
日韓大戦 第一部 開戦の章

独楽犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日韓大戦 第一部 開戦の章

【Nコード】

N7711D

【作者名】

独楽犬

【あらすじ】

念願の南北統一を果たした韓国であったが、未曾有の経済難に直面した。韓国改め高麗連邦は状況を好転させる為に日本への侵攻を企図するのだった。史上最悪の危機に日本は、自衛隊はどう立ち向かうのか？

序（前書き）

この小説（と言わせて頂きます）は一度、某所に投稿したものを加筆修正したものです。あなたがどこかで見たことあるとしても、決して盗用ではありませんから

序

2008年8月13日 愛知県豊橋市

それはまさに地獄の光景であった。街のあちこちに煙が立ち昇り、木造建築は倒壊し、道にできた亀裂からは水道管が破裂したのか、水が噴出していた。

住む場所を失った人々が路上に屯し、容赦無い真夏の日差しに僅かな気力も奪われてしまう。頼るべき避難施設はすでに飽和状態であった。

大地震に襲われて早4日目。ようやく復興作業が始まろうとしている頃だった。

東海道本線の線路上を人の群が突き進んでいた。電車はすでに運行を中止している。線路の上の群は、たくさんの荷物を背負い、町の中心部へ進んでいる。空の上から見ると、まるで蟻のようでもある。

後に東海大地震と呼ばれることになるこの災害により、人口34万5000の都市は壊滅的被害を負っていた。被害にあったのは豊橋だけではない。静岡を中心に中部全域に広がっている。

群の中の一人に桜井雄一という少年が居た。この災害にボランティアとして復興に参加している福岡の高校生で、夏休みの真っ只中の彼は所属するボランティア団体の先輩の誘いに旅行気分に乗ったのが運の尽きだった。物資を積んだトラックに乗った方がいいが、被災地に近づくにつれ渋滞が酷くなり、名古屋を越える頃には身動きがとれなくなった。さらに被災地にはボランティアの人員物資を受け入れるだけの余裕も無く、徒歩で進むことになった。

何十キロも歩きとおして疲れきった身体に真夏の日差しが突き刺

さる。それでも雄一は歩みを止めなかった。使命感からでは無く、止まってしまったら、そこから一步も進めなくなるような気がしたからだ。

「大丈夫か？」

その様子を見かねた1人の男が雄一に声をかけた。迷彩服を着た自衛官だった。

「あんまり無理するなよ。倒れられたら、被災者に加えてあんたの世話もしなきゃならん」

そう言うのと、その自衛官はにやりと笑った。雄一の顔にも笑みが浮かんだ。

「ありがとうございます」

その時、異様な光景を見つけた。

「皆さん。すでに地震から数日たっています。それなのに政府はなにをやっているのでしょうか？」

拡声器を手に政府批判を繰り返す団体。救助作業を続ける人々の中で彼らは浮いていた。彼らが肩から下げる襷には「平和市民団体ラブ・アンド・ピース」と書かれていた。

あいつらはなにをやっているのだろうか：

そんな事を考えていると、だんだん視界がぼやけてきた。足から力が抜け、身体を支えることができなくなった。雄一は支えを失った人形のように受身の態勢もとれずなにもできないまま、顔を地面に激突させようとしていた。雄一の目には地面がまるで自分に向かってくるように見えた。が、迫りくる地面は顔に接触する寸前に停止した。

「大丈夫か。」

倒れそうになった雄一を支えたのは、災害出動していた自衛官だった。

「すみません。」

その時だ。地面が揺れた。凄まじい揺れだ。

「あぶない！！」

自衛官はとっさに俺を突き飛ばした。地面に倒れた俺が感じたのは轟音だけだった。

揺れが止んだ後、あの自衛官の居た場所にあったのは・・・崩れた家の残骸と深紅の鮮血だけであった。

「うわあああああ！！」

1人の人間の命が失われた瞬間だった。

一・情勢は甚だ悪し

日本海の上空2万メートルをそれは飛んでいた。白い翼を持つそれは、センサーという名の目で海上を舐めるように監視していた。航空自衛隊初の無人偵察機グローバルホーク。平時の主要任務は、このように日本海上空を飛び、沿岸の監視・警備を行なうことであるが、今回は特別なミッションが与えられていた。

2015年6月21日

東京は新宿、市ヶ谷には一般的に防衛省と呼ばれる施設群がある。

「これが、一週間前、グローバルホークは撮影した、プサンの高麗海軍基地です」

海上自衛隊幕僚監部から派遣されてきた男は、壁に貼られた航空写真の解説を始めた。

防衛省地下にある会議室には、陸海空幕僚長に3自衛隊を束ねる統合幕僚長。統合幕僚部直轄の情報機関である情報本部の本部長。さらに、防衛省内局の背広組に、外務省や警察庁、そして国土交通省とその下部機関である海上保安庁から派遣された者もいる。

「高麗海軍の中で主力艦と呼ばれる主要艦艇の数はそう多くはありません。写真の中には、これとこれと…」

海上自衛隊の男は、指示棒で写真の中に写っている様々な艦艇の中から一部を指し示した。8隻。高麗海軍1個艦隊の戦力である。

高麗：高麗連邦共和国は、韓国と北朝鮮が合併して生まれた国家だ。

全ては2004年、北朝鮮の指導者が中国訪問後の帰路に、中国国境線に接する平安北道で専用列車が突如爆発して吹き飛ばされたことに始まる。

指導者を失った北朝鮮上層部は混乱状態に陥り、いつしか一部の部隊には爆発は米国からの攻撃ではないかという噂が流れるようになった。こうなれば疑心暗鬼は止めなく広がり、北朝鮮軍が臨戦態勢に突入するのにさして時間はかからなかったのである。

そして爆発から2時間後、北朝鮮砲兵部隊がソウルに対して砲撃を行なった。

ソウルは事実上壊滅。在韓米軍と韓国軍の反撃により北朝鮮砲兵部隊はすぐさま殲滅されたが、被害は甚大なものとなった。

さらに米軍による報復攻撃が開始された。北朝鮮軍の中樞は破壊され、事実上北朝鮮は戦争能力を失ったのであった。

国家中枢が崩壊すると、これまで力で抑えられていたものが一気に解放された。北朝鮮軍が各地で中央政府に対して叛旗を翻し、平壤へと競うように進撃していったのである。北朝鮮は内戦に突入し、中国やアメリカ、韓国は難民への対応で手いっぱいとなった。

内戦が終結したのは2008年。ある将軍が平壤から他の叛乱軍を追い出し、中国との石油パイプラインを握ってからだ。中国の後盾を得たその将軍は他の叛乱軍を討伐し、政府を掌握した。

こうして北朝鮮は中国の勢力圏下に収まろうとする寸前、将軍は何者かに暗殺され、後継者は米韓への接近を行なった。

かくして2009年8月、韓国は北朝鮮を併合し、高麗連邦共和国が成立した。東アジアから平和を脅かす要素が消滅したと世界に歓迎された。だが高麗を待っていたのは地獄だった。北朝鮮のインフラ整備による多大な経済負担が高麗財政を脅かし、経済も下向きになり、高麗国民はしだいに右傾化した。

2010年代に突入すると、事態はさらに悪化した。北に南の会

社の工場が次々と進出していったが、賃金はかなり低く設定され北朝鮮地域の生活レベルは一向に向上しなかった。南は南で多数の工場や会社が北へ進出していったため、失業率が上がり、経済は悪化するばかりであった。

高麗政府が混乱を防ぐため、38度線で国民の移動を規制し情報も制限された為に南北で分断された高麗国民はお互いを憎しむようにもなり、高麗内政は爆弾を抱えた危険な状況になった。高麗政府は国民の目を海外に向けようと画策し、反日政策をさらに推し進めたのである。

だが対外政策でも問題が生じた。2012年、統一直後に「破棄した」と世界に宣言した北朝鮮の弾道弾開発、さらに核兵器開発を秘密裏に続けていた事が発覚したのだ。これにより高麗は急速に孤立を深めていき、現在に至る。

海上自衛隊の男は、高麗軍の艦艇について詳細な解説をはじめた。男の持つレーザーポインターの先端は、写真の1番上に写っている栈橋に3隻繋がれている砲塔の多い小型艦に向けられた。

「まず、この3隻がウルサン級です。旧式のフリゲートで退役間近の艦ですが、後継艦建造がまだに行なわれていませんので、現在でもこのように主力艦隊におかれているのです」

ウルサン級は韓国が1980年から1990年代前半にかけて建造した沿岸用フリゲートで、一時期は韓国海軍の主力を担っていた。北朝鮮の小型砲艦を意識したのか、76ミリ砲2基をはじめ各種機関砲など砲兵装が充実している他、対艦ミサイルを装備し高い対水上戦闘能力を備えている。

レーザーポインターは、1つ下の栈橋に繋がれた2隻のウルサン

級より一回り大きい艦に向けられた。その艦は不鮮明な偵察画像でもステルスを意識した洗練された船体を持つ艦であることが認識できた。

「高麗海軍のテグ級フリゲート。高麗海軍の主力艦として造られたものですが、財政難の為に配備が進んでおりません」

テグ級は、かつてはFF-Xと呼ばれ、トンヘ級やポーハン級といった旧式コルベットの後継艦として開発された艦で、高度なステルス性を備え韓国国産対艦ミサイルで武装していた。ウルサン級フリゲートの後継艦でもあるが、配備は進んでいない。

さらに下の栈橋には大型艦2隻とそれより一回り小さい艦1隻が繋げられていた。海上自衛隊の男は、一回り小さい艦にレーザーポインターを向けた。

「また、これがクワンゲト・デワン（広開土大王）。KD-1とも言います」

韓国海軍の海軍増強計画第1弾として完成したKD-1は、韓国海軍がはじめて保有した汎用艦であった。対空ミサイルや対艦ミサイル、対潜ヘリなどを装備し、様々な任務に対応できた。

最後にレーザーポインターは大型艦に向けられた。

「こちらの2隻がチュンムゴン・イ・スンシン（忠武公李舜臣）。KD-2です。現在の高麗海軍の主力艦で合わせて6隻建造されています。防空ミサイルSM-2を装備しています」

KD-2は韓国海軍が初のミサイル防空艦として完成させた艦で、長射程対空ミサイルSM-2を装備、高麗艦隊の空を守っているのだ。

説明していた男はレーザーポインターを切ると胸ポケットに収めた。

「これが高麗海軍の1個艦隊の戦力となります。これらの艦隊が高麗には3つ存在し、高麗海軍の主力部隊となっています。なお、平沢の第2艦隊のみウルサン級が2隻のみで、旗艦としてイージス艦セジョン・デ・ワン（世宗大王）が配備されています。以上が高麗海軍の戦力であります」

セジョン・デ・ワンは、弾道弾及び核開発継続が発覚する直前に完成したKD-2に続く防空艦であり、世界最強の艦載防空システム<イージスシステム>を備えている。イージスシステムは大変高価で、高麗はこれを世界で5番目に保有したが、ドックで建造中の2番艦、3番艦の完成の目処はたっていない。

「で、現状をどう判断します？」

海上保安庁から派遣された男が、説明していた男に尋ねた。

「ここ数ヶ月、高麗海軍の動きが活発化しています。現在、我が自衛隊はグローバルホーク無人偵察機及び偵察衛星による監視活動を行なっておりますが、昨日の定期監視時に消えました」

「消えた？」

「高麗各地の基地より主力艦隊：駆逐艦、イージス艦、潜水艦、それに揚陸艦です」

すると情報本部長、真田陸将が立ちあがった。

「海軍だけじゃない。陸軍もだ。最近、高麗軍の軍用通信が異常な量に増えているし、部隊が移動しているのは確実だ」

「では、高麗軍が攻めてくるというのか?!」

警察庁から出向してきた官僚が立ち上がって怒鳴った。隣にいた外務省官僚も立ち上がり、警察庁の男を抑えた。

「まあまあ。なにしろ自衛隊はな…中国が内乱で覇権争いから脱落した時点でアジア最強の軍隊であると確定した。いま高麗と中国が裏で接近しているという噂も聞くが、それでも日本には到底かなわない。攻め込もうなんてバカはいないだろう」

事実だった。中国では2008年の五輪と万博をなんとか成功させることができたが、2010年には地方の軍隊が軍閥化して、政府軍と内戦を繰り返していた。中国はその経済力、軍事力を失い、日本が再びアジア一の経済大国へとなった。

だが内乱で力を弱めているとはいえ中国軍はまだ力を保っている。海軍力はほとんど政府軍隷下であり、海上自衛隊には及ばないものの、東アジアの軍事バランスを動かすだけの影響力をいまだに保っている。決して無視できる存在では無い。そして、イージス艦をはじめとする強力な軍事力を持つ高麗。もし両者がドッキングしたら？自衛隊が憂慮するのはその点だ。

「だが、工作戦を妨害してくるかもしれんぞ」

そう語るのは海上保安庁の男だ。今回の作戦の主体となるのは彼ら海上保安庁だ。

「自衛隊の方はどこまでバックアップしてくれる？」

海上保安庁の問いに対して海上自衛隊幕僚長が立ちあがった。海幕長は名を笹山と言い、階級は海将で、温和そうな容貌で軍人には

見えなかった。

「現在、第2護衛隊群が即応体制に入っており、護衛艦8隻がいつでも出動可能です。それに加え、佐世保、舞鶴、呉の各地方隊から護衛艦をそれぞれ1隻ずつ展開できます」

「まってくれ。護衛艦隊には護衛隊群4個、護衛艦32隻がある筈だ。なぜ8隻だけなんだ？」

口を挟んだのは国土交通省の役人で、自衛隊の戦力について付け焼刃の知識を披露した。

「ローテーションというものがあまして。護衛艦部隊は4つに分かれておりますが、修理・点検や訓練の都合により常に実戦に投入できるだけの態勢を整えているのは1つか2つの護衛隊群のみなのです。地方隊も同様です。」

現在、佐世保の第2護衛隊群が即応態勢にあります。第1護衛隊群も出撃可能なはずだったのですが、現在、ASEAN諸国海軍や米海軍との合同演習の為、南シナ海へ展開しており、呼び戻しておりますが、日本に戻るにはまだ時間がかかります」

各省庁から出向してきた役人はもちろん陸空自衛隊の幹部からもやじが飛んだ。

「なにを考えているんだ、海上自衛隊は！」

「この大事な時に南シナ海に派遣中だと！」

「マジメにやっているのか海自は！」

「訓練でいい成績を出せばいいと言うのか？」

それに対して笹山も反撃を開始した。

「急なことなんだから仕方がないだろう。南シナ海派遣は正月から決まっていたことなんだぞ。それにこれだって、東南アジアとの関係強化という外交的意味があるんだぞ。中国の内乱が自国に波及することを彼らがどれほど恐れているか、君なら分かるだろう」

そう言う和外務省の男を指さした。

「人を指さすな。まあ、急だったのは事実だが」

確かに急な話だった。

T（竹島）作戦。高麗に不法占拠されたままの竹島を奪還する作戦だ。

アメリカを始めとする西側先進国は、弾道弾・核問題の平和的解決を望んだが、高麗は一切の交渉を拒絶した。そこで高麗を交渉の場に引きずり出すべく、さまざまな圧力を与えられた。T作戦もその一環で、背景にはアメリカの後押しもあった。海上保安庁で竹島警備隊や住人を取り押さえ、島を奪還。高麗が抗議してきたら「では、国連の法廷で諸問題と一緒に解決しよう」と返事をするわけだ。

対馬上空

真夏の太陽の下、雲ひとつない空を航空自衛隊主力要撃機F-15Jは飛んでいた。翼の下には赤外線追尾式ミサイルAAM-3を抱え、バルカン砲には20ミリ弾がたっぷり装填されている。

航空自衛隊のイーグルドライバー、野々宮3等空佐は憂鬱な気分だった。これで第8航空団は今月9度目のスクランブルだ。相手は高麗空軍。領空を侵犯することたびたびあり、今回もそう、今月3度目の領空侵犯だった。

「見えた。やっぱりKF-16だ。間違いない高麗空軍機だ」

野々宮は、目視でKF-16戦闘機と高麗空軍の国籍識別マーク
―旧韓国空軍のそれと同一である―を確認した。KF-16は米国
が開発したF-16戦闘機の韓国版で、米国から輸入した部品を韓
国国内で組み立てたものである。機数は2機。編隊飛行で南下して
いる。翼の下に何かを吊るしている。AAM-（空対空ミサイル）
の類か？気になったが手順通りに進めることにした。証拠及び研究
資料用の写真を撮影し、無線で警告を行なう。

「こちら航空自衛隊。前方を飛ぶ高麗空軍機に告ぐ。貴官は日本領
空を侵犯している。ただちに退去するか、こちらの指示に従え！」

英語と韓国語で呼びかけたが相手に反応は無い。

「ちっ。こちらアロー1。管制室。高麗空軍機は警告に応じない。
威嚇射撃の許可を！」

こういう時の対応はしっかり定められており、返事は瞬時に返っ
てきた。

「こちら管制室。アロー1。威嚇射撃を許可する。慎重にやれよ」
「ラジャ」

野々宮は返事をする、FCSを起動した。

「サリー、援護しろ！」

サリーはともにスクランブルしてきた僚機のTACネームだ。航

空自衛隊のパイロットには部隊のコールサインとは別に個人を識別する愛称がつけられる。それがTACネームで、野々宮の場合、アーニーだ。

選択した武器はM61、20ミリバルカン砲だ。そして照準を高麗空軍機のすぐ横を掠めるようにあわせる。今だ！

「アロー1。フォックス3！」

野々宮が発射ボタンを押すと同時に、機体側面の装備されたM61から毎分6000発のスピードで20ミリ弾が空中に放たれる。時間にして1秒ちよつとのことであるが、高麗空軍のパイロットへの威嚇には十分だった。

F-16は突然、急旋回し、高麗本土へ向かって飛んでいったのである。野々宮と僚機は日本と高麗の防空識別圏の境界まで追尾して、その後、築城基地に向け旋回した。

＜アーニー、さっきのF-16：＞

「ああ、確認した。翼の下には兵装を吊るしていた。最初はAAMかと思ったが、いや、あれは対地攻撃用の装備だ」

驚くべきことでは無かった。実際、侵入してくる高麗空軍機が実戦用の装備をしている事は決して少なくは無かった。

＜また、いつもの脅しでしょうかね？＞

サリーの声は冷静そのものだった。高麗の核開発発覚後の最初に武装戦闘機が侵入した際は撃墜も検討されたが、その時、高麗機は慌てふためく自衛隊を嘲笑うかのように領空侵犯直後に旋回し、機首を朝鮮半島に向けた。

それ以来、武装した高麗機が侵入しても騒がなくなった。どうせ

脅しだ。倒れそうな国はいつもそうやって強がるものだ。
だが、野々宮は自衛隊のそういう態度が不安でならなかった。

二．決断

高麗連邦共和国 首都ソウル

その建物は青瓦台と呼ばれ、日本統治時代に朝鮮総督官邸として始まり、独立後は韓国大統領官邸となり、歴史的な南北統一を達成した現在でも連邦大統領の官邸となっている。連邦第3代大統領、チヨン・ウジユン鄭宇中も去年、青瓦台の住人となった。

「確実に成功するんだな？」

チヨンは目の前にいる男、国防部長であるイ・セチヤン李世昌に問い掛けた。

「すでに中国北京政府の高官と接触しました。彼らと我々の利害は一致しています。米軍に圧力をかけてくれるでしょう」

その男は閣僚の中でも楽観主義者として知られていた。

「しかし、大丈夫なんだろうな。我々のやろうとしていることは……」
「大統領閣下。もはや我が高麗連邦を救う道はこれしかありません。日本にはこれまで発見されなかった様々な資源が眠っている事が明らかになりました。これを利用するしかありません。なに、日帝36年の支配の中で行なわれた朝鮮民衆への残虐なる搾取に比べれば、とるに足らんことですよ。」

それに今の日本の内閣総理大臣は腰抜けです。必ず我々の要求に屈するでしょう」

そう答えたのは、日本で言う外務省に相当する外交交通商部の部長、ソン・ベクイル宋白一であった。

それに対し、閣議室の奥で沈黙を保っていた男の口が開いた。

「しかし、樂觀視しすぎではないか？」

高麗の情報機関である国家情報院のトップにいる金幽霊キム・ユリョンである。

「ユリョン院長、あなたは以前から情報機関に居られた方だが、韓国情報の専門家であって日本のことをあまりご存知無いはずだ」

ペクイルがユリョンに反論した。ユリョンは朝鮮労働党の対南工作機関である体外連絡部の指導者を努め、数々の情報工作を実行してきた。幽霊を意味するユリョンという名字もおそらく偽名だろう。セチャンがさらに続けた。

「勝算はあります。我々には輝かしい未来が待っています」
「分かった。ただちに参謀総長を呼んでくれ。作戦の説明を再度聞きたい」

ウジュンは決断を下した。

福岡市内 喫茶店

すでに太陽が沈みかけており、客は疎らだった。

「非常召集？明日の約束は？」

客の1人、若い女が連れの男に言い寄っていた。

「新聞くらい読めよ。韓国方面がやばいって言ってるだろ。それで

召集がかかったんだよ。明日以降は24時間、駐屯地に詰めてなくちゃいけないんだ」

男はそう反論した。彼は普段は高麗という現在の正式国名を使うが、一般社会ではまだ浸透していなかった。

「確かにあんたが自衛官で、そういうヤバイ時に行かなきゃならないのは分かるけど。なんとかならないの？」

「ならない」

男の頑固な態度に女は溜息をついた。

「はあ。だいたいヤバイって言ったって、どうせ大した事にはならないんでしょ？ まったく過敏すぎるのよ」

「万が一ということもある。それに備えるのが俺たちの仕事だ」

男の方は、東海大地震の悲惨な現場にボランティアとして駆けつけていたあの少年、桜井雄一であった。女の方は萩原里美といって雄一の交際相手であった。萩原は高校での雄一の後輩で、卒業後は雄一は自衛隊、萩原は大学への進学という別々の道へ進んだが、二人の関係は続いていた。

「そうやって、過大に危機を煽るのが右翼のやり方よ。萩原さん、騙されてはダメ！」

萩原は声のした方向に振り向くと、そこに1人の女性が立っているのに確認した。

「片平先輩！」

片平と呼ばれた女は、男に対して明らかな敵意を向けていた。彼女、片平由香里は萩原の大学の先輩で、平和運動のグループに参加しており、活動のために留年をしている筋金入りの運動家であった。

「あなたは？」

「陸上自衛隊、第4師団第19普通科連隊所属、3等陸曹、桜井雄一です」

「ふーん、自衛官ね？憲法違反の人殺し集団」

あまりにも型にはまったプロ市民を目の前に、桜井は溜息をついた。こういうのは相手にしない方が良い。

「里美、行こう」

雄一は里美の腕を掴むと店を出ようとした。

「待ちなさい」

片平が立ちふさがった。

「人殺しに行くの？」

雄一は片平の腕を振り払い、店の外に踏み出した。この時、里美は雄一が小声で「人殺しの為に自衛隊に入ったんじゃない」と呟くのを耳にした。

名古屋市内 あるアパートの一室

すでに時間は夜の10時を過ぎていた。

ソファアの上で毛布をかぶり横になっていた男は、ここに來た事を後悔していた。男の名は深海真^{ふかみ まこと}。ある軍事系雑誌に関わる仕事をしていた、今は取材に参加する為に名古屋を訪れていた。そこでホテル代を節約しようと、たまたま名古屋で会社員をやっている弟のアパートに押しかけたのが間違いの始まりだった。

弟の辰巳^{たつみ}はいわゆるアニメオタクで、部屋の中はそれ系のグッズで埋め尽くされていた。真は特定の趣向や性癖を軽蔑する気持ちもないし、そもそも真の趣味も世間一般から見ればアニメオタクと大して変わらないものに見えるだろう。だが、この部屋の空気に真は違和感を覚えざるにはいられなかった。

こういう時は寝ちまった方が良いと思い横になったが、寝るには時間がまだ早すぎた。結局、一睡もできない間に真は立ちあがった。立ちあがった真の目に映ったのは、パソコンに向かう弟の姿だった。

「なにを見てんだ？」

「匿名掲示板だよ。なんか兄貴が興味ありそうなことやってるよ」

212 名前…名無しさん 投稿日…2015/6/21(日)

22…23…07

いよいよ明後日だね。竹島奪還の日は。

213 名前…名無しさん 投稿日…2015/6/21(日)

22…23…30

60年振りの悲願の達成キター

だけどさ、香具師らが火病って戦争ふかっけてきたらどうする？

214 名前…名無しさん 投稿日…2015/6/21(日)

22…25…01

余裕余裕。圧倒的な海上自衛隊艦隊の前に殲滅あるのみ。3分で決着がつくw

215 名前…名無しさん 投稿日…2015/6/21(日)
22…26…20

そこまで高麗は弱くないよ。

精々30分だねwww

216 名前…名無しさん 投稿日…2015/6/21(日)
22…27…17

でも高麗も一応、イージス艦とか持ってるんでしょ？

217 名前…名無しさん 投稿日…2015/6/21(日)
22…30…20

イージス艦を過大評価しすぎ

高麗のイージス艦は1隻だけ

1隻で対処可能なのは精々12発くらい

自衛隊は1個護衛隊群だけでも一度に50発以上対艦ミサイル発射できる

ま、そゆこと

218 名前…名無しさん 投稿日…2015/6/21(日)
22…31…01

つか護衛艦出すまでもないよ。F-2で十分

どうせ高麗の連中に近代兵器なんて扱えないんだしさwww

219 名前…名無しさん 投稿日…2015/6/21(日)
22…31…20

結局は対馬海峡で海の藻屑だろw

まあ魚の餌がヒトモドキどもには相応しい

220 名前…名無しさん 投稿日…2015/6/21(日)
22…32…32

そう言うこと言うなよ

んなもん食ったら、魚が腹壊すw

「こりゃ酷いな」

真は思わず本音を洩らした。

「そう？で、軍事雑誌担当者としてどうよ」

「反韓、嫌韓は結構だけどさ。相手を見くびったらダメだ。相手を常に最高の軍人だと思え。それが鉄則だよ」

そう言うと、テレビの方に振り向いた。テレビと真の間にあるちゃぶ台の上にリモコンがあつて、真はそれを取ると電源をいれた。映ったのは民放のニュース番組だった。

<中国軍の最新の動向ですが>

キャスターが伝えたのは、きな臭い台湾海峡の話題だった。外部に敵をつくるのは国内の分裂を手取り早く終結される手段であり、中国も内乱による不安や不満から内外の目を逸らす為、台湾に対して積極的に圧力をかけていた。

<米国防総省筋の情報によりますと、中国海軍が臨戦態勢をとり、空陸の戦力も沿岸部に移動している模様で>

だが、今回の動きは異常だ。仮にも内戦状態にある中国。陸上戦力をそこまで割くのは危険だ。それにも関わらず、なぜ？

「なに？台湾でも戦争なのか？」

辰巳の声はその内容に対してなんの緊張感もなく発せられた。

「そうかもしれない」

真はそう答えると、ニュースに意識を集中した。本当に戦争なのか？それとも？

<米軍は最大級の警戒体制で中国の動きに備える模様です>

二．決断（後書き）

気づいた方もおられると思いますが、劇中は6月という設定の筈なのにこの第2話だけ7月になっているという大ポカをやらかしてしまいました。申し訳ございません。

元々は夏という設定で執筆を進めていたのですが、高麗艦隊を梅雨の雨雲で隠すために6月に変更したという裏事情があり、このエピソードだけ7月のまま残ってしまったということです。

というわけで、修正を行いました。萩原さんの言う「約束」ですが、矛盾を発生させないために出来た急造設定ですので、特に深い意味はございません。

3. 出陣

6月22日

高麗ポハン市

旧韓国東南部の慶尚北道最大の都市は小雨の降る中、朝を迎えた。ポハンは鉄鋼業で栄える工業都市であり、街のあちこちに工場が建っており、通勤の時間帯を迎え自分の職場を目指して歩く無数の労働者たちの姿を見ることが出来た。未曾有の経済危機の中にあるとはいえ、この工場の街が停止することは無かった。

この街の一角に第1海兵師団司令部があった。高麗海兵隊は、韓国海兵隊と北朝鮮の両用戦部隊を統合して誕生した部隊である。かつて韓国海兵隊は韓国へ侵攻してきた部隊の背後への逆上陸作戦を実行する部隊として発展し、ベトナム戦争に派遣されるなど精鋭部隊として知られていて、高麗海兵隊もその伝統を引き継いでいる。

ここポハンには第1海兵師団が駐留している。3個の歩兵連隊と1個の戦車大隊を基幹とする部隊である。

師団長室のテーブルを挟んでソファに向き合って座る二人の男、

1人は第1海兵師団長の崔民基少将、チュ・ミンギもう片方は高麗軍合同参謀総長、元仁完大将であった。ウォン・インワン

「千里馬作戦決行はいよいよですな」
チヨリマ

最初に口を開いたのは、ミンギであった。

「ああ。これで我が民族の苦難を打破できればいいのだが・・・」

インワンは千里馬作戦に乗り気ではなかった。

「確かに日本は強大です。だが、日本全土を占領しましょう、と言

っているわけではありません。重要なのは我々が日本に、たった一つでもいい、楔を打ち込むことです。別に東京を攻め落とさなくたって、平和ボケした日本政府は必ず我々の要求を呑むでしょう。そうすれば我々は苦難を乗り越えることができますのです」

ミンギは力説した。だが、インワンはまだ納得できないようだ。

「だいいいのだが。そうだ。指揮官が決定したよ。海上部隊は金周キム・ジユ永提督、第1次上陸部隊は君。そして統合指揮官は崔正熙將軍だ」

話の流れを変えようとインワンが振った話題に、今度はミンギが顔を青くした。

「キム提督は知っている。アメリカへの留学経験もある見識豊かな優れた指揮官だ。だが、チョンヒはダメだ。あいつは父の威光で今の地位に成り上がった無能者だ。あいつになにができる？」

「安心しろ。優秀な参謀がついている。彼らが千里馬部隊を勝利に導いてくれる」

日本 首相官邸

執務室の自分の席に座り内閣総理大臣、烏丸祐一郎からすま・ゆういちろうは電話の対応に苦慮していた。相手は自分が所属する政党の大物。社会民主党前々党首、井戸竹子いど・たけこ。以前の選挙での大敗が原因で党首を辞したが、現在でも大きな影響力を持っている。

「いいですか？ 烏丸さん。我が党としては、竹島攻撃を許す事はできません。あくまでも平和的解決に拘るべきです。今ならまだ間に

合います。止めてください>

「そう言われても、井戸さん。もう頑固に平和だけじゃやっていけないんですよ。自由民権党やアメリカなど国外からも突付いてきますからね。国民だって多くがこれを支持しているんですよ？」

<そうやって右翼やネオコンに言い負かされてどうするんですか？

>

社会民主党は21世紀はじめには議席を大きく減らしていた。それは主に北朝鮮への対応の失敗が原因であり、党存続の危機でもあったが、北朝鮮が崩壊して国民の目は外交から内政へと向けられるようになる、再び議席を伸ばした。

2012年の総選挙で最大野党が僅差で勝利を得ると、与党である自由民権党は社会民主党に連立を持ちかけた。こうして誕生したのが烏丸政権である。

こうして念願の総理の椅子を手に入れた烏丸であったが、その道は苦難の連続であった。就任とほぼ同時に高麗の核及び弾道弾の開発継続が発覚したからである。これによって最大公約であった自衛隊の縮小、防衛費の削減は立ち消えとなり、また国際社会からの要請もあって高麗に対しては党是に反する強硬姿勢で臨まざるえなくなかった。

「とにかくですな。もうやると言った以上無理ですよ」

烏丸はそう言って電話を切った。

「平穏無事に済めばいいのだがね」

対馬海峡 高麗某社所属 貨物船【清津^{チョンジン}32号】

高麗が国際社会で孤立化しているとはいえ、全ての関係が断たれているわけではない。細々ながら定期船も運航しており中規模貨物船【清津32号】も北九州港を目指していた。

問題はこの船を所有する会社が、旧北朝鮮の特殊工作機関が隠れ蓑として使っていた会社が合併・吸収を経て誕生した会社だということだが、その点に注目していたのはごく一部の人間で、彼らの声の上層部に達した頃にはすでに手遅れになっていた。

福岡駐屯地

福岡駐屯地は九州北部の防備を担当する陸上自衛隊第4師団の中樞が集まる駐屯地である。第4師団は4つの普通科（歩兵部隊を意味する自衛隊用語である）連隊とその支援部隊から成り、その1つ第19普通科連隊も福岡に駐屯している。

T作戦に備えて待機中の第19普通科連隊の中に雄一の姿があった。今は彼の中隊が即応状態にあり、なにかがあれば先遣中隊として飛び出すことになる。雄一は訓練も免除され、兵舎の中で自分の装備品を点検して時間を潰していた。彼の銃は旧式の64式自動小銃を狙撃銃に改造したものである。自衛隊には専用の対人狙撃銃としてM24ボルトアクション式ライフルを配備している。そちらの方が精度は優れるが連射が出来ないという欠点があり、野戦での長距離狙撃ならともかくとして市街地戦なら距離は限定されたものになるから精度より連射性・即応性が重要になってくるので64式改でも十分に活躍の機会がある。それにアメリカに留学して狙撃術を学んだ雄一は、多少の精度の悪さなら腕で補える自信があった。

座って64式改を点検する雄一の横に男が座った。その男は雄一

と同じく迷彩服を着込んでいて、腰を降ろすと、雄一の肩を軽く叩いた。

「調子はどうだ？」

64式改に集中していて隣の人物の存在にまったく気づかなかった様子の雄一は、声の主の方にすぐさま振り向いたが、その顔には驚愕の表情が見て取れた。

「どうした？3曹。その調子じゃ、高麗のゲリゴマに後ろからやられるぞ」

「すみませんでした。古谷^{ふるや}3尉」

雄一を8つほど歳が離れた3尉は部内選抜幹部で、雄一の所属する小隊の指揮官である。

「いよいよだな。聞いたか。特戦群の連中が来たらしい」

「特戦群ですって！」

特戦群―特殊作戦群―は陸上自衛隊が唯一保有する本格的な特殊部隊であった。彼らはテロ対策部隊として生まれ、現在では自衛隊最強の部隊として見られている。幸か不幸かその能力を実戦で試す機会には恵まれなかったが、イラクなどにも派遣され高い評価を得ていた。

「高麗コマンドの浸透が考えられると？」

「上層部はそう見てる。だが、俺はそうは思わない」

「連中は来ないと？自分もそう思います」

「違う。もっとすげえ形で来ると思うんだ。本格的な着上陸侵攻とかよ」

なにかの冗談と思って、何か言い返すべきだろうかと考えた雄一だったが、古谷の目を見た瞬間、その考えは消えた。古谷は笑っていたが、その目は真剣そのものだったからだ。

ポハン港

梅雨は日本特有の現象ではない。高麗や中国にも同様の現象は存在し、高麗では長霖チャンマと呼ばれる。その真っ只中のポハンは数日前から雨が降り続いている。半島南部は雨雲に覆われ、その結果、画像偵察衛星による観測から地上の動きが隠される事になった。レーダー偵察衛星はごまかすことはできないが、そこらは不鮮明な映像にならざるえないので、アメリカなり日本なりがこの一帯を撮影していたとしても分析を終える頃には既に後の祭りである。

ポハン港に2隻の大型艦が入港し、部隊の積み込みが始まった。艦の名前は【独島ドクト】と【馬羅島マラト】。高麗海軍が誇る強襲揚陸艦であった。700名の兵員と10機のヘリ、それに10両の戦車を輸送可能で、極東アジア最大の揚陸艦として君臨している。

そこへ第1海兵師団の兵員や車両が次々の積み込まれてゆく。その様子をミンギ少将は上空を飛ぶヘリから眺めていた。高麗海軍が独島艦載機として運用しているK a - 32輸送ヘリである。

すでに兵員を積み終えた戦車揚陸艦【高峻峯ゴージュンボン】級4隻は出港した。こちらの方が速力は速いから洋上で追い抜くことになるだろう。またインチョンでは、陸軍部隊が民間から徴用した貨物船やフェリーに乗り込んでいることだろう。周辺諸国との関係悪化により多くの航路が封鎖され、仕事もなく港に放置状態だった船たちなので、事前に察知される事はおそらく無い。

そうこう考えているうちに、ヘリが飛行甲板に着陸した。ミンギ

が甲板に足をつけると艦橋構造物のハッチが開き艦長が現れた。

「ミンギ少将。いよいよですね」

「ああ、我々が祖国の礎となるのだ」

ミンギは空を見上げた。厚い雲が雨を降らしているが、もし晴れていたならば真南からこちらを照らす太陽を拝む事ができる筈だ。

高麗時間正午、船団は港を出発した。

太平洋 アメリカ海軍空母【ジョージ・ワシントン】

アメリカ海軍第7艦隊所属の航空母艦【ジョージ・ワシントン】は【ニミッツ】級空母の第6番艦で、【キティホーク】に替わって横須賀に配備された。この満載排水量が10万トンを超える巨艦は太平洋上での演習を急遽中止して、護衛艦を率いて東を目指していた。理由は中国である。台湾海峡に人民解放軍の艦艇が次々と進出し、台湾を恐喝している。そこで急遽、【ジョージ・ワシントン】が台湾海峡に派遣されることになったのだ。

【ジョージ・ワシントン】艦長のアダムス大佐は甲板の状況を嘆いていた。彼が合衆国海軍に入隊したのは27年前で、映画トップガンの影響でパイロットを目指した青年だった。彼はF-14のパイロットとなり夢を果たし、その後航空団指揮官を経て戦闘機から降り、今は艦長の役職に就いている。だが彼が指揮する部隊は彼がかつて憧れた世界最強の海上部隊の姿では無かった。彼が愛機としていたF-14は姿を消し、代わりに薄っぺらいF/A-18で飛行甲板が埋まった。F-14の迎撃任務はもとより、S-3多用途機が実施していた様々な任務まで奪い空母航空団をたった1つの機種が支配している。最近になってようやく新機種が配備され少し

は見栄えも良くなると思ったが、無表情無個性のF-35はむしろ逆効果にしかならなかった。もちろん、これらの機体が様々なハイテクシステムを備え、世界中のあらゆる地域で圧倒的な戦闘能力を発揮することができるとは理解しているが、それでもかっこよさに憧れて入隊したアダムスは許せないのだ。

海上自衛隊第二護衛隊群旗艦DDH146【いせ】

その艦は、一応は＜護衛艦＞と呼ばれているが、他の自衛隊の艦艇とは明らかに異質だった。基準排水量1万3500t。かつて護衛艦中最大を誇っていたイージス艦【あたご】型ですら基準排水量は7700tに過ぎない事を考えれば、【いせ】がいかに巨大であるかを理解できるだろうか？

全通甲板を備えたそのシルエットはまさしく空母であり、実際に普段の艦載機数は3から4機に過ぎないが非常時には11機のヘリコプターを搭載する事ができる。また指揮管制能力にも優れており洋上司令部として機能することもできた。

「すでに高麗軍が大々的に行動を開始している。」

【いせ】CICで熱弁を振るうのは、第2護衛隊群を指揮する二ノ宮海将補である。現実^{みや}にリンク16を通して次々と送られてくる情報^のは、高麗軍の激しい動きを警告していた。

「詳細は不明であるが、ここ数日、高麗軍の通信量が増加したのをはじめ、本格的な軍事侵攻を示す兆候を様々な形で示している。どうやら、虎の子イージス艦まで動き出したらしい」

「それで、我が国はどのような行動を行なうのでしょうか？」

【いせ】艦長である佐川^{さがわ}1佐だ。

「政府は本気にしていない。まさか高麗軍が攻めてくるとは夢にも思っていない。いや、政府だけじゃない、防衛省や隊内でも高麗軍の行動をあくまでも脅しだと考えている者かなり居る。もちろん最低限の対応はするよ。自衛隊の権限の中だな」

政府が本気にしていないとなれば、実際に攻め込んできた時の対応がそうとう遅れることになるだろう。ただ自衛隊が独自に対策を進めているなら、敵の第1撃に耐える事ができる。

「まあ、杞憂だと思いますが」

佐川が最後にそう付け加えた。

四・衝突

6月23日

時計の短針が12時を回り、日付が変わった。

竹島は、隠岐諸島沖157kmにあり、東島と西島の二つの主島と岩礁からなり、古くから漁師からは好漁場として親しまれてきた。そして韓国はこの島を独島^{ドクト}と呼んで、1952年に李承晩ラインを設けて以来、日本と領有権を巡り争ってきた。しかし日本は国際法廷で争うべきと言っても韓国はそれを受け入れなかったうえに、その一方で韓国は警備隊を竹島に常駐させている。侵略行為に他ならなかった。

T作戦を実行するのはSST（特殊警備隊）と呼ばれる海上保安庁特殊部隊である。アメリカのSEALから教育を受け、なにより日本では最も実戦経験の豊富な特殊部隊であるが、もともとシージャックや海上テロ、プルトニウム輸送船の護衛を任務とする部隊であり、一つの島の制圧などという任務は初めての経験である。

「竹島を巨大な船を思えばいい!!」

隊長は、そう言うが、やはり、隊員達は不安でならなかった。

SSTは、巡視船【だいせん】に乗り込み、竹島を目指していた。竹島は、一ヶ月前ほどから、海保巡視船により包囲されている。

【だいせん】は2001年に就役した中堅のPLH（ヘリコプター搭載巡視船）であり、35ミリ機銃と20ミリ機銃を1門ずつ装備して、ヘリコプター1機を装備している。

午前1時、闇夜に包まれた海の上、SSTを乗せた小型ボートが

巡視船を離れた。突入部隊は20名。隊員達はサブマシンガンMP-5や89式自動小銃で武装している。いざとなれば巡視船の機銃の援護もある。SST隊員達は覚悟を決めた。

ボートはなんとか接岸した。SST隊員達は、闇夜と岩場に苦しんでいた。なかなか前へ進めない。ようやく安定した場所に隊員達は岩場に隠れ、時をまった。

午前2時。巡視船のスピーカーから、韓国語が流れてきた。

「竹島が日本領である事は国際社会で認められた事実です。ただちに退去してください。さもなくば、出国管理及び難民認定法、武器準備集合罪、不法占拠の容疑により現行犯逮捕します!!」

その時、巡視船の甲板にカン、カンという音とともにいくつもの火花は散った。返事は銃撃だった。

「現行犯逮捕する!!」

SSTが銃を構える。

「武器を捨てろ!! 捨てないと応戦する!!」

巡視船のスピーカーからの怒鳴り声。だが銃撃は止まる様子はない。

「応戦!!」

SSTの89式小銃やMP-5短機関銃が一斉に放たれ、数人の高麗警備兵が倒れた。残った警備兵が倒れた者を背負い、岩の陰に隠れようとしている。

「被疑者、後退していきます。」

第4護衛隊群第八護衛隊、護衛艦【ゆきぐも】

【ゆきぐも】は20DDとして計画され、【まきぐも】型2番艦として2012年に実戦配備された最新鋭の艦である。特に目立つのは艦橋構造で、国産の新型レーダー及び射撃統制システムであるFCS-3が装備されていた。この新システムのおかげで【ゆきぐも】はイージス艦に準ずる防空能力を持つ事になった。もともとはMD計画が推進されていた時に弾道弾迎撃に専念するイージス艦を守る為に計画された艦艇で、当初はスタンダード級の長射程対空ミサイルの装備も考えられたが、北朝鮮危機が去ったことから白紙にされた。

【ゆきぐも】は対馬周辺で警備行動をしている第2護衛隊群と佐世保地方隊とは別に、第4護衛隊群から単独で派遣されたのである。

「ただいまリンク16から高麗軍の最新の情報が入りました。大変だ!」

CICのオペレーターは驚きの声をあげた。一方で艦長の梶2佐はいたって冷静であった。

「どうしたんだ？」

「哨戒中のP-3Cが高麗と思われる艦隊と偶然接触したそうです」
「規模は？」

「駆逐艦クラスが4隻…ミサイルの照準をロックされた為、P-3Cはすぐに離脱してしまった為、詳細は不明だそうです」
「そうか」

梶はそう言うと、後ろに立つ副長に向けて言った。

「ブリッジに戻る。これはひょっとしてひょっとするかもしれない」

竹島

突如、爆音とともにSST部隊の一角が吹き飛んだ。

「迫撃砲だ！！散開しろ！！負傷者を確保しろ！！」

「田辺と雪原が死亡、重傷者が4名！！」

「巡視船に援護を要請しろ！！」

最前線の隊員達はパニックを起していた。

巡視船の甲板に搭載されている20ミリ機関砲が、竹島に向けられた。

「照準よし！！」

赤外線暗視装置は、高麗警備兵の迫撃砲陣地をしつかり捉えている。

「射撃！！」

20ミリ機関砲の曳航弾が、迫撃砲陣地のあるあたりに次々と吸い込まれてゆく。岩が砕け、迫撃砲陣地を破壊し、高麗警備兵を粉碎する様子が赤外線暗視装置を通した映像として巡視船内でも確認できた。

「酷いな」

船長が手で口を覆いつつ言った。彼らがこのような陰惨な映像を見たのは始めてだった。

高麗海軍 旗艦【世宗大王】セジョン・デ・ワン

イージス艦であるセジョン・デ・ワンは情報収集能力で優れ、竹島周辺の状況も把握していた。CICの司令席に座る高麗海軍少将、キム・ジュヨンは命令書を受け取っていた。

「いよいよ、時が来たか・・・」

複雑な気持ちだった。彼にとって海上自衛隊は兄弟のようなものだ。日本人は好きになれなかったが、海上自衛隊はアジアにおける近代的海軍の模範として、尊敬していた。

しかし、彼も軍人である。命令には逆らえない。

「全艦に命令!!」

巡視船【だいせん】

【だいせん】航海士は、高麗の警備兵が死んでゆくさまを暗視装置の通して見ていた。

「ざまあみろ・・・」

彼は高麗を、韓国を、ずっと怨んできた。なにしろ彼は何年も高麗の密漁船対策に携わっていたのだから。高麗によって日本の海が侵され、漁獲物が奪われる様をずっと見つづけてきたのだ。

「そうだ!! もっとやれ!!」

彼の興奮は絶頂に達していた。

護衛艦【ゆきぐも】

艦長がC I Cを離れようとしたその時にそれは起こった。異変を捉えたのは【ゆきぐも】に載せられていた哨戒ヘリだった。

「シーホークが高麗艦隊を捕捉しました。駆逐艦4、P-3Cは接触した艦隊と思われます」

C I Cは緊張に包まれた。モニターにはリンクシステムを通じて

哨戒ヘリから遅れられてきた高麗艦隊の情報が表示されている。

「艦長、対水上レーダーが高麗艦隊を探知」

「艦長、これは・・・！」

副長は艦長の顔を見た。見た目はいつものように冷静そのものだった。

「私はブリッジに戻る。ここは頼むぞ」

副長にそう言うと、艦長は出口に向けて一步踏み出した。その時だった。

「高麗艦より高速飛翔体が分離！対艦ミサイルと思われる！」

オペレーターは絶叫した。艦長が振り返ると、モニターに高麗艦隊や海保巡視船を示す輝点とは別に新たな輝点が表示されていた。

「対空戦闘用意！」

艦長は考えるより先にそう命じていた。

「対空戦闘用意！これは訓練では無い」

副長が艦内マイクに向かって復誦している。艦長はモニターの輝点に集中していた。

「目標は本艦じゃない。海保だ！」

高速飛翔体は一直線に【だいせん】を示す輝点に向かっていった。

「迎撃できるか？」

艦長はいつのまにか隣に立っていた砲雷長に尋ねた。

「我が艦はイージス艦の補完の為に建造されたのです。可能です。艦長。しかし、まだ命令がありません。我々が迎撃できるのは我が艦に放たれたミサイルだけです」

対馬沖 第2護衛隊群

T作戦は海上自衛隊にとっても大きな意味を持つことであった。

直接作戦には加わらないが、高麗と紛争状態になれば当然ながら高麗正規軍との交戦も想定される。その為に1個護衛隊群を対馬沖に進出させ高麗に圧力をかけるといふ思い切った行動にでたのである。

第2護衛隊群は佐世保を母港とする部隊で、常に最新鋭装備が配備され他の護衛隊群よりも多く訓練時間を割いていることから【訓練の2群】の異名を持つ。

それに佐世保地方隊からの護衛艦1隻、旧式の【はつゆき】型が加わった。

第2護衛隊群は旗艦【いせ】とその護衛で構成されるDDHグループ、第2護衛隊と新鋭のイージス艦【あたご】を中心とするDDGグループ、第6護衛隊の2つに分かれ対馬の南を航行している。佐世保地方隊第13護衛隊の【いそゆき】はDDGグループとともに行動していた。

その護衛隊群を追う艦が水中にあった。高麗海軍のチャンボコ級

である。チャンボコ級は高麗海軍の前身である韓国海軍が初めて導入した潜水艦で、ドイツの傑作潜水艦タイプ209の韓国向けバージョンであり、高い性能を誇る沿岸潜水艦なのである。

【いせ】艦長佐川はブリッジから暗闇の中にかすかに見える対馬を眺めていた。

「変わったもんだな。この国も」

もしかしたら戦争になるかもしれない。そんな考えが一瞬過ぎたが、すぐに振り払った。

「まさかな。戦争になったって、誰も得はしないさ」

そこへ若い尉官が駆け寄ってきた。

「潜水艦は？」

佐川が尋ねると、尉官は手にもったメモを佐川に渡し答えた。

「後方1000に1隻、10ノットで追尾してきます。しつこい連中だ。いっそ振り切りますか？全速なら」

「焦るな。探知しているなら、こっちのものだ」

海自側はすでに高麗の潜水艦の存在を把握していた。それほど海上自衛隊の対潜能力は優れているのだ。だが、同時にその高い能力は隊員達の慢心にもつながっていた。

高麗海軍潜水艦【チャンボコ】

護衛艦隊を追尾しているチャンボコ級1番艦【チャンボコ】の乗組員達は疲労に耐えつつ任務を遂行していた。

「艦長。我々の存在は気づかれていますのでしうか？」

「おそろくな。彼らの対潜能力の高さを見くびるわけにはいくまい」

不安げな副長にそう言うと、艦長は腕時計に視線を移した。時間だ。

「フローティングアンテナを伸ばせ」

竹島近海

海保船隊に迫る危機を1番最初に感知したのは、T作戦の為の増援として派遣されてきた巡視船【しきしま】だった。【しきしま】はプルトニウム輸送護衛の為に建造された世界最大規模の巡視船で、航空機による襲撃に備える為に【はつゆき】型護衛艦に搭載されているのと同様の対空レーダーが装備されており、それが高麗の対艦ミサイルを探知するのに役立った。

「ミサイルか！」

【しきしま】船長はその事態を信じることができなかった。彼らはあくまで海上保安官であり、海の上の警察官兼消防官でしかないのだ。無論、外国の軍艦との戦闘など考えたことは無い。しかし、もたらされる情報はそれが諸外国の軍艦が発射したと思われる（海

保はこの時点で高麗艦隊の所在を探知もしなければ、通報も受けていなかった）ミサイルであることを示していた。

「機銃、撃ち方はじめ！」

【しきしま】には、プルトニウム輸送という任務を実行する為、海保の巡視船でも特に重武装が施されている。が、想定された相手は高速艇から精々セスナのような軽飛行機で、ミサイル迎撃など完全に想定の範囲外。当然、ミサイル迎撃の訓練だって行っていない。

搭載されている35ミリ連装機銃と20ミリ多銃身機銃がそれぞれ2門、計4門。レーダーが捉えたミサイルに向け、火を噴くが、美しい火線を描くだけで、掠りさえしなかった。

高麗艦隊から放たれた対艦ミサイル、ハーブーンと国産SSMである700K型の混成、計8発は、対艦攻撃の最終段階に達していた。着弾の直前になり、ミサイル群は突如上昇に転じたが、それは一瞬の事でさまざま弾頭が斜め下を向きミサイルは巡視船に向けて最後の急降下を始めた。ホップアップとも呼ばれる一連の動きは、命中率を上げることができるが、一方迎撃を受けやすくなる欠点を持つ。しかし、まともな防空装備を持たない海保巡視船相手には何の問題もなかった。

1発目は【しきしま】の艦橋、2発目が機関部に命中し、【しきしま】の巡視船としての機能は失われたが、海保巡視船で唯一、軍艦と同様の仕方で建造されたその船体はなんとか【しきしま】を水の上に浮かばせていた。

3発目は【だいせん】を目標していた。

「くるぞ！」

あの航海士が叫ぶ。

「回避！機関出力最大！取り舵一杯！」

艦長の号令を受け、航海士は操舵輪を思いっきり回したが、すでに手遅れだった。動き出したばかりでまだ速力が出ない【だいせん】をミサイルは簡単に捉えることができ、【だいせん】の無防備な横腹に飛び込んでいったのである。ハーブーンミサイルの弾頭に仕込まれた224キログラムの高性能火薬は【だいせん】の防弾仕様の船体をいとも簡単に破壊したのだった。

【チャンボコ】

【チャンボコ】は、この戦争において主敵である自衛隊に最初の一撃を与えるという名誉ある任務を授かった。すでに8本の魚雷発射管には国産の長魚雷である【白鮫】ベクサンオを装填している。この魚雷は、開発環境の不備もあり試験中に様々な問題を起し、その後の経済危機もあって思うように改良が進まず信頼性が低いのが難点であるが、うまく作動すれば恐るべき威力を発揮する。【チャンボコ】には、より信頼性の高いドイツ製SUT魚雷も装備しているが性能にあまり高くなく、それにこの記念すべき第1撃を外国製の兵器で行なうというわけにはいかず、白鮫魚雷を使用することとなった。

艦長は海図台に立ち海図の上に置かれた船の模型を見つめた。目標の海自艦隊。艦隊は2つに分かれており、前方は4隻、後方に5隻。

「1番から8番、発射用意！」

「1番から8番、発射用意！」

水雷長が兵装制御区画の計器の前で復誦する。

「目標は？」

水雷長が計器から艦長に目を向けた。

「後方5隻だ。撃破と同時に急速潜航、混乱を利用して離脱を図る」

操舵席の後ろで操舵手に指示を出していた航海長も艦長に振り向いた。

「前方4隻は？」

「我々の目的は日本の独島の侵略を阻止し、我々が行動する隙をつくることだ。それを達成できれば、我々が必要以上の危険を冒す必要はない。それに僚艦の手柄まで奪ってはかわいそうだろう？」

対馬の東には【チャンボコ】が自衛艦隊を逃した時に備えて別の潜水艦が配置されている。もしかしたら残りの護衛艦は彼らが始末してくれるかもしれない。

「発射用意よし！」

水雷士が発射ボタンの上に指を置き、いつでも発射できるようになった。

「1番から8番、発射！」

艦長の号令と同時に水雷士が指に力を込めた。発射ボタンが押され、8本の魚雷管から1本ずつ、20秒ごとに次々と海中に放たれた。

五・海戦

護衛艦【いせ】

時間を遡ること約5分前。それはリンク16を通じて【ゆきぐも】から高麗艦隊の海保に対するミサイル攻撃の情報を受けた直後であった。

<ソナー感！>

【いせ】の水測員の声がスピーカー越しに聞こえてきた。

<後方高麗潜水艦より注水音！>

その報告にCICにいる全員が凍りついた。注水音、それは相手が魚雷発射の準備をしていることを表しているからだ。

「対潜戦闘用意！これは実戦では無い！」

艦長の命令に誰も反応しなかった。

「復誦はどうした！」

艦長の怒鳴り声で我に返った副長が復誦し、ようやく艦が動き始めた。だが甲板VLSに装填されているアスロック対潜ミサイルを発射することはできない。ROE（交戦規定）が定められていない現状、自衛隊に先制攻撃は許されない。

その時だった。

「魚雷を探知。方位2－8－1。目標、魚雷を発射しました」

「回避!!」

東京 首相官邸

烏丸首相は5階の執務室に居た。地下の危機管理ルームなら工作戦の状況をリアルタイムで知ることができ、数人の閣僚（おもに自民党員）が総理の入室を求めたが、烏丸は拒否して定期的に持ち込まれるペーパーで状況を確認していた。平和主義を標榜する政党のトップとしてのささやかな抵抗であった。

「総理。」

秘書官がドアを開けて入ってきた。

「緊急事態です。下の危機管理ルームに移動をお願いします」

対馬海峡

【チャンボコ】の放った魚雷は、艦隊の後方を進むDDGグループを襲い掛かった。DDGグループを構成する5隻の護衛艦、【あたご】【ゆうだち】【まきなみ】【さわぎり】【いそゆき】はそれぞれの機関出力を最大にして回避行動を開始したが、至近距離から放たれた魚雷を回避するには無理があった。白鯨魚雷は55ノットの速力で追いかけてくるのだ。

【いそゆき】が最初に犠牲になった。最近の魚雷は直撃させる必要が無い。磁気信管により目標艦の真下に達した時に爆発する。下

方からの衝撃による竜骨を破壊された【いそゆき】の船体は真つ二つになってしまった。

【ゆうだち】には2本の魚雷が襲った。1本目は信管が作動せずそのまま艦底をすり抜けてしまったが、2本目は艦首側に針路が逸れて爆発した。【ゆうだち】は艦首を一瞬で吹き飛ばれたが、瞬時に海底へ消えることは無かった。回避行動が実った結果だった。

【まきなみ】を襲った2本の魚雷のうち1本は信管の過敏により【まきなみ】のはるか手前で爆発した。これは試験時に露呈した初期不良の1つで、その後の経済危機の中では十分な改善が施せなかったのだ。しかし先行していた1本を避けられず正常に作動し【いそゆき】と同様の結果となった。

5隻の中でも前の方にいた【さわぎり】と【あたご】にはいくらか回避の為のオプションが残されていた。【さわぎり】を襲った魚雷のうちの1本は先ほどの【まきなみ】を狙った魚雷の1本と同じように信管の過敏を起し手前で爆発。そしてすぐ後ろを進んでいたもう1本の魚雷のハイドロフォンは近距離での爆発音のために【さわぎり】を見失い、急回頭を行なった【さわぎり】を再び捕捉することはできなかった。

【あたご】には対魚雷防御システムが後日装備されていた。それは音響的な欺瞞と妨害による一種のデゴイ装置のようなもので、技術研究本部で開発され【まきぐも】型に初めて搭載されたものである。【あたご】は取り舵で急回頭すると、ただちにそれを使用した。

「魚雷防御システム発射！」

艦側面に設置された発射装置から筒状の物体が射出された。その物体は海面に落下すると適当な深さに自ら潜り、【あたご】のスクリー音と似た音を発した。

「騙されてくれよ」

【あたご】艦長は艦橋のウイングから魚雷防御システムの落下した海面を双眼鏡で眺めていた。そして次の瞬間、その海面に水柱が立ち爆音が轟いた。

第二護衛隊群は2隻の護衛艦が撃沈され、1隻が戦闘不能の状態となった。それが高麗軍の自衛隊に対する初の戦果となった。

危機管理ルーム

「第二護衛隊群と海上保安庁が攻撃を受けた？」

烏丸は、そのあまりの報告に耳を疑った。

「で、いまはどうしているんだ？」

「海上自衛隊及び海上保安庁には安全圏まで撤退するように指示しました」

答えたのは防衛大臣の中山である。彼は自由民権党の議員の中でもタカ派として知られていた。

「今確かなのはこれだけです。わが国は高麗軍の攻撃を受けました」

竹島沖

海上保安庁への攻撃を終えた高麗艦隊はどこかへ消えた。【ゆきぐも】はそれを確認すると、攻撃を受けた巡視船の救助を開始した。

【ゆきぐも】から降ろされた救命ボートに、撃沈された巡視船の乗組員が殺到する。

「思ったより、巡視船の乗員って少ないんですね。」

甲板より、その様子を眺めていた副長が部下に言った。

「巡視船はダメコンを考慮していませんから。」

「3隻か・・・」

現在、水上に見える巡視船は3隻。作戦開始前の半分だけだ。しかも、浮いている巡視船のうち【しきしま】ともう1隻は既に巡視船としての機能を失っており、無傷なのは1隻だけである。

「敵艦隊は撤退してゆきましたが」

「なにか企んでいるんでしょうかね。とにかく早く収容して、この海域を離れないと」

1隻で艦隊を相手することはできない。副長は、そそくさと艦内に消えていった。

【ゆきぐも】の医務室に【だいせん】の航海士は運ばれていた。

「大丈夫だ。お前は助かるぞ。」

医官が、航海士に言った。

「そうか…俺の船はどうなったんだ？」

「残念だが、もう沈んでしまったよ」

「…頼む…仇をとってくれ…【だいせん】の仇を」

医官は、航海士の手を優しく握った。

「ああ。分かっている。」

北九州港 高麗貨物船【清津32号】

真夜中の埠頭の1つに【清津32号】が停泊していた。

甲板に並べられたコンテナの一つが船員によって開けられる。コンテナの扉が開き、中に月の光が入り込む。そこには銃火器が並べられていた。船内から野戦服を着た男たちが出てきてコンテナから自分の銃を取っていった。

「諸君・・・いよいよ、時が来た。」

リーダー格の男が宣言した。彼らは精鋭中の精鋭。今回の作戦の為に特別に組織された特殊部隊であった。

「出撃だ！」

部下は全員で300人。彼らは全員、艦内の貨物スペースに集結した。そこで、先ほどのリーダーが、台の上に立った。

「諸君。作戦の概要を説明する。この作戦で重要なのは、速さだ！速力こそ武器なのだ！北九州市をその手に収め、主力部隊を迎え入れる準備をするのだ！キム中尉。君はAチームを連れて、市内の重

要施設を制圧するのだ」

つづいて、リーダーは一人の男を指差した。

「ドン少尉。君はBチームを率いて、海峡を封鎖し、本州からのルートを断て」

そして、リーダーは一番奥にいる男に視線を移す。

「そして、リ中尉。Cチームを率いて、この港で主力部隊を迎える準備をしろ・・・作戦開始だ！」

「団結！」

兵士達が一斉に駆けていった。

六・空戦

対馬海峡上空

T作戦に際して航空自衛隊も部隊を展開していた。対馬上空に築城基地から発進したF-15Jが二機、竹島上空に小松基地から発進したF-15Jが二機。そしてその中間に当る空域には小松の二機のF-15Jに護られたE-767AWACS早期警戒官制機が飛んでいた。

AWACSは空中のレーダーサイト兼司令部とも言うべき航空機で、巨大なレーダードームを背負う特異な外観の航空機だ。

＜アロー1。こちらアスター1。北方より高速で戦闘機らしき飛行体が接近。数は2＞

「アスター1。こちらアロー1。高麗軍か？」

野々宮は海上で衝突が起こっているという情報を既に得ていた。AWACS＜アスター1＞のオペレーターは「詳細は不明」と繰り返すばかりであったが。

＜アロー1。こちらアスター1。詳細は不明。繰り返す、詳細は不明。目視確認せよ＞

「ラジャー。アロー1、目標と接触し目視確認する」

この時、E-767AWACSは高麗領空内を飛ぶ複数の高麗空軍機と見られる機影と民間航路を飛ぶ旅客機を捉えていた。高麗空軍機の中にはE-737AEWの姿も確認できた。空自のE-767ほどでないにしろ、優れた能力を持つ早期警戒機である。旅客機の方は仁川空港から美保飛行場へ向かう機体であった。フライトプランも提出されている通常便である。若干、針路がずれているよう

だが。

高麗 巨済島

巨済島は釜山のすぐ南にある島で、造船の島として知られている。その島の公園にそれはいた。M2ブラッドレー戦闘装甲車を改造して作られたM270自走発射機、いわゆるMLRS（多連装ロケット砲）である。しかし発射機に装填されているのは、ロケット弾では無い。ATACMS（陸軍戦術ミサイルシステム）、米軍の開発した地对地短距離弾道ミサイルである。このミサイルは、ブロック1Aと呼ばれるタイプで射程は330kmに達しているから、巨済島から九州を直接攻撃できる事になる。その弾頭には、通常ならM74APAMという子弾を300発ほど搭載しているのだが、今回は特別な弾頭が収められた。

対馬海峡上空

野々宮は目標を発見した。

「畜生！アスター1、目標は4機だ！繰り返す目標は4機だ！」

AWACSアスター1の指示に基いて、目標の後方から接近した野々宮が見たのは、高麗空軍の識別表を付けた4機の戦闘機であった。2つの2機編隊で飛んでいて、編隊を組む2機があまりに接近していたので、編隊が1機の航空機のようにリーダー上では見えただ。

「2機はKF-16。残りの2機はF-15Kで翼下に大型のミサイルを搭載している！築城から増援を呼んでくれ。2機では対処できないかもしれない」

「アーニー、こちらサリィ。援護してください。自分が行きます」

巨済島

「照準よし！発射！」

指揮官の号令とともにM270から特別仕様のATACMSミサイル4発が発射された。

航空自衛隊築城基地

航空自衛隊の実戦部隊である要撃飛行隊は、緊急発進^{スクランブル}に対処する為に4機の戦闘機が常に待機しており、そのうち2機がスクランブル指令から5分間で離陸できるようになっている。待機しているのはパイロットも同様であり、待機中はトイレに行くことも許されない。

スクランブル指令を示すサイレンがなると、パイロット2名はアラートハンガーに駆けていった。

アラートハンガーに入ると、そのまま要撃機F-15Jのコクピットに潜り込んだ。すぐにエンジンが始動され、滑走路まで自走した。滑走路上の定位置につくと、パイロットは管制に離陸許可を求めた。あとは離陸するだけである。いや、だけだった。

次の瞬間、ATACMSの弾頭は、ATACMS本体から離れ、

そのまま高速で滑走路を貫いた。爆発の中に2機のイーグルは消え、そのまま鉄の塊となった。二人のパイロットは飛び立つことなく、この世から去った。さらにその爆風がシャッターの開いたままのアラートハンガーに向かった。

築城基地は、この瞬間に運用能力を失った。

対馬海峡上空

野々宮の僚機であるサリーはE-767AWACSの指示に従って、高麗空軍編隊の後方から接近していった。

「高麗空軍機に告ぐ。貴官は日本の領空を侵犯している。ただちに退去せよ！繰り返す、貴官は日本の領空を侵犯している。ただちに退去せよ」

だが、高麗空軍機は応答も変針もしない。

「アロー2よりアスター1へ。目標は応答しない。威嚇射撃の許可を！応援の機体はまだか？」

しかし、返事は思わぬものだった。

＜アロー2、こちらアスター1。築城が攻撃を受けた。スクランブル機は発進できない＞

「なんだって！」

サリーと野々宮は、この時、この高麗空軍機がただの脅しではないことを悟った。だが、それは遅すぎた。

高麗空軍編隊のうち2機のKF-16が突如右旋回した。

＜アロー1、アロー2。こちらアスター1。退避せよ！退避せよ！＞

野々宮とサリーは咄嗟に操縦桿を前に倒して急降下した。2機のKF-16は2機のF-15Jの尻に喰いついてくる。

「サリー！もっとパワーを上げろ！」

野々宮のF-15のコクピット内では警告音が鳴り響いていた。高麗の戦闘機がレーダー照射を行ったのだ。

＜くそ！アーニー！助けてくれ！ミサイルロックされた！＞

野々宮は海面付近まで降りると操縦桿を引き急上昇した。

「サリー！俺のようにやるんだ！ついてこい！」

野々宮のF-15はパワーを生かして喰いついてくるKF-16との距離を稼ぐことに成功した。だが、サリーは野々宮のようにはいかなかった。海面に近づいた時、サリーはスロットルを緩めてしまったのだ。すぐ後ろについたKF-16は右の翼端に搭載されたサイドワインダー赤外線誘導ミサイルを発射した。サリーは回避する間も脱出する間もなく、愛機ごと吹き飛んだ。

「サリー！糞！どうなってるんだ！」

＜落ち着けアロー1。我々が誘導する。上空待機中のF-15が急行中だ。それまで踏ん張れ＞

E-767のオペレーターは冷静に指示を出しているが、彼らに

も危機が迫っていた。

日本海上空 E-767 AWACS<アスター1>

オペレーターたちは管制下の作戦機たちに冷静に指示を与えていたが、その顔面は誰しも蒼白していた。なにしろ初めての<実戦>である。

ともかく竹島上空を警戒していた2機のF-15Jを増援として向かわせた。E-767にはそれとは別に2機のF-15Jが護衛についていて、彼らの方が距離的に近いのでアロー1の救援が可能だが、AWACSという最重要目標の護衛を向かわせることはできなかった。

その時である。オペレーターの1人がそれに気づいた。

「高速飛翔体が接近！ミサイルと思われる！」

「ミサイルだって！レーダー照射は受けたのか？」

コクピットで操縦桿を握っている機長が怒鳴った。

「いや、受けていない！畜生！対レーダーミサイルだ！いったいどこから…」

この時、彼らは知らなかったが、先ほど彼らが捉えていた高麗の民間旅客機が実は高麗空軍の電子戦機でESM（逆探知装置）でE-767のレーダー波を追い、E-767の方へ微妙に航路からずれたルートを飛び接近し、その電子戦機の影に隠れていた高麗空軍

のKF-16がやはりESMを頼りにE-767にAGM-88H RAM（高速対レーダーミサイル）を放ったのだ。

AIM-120AMRAAM（発展型中距離空対空ミサイル）を使用することもできたが、これを使用するにはレーダーを使う必要がある。なので事前に察知され、護衛機の攻撃を受ける可能性がある。それに対してHARMは相手の発するレーダー波に向かっていくのでこちら側がレーダーを使う必要は無い。AIM-120ほどの確実性は無いが、今回はそれでよかった。

「メーデー、メーデー、こちらアスター1、攻撃を受けている。繰り返す、攻撃を受けている！」

コパイが無線に向かって怒鳴っている横で、機長は回避行動を開始しつつ叫んだ。

「レーダーを切れ！」

そうするしか対レーダーミサイルから逃れる術は無い。機体の背部に載せられた巨大な円盤型のレーダードーム、APY-2は活動を停止し、AWACSとしての機能を失った。

かくして、高麗空軍は一時的にせよ高麗から九州北岸までの制空権を事実上確保したのである。

一方、KF-16と分かれたF-15Kは地上のレーダーの警戒網から逃れる為に急降下して超低空を飛行していた。F-15Kは、制空戦闘機であるF-15の対地攻撃能力を向上させた戦闘爆撃機であるF-15Eの韓国版で、今は翼の下にそれぞれ2発ずつのAGM-84H「SLAM-ER」巡航ミサイルを搭載している。

2機のF-15Kは2手に分かれて、それぞれの目標へ迫った。目標とは、山口県の見島と長崎県の五島列島に設置された航空自衛隊のレーダーサイトである。

危機管理ルーム

「いったいどういう事なんだ？ちゃんと説明をしてくれないか？」

烏丸が怒鳴っていた。

「日本は高麗と事実上の交戦状態に突入しました」

中山は冷静に振舞うことに努めていた。

「最新の情報による航空自衛隊のレーダーサイトが攻撃を受けたと。詳しい被害は不明です。ともかく、これは高麗軍の本格的かつ組織的な軍事侵攻です」

「米軍はどうしたんだ？」

米軍は動くに動けない状況であった。

台湾海峡 空母【ジョージ・ワシントン】

第7艦隊第70任務部隊は、原子力航空母艦【ジョージ・ワシントン】と複数の護衛艦艇から構成される。その指揮を執っているのがフランク・スチュワート海軍少将だ。

「艦長。大変なことが起こった」

艦橋で航行の指揮を執っていたアダムスが声のした方へ振り向くと、疲れ果てた司令官の姿を見ることができた。

「司令。なにが起こったというのですか？」

艦橋からは今まさに発艦した2機のF/A-18E戦闘機の姿が見えた。ここ数時間のうちに中国空軍及び海軍航空隊の動きが慌しくなり、【ジョージ・ワシントン】ではそれに対抗する為に艦載機を発進させているのだ。

「高麗軍が日本を攻撃したようだ。詳しいことはまだ分からない」「畜生！あの糞つたれどもめ！この忙しい時に！司令、我々はこれから高麗を叩きに行くのですか？」

「いや。太平洋艦隊司令部からは、現状を維持せよ、という命令がきている。この状況では我々が台湾海峡から離れるわけにはいかんだろう」

対馬上空

野々宮は孤独な戦いを続けていた。急旋回を繰り返し、追ってくる2機のKF-16から逃れようとするが、2機ともしつこく喰いついてくる。

1機のKF-16がAIM-9サイドワインダーミサイルを1発放った。これは目標の発する熱を追跡するミサイルで、今はF-15Jが装備する2基のジェットエンジンの排熱を追ってくる。野々

宮はF-15Jに装備されたフレアを空中に解き放った。フレアは
囀の熱源である。野々宮はすぐに急旋回したが、サイドワインダー
の方はフレアをF-15Jだと誤認してそのまま真っ直ぐ突っ込ん
だ。敵のサイドワインダーはどうやら旧式だったらしい。

すると突然警報が鳴り止んだ。野々宮が後ろを見ると、KF-1
6は反転して行ってしまった。なぜだろう、と勘ぐっていると東か
ら2機のF-15Jが現われた。AWACSのオペレーターが行っ
ていた増援機だろう。

名古屋市内 あるアパートの一室

深海真は用を足しに起きた。時計は2時半を過ぎたあたりを示し
ている。辰巳は夜のアニメタイムであった。

「あれ？どうなってんだ？」

トイレから出てきた真が見たのは、テレビに対して困惑してい
る弟の姿であった。

「どうした？」

「なんか九州で小競り合いがあったみたいだニューステロップが流
れて、そしたら突然、画面が切り替わって…」

確かに本来ならアニメを放映している筈のテレビ画面にはニュー
ススタジオと原稿を読みあげるキャスターが映っている。

＜海上保安庁が高麗軍の攻撃を受けました。未確認ですが複数の巡
視船が沈没したとの…＞

その時、真には辰巳の呟き声が聞こえた。

「これはマジでやばいかもしれない…」

6 4 2 名前…名無しさん 投稿日…2015/7/23 (木)
0 2…3 4…0 7

高麗、マジで攻撃してきたの？

6 4 3 名前…名無しさん 投稿日…2015/7/23 (木)
0 2…3 4…1 1

戦争キター

6 4 4 名前…名無しさん 投稿日…2015/7/23 (木)
0 2…3 4…1 3

臨時ニュースやってる。巡視船が沈んだらしい

6 4 5 名前…名無しさん 投稿日…2015/7/23 (木)
0 2…3 4…1 3

あいつらマジでやりやがったかorz

最後の一欠けらの理性くらいは残ってると思ったのに

6 5 1 名前…名無しさん 投稿日…2015/7/23 (木)
0 2…3 5…0 5

<<6 4 4

テレ東は？うちテレ東系映らないんだけど

6 7 0 名前…名無しさん 投稿日…2015/7/23 (木)
0 2…3 6…2 0

<<6 5 1

テレ東も。ひょっとして、日本終了フラグ？

6 7 3 名前…名無しさん 投稿日…2015/7/23 (木)
0 2…3 6…5 1

うそだろ？

680 名前…名無しさん 投稿日…2015/7/23 (木)

02…38…10

<<673 マジだ

テレ東が臨時ニュースってただ事じゃないだろ

689 名前…名無しさん 投稿日…2015/7/23 (木)

02…39…07

<<680

それってかなりヤバイな

690 名前…名無しさん 投稿日…2015/7/23 (木)

02…39…07

日本オワタ＼(＾o＾)／

七. 交戦

糸島半島 二見ヶ浦

福岡市外の北西10kmほど先に二見ヶ浦がある。糸島半島の先端にあるその地はサーフィンの名所として知られるが、午前3時近い深夜に人影は無い。

そこへ20機ほどのヘリコプターが飛来した。うち15機は高麗海軍が輸送ヘリとして使用するロシアのカモフ社製のKa-32であり、残りの5機は高麗陸軍で偵察及び攻撃に使われている500MD小型ヘリであった。これらの機体は【独島】【馬羅島】に載せられ、高麗海兵隊侵攻部隊の第1陣として送り込まれたのである。高麗海兵隊は出入り口が狭い博多湾への侵入を諦め、二見ヶ浦を上陸地点に選んだのである。

20機のヘリコプターの発する騒音はすさまじいものであり、数分後に北九州の警察が連絡を断ったことでパニック状態の福岡県警に「二見ヶ浦に多数のヘリコプターが飛来し、迷彩服を着た男たちが現われた」という通報が飛び込んだ。

北九州市小倉駐屯地

小倉には陸上自衛隊第4師団の第40普通科連隊が駐屯している。工作戦に伴い高麗の妨害活動に対抗する為、北九州の警察組織との連絡を密にしていたが、突如、連絡が断たれてしまった。

「上からまだ命令はありません」

連隊長の金井1佐に対して通信士が報告した。

「よろしい。命令は無いが、これが尋常ではない事態なのは間違いない。情報小隊を出そう」

情報小隊とは普通科連隊本部直轄の小規模な偵察部隊である。

「訓練名目で出しましょう。問題は遭遇戦になった場合ですが」

運用（作戦）担当幕僚が金井に尋ねた。

「命令が無い以上、緊急避難、正当防衛で各隊員が臨機応変に対応するしかあるまい」

数分後、待機していた情報小隊のオートバイと新73式小型トラック（三菱パジェロの自衛隊版である）が駐屯地の門を出た。

門の外には市民団体の集団が真夜中にも関わらず待ち受けていて、抗議活動を行っていたが、命を張るつもりは無いらしく、車が出てくると素直に道を空けた。

73式小型トラックに乗る2人の曹がその様子を見て談笑していた。

「連中は高麗軍の攻撃を知っているのだろうか？」

「むしろ高麗の指示でやってるんじゃないすか？」

情報小隊は北九州市立大学の脇を抜けて国道322号線に出て北上し、各方面に分かれていった。そのまま直進していた班はやがて日豊線との交差点に達した。

先頭に行く2台のオートバイの乗り手は、鉄道の高架の下に4W

D乗用車が停まっているのが見えた。日本では珍しいヒュンダイ製の車であった。

車の影になにか光るのが見えた。次の瞬間、オートバイの1台が横転し、乗り手が首を手で押さえて倒れていた。光は銃の発射炎であった。もう1台のバイクの乗り手はその場で停止し、バイクを盾にして89式小銃を4WDに向けた。追走する73式小型トラックもその場に停止して小銃を持った隊員が駆け下りて、応戦の態勢をとった。

「0-2より本管へ。0-2より本管へ。アタックを受けた！指示を請う！オクレ！」

福岡駐屯地

小倉駐屯地から情報小隊が出動した頃、福岡県警から駐屯地に電話があった。

「この忙しい時に騒ぎを起こして、何のつもりなんですか？海岸で訓練をするなら事前に連絡を」

電話にでた当直は相手がなにを言っているのかさっぱり理解ができなかった。

「いったいどうしたのですか？状況が理解できないのですか？」

「くえっ！二見ヶ浦で迷彩服を着た男がたくさん居るって通報がありました。お宅の部隊の訓練かなにかではないのですか？」

その言葉を聞いた瞬間、当直は思わず電話の受話器を床に落としてしまっていた。

「敵だ！」

北九州市 九州自動車道

ドン・テヒョン少尉は、元々は北朝鮮第八特殊軍団所属のゲリラ兵で、中東や東南アジア、アフリカの戦場にも派遣された戦のプロであり、北朝鮮出身の人間としては割と成功している方に分類される。彼が最初にこの計画を聞いたとき、返事は一言。

「なにを考えてるんですか？」

戦場のプロである彼は、日本と高麗の国力の差をしっていた。長期戦になれば国力の勝る日本に負けるのは明らかだ。彼の上官たちは「必ず短期間で決着がつく」と言い張ったが、彼はそこまで樂觀的にはなれなかった。北九州に貨物船に乗り込み、作戦遂行中の今でも勝てるとは思っていない。

彼は貨物船に乘せられていたヒュンダイ製の市販の4WDに乗り九州自動車道を関門海峡に向けて走らせていた。

九州と本州を結ぶルートは5つある。在来線の通る関門鉄道トンネル、新幹線用の関門新トンネル。有料道路が走る関門国道トンネル。高速道路の通る関門橋。そして、人用の関門人道トンネルだ。

「すでに関門新トンネルと鉄道トンネルは封鎖しました。トラックやらバスやらで塞いでやりましたよ。それで無線で本州側にトンネ

ルを封鎖してやった事を知らせてやりました」

「知らせたのか？」

「ええ。新幹線に突撃されたんじゃない、こっちもやってられないので。あとは橋を爆破するだけです。少尉。我々の拠点は、ここ。＜めかり＞という休憩所があるでしょう」

下士官が、そう言って地図の一点を指差した。

「そうか。分かった。ところで、Aチームの方は？」

ドンが聞くと、下士官はすぐさま答えた。

「はい。すでに市役所や警察など制圧済みです」

車はパーキングエリアに入っていた。

門司 めかりパーキングエリア

ドンと同様、ヒュンダイ製4WDで展開していた高麗特殊部隊が、テントの組み立てやら機器の設置やらで忙しそうに働いていた。

「あれが本州か・・・」

車を降りたドン少尉は、関門海峡を挟んで見える対岸の島を眺めていた。

「できれば、あそこも制圧したいですね」

「そうだな。軍曹。高速道路の封鎖状況を確認したいのだが・・・」

「分かりました。案内します」

二人がやって来たのは、九州自動車道と門司港インターの分岐点だ。

高麗軍はすでに封鎖を行っており、一般車を門司港インターへ誘導していた。

そこへ一台の車が止まり、男が出てきた。

「これは一体、どういう事だ？」

しかし、封鎖を行なっている高麗軍兵士は答えなかった。

「はつきり言え。」

「私が責任者だ。」

ドンは無表情で答えた。その日本語は流暢だが日本人ではない。えんない訛りがあった。

「お前ら外人だな？中国人か？朝鮮人か？いったい、なんの権利があつて。だいたい、お前ら何者だ」

ドンは、にやりと笑うと、懷からサブマシンガンを取り出して、引き金を引いた。弾丸は男の車のフロントガラスを貫いた。

「高麗陸軍、ドン・テヒョン少尉だ。さあ、行ってくれ。車はフロントガラスが無くても動くだろ」

男は、頷くと慌てながら車に戻って行った。
北九州は、高麗軍の支配下におかれていた。

陸上自衛隊対馬駐屯地

対馬は九州と朝鮮半島の中間地点にあり古くから戦略的な要所と見られていた。戦前には要塞も建築され、現在でも第4師団から警備隊が派遣されている。

第4師団対馬警備隊は、1個の普通科中隊とその支援部隊から成り、350人ほどの人員が配置されている。指揮官は一等陸佐という連隊並の扱いとなっており、いかに重要な部隊であるかが分かる。そんな、対馬警備隊は今、絶望的な状況の中にあった。

「空自のレーダーサイトが襲撃を受けたみたいです」

航空自衛隊との連絡を行っていた3尉が叫んだ。

「高麗陸軍のヘリが飛来したそうです」

「西部方面隊総監部は？」

隊長の小津^{おづ}1佐がその3尉に尋ねた。

「待機せよ、と命令が」

小津は小さく頷いた。

「出動しよう。情報収集が必要だ」

数分後、対馬駐屯地からオートバイを先頭に対馬警備隊の車両が

次々と出動していった。

首相官邸 危機管理ルーム

「総理。防衛省の中央指揮所と回線が繋がります」

中山は中央指揮所にメンバーが揃ったという連絡を受け取ると、総理に報告した。危機管理ルームの方もようやく烏丸内閣の主要な閣僚たちが揃った。時刻は午前4時を過ぎた頃だった。

「よろしい。繋いでくれ」

相手は統合幕僚長の神谷^{かみや}陸将であった。

＜総理。はじめに新たな情報が入ったことを報告します。高麗軍は北九州及び福岡に既に上陸していると思われます。北九州では既に我が自衛隊部隊と交戦しております＞

「さて！なんで勝手に戦っているんだ！まだ命令は出してないぞ！」

烏丸が声を荒げた。

「自衛隊の出動には総理のご命令が必要だ。勝手に戦闘をはじめるなんて、甚だしきシビリアンコントロールの逸脱だ！」

法務大臣の栗田^{くりた}がそれに続く。彼も社会民主党の人間である。神谷はすぐに反論した。

＜訓練名目で情報収集に出動した部隊が、高麗軍と思われる敵部隊

の銃撃を受けたの正当防衛射撃を行ったのです。自衛隊はあくまで法令枠の範囲内で行動しております＞

「とにかく今は情報が必要だ」

中山が間に入った。

「現状を詳しく報告してほしい」

＜T作戦に参加した海上保安庁の巡視船が高麗水上部隊の、援護に出動した海上自衛隊が高麗潜水艦の、攻撃をそれぞれ受けました。巡視船3隻が沈没、2隻が大破。また護衛艦は2隻が沈没、1隻が大破しました。海上自衛隊及び海上保安庁は安全圏に撤退しています。＞

その後、対馬上空を警戒中の空自の戦闘機、警戒機が高麗空軍の襲撃を受け、戦闘機が1機撃墜されました。さらに築城基地が高麗軍のミサイル攻撃により現在、使用不能の状態です。

詳細は調査中ですが、これらの攻撃により数十人の死傷者が発生したものと＞

「私はどうすればいい？」

ようやく落ち着いたらしい烏丸が神谷に尋ねた。

＜これは明らかな侵略行為であり、明白な武力攻撃事態です。防衛省統合幕僚監部としては、自衛隊の防衛出動を進言します＞

「防衛出動なんてトンでもない！」

神谷の言葉に異を唱えたのは外務大臣の古橋ふるはしだ。例にとって彼も社会民主党の人間である。

「自衛隊を出せば事態がややこしくなります。まずは高麗の駐日大使を呼んでこの件に関して抗議を行ったうえで、外交的な解決を進

めるべきです。今こそ平和立国としての対応が求められているのです」

「既に死者が出てるんだぞ！」

古橋の言葉に中山が声を荒げた。

「なにが平和立国だ！憲法を守って国民が死んだ、じゃ世話ないさ！」

その言葉は法務大臣を刺激した。

「貴様！憲法をなんだと思っているんだ！」

「まあ、待ちたまえ」

争いを止めたのは、これまでずっと沈黙を保ってきた官房長官の菅井だ。自由民権党の長老として知られる彼は政界に大きな影響力を持っている。

「統幕長。我々にはどれだけの猶予があるのかね？」

＜陸幕は12時間以内に戦車の援護をつけた部隊を進出させ、敵上陸部隊を蹴散らす必要があると言っています。高麗が橋頭堡を固めたら手遅れです。事態が長期化する可能性が＞

その時、危機管理ルームのドアを叩く音が響いた。ドアが開くと入ってきたのは烏丸の秘書官だった。

「総理。高麗の駐日大使が総理との面会を希望しています」

八、侵攻の裏

二見ヶ浦

沖合に強襲揚陸艦【独島】【馬羅島】が投錨し、ヘリコプターで上陸した部隊が確保した海岸に次々と兵士と兵器を送り込んだ。戦車は揚陸艦に搭載しているLCAC（エアクッション艇―軍用ホバークラフトのことである―）で海岸まで運び、歩兵の足となる装甲車は水陸両用のAAV-7なので揚陸艦から自力で海岸まで向かった。

この2隻だけで2個大隊の兵力を運ぶことができる。後続する【コージュンボン】級揚陸艦4隻が到着すれば海兵隊1個連隊強の兵力が揃うことになる。

対馬

対馬の夜道は寂しいものだった。だが、このどこかに敵が潜んでいるのかもしれない。

数分前、レーダーサイトに続いて海上自衛隊の上対馬警備所からも連絡が途絶えた。北上していた対馬警備隊は一旦車を停めて徒歩による斥候を出すこととなった。

小銃を持った自衛隊員が曲がりくねった県道182号線を進んでいる。先頭の隊員は、進行方向、すなわち北の方向を、暗視装置を駆使して睨んでいた。

「前方300に敵車両！」

最後尾を進む指揮官は、89式小銃の安全装置を解除した。

「構え！ただし、先制攻撃はするな！」

彼の目は、こちらに迫る高麗のジープを確認した。ジープの荷台に一人の兵士が立っている。その兵士はジープに備え付けた火器の銃身をこちらに向けていた。

「やばい！散開！散開するんだ！」

高麗の火器はK4グレネードランチャーだった。それは自衛隊の96式自動擲弾銃と似た兵器で、炸裂弾を連続して発射することができた。

指揮官はとっさに物陰に隠れて難を逃れたが、何人かの隊員が炸裂弾で吹き飛ばされた。

「応戦！！」

高麗兵に向けられた89式小銃が唸り声をあげた。

首相官邸 特別応接室

首相官邸の4階には首相が面会者と対応するための応接室がある。

高麗駐日大使の金基文キム・ギムンもそこに案内された。

「お久しぶりです。烏丸総理」

「こちらこそ大使」

2人の会談は簡単な社交辞令から始まった。

「大使。日本政府としては貴国に嚴重な抗議をせざるえません。貴国に軍の撤退と事実関係の説明を要求します」

毅然とした態度で臨む烏丸に対してギムンは眉ひとつ動かさず平然としていた。

「総理。今回の事態で犠牲になった日本の方々に對して追悼の意を表します。しかし今回の事態の責任は高麗政府にない事を言明させていただきます。今回のすべての責任は貴国にあります。我が軍は自衛の為に武力行使に踏み切ったのです。」

貴国は我が国の脅威を過大に煽り、不当な圧力をかけて我が国を破綻させようとし、挙句の果てに我が国土を奪おうとしたのです。我々こそが被害者なのであり、要求する権利は我々にあるのです」

そう言うときギムンは自分の鞆から書類の束を出した。

「これは大統領からあなたに渡すように言われてものです。回答は貴国の駐韓大使が大統領に直接渡していただきたい」

ギムンは書類を渡すとそのまま帰ってしまった。

防衛省中央指揮所

総理の退出で会議が中断されたが、神谷たちは自分たちの仕事を続けていた。

「陸幕長、陸自はどう対処している」

「第19普通科連隊から情報小隊と1個中隊を偵察に二見ヶ浦へ派遣します。北九州については第40普通科連隊から1個中隊を出して情報小隊の救出に向かわせます。どちらも訓練名目で積極的な戦闘は控えるように命じております。また玖珠くすからすでに戦車大隊を前進させています。命令さえあれば、ただちに攻勢に転ずることができます」

陸上幕僚長の剣持けんもちはそう説明した。その顔には、なかなか決断を下さない政府への苛立ちが表れていた。

「よろしい。斎藤君。空自の状況は？」

次に指名されたのは航空幕僚長の斎藤であった。

「築城が攻撃を受けて離陸中のF-15J2機が破壊されました。さらに爆風でF-15Jが4機、DJが2機、F-2Aが3機、F-2Bが1機、損傷して飛行不能です。」

航空自衛隊としては築城基地の復旧が完了しだい、残存の機体を新田原まで後退させようと思います。築城は前線に近すぎる。その際には新田原から護衛を出して空の守りを固めます。問題は陸上の守りです。基地の警備隊では心もとない。陸上自衛隊に支援を要請することになるかもしれません」

「西部方面隊と相談してみましよう。ただ恒久的な警備は現状の戦力では無理です」

剣持は1990年代の頃の兵力があれば今よりはずっと充実した警備が可能だった、とも考えたが口には出さなかった。

「よろしい。次は海上自衛隊だが？」

最後に指名されたのは海上幕僚長の笹山であった。

「第2護衛隊群は佐世保に戻して再編成を行います。舞鶴の第3護衛隊群が日本海に展開して高麗海軍の東進の阻止を行っていますが、鍊度に不安があります。第4護衛隊群はほとんどの艦がオーバーホール中で動かせる船は1〜2隻だけです。反撃は第1護衛隊群の帰還を待たないと」

「潜水艦の方は？」

「現在、オンステージ任務行動中なのは6隻です。うち1隻は【ゆきぐも】と合流して海上保安庁の護衛を行っています。残りの5隻ですが、2隻は日本海で、2隻は東シナ海で、1隻はオホーツクで行動中の筈です」

陸上自衛隊出身の神谷には、最後の言葉が引つかかった。

「筈です、というのは、どういうことだね？」

「サブマリナー潜水艦乗りが本当に指示通り動いているか、確信が持てないものでしてね」

隠密行動中の潜水艦の行動を把握する術を海上自衛隊は持っていない。

「よろしい。今後の行動についてだが、やはり相手の意図が読めないとうしょうもないな。もし大規模なゲリラ・コマンドの浸透作戦が行われれば、大変なことになる」

それは神谷が最も恐れるシナリオだった。

「ええ。極端な話ですが、1人のゲリラ兵が山に隠れるだけでも1個師団の兵力を数週間、下手すれば数ヶ月以上拘束することが可能

です」

剣持が神谷に続いた。

「皆さん、【ランボー】という映画をご覧になったことはありますか？あの映画では、保安官はたった1人の逃亡者の為に州兵まで動員しました。あれは決して絵空事ではないのです。逃げ回る少数のゲリラ兵を捉えるには、大人数で取り囲んで、虱潰しに探すしかありません。」

実際に、これは高麗統一前の事例ですが、北朝鮮の潜水艦が韓国の海岸に座礁した事件がありました。北朝鮮の乗組員26名が上陸し、11名は自決しましたが、残りの15名が逃亡しました。この事件で韓国は、その僅か15名を追うのに延べ数万人の人員と49日という日数が必要としたのです」

この事件は江陵浸透事件^{カンスン}として知られている。

「もし高麗が少数の人員から成る浸透部隊の潜入を同時多発的に行った場合、陸上自衛隊の対処能力が飽和され、対処不能になります」
「前の海幕長は海上で阻止できる、と言い張っていたが」

神谷の言葉を聞いて、笹山が苦笑した。

「いやあ。あの男は船乗りですからね」

前幕僚長が護衛艦隊出身なのに対して笹山は航空集団の出身だった。

「空を飛んでいると海がどれほど広いものかよく分かります。現在の海上自衛隊の戦力では洋上阻止は不可能です」

「ともかく、高麗によるゲリラ攻撃の可能性がある限りは、部隊を九州へ動かさせません。原発をはじめとする重要警護対象が全国に多数ありますからね」

剣持がそう結論づけた。

「となると、我々自衛隊が当面できることは、築城の戦闘機を安全地帯まで下げることか」

最初にやる事が敵から逃げることに情けないな、と神谷は考えていた。

首相官邸 総理執務室

烏丸は閣僚たちとともにギムン大使から渡された書類を読んでいた。

「なんだこれは！」

烏丸が思わず嬌声をあげた。その要求は恐るべきものであった、

「独島、竹島のことだな、が高麗の領土であることを認め、自衛隊及び海上保安庁を撤退させること。高麗領土への侵略とこれまでの不当な圧力に対して賠償金を支払うこと。これが目的か！」

日本から外貨を頂き、高麗の再建を狙う。これが高麗連邦の目的なのだ。

「これを見てください」

経済産業大臣が書類の一点を指差した。烏丸がその部分を読む。

「東海、日本海のことだな、から東シナ海にかけての、資源採掘権だ！」

近年の研究で、無資源国と言われる日本の周辺にも多くの資源が眠っていることが明らかになっている。特に注目されているのが海底に眠る未来のエネルギー、メタンハイドレートである。日本周辺における埋蔵量は世界一とも言われている。

「これは重大な意味を含んでいますよ」

菅井が別の観点から意見を述べた。

「これを押さえることで東アジア一帯、いや世界の経済に対して重大な影響力を持つことになります。しかし、それ以上に重大なことは、そのような要求は中国を刺激するということです」

中国は日中の東シナ海のガス田を巡る争いからも分かるように、自国のエネルギー問題解決の為に周辺の資源を自分のものにしようと考えている。

「もしかしたら、中国と高麗は何らかの協定を結んでいるのかもしれませんが。だからこそ、高麗はこのような要求を出すことができた。そう考えれば、高麗の侵攻の直前になって突然に軍を活発に活動させたことも説明できる」

「なるほど。高麗の侵攻にあわせて軍を動かして、米軍の介入を阻止しようというわけですね」

中山が頷きながら言った。古橋はその様子に苛立っている。本来なら彼が説明すべき事柄なのであるから。

福岡駐屯地

4時半を過ぎ、東の空が明るくなりつつあった。

偵察の命令を受けて、第4師団第19普通科連隊が出動した。情報小隊、それに桜井の所属する第1中隊が続く。桜井は軽装甲機動車に乗り込んだ。軽装甲機動車は一般的な四輪駆動車に装甲を貼ったような車で、イラク復興支援部隊で使用されたことでも知られる。機関銃弾に耐えることができ、安価であることから自衛隊普通科部隊の装甲化の促進に貢献した。後席に座った桜井は自分の64式改の点検を行った。いつ戦闘になってもいいように。

駐屯地の門には、例によって市民団体が群がっていた。

九. 防衛出動発動

首相官邸 特別応接室

高麗駐日大使の次に訪れたのはアメリカ駐日大使のローゼンバークであった。2人は握手を交わして席についた。

「総理、大変なになりましたな」

「まったくです。アメリカはどのような対応をなさるのですか？」

大使は間を置いてから答えた。

「いいですか、総理。現在の東アジアの情勢を鑑みますと、我々としても部隊の展開に慎重にならざるをえません。ですが、アメリカは日本を出来る限り支援することを約束します」

「大使。それでは日米安保条約が…」

「総理。日米安全保障条約において、我々は貴国の為に軍を展開する義務は無いのです。それに米韓相互防衛条約はまだ生きています。高麗は法的には我が国の同盟国なのです。同盟国に対して軍事的な行動を行なうことは重大な決断が必要です」

高麗は国際社会から半ば孤立している状態とは言え、アメリカは同盟を断絶するに到らなかった。

「ちょっと待ってください。アメリカは日本を見捨てるってことですか？」

「そういうわけではありません。我々は貴国の為に出来る限りのことを行います」

ローゼンバークは優しく諭すように言った。だが、最後は力強い

口調になった。

「しかし我がアメリカ合衆国は、自国を防衛する意志の無い国に合衆国の軍事力を提供することはありません」

赤坂 アメリカ大使館

首相官邸から戻ったローゼンバーグを待っていたのは空軍の軍服を着た男だった。

「アトリー将軍。軍の方はどうなっている？」

「現在、即応状態にある陸上戦力は沖縄の海兵隊です。ただ実際に動かせる兵力は第31海兵遠征隊のみで、グアムや本土から増援を受ける必要がありますね。空軍は第5空軍がいつでも行動可能ですが、中国情勢を鑑みますと慎重にならざるをえません。アラスカやハワイに増援を要請しています」

アトリーと呼ばれた男は空軍の人間だが、日本にある全アメリカ軍への責任を有していた。なぜなら彼、チャールズ・アトリー中將はアメリカ第5空軍の指揮官であると同時に在日米軍の最高司令官だからである。

在日米軍の中で最大勢力を誇るのは沖縄の海兵隊であるが、元より訓練部隊としての意味合いが強くアメリカ本土の海兵隊師団に比べると小規模であったが、米軍再編のために大きく削減されて現在では1個歩兵大隊を基幹に編制される2000人程の海兵遠征隊が実働可能な唯一の兵力となっている。ただ、それ以上兵力があっても運ぶ船が足りないので合理的と言える合理的ではあるのだが。

「事前集積の方はどうなっているのかね？」

事前集積とはアメリカ軍の強大な戦力投射を支える仕組みの1つである。部隊というのは、兵士と兵器・武器によって構成されるが、兵士について航空機等で迅速に移動させることが可能であるが、戦車や車両などの重い兵器は輸送に手間がかかり結果的に部隊の移動そのものは遅くなってしまう。そこであらかじめ世界各地に兵器を事前に保管しておいて、部隊が移動する時は、その部隊の兵器はその場に残し、兵士だけが移動して各地に保管してある兵器を使って戦う。そうすれば、部隊の移動時間を短縮することができる。これが事前集積の概念である。

アメリカは世界各地の米軍基地に兵器を保管しているほか、専用の事前集積船を用意して必要に応じて各地に派遣している。

「相模総合補給廠にIBCT（歩兵旅団戦闘団）1個分に、沖縄にSBCT（ストライカー旅団戦闘団）1個分があります。さらにデイエゴガルシアからHBCCT（重歩兵旅団戦闘団）1個分の装備を積んだ事前集積船が既に出港しています」

歩兵旅団戦闘団とは主に軽歩兵で編制される戦闘部隊で、戦車など重装備は少ないが、それ故に迅速な部隊展開が可能なのが特徴である。重歩兵旅団戦闘団は戦車や重装甲車で編制され高い打撃力を持つ。そしてストライカー旅団戦闘団は両者の中間に位置する存在で、比較的軽量なストライカー装甲車を装備する。

「情勢に関わらず九州での反攻作戦開始には2週間が必要です」

首相官邸 執務室

高麗大使とアメリカ大使との会談は短いものであったが烏丸総理を疲れ果てさせるには十分だった。

「ああ、なんて時に総理大臣になってしまったんだ」

そこへ閣僚たちが集まってきた。

「総理。アメリカ大使との会見はどうですか？」

いの一番にそう尋ねたのは防衛大臣の中山であった。

「向こうもどう動くか、方針が定まっていないうだ。だが1つだけ明言したよ」

「と言いますと？」

「日本が決意しないのなら、アメリカは動かない。自分たちだけが血を流すつもりは無いというわけだ」

それを聞いて古橋が割って入ってきた。

「やはり自衛隊を出動させるべきではありません。これはアメリカへの従属から抜け出すチャンスですよ。ここで武力に頼らず平和的に事態を解決してこそ日本は平和立国として自立した国家だと世界から認められるですよ」

社会民主党の中でも特に左よりの人間として知られる古橋は、今でも平和解決路線を捨てる気は無いようだ。

「まだそんな事を言っているのか！」

その態度は中山を怒らせた。

「いいかげんに目を覚ませ！日本は侵略を受けているんだ。平和な
どすでに無い。だいたい何がアメリカからの自立だ！ここで戦わな
くては高麗に従属することになるだけだ」

さらに続けようとする中山を菅井が制した。

「今更に仲間内で喧嘩しても仕方ないだろう。

総理。私はやはり自衛隊は出動させるべきだと思います。武力解
決を採るにしろ平和的解決を採るにしてもね。我々もやる時にはや
る。交渉が決裂しても、いつでも武力行使ができる。という姿勢を
見せる必要があります」

だが、烏丸はまだ迷っているようだった。止めが必要である。

「それに今、何らかの手を打たないと、民間人の犠牲者が出た場合
に総理の責任ということになりますよ」

政治家は責任という言葉とにかく弱い生き物であった。

「よろしい。これ以上の被害を出さないために自衛隊に出動を命令
しよう。だが、あくまでも現状維持が任務だ。外交的解決を果たす
までは、出来る限り戦闘は控えて欲しい」

福岡市西区 昭代橋

空はすっかり明るくなり東の地平線から太陽の姿が現れ始めてい

た。

桜井たち第19普通科連隊第1中隊は、瑞梅寺川に架かる昭代橋を押さえた。桜井の属し古谷率いる第2小隊は橋の西側を固め、第3小隊はさらに南にある別の大きな橋を確保している。第4小隊は昭代端の東側で予備となり、第1小隊は情報小隊を援護すべく西進し、桑原という集落に布陣した。

布陣と言っても訓練名目で出動している手前、本格的な陣地構築ができる訳も無く、道路の両側に車を止め、交通の邪魔にならないように配慮した消極的なものであるが。

古谷は73式小型トラックに小隊陸曹と無線手と一緒に詰めていた。無線手は中隊の無線を傍受しその動きを探っていた。そこへ師団本部から入電があった。

＜第4師団隷下の全部隊に伝達する。午前4時45分に内閣総理大臣より侵入した高麗軍に対する自衛隊の防衛出動が命令された。繰り返す。防衛出動が命じられた。各部隊は上級司令部の指示に基づき防衛行動を実施せよ。以後は高麗部隊を捕捉次第、発砲を許可する。以上、交信終わり＞

それに続いたのは連隊本部からの通信だった。

＜第19連隊各部隊に告ぐ。聞いての通りだ。さしあたっては、事前に説明した通りに甲線に防衛線を敷く。延滞行動を実施し、最終防衛線は丙線とする。事前の運用計画に基づき展開せよ。繰り返す、運用計画に基づき展開せよ。以上、交信終わり＞

どちらの通信も一方的に終わった。古谷は現場の隊員に対するこの態度に多少、不満を感じた。こちら側が疑問点を質問し、運用の細部を詰めるような事があってもいいだろうに、と。しかし、すでに展開済みの第1中隊が電波発信をするわけにはいかない。逆探知

装置でこちらの防衛線の位置が暴露してしまう。

「各班長を集めてくれ」

古谷からそう命じられた小隊陸曹はすぐに車から外に出た。陸上自衛隊普通科連隊の小銃小隊は小隊長、小隊陸曹、通信手から成る小隊本部とそれぞれ10人の隊員が配置された3つの小銃班から編制される。定員は33名となるが、慢性的な人員不足に苦しむ陸上自衛隊の例に漏れず、第2小隊も古谷らを含め25人の隊員しか居ない。

小隊陸曹は各小銃班の指揮官を集めると、また73式小型トラックに戻ってきた。2人が陸曹長で1人は1等陸曹だった。古谷は73式から降りると、指揮官たちに向かって小声で言った。

「防衛出動命令が出た。当面は現状維持で、具体的な行動は連隊主力の部隊展開を待ってからだ。だが、以降は高麗軍を確認次第、発砲しても構わない。以上だ」

言い終えると、そのまま指揮官たちは元の位置に戻っていった。古谷はそれを確認すると、背後の橋に目を向けた。この橋が架かる瑞梅寺川が第1防衛線<甲線>である。ちなみに<丙線>は長垂山と叶岳を結ぶ山岳地帯で、それが高麗軍の福岡市街への侵入を防ぐ最後のラインとなる。2つのライン間の距離は5km弱。短すぎると古谷は思った。連隊が揃い次第、ただちに反攻に転じれば、揚陸作業中で態勢の整っていない高麗軍を蹴散らすことができるかもしれないが、こちらが受身に回れば、わずか1個連隊の戦力では容易く突破される。海上機動で高麗軍が背後に上陸して包囲される可能性もある。どちらにしろ、古谷には喜ばしくない想定であった。それでも数年前までに比べれば、まだ比較的マシだと言えた。第19普通科連隊はかつてコア部隊だったのだから。

コア部隊とは、防衛予算削減に伴い次々と現役隊員を減らされる陸上自衛隊がとった苦肉の策で、即応予備自衛官という予備役によって編制される部隊のことである。即応予備自衛官は、予備自衛官という言葉の頭に即応の2文字が付け加えられているが、実態は訓練日数が年20日から30日に増やされている程度で十分な錬度があるとは言いがたい。第19普通科連隊は数年前に高麗や中国の情勢の悪化への対応としてコア部隊から一般部隊に戻されたが、もしコア部隊のままであつたらここまで素早い行動はできなかったであろう。

首相官邸 記者会見室

時計は午前5時を指していた。

官邸1階の記者会見室には、民放やNHKなどの報道陣の首相担当である総理番達がその時を待っていた。官邸記者会見室の会見台バックのカーテンはワインレッドのものであり、それは総理大臣が会見を行なう事を示している。そこへ総理大臣が入ってきて、一斉にフラッシュが焚かれた。

「皆さんもご存知であると思いますが、竹島への強制捜査を行なっている海上保安庁及び、その支援の為に行動していた自衛艦が高麗軍の攻撃により重大な被害を受け、さらに高麗軍の上陸部隊が我が国へ侵攻しています。

これは、我が国の主権に対する重大な侵害であり、また国民の生命・財産を守る為に早急に事態を解決する必要がある、考えうるあらゆる対策を実行する事を決定いたしました。

その為、内閣総理大臣の私の権限により自衛隊に対し防衛出動を命じました。これは憲法9条下で自衛権の行使に必要な要件であります、我が国の主権に対する急迫不正の侵害である事、他に適当な

手段が無い事、必要最低限度の武力行使にとどめる事。を十分満たすものであると確信しております。

今後、九州北部における高麗軍の侵攻を<北九州有事>と呼称し、陸海空自衛隊及び関係機関がその総力結集し、出来る限り早期に解決することを国民の皆様にお約束します」

総理はそう言うで一礼した。そして、また一斉にフラッシュが焚かれる。

報道陣は全員、信じられないといった表情であった。他国から侵略を受ければ自衛隊が防衛出動を行なうのは当然の事であるし、彼らもそれは理解したつもりでいたが、やはり平和ボケの日本人には日本が戦争状態に突入したという事実を受け止められないらしい。

十．火花散る

宮崎県 新田原基地 にゅうたばる

新田原基地の第5航空団第301飛行隊は、日本に唯一残ったF-4EJ改の飛行隊である。F-4ファントム2戦闘機はアメリカ海軍の艦載迎撃戦闘機として開発され、1958年の初飛行から世界各国の空軍で使用されてきた傑作戦闘機である。ベトナム戦争ではアメリカ空・海軍に使用され、多数のミグ戦闘機を撃墜した実績を持つ。

航空自衛隊のF-4は独自の改良が施されており、オリジナルの機体に比べ幾分優れているが、それでも製造終了から30年以上経ち、完全に旧式化してしまっている。後継機としてF-15FX戦闘機の配備が開始され、後はここ新田原で僅か20機強が運用されているに過ぎない。

アラートハンガーからF-4EJ改が引き出された。彼らには重大な任務が与えられている。

「築城の状況は？」

その様子を管制塔から眺めていた基地司令がオペレーターの1人に尋ねた。

「滑走路の応急措置は完了した、との報告です」

「よし。いいぞ。ただちに出撃だ」

2機のF-4EJが滑走路に踊り出た。その翼には、AIM-7スパローと90式空対空誘導弾AAM-3を搭載している。前者はセミアクティブ誘導方式による中距離空対空ミサイルで旧式ながら多くの実績を持つ、後者はAIM-9Lサイドワインダーを上回る

性能を示す国産の赤外線ホーミング式のミサイルである。

「エポック1。離陸準備よし」

「離陸を許可する。以後、AWACSの管制を受けよ」

「ラジャー」

F-4EJ改、エポック1が宙に浮いた。そのまま高度を上げてゆく。他のF-4EJ改もそれに続く。計8機のF-4EJ改が離陸した。

空中に舞い上がったF-4EJ改、エポック1は空中に浮かぶAWACSを見つけた。日本海上で高麗軍の攻撃を受けたアスター1である。

「こちらエポック1。アスター1、応答せよ」

『こちらアスター。目標を指示する。』

「ラジャー。エポック、アスターの統制下に入る」

山口県 岩国基地

野々宮と彼の援護の2機は岩国基地に着陸していた。

岩国は海上自衛隊、それにアメリカ海兵隊とアメリカ海軍の航空隊が使用する基地で、アメリカ軍との交戦を避けるためか高麗軍の攻撃は行われていなかった。

その基地の滑走路の脇に野々宮は立っていた。

「野々宮3佐、あなたのイーグルですが点検を完了しました。損傷は無いそうです。燃料も補充しましたから何時でも飛ばせます」

野々宮の救援に駆けつけたパイロットの1尉、TACネーム<ト
レロ>が海兵隊の整備員の言葉を野々宮に伝えた。

「まあ、ここで運用しているのはF/A-18ホーネット戦闘攻撃機ですから、
最低限のことしかできませんが」

野々宮はずっと西の方を眺めていた。九州の方角だ。泣いている
のか？

「野々宮3佐、僚機の件については、その、何とお悔やみを申し上
げたら…」

「最初の国になっちまったな」

「はっ？」

野々宮の突然の言葉に1尉は困惑した。

「日本はイーグルを空中戦で最初に撃墜された国になった、という
ことだ」

F-15イーグルは初飛行から40年以上経つが、それまで幾多
の戦闘を経験しながら空中戦でただ1機も撃墜されたことが無く、
伝説的な存在となっていた。しかし、遂に空中戦で敗れてしまった
のである。

「1尉。高麗空軍もイーグルを持っていた筈だな？」

「はい。F-15Eストライクイーグル戦闘爆撃機を40機ほど保有しています。稼働
状況は不明ですが」

「なら、そいつを撃墜して汚名返上といこうじゃないか。最初にイ
ーグルを撃墜したのは奴らだが、最後に撃墜するのは俺たちだ。そ
れがあいつへの最高の供養さ。だろ」

そう言って振りむいた野々宮の表情は穏やかなものであったが、目の周りには涙の跡が見えた。1尉はなにも言えなかった。

そこへ格納庫から1尉のウイングマンが現われた。

「3佐！1尉！任務です！」

彼のTACネームはくアイスマンでであった。多分、くマーベリックく争奪戦に負けたのだろう、と野々宮は思った。

築城基地

高機動車が数両、築城基地内に入った。その荷台から完全武装の自衛隊員が飛び降り、築城の基地警備隊の誘導に従って、基地のあちこちに散らばってゆく。別府より進出してきた第4師団第41普通科連隊の1個中隊、築城の航空機を新田原まで退避される作戦の支援の為に派遣された部隊である。

ある小隊は基地の最北端を担当した。し尿処理施設を正面にするその場所は好ましいとは言えなかったが、それを気にするものはいなかった。

「第2班、右！」

小隊長の3等陸尉が部下に指示を出している。

「第3班、左！第1班、正面！射撃用意！」

小銃を構えた隊員が、その場に伏せ、いつ襲ってくるか分からない

い高麗兵に備えていた。

北九州市

北九州市周辺にはいくつかのゴルフ場があり、その1つは港のすぐ近くにあり、高麗陸軍の空中襲撃旅団ヘリボーンを乗せたヘリの降下地点に選ばれた。高麗軍は航空自衛隊から制空権を奪うと、20機ほどの大型ヘリが往復して兵士を北九州へ運んだのである。

最後の部隊を乗せたM i - 8輸送ヘリから最後の1人が飛び降り、1個旅団の北九州への展開を完了した。ヘリはそのまますぐに飛び立ち、祖国へと一目散に帰っていった。ヘリの航続距離では北九州までの往復はギリギリの範囲であった。

また、埠頭では入港したカーフェリーや貨物船から次々と部隊が降ろされてゆく。旧韓国陸軍の精鋭部隊として知られる第11機械化歩兵師団を中心に編制された部隊で、多数の戦車や装甲車、自走砲を有していた。

このように順調に部隊を日本に降ろしている高麗軍に対して、自衛隊の動きは鈍かった。自衛隊は二見ヶ浦に上陸した高麗海兵隊部隊に注目し、北九州にあるのは陽動の為に上陸した小規模なゲリラ・コマンドであると考えていたのだ。さらに二見ヶ浦に上陸した部隊があくまで助攻に過ぎない可能性まで考えられ、今後あるかもしれない高麗軍の攻撃に備え、全国各地の自衛隊部隊を動かすことができなかった。特に防備の薄い山陰方面（わずか3個中隊強の部隊が配置されているに過ぎない）への強襲上陸は現実的なシナリオとして受け止められていたのである。さらに慢性的な兵員不足から、戦線の後退・縮小が検討され、最悪の場合には九州を放棄することを既に決定している。冷戦末期にすら日本防衛に最低限必要な兵力を有していたに過ぎないにも関わらず、その後に極端な陸上兵力の削

減を続けてきたツケを日本は今になって払わされたのである。

ともかくとして第4師団の主力は福岡西部へと指向し、北九州の防備を任された第40普通科連隊は厳しい戦いを強いられた。高麗コマンドと遭遇戦になった情報小隊はなんとか後退した。敵をゲリラ・コマンドだと考えていた金井1佐は、敵部隊殲滅よりも情報の収集を優先し、さらなる情報を収集するために連隊を構成する各中隊を偵察部隊として市内各地に派遣することを決定した。

第1中隊は北九州市の中枢が集まる小倉地区を、第2中隊は本州との連絡道である門司方面を、第3中隊は工業地帯である八幡方面をそれぞれ担当し、第4中隊は予備として駐屯地に残ることになった。

第1中隊から1個班が北九州港へと進出した。彼らは高機動車に乗り朝の街を疾走していた。高機動車は、大型の四輪駆動車でトラックの代わりとなる輸送車として開発され、イラク派遣でも使われたことで知られる。民間型がメガクルーザーとして市販されてもいた。

「班長！」

運転手を務める士長が指揮官の陸曹長に訪ねた。

「ヘリコプターですか？だんだん遠ざかっていくみたいですが」

確かにヘリコプターらしき爆音が聞こえる。

「降車しろ！」

高機動車が停まり、隊員たちは地面に飛び降りた。場所は高見台の住宅地の裏、高校と小学校に挟まれた道の上だった。

彼らは鹿児島本線に架かる橋を渡り、北九州都市高速道路の高架の下に出た。国道199号線に沿って東に向かい川を越える時に、道路を塞ぐように数台車が停めてあるのが見えた。例によってヒュンダイ製のピックアップトラックであった。荷台に急造の機関銃陣地が設けられて武装トラ^{テクニカル}ックに改造されていた。

荷台に据え付けられたK3機関銃（自衛隊でも使用している5.56ミリ機関銃MINIMIの韓国版である）が唸り、2人の自衛隊隊員が倒れた。残った隊員は2人を引きずって銃撃から逃れるために駐車車両などの物陰に隠れた。

「応射！ 応射！」

陸曹長がそう叫ぶと、隊員たちは89式小銃やMINIMIを高麗兵に向けて乱射した。フルオートで当てずっぽうに撃っているのに、敵に当る気配は無い。

「撃たれた奴は？」

「小向1士が重傷です。すぐに後送しないと！ 柏3曹は、もう……」

その瞬間、隊員たちの射撃が瞬間的に止まった。全員の視線が倒れたままの柏に向けられた。頭部に2つの銃創が出来ていて、すでに動かなくなっていた。

「こちら2-0！ 敵の攻撃を受けた。場所は北九州高速、西港インター付近。応援求む。現状は死者1名、負傷者1名！ 後送が必要だ！ 繰り返す……」

陸曹長は小隊無線にそう怒鳴ると、無反動砲手の隊員に目を向けた。

「テクニカルを破壊するんだ！」

無反動砲手は頷いた。陸上自衛隊の小銃班には1門ずつ、スウェーデン製の84ミリ無反動砲を配備している。カールグスタフ弾薬手の小向は負傷をしているので、別の隊員が小向の持つ弾薬を取って多目的榴弾を砲身に押し込んだ。

「援護射撃！」

陸曹長の号令のもと、残りの隊員が一斉に射撃をした。敵の注意が小銃や機関銃に向けられた時に無反動砲手は道路に飛び出た。中央のテクニカルに照準を合わせ、引き金を引き、一筋の閃光が砲身から飛び出し、次の瞬間、多目的榴弾が1台のテクニカルとその周りに居た高麗兵を吹き飛ばした。

そこへ小隊主力を乗せた高機動車が現われた。隊員たちが次々と飛び降りて、地面に伏せ、小銃や機関銃の銃口を高麗兵に向ける。また別の隊員はすぐさま無反動を撃って、別のテクニカルを破壊した。その間に重傷の小向1士と柏3曹の遺体が高機動車に乗せられ、そのまますぐに発進してしまった。

九州上空

F-4EJ改の編隊は北を目指し亜音速で飛行していた。あと数分で築城上空に達する筈である。

「アスターからエポックへ。高麗空軍機―KF-16と思われる―を捕捉した」

<エポック・リーダー、了解。攻撃するか?>

E-767 AWACSの捉えたのはKF-16の12機編隊である。高麗の早期警戒機は確認されなかった。自衛隊は知らなかったが、対馬海峡上空で警戒活動を行っていた。

「敵にAEW（早期警戒機）の支援がないとすれば・・・」

KF-16に比べ旧式であるF-4EJ改であるが、AWACSの支援のあれば対等に戦える。

＜エポック。こちらアスター。高麗機を撃墜せよ＞

「了解。高麗機を撃墜する」

エポック隊は散開した。

対馬

対馬では本土からの援護を受けられない警備隊が孤独な戦いが続いていた。

警備隊は高麗兵と遭遇戦となり上対馬高校まで後退したが、その後は睨み合いが続いていた。

対馬駐屯地から指示を出している小津3佐は、作戦室の机の上に広げられた対馬の地図を睨んでいた。

「なぜ奴らは南下してこない？」

空自のレーダーサイトと海自の基地をいとも簡単に制圧した以上、それなりの兵力を上陸させている筈である。遭遇した1個小隊弱の

兵力など蹴散らせる筈だ。

上対馬に居座っているのは陽動で、他に本命がいるのか？それともこちらの様子を窺って南進のタイミングを待っているのか？

小津は決断を迫られていた。上対馬に兵力を集中すべきか？それとも？

対馬警備隊の佐久間二曹は上対馬への増援として、1個小銃班を率いて高機動車に乗り、国道382号線を北上していた。

佐久間は助手席に座り、手にした地図を見つめていた。

「二曹！」

突然、声をかけられた佐久間。振り返ると後部に座る隊員の1人が佐久間のすぐ後ろに来ていた。

「どうした？」

「警備隊本部より命令変更が。目標を変更すると」

「どこへだ」

十. 火花散る（後書き）

小説評価／感想での返答では「F-15は後半で活躍する」と言いつつ、次話でいきなり活躍させることになってしまいました。テキトーだな、私って。

十一・築城防衛戦

築城基地

滑走路のど真ん中に開いていた穴は埋められた。破壊されたF-15は撤去され、パイロットの遺体も回収済みである。

「修復完了。いけます！」

滑走路の修復作業の指揮を執っていた男が、頬の汗を拭いながら無線機に向かって叫んだ。

＜了解。これより新田原への移動を開始する＞

素直に逃げると言いなよ、と思いつつ男は無線を切り、格納庫へ走っていた。この後、陸上自衛隊の輸送隊が築城基地に保管されている弾薬類を新田原に持っていく手筈だ。そして、その後は男も新田原まで逃げる。築城基地に残るのは陸上自衛隊の守備隊だけ。築城は基地としての機能を完全に停止する事になる。

滑走路上に2機のF-15Jが踊り出た。8発の空対空ミサイルで武装した完全装備だ。滑走路に出るとパイロットは愛機をすぐさま発進させた。そして、その後にすぐさま別のF-15が滑走路に現われる。撤退作戦は順調に進んでいた。

九州上空

KF-16の編隊は、築城の空自機を完全に殲滅する為に出撃し、今は地对空ミサイルを避けるために超低空を飛行していた。KF-16編隊12機のうち8機は500ポンド爆弾などを載せて爆装していた。

爆装の8機が超低空で先行し、残りの4機はその後ろを警戒のためか、若干高い高度を飛んでいる。

<レッド1！こちらレッド2。AEWの援護なしで大丈夫なのでしようか？>

レッド1―キム大尉は、部下の言葉を聞いて、思わず腹をかかえて大笑いしそうになった。

「安心しろ。日本軍（自衛隊）はしばらく動けんだろう。それに動いたとしてもチョッパリ（日本の蔑称）の腰抜けになにができる？ レッド9。お前も爆装してこればよかったのに。そうすればチョッパリどももつと派手にふつとばせたんだぞ？」

KF-16、レッド9、12は空中戦に備え、爆弾の代わりにAIM-120AMRAAM空対空ミサイルを搭載していた。
ラムラーム

<しかし、日本軍と交戦した時の為の備えは必要でしょう>

「お前もか？ レッド9。どうしてお前はそんなにチョッパリを恐れるんだ」

<しかしですね。>

レッド9のパイロットは、最近、竹島上空の哨戒飛行を強行した時に日本軍機と遭遇していた。F-15Jイーグルだ。パイロットは極めて冷静かつ慎重であった。優秀なパイロットだと感じた。そ

うだ。日本空軍のパイロットは優秀なのだ。もし日本空軍の戦闘機と交戦したら、はたして生き残れるのであろうか？

<レッド2よりレッド1へ。E S Mが強力なレーダー波を確認。A W A C Sと思われる>

「こちらレッド1。どうせ脅した。チョッパリには交戦する意志などある筈がない」

<こちらレッド9。なぜそう言いきれるのですか？敵が接近しているかもしれないですよ>

「チョッパリは話し合いで全てが解決できると本気で信じている民族だ。交戦する勇気などない！」

レッド9のパイロットは舌打ちした。

なぜこのようなバカの下で行動しなければならないのだ！これも我が祖国の大統領のせいだ。彼は徹底的な反日政策を行い、この軍事侵攻作戦を計画した。そして、その過程で愛国主義者、反日主義者が優先的に昇進させ、また少しでも日本を擁護したり政策に否定的な意見を言ったりする人間は徹底的に排除された。その結果がこれだ。現実を知らず、ただ祖国を持ち上げ、日本を罵倒するしかできないような人間が上層部のほとんど占めるようになってしまったのだ。

F-4 E J改は、E-7 6 7 A W A C Sの指示により大きく旋回してK F-1 6の機首に装備されているレーダーの索敵範囲外である斜め後ろからK F-1 6に接近していた。

F-4 E J改は攻撃の手順を開始した。F C S（火器官制装置）をONにして、照準のためにレーダー派を照射する。F-4 E J改に搭載されているレーダーはA P G-6 6と言って初期型のF-1

6に搭載されていたものと同じレーダーである。一方でKF-16のオリジナルはF-16の後期型で、より新型のAPG-68を装備している。このようにF-4EJ改はKF-16に対して様々な面で劣っているのです、第1撃でできる限り撃ち落さなくてはならない。

「ターゲット…」

HUD上のロックオンサイトがKF-16を示すマーカーと重なった。

「ロックオン！エポックス1、フォックス1！フォックス1」

＜フォックス1＞は、パイロットがミサイルを発射する時にする合図で、フェネティックコードでFを示すFOXTRITの略称であり、FIRE（発射）の頭文字であるFを意味する。自衛隊では中距離空対空ミサイルの発射時にフォックス1、短距離空対空ミサイルの場合はフォックス2、機関砲はフォックス3である。（ジョークとしてフォックス4がカミカゼというものがある）

先頭を飛ぶF-4EJ改の翼下から2発のAIM-7スパロー中距離空対空ミサイルが放たれる。さらに他のF-4EJ改からもAIM-7が次々と発射される。AIM-7ミサイルはセミアクティブ誘導方式なので、命中するまで母機がレーダー照射を続けなくてはならないのが欠点だ。

KF-16のコクピットに警告音が響いた。

「ロックオンされた！ミサイルくるぞ！」

レッド1が叫んだ。これが彼の最後の言葉となった。回避しようとチャフをばらまき、旋回しようとしたがすでに遅かった。1発のAIM-7がチャフに吸い寄せられ外れたが、もう1発はチャフをすり抜け、KF-16の右翼に突き刺さった。

「レッド1がやられた！レッド2もだ！」

キャノピー越しに炎に包まれ落ちてゆく2機のKF-16を確認したレッド9は、反撃を決意した。

<全機散開！全機散開！>

先任となったレッド3のパイロットの絶叫が無線機から聞こえてきた。

築城基地の北端を担当する小隊にも空中戦の爆音が聞こえていた。

「上ではもう始まっているらしいな」

軽機関銃MINIMIを手にもった2曹が、空を見上げて呟いた。

「こちらも来たか」

基地と外を隔てるフェンス越しに2曹は、高麗軍の軽装甲車両数両を確認した。おもに治安維持任務に使われる装輪式の<バラクーダ>だ。

「撃ち方用意！」

小隊長の声だ。2曹はMINIMIの引き金に指をかけた。その時に気づいた。高麗のバラクーダ装甲車に備え付けられた12.7ミリ機関銃がこちらを向いている。

「対戦車榴弾用意！」

小隊長がそう怒鳴ると同時に機関銃は放たれた。2人が血飛沫をあげた。その間に高麗兵が装甲車から出てくる。

「撃ち方はじめ！」

2曹はMINIMIの引き金を引いた。それと同時に5.56ミリ弾が銃身から一分間に750～1000発の速さで弾丸が次々と放たれてゆく。

誰かが携帯式の対戦車榴弾パンツァーフアウスト3を構え、装甲車に照準をあわせていた。

「撃て〜！」

パンツァーフアウスト3の弾頭が白い煙を残して一直線に進んだ。先頭の装甲車に当たると、弾頭は爆発し装甲車を吹き飛ばした。自衛隊は高麗軍の装甲車を1両撃破することに成功した。

それと同時に、高麗兵を更なる衝撃が襲った。新たな銃撃が彼らを攻撃したのだ。それは小銃や軽機関銃では不可能な猛烈な銃撃で、高麗兵十数人が吹き飛ばされたのだ。

それに気づいた2曹が銃撃の飛んでくる方に目を向けると、そこには回転する銃身が見えた。

「基地防空隊です！援護します！」

銃撃は、バルカン砲―戦闘機の機関砲として使われるM61バルカンを防空用に転用したVADS―によるものあった。1分間に3000発もの20mm弾を敵に浴びせる事のできるVADSは文字通り航空自衛隊最後の砦なのだ。

F-4EJ改が2発ずつ、計16発のAIM-7ミサイルのうち4発が命中し、4機のKF-16が撃墜された。どれも爆弾を搭載している機体で、これは偶然では無い。F-4EJ改側は先行している8機を爆装機と判断して攻撃を集中したのだ。残った4機はすぐさま爆弾を放棄し、高麗空軍はこの時点で任務達成は不可能になった。

くアスターからエポックへ。撃墜4！繰り返す、撃墜4！>

「エポック1から各機へ。続けて攻撃せよ。続けて攻撃せよ！」

8機のF-4EJ改は第2次攻撃を開始した。今度は各機1発ずつAIM-7を発射した。第1撃は奇襲だったこともあって1機当り2発発射したが、それでも数が同数になったに過ぎず、今度は慎重になっているようだ。

「レッド9、フォックス3！」

制空任務を帯びる4機のKF-16からそれぞれ1発のAIM-120ミサイルが発射された。高麗空軍の前身である韓国空軍はア

メリカ空軍の影響を強く受けた組織で、発射時のコールも米軍と同一で、フォックス1がセミ・アクティブ誘導中距離空対空ミサイル、フォックス3がアクティブ誘導中距離空対空ミサイルとなっている。AIM-120をはじめとするアクティブ誘導方式のミサイルは、ミサイル自身が装備するレーダーが目標を探知し誘導するのが特徴で、発射母機が誘導を継続せず敵の攻撃に対して回避行動が行えるので生存性に優れるとされている。ただミサイルのレーダーは小さいので、ミサイルが目標まで一定の距離に近づくまでは母機による誘導が必要である。

空中でF-4EJ改のAIM-7とKF-16のAIM-120が交差する。狙われたF-4EJ改はレーダー照射を止め回避行動に移った。目標を見失ったAIM-7は明後日の方向へ飛んでいった。KF-16もレーダー照射を止め、自衛隊側の攻撃に備え急旋回を行った。しかしAIM-120は自身の搭載するレーダーを作動させ、F-4EJ改を捉えた。AIM-120は<覚醒>したものである。製造から30年以上の年月が経ち機体の各部が劣化しているF-4EJ改が急激な回避行動を行うのは不可能であった。チャフをばら撒いて、ミサイルの狙いを逸らそうとしてが、AIM-120は正確にF-4EJ改を捉えていた。

2機のF-4EJ改が空中で吹き飛んだ。F-4EJ改の放った8発のAIM-7は1機の爆装のKF-16を撃墜し、別の1機に損傷を追わせただけだった。

E-767はKF-16のうち4機が急旋回して北上していくのを捉えた。おそらく爆装機だろう。爆弾を放棄したので任務達成が不可能になり、しかたなく帰還するに違いない。築城への攻撃を諦めたなら自衛隊側の勝利である。

＜アスターからエポックへ。敵主力は反転した。繰り返す、敵主力は反転した＞

「ラジャー。エポック1」

だが、制空仕様のKF-16が反転する様子は無い。こちらに止めを刺すつもりだろうか。レーダーロックされたことを知らせる警報が鳴り響いていた。

レッド9はF-4EJ改を示すヘッドアップディスプレイ上の照準マーカーが豆粒のような敵機の姿と重なり、勝利を確信した。敵は尻をこちらに見せて、空域から逃げようとしている。

「レッド9、フォックス3！フォックス3！」

4機のKF-16から2発ずつのAIM-120が発射されたその時、KF-16のコクピットに警報音が鳴り響いた。

「フォックス1！フォックス1！」

超低空でKF-16の背後から気づかれることなく接近してきた野々宮らF-15J3機編隊は最適な位置からAIM-7を発射することができた。4機のうち3機のKF-16に向かって2発ずつのAIM-7が迫る。

KF-16はレーダー照射を止め、回避しようとしたが手遅れだった。次の瞬間、3機のKF-16が吹き飛び、1機が急降下して後退する4機の爆装KF-16の後を追った。

野々宮は敵機が爆発した瞬間を見ることができた。

「とりあえず1機か」

3機のF-15Jが1機ずつ敵を撃墜した。彼の最初の戦果だった。KF-16側の放ったAIM-120はF-4EJ改を自身のレーダーの索敵範囲内に収める前に発射母機からの誘導を失ったために、1発が近接信管により1機のF-4EJ改に損傷を与えただけで、すべて外れてしまった。

築城上空の空中戦は、航空自衛隊側は8機のF-4EJ改と3機のF-15J、高麗側は12機のKF-16を投入し、自衛隊側は2機のF-4EJ改が撃墜され、1機が損傷した。高麗側は1機が損傷し、8機が空中に散った。高麗側は築城攻撃に失敗し、この戦いは自衛隊の完全勝利だった。

築城基地

滑走路の片隅に基地防空隊の地对空ミサイルがいつでも発射できる態勢で、待機していた。ミサイルは陸上自衛隊の部隊防空用に開発された初の国産地对空ミサイル、81式短距離地对空誘導弾、通称「短SAM」である。正式な愛称は「ショートアロー」であるが、誰も使わない。陸上自衛隊のネーミングセンスは何かがおかしい。

短SAMは発射装置を載せた2台のトラックとレーダーなどの射撃統制装置を搭載する1台のトラックから構成される。射撃統制装置搭載車が索敵・照準を行うが、必要に応じて光学照準器を使うことで発射装置単体で戦闘を行うことができる。その光学照準器で担当官の1曹が空を眺めていた。発射装置には4発のミサイルが装填

され何時でも発射することができる。そこへ1人の士が駆け寄って、1曹の背後に立った。

「1曹！戦闘機が高麗空軍を追い払いました。我々の仕事は終わりです」

「なんだつまらないなあ。終わった、ってことは戦闘機の撤収は完了したのか？」

「はい。全機、無事に離陸したとの事です」

それを聞くと、1曹は照準器から離れて発射装置の周りで待機中の隊員たちに身体を向けた。

「我々も撤収だ。すぐに片付けろ」

そう叫ぶと、1曹も照準器を片付けようとした。そこへ野戦服を着た数十名の男たちが歩いてきた。男たちは2つに別れていて後ろを歩いているのは陸上自衛隊の隊員たちで、前を歩く男たちに小銃を向けている。前を歩いているのは陸自とは異なる迷彩が施された野戦服を着ていて、全員が両手を頭のうえに載せていた。

「陸自さん！そっちはどうだい？」

1曹がそう尋ねると、指揮官らしき隊員が答えた。

「捕虜をこんなにとれました。大勝利ですよ」

一二・火力戦

福岡市内

あまりの五月蠅さに目を覚ました萩原里美は、その原因が目覚まし時計では無いことに気づいた。7時にセットしてある時計が1時間も前に鳴り出すわけも無く、音の原因は玄関のドアを叩く何者かと外から聞こえる謎のサイレンだった。

「誰!こんな朝早くに起こすのは?」

目の下を擦りながら玄関へ歩いて行って、覗き穴から犯人の姿を確かめた。

「片平さん?」

萩原が慌ててドアを開けると、片平は萩原の肩を掴んだ。

「戦争よ!」

いきなりの一言に寝ぼけたままの萩原の頭脳は次のような結論に行き着いた。

「機動隊とゲバ棒で殴りあうんですか?」

「萩原さん。いったいいつの時代の話をしているの?」

片平は思わず聞き返してしまった。左翼系運動に参加はしているが、そこまで過激では無い。というか今時やらない。

相変わらず寝ぼけたままの萩原は、外から聞こえるサイレンが鳴り止まないことに気づいた。

「このサイレンは何ですか？」
「さあ」

それは政府が武力攻撃を受ける可能性が高い地域に注意を促すために流すサイレン音だが、それを知る人間は広い福岡でも数えられるほどしかいなかった。しかし、多くの住人はそれが異常事態を告げるものであることは理解できた。

対馬 浅芽湾

高麗軍の攻撃が続く中でも海上保安庁は任務を継続していた。対馬海上保安部には6隻の30メートル型巡視艇を配備していて、全船がT作戦支援のために出撃していた。この種の巡視艇は領海警備を主任務とし、高速性能に優れ12・7ミリ機関砲1門を装備している。

6隻のうち遠方に居た4隻は本土の安全地帯へと向かったが、対馬近辺に居た2隻は監視活動を続けていた。今さら逃げても間に合わないし、海上保安官として目の前の対馬島民を残して逃げるようなマネはできなかった。

「レーダーに感。包囲3－5－0。複数の船舶が接近してくる」

レーダー監視員の報告を受けて、船橋に立つ艇長は首からぶらさげている双眼鏡を手にした。

3隻の船は高麗海軍のものであった。1隻は高麗海軍の旧式コルベットである【浦項^{ポヘン}】型の21番艦【南原^{ナムウォン}】で、次は機雷敷設艦である【元山^{ウォンサン}】。艦種が示すように本来は機雷を設置することを任務とするが、重武装が施されていて哨戒艦としても使用できる。そしてもう1隻は小型のLCU-1610型揚陸艦であった。

「艦長！前方の小型船舶は日本の警備船（巡視船）のようです」
「よろしい。攻撃を開始せよ」

【南原】の艦橋にて艦長は命じた。海上保安庁と海上自衛隊を区別する必要は無かった。【南原】は76ミリ速射砲2基をはじめとする強力な砲兵装を誇る。近代艦艇としては些か力不足な点もあるが、海上保安庁相手には十分である。

前部甲板の76ミリ速射砲が動いた。僅かに仰角を操作し、続いて轟音とともに2発の砲弾が放たれる。そのうち1発は水面に1つの水柱を建てただけだが、もう1発は巡視船に直撃した。さらに数発、76ミリ砲の射撃が続く。巡視船は完全に叩きのめされたが、高麗軍接近の警報を発して最後の任務を果たした。

福岡市西区 昭代橋

午前6時を回り、防衛線の体裁はなんとか整った。福岡駐屯地から駆けつけた連隊本部付の施設小隊（これは自衛隊用語で一般的な軍隊における工兵部隊を意味する）が道路のアスファルトを剥がして即席の塹壕を掘り、そこへ到着した第19普通科連隊の隊員たちが潜り込む。最前線で警戒をしている情報小隊には、師団司令部直属の第4偵察隊が加わった。中隊規模の師団偵察隊は装備の面で言えば連隊の情報小隊と多くの点で変わらないが、87式偵察警戒車

を装備しているという点において異なる。6輪のタイヤ駆動の87式偵察警戒車は25ミリ機関砲1門を有する砲塔を持ち、名前の通り偵察活動に使われる。生産数は僅か100両前後で、師団や旅団の偵察隊には10両以下の少数ずつしか装備されていないが、偵察部隊にとっては頼もしい存在であることに代わりは無い。

また前線で戦う隊員たちを喜ばしたのは戦車の到着だった。玖珠^{くす}から進出してきた第4戦車大隊の1個中隊14両、どれも最新鋭の10式戦車である。総重量50tと重く（といっても、当時の西側最新鋭戦車の中では最軽量であるが）北海道以外での運用に難があった90式戦車^{キユーマル}の反省から生まれた10式は、重量はなんと44tに抑えられている。さらに90式には無かった様々なハイテク装備を積載している10式は自衛隊の次世代戦車に相応しいものと言える。現在、10式戦車は本州以南の旧式な74式戦車に代わって配備が進められ、2015年現在では生産数は40両ほどになっている。

それに加え、第4師団の師団砲兵部隊である第4特科連隊も久留米から駆けつけたらしく、防衛線にF.O（前進観測班）が姿を現した。F.Oの仕事は、前線からずっと後方に展開している特科連隊主力に、前線部隊の要請や射撃に必要な各種情報を伝えることで、前線部隊と砲兵を結ぶ命綱と言える。予断ながら自衛隊は貧弱な兵力を補うために火力を重視しており、砲兵部隊である特科連隊は大変充実していた。歩兵部隊である普通科連隊よりも特科連隊の方が人員が多いという事実がそれを表している。だがそれも過去の話で、近年では大砲を大幅に減らされ弱体化が急速に進んでいるのが現状である。

ともかくとして一応、防衛線は整った。

桜井は橋の西側、ようするに敵側の塹壕の中で朝食を摂っていた。

缶詰型の戦闘糧食^{カンメシ}1型のバリエーションの1つ、鶏飯である。自衛隊の糧食はかつてカンボジアPKO時に参加国間で行われた糧食コンテストで優勝した事例が示すように本来は美味しいのであるが、暖めずに食べているのでとても食べたものではない。桜井は無理やり飯を口に押し込んだ。

その時、遠くから爆音が聞こえてきた。高麗軍の上陸した海岸の方だ。

「戦闘ですか？」

桜井は隣で塹壕か顔を出して様子を伺っている古谷に尋ねた。

「そのようだ。斥候の連中が…」

古谷が返答はそこで途切れた。すぐ後ろから爆音が聞こえ、2人とも思わず耳を手で塞いだからだ。

「迫撃砲だ。重迫中隊の連中だな？」

古谷は橋の向こう側に陣取っている筈の重迫撃砲中隊の姿を想像した。爆音は恐らく120ミリ重迫撃砲RTのものであろう。迫撃砲は普通科連隊直属の支援火器として配備されている小型の大砲である。特科連隊が保有する大型の榴弾砲に比べると、射程や精度の面で劣るが使い勝手が良く、歩兵に密着した支援を行う兵器として隊員たちから頼りにされている。なお自衛隊では120ミリ重迫撃砲RTの他、81ミリ軽迫撃砲L16を配備している。

「見てください！発煙弾です」

桜井は塹壕から顔を出して、弾道を追っていた。田園地帯のその

向こう、山に囲まれた集落、桑原の一带に着弾し、爆発の代わりに白い煙が発生していた。

その様子に何かを感じたのか古谷は通信手の持つ通信機の受話器を取った。中隊の指揮所からの指示を聞くと受話器を元に戻し、89式小銃を手に持った。

「食事を終わりだ。銃を取れ！斥候の連中が戻ってくる。収容の準備だ」

桜井もカンメシをその場に置くと、64式狙撃銃を構えた。

白煙に紛れて情報小隊と第1小銃小隊、第4偵察隊の面々が昭代橋に向かっていった。偵察用オートバイを先頭に、高機動車や軽装甲機動車、73式小型トラックのような車が続く。殿は1両の87式警戒偵察車が務めているようで、砲塔を後ろに向けて25ミリ機関砲を乱射している。

「おかしいですね。RCVが1両しか見えませんが」

桜井が呟いた。RCVとは87式警戒偵察車の事である。陸上自衛隊の正式な愛称はブラックアイだが、やはり誰も使っていない。偵察隊は3個小隊に分かれて、複数の方向から偵察を行っており、桜井らの正面からは警戒偵察車2両を中核とする1個小隊が連隊の情報小隊や第1小銃小隊とともに偵察を行っている。

「確かにな」

古谷はそれだけしか言わなかった。桜井ももう1両のRCVの運

命を想像することを止めた。

重迫撃砲中隊が再び射撃を行い、何発もの砲弾が白煙に飲み込まれていく。先ほどのように撤退援護の為に煙幕を張ることを目的とする白煙弾では無く実弾を使用した効力射らしく、着弾時の爆音は耳を貫く強烈なものであった。その震動が肌に伝わってくる。桜井は迫撃砲の着弾点には高麗軍が居て、砲弾で吹き飛ばされているのだろうか、と考えて、そういう目には遭いたくないな、と考えた。しかし、その機会はすぐに訪れることになった。

ヒュルヒュルという音が聞こえてきた。古谷が立ち上がり、何かを確かめると叫んだ。

「敵の砲撃だ！伏せろ！」

桜井は慌てて伏せて、塹壕の中に隠れた。

それは高麗海兵隊のK55自走砲の射撃だった。K55はアメリカ軍が開発したM109A2自走砲の韓国版で、155ミリ榴弾砲を装備している。照準はむちゃくちゃで直撃弾は無かったものの、自衛隊が受けた被害は甚大であった。田んぼに次々と命中する155ミリ榴弾の起こす爆風によって数両の73式小型トラックが煽られ横転した。さらに砲弾の破片が飛び散り、装甲化されていない車両に乗る隊員たちに襲い掛かる。高機動車や73式小型トラックに屋根代わりに張られている幌程度では簡単に貫かれ、致命傷を負わせるのだ。

ある隊員は車の座席から動けなくなっていた。首に破片が刺さり、手で傷口を押さえているが出血が止まる気配は無かった。意識が朦朧とする中でその隊員は視界の中に吹き飛ばされたいろが空中を舞う姿を捉えた。その姿は幻想的ですが、その隊員は思わ

ず見とれてしまった。そしてそのまま意識が途絶した。

桜井たちが陣取る塹壕のすぐ横の小学校にも数発の砲弾が落下した。いくらかの設備を破壊し、植えられた木をなぎ倒す。

塹壕の中で伏せている桜井の上に焼け焦げた木々の破片やら葉っぱやらが降り注いだ。熱された破片は野戦服越しでも熱かったが、それは桜井の意識を現実に戻す効果もあった。彼にとって（というより全ての自衛官にとって）初めての砲撃により彼の神経は半ば麻痺状態であったのだ。

「砲撃が止んだ？」

爆音が聞こえなくなっていた。顔を塹壕から出すと、斥候部隊の惨状を目で見る事ができた。水田には小さなクレーターがいくつも出来ていて、路上には横転した車両やら血を流して倒れている様子の隊員やらと一目見ただけで友軍が大きな被害が出ていることが分かる。無事であった隊員はけがをしている隊員を担ぎ、無事な車両は走行不能になった車両を避けて進み、防衛線まで下がろうとしている。無事だった車両はRCVをはじめとして少数だけだった。遠目から見て無事に見える車両も、破片をタイヤに受けて走行不能になっているのだろう。

またヒュルヒュルヒュルという音が聞こえてきた。それも不思議なことに味方の側から。着弾点は見えなかったが、爆音が山の向こうから聞こえてきた。

桜井は知らなかったが、先ほど斥候部隊を攻撃したK55自走砲

部隊に対して第4特科連隊が対砲兵射撃を行ったのである。対砲兵レーダーによりK55自走砲の弾道を観測して、布陣していると思われる大まかな位置を割り出し、そこへ自衛隊の主力火炮であるFH-70型155ミリ牽引式榴弾砲を撃ちこんだのである。第19普通科連隊の背後に布陣しているのは第1大隊（1個普通科連隊に対して特科1個大隊ずつが支援を行うことになっている）で、3個中隊計15門が前線から10kmほど離れた室見川河畔一帯に分かれて配置されていた。

ある1門のFH-70は計7発の砲弾を発射した。射撃が終わると、その砲を担当する隊員たち（FH-70は運用に1門あたり8名の人員が必要だがこの砲には6人しかいない）が慌しく動き始めた。擬装用ネットを外し、反動を抑えるための脚を片付け、弾薬を輸送用トラックに戻す。さらに1人の隊員が砲に備えられている座席に座った。するとFH-70が動いた。FH-70は牽引式榴弾砲であるが補助動力装置を備え、短時間・短距離なら自走することができるのである。これにより迅速な展開・撤収が可能であるという触れ込みなのだが、自走砲に対してはやはり分が悪い。

現在の砲兵戦では、対砲兵レーダーにより砲兵陣地の位置はすぐさま暴露され、次の瞬間にはお返し of 射撃が降り注いでくることになる。幸い高麗軍は対砲兵レーダーの数が十分で無く、すぐさま応射が行えないようであるが、それほど時間は無いはずだ。敵の対砲兵射撃に対抗するには、迅速な移動が不可欠だ。牽引式の砲では、その点がどうしても不利だが、陸上自衛隊の予算では全部隊に十分な自走砲を配備することは不可能だ。

FH-70がトラックの後ろに繋がると、すぐさま砲兵陣地を後にした。次の陣地はすでに決められているが、予備の砲兵陣地は今のところそれだけだ。準備がまだ十分に進んでいないのである。

そして高麗砲兵の砲弾が先ほどまでFH-70の居た陣地に落ちた。

余談ながらFH-70の陸自における正式な愛称は「サンダーストーン」である。もちろん、誰も使っていない。

一三・進撃

北九州港

高麗陸軍の揚陸が始まり4時間近く経ったが、まだまだ終わりは見えなかった。現状、即座に行動可能なのは戦車1個中隊に歩兵2個中隊ほどだ。それでも補給物資の荷揚げが不十分なので長期間戦うことはできないだろう。今のところ、存分に戦えるのは空中襲撃旅団と事前展開したコマンド部隊だけだ。旅団は港の周囲を固め、コマンドは北九州市周辺で遊撃戦を実行中である。一部の部隊が築城基地襲撃に割かれ、荷揚げした装甲車とともに南下したが連絡が途絶えてしまっている。

チヨリマ作戦の統合指揮官であるチェ・チョンヒ中将は自動車学校の会議室に司令部を設けていた。

「海兵隊の方はどうなっているのかね？」

コの字に並べられた机の一番奥に座るチョンヒが、端に座る海軍の連絡官へ尋ねた。

「作戦は順調です。1個連隊戦闘団の揚陸を完了し、福岡市への進撃を開始する予定です」

「順調でなにより。やはり専用の揚陸艦を持つ海兵隊は羨ましいね」

兵士を陸地に送り込むために建造された揚陸艦と通常の貨物船では部隊を揚げるのに必要な時間について雲泥の差が生じる。ある試算では通常型の貨物船で歩兵師団1個を揚陸するのに72時間の時間が必要とされている。今回、高麗軍は主にカーフェリーやRO-RO船（貨物を載せたトラックが直接船内に載りこむことができる特殊な貨物船。貨物版カーフェリーと言える）を使用しているので、

時間は大幅に短縮できるが、それでも多くの時間が必要である。
連絡官は海兵隊についての報告をさらに続けた。

「自衛隊は半島の根元に防衛線を展開しているようです。すでに砲兵も展開しており、我が海兵隊と火力戦を行っています」
「こちらの方はどうだね？」

チョンヒは連絡官の報告を聞くと、隣に座る主席参謀に尋ねた。

「コマンド部隊の偵察報告によれば、この方面の自衛隊はまだ情報収集活動を続けており、戦車や砲兵部隊が現われる兆しはありません」

主席参謀の李大延大佐はかつて北朝鮮戦車部隊の指揮官を務め、
叛乱鎮圧や北朝鮮内戦で戦闘を経験し、市街地における戦車運用の
専門家として高麗軍では知られている。

「司令。おそらく日本は我々をあくまで陽動であると考えて、主力は福岡へ向かっているでしょう。目下のところの脅威は周辺の自衛隊軽歩兵1個連隊だけです。空中襲撃旅団から1個大隊を抽出し、第11師団の戦車中隊を付けて殲滅しましょう」
「その案を採用する。ただちに準備にかかれ」

対馬空港

海上保安庁の巡視船を撃破した高麗艦隊は浅芽湾の奥へ進んでいた。その向こうに対馬空港がある。彼ら是对馬空港の確保のために派遣された部隊なのである。

LCU-1610型が着岸した。100名の人員と野戦用の航空

管制装置、防空装備を載せて。艦の全部ランプが開き、兵士たちが地上に降りた。目の前の山を登れば、そこが対馬空港である。

対馬空港は、1900mの滑走路を持つ第3種空港であり山頂を切り開いて作られた空港である。上陸した高麗兵は空港北側の斜面を登っていった。そして空港に辿りついた彼らを待っていたのは、毎分400～600発の発射速度を誇る12・7ミリ機関銃M2の銃口であった。先回りした佐久間達対馬警備隊は、機関銃陣地を築き高麗軍を待ち構えていたのだ。

「やりましたね！二曹！」

射撃を行なっている隊員が、横で陣地の陰に隠れている佐久間に叫んだ。

「油断するな。兵力は向こうが上だ。力押しされたらかなわん」

12・7ミリ機関銃の前では高麗兵は無力だった。装甲車をも貫く弾丸の連射の前では、軽装備の彼らは隠れるしかない。

「佐久間二曹！我々の勝利ですね！」

射撃を行なっている隊員は相変わらずうれしそうだ。

「ああ。だがなにか嫌な予感がするんだ」

佐久間の予感の外れていなかった。
それは爆音とともに現れた。

「10時方向より高麗軍へり！」

警戒を行っていた隊員が叫んだ。彼が指さす方向には、高麗軍の500MDの姿があった500MDは機体の右側面にロケット弾ポッド、左側面に7・62ミリガトリング式機関銃ミニガンが装備されていた。この機体は上陸支援の為に【元山】に載せられていたものである。

「待避！」

佐久間がそう叫ぶ前に、シュという音とともにロケット弾が放たれた。ロケット弾は、機関銃陣地に突き刺さり爆発する。射撃をしていた隊員も吹き飛ばされ、この世から消えた。

「退却！退却！」

佐久間は空港駐車場に向かった。駐車場には73式小型トラックが2台停めてある。

「早く乗るんだ！」

先頭に行く隊員が、オープンタイプの73式に飛び乗り、そのまま運転席に収まった。差し込んだままのキーを掴み、エンジンをかけようとした時だった。

空港建物の上に500MDが現れ、再びロケット弾を発射した。

73式小型トラックは隊員を載せたまま吹き飛んだ。

残った隊員は、もう1台の73式小型トラックを目指したが、佐久間が制止した。

「バカ！上から狙い撃ちされるだけだ。林に逃げろ」

佐久間を先頭に駆けてゆく隊員達を、500MDは容赦なく攻撃

した。ミニガンが隊員達を襲う。＜無痛ガン＞とも呼ばれるミニガンの掃射は、隊員達の生命をいとも簡単に奪う。事実、佐久間が気づいた時には2人の隊員が地面に倒れ、絶命していた。

佐久間は、駐車場近くの林に逃げ込み、木の陰に隠れた。生き残ったのは、彼を含め3人だけだった。

対馬空港は占拠され、高麗軍は対馬を南北に分断することに成功した。

北九州港

高麗軍が占拠した埠頭の一角に空中襲撃旅団の1個大隊の将兵たちが集結していた。彼らの前には第11師団の戦車大隊から増援として来たK1A1戦車14輦の姿があった。K1A1戦車は韓国時代に開発されたもので、初の国産戦車であるK1を改良したものである。主砲は120ミリ滑腔砲を装備していて、これは日本の90式やアメリカのM1A2戦車と同等のものである。しかし元々105ミリライフル砲を装備する戦車として開発されたため、120ミリ砲を装備したことで、より強い反動による照準のブレが大きくなり命中精度が下がり、またより大きな砲弾になったことで装備できる弾数が減った、という弱点を持つ。

兵士たちは待機していたヒュンダイの四輪駆動車とトラックに乗り込んだ。まだ十分な装備品を陸揚げしていない高麗軍は、こうやって市販車を利用せざるえなかった。

北九州市街

小倉城を望む新勝山公園。周辺には北九州市役所や小倉北区役所など市の中核とも言うべき施設が立ち並ぶこの地は第1中隊の集結

地に選ばれた。

「敵の主力は港一帯に展開しているようだ。第3中隊と挟み撃ちする」

中隊長は市街の地図を芝生の上に敷いて集まった小隊長たちに作戦を伝えた。

「市役所、区役所の方はどうなっている？」

「ダメです。深夜に残っていた職員はほとんどが殺されました」

搜索を行っていた小隊の指揮官が答えた。

「一部は図書館に逃げて難を逃れましたが：惨いことをするものです」

「まったくだ。市役所は小倉南区役所で業務を継続しているが、やはり支障が出ている。早くここを安全地帯にしよう」

「第2中隊ないし第4中隊の増援は得られませんか？」

別の小隊長が中隊長に尋ねた。

「第2中隊は第2中隊で、門司方面で交戦中らしい。こちらへの増援は無理だ」

「敵は門司方面にも居るってことですか？」

「そのようだ。敵情は未だにはっきりしない。それゆえ予備の第4中隊も動かせん。とにかく我々はやるべきことをやるだけだ。出動！」

小隊長は自分の小隊に戻り、隊員たちを各自の車両に乗せて、そのまま発進した。

一三・進撃（後書き）

ぶっちゃけた話、ソースは某大型匿名掲示板であつたりすることもあるんで、あまり真に受けないように

無責任ですみません

一四・衝撃

門司

門司周辺の偵察任務を与えられた第2中隊は旧門司と呼ばれる地区で高麗軍の攻撃を受けていた。文字ヶ関公園脇の曲がり道、その側面の山の上に高麗軍は機関銃陣地を設置して、自衛隊部隊に射撃を浴びせてきた。

隊員たちは高機動車を盾にして、なんとか突破の方法は無いかと考えていた。強行突破しようにも、下手に接近すれば無反動砲の餌食になるというのは、彼らの目の前で炎上している1台の高機動車が示している。

先遣となった1個小隊が高麗軍と接触したのは1時間前。それ以降、膠着状態となり、それを打開するために中隊が集結を終えたのが10分前。部隊の最後方に設置された中隊本部で中隊長の中田3佐は作戦を練っていた。

「第1小隊がここで高麗^{ヤツラ}を釘付けにしろ。第2小隊と第3小隊が迂回。後方から敵陣地に浸透する。第4小隊は「めかり山荘」までまわって山中を斥候。軽迫撃砲と対戦車、各小隊は援護の準備を」

中田は路面に地形図を敷いて小隊長たちに簡単な説明を行うと作戦実行を命じた。1分後、中隊付の81ミリ軽迫撃砲が射撃を開始した。

北九州市街

先遣として高機動車装備の1個小隊が先を進み、その後方500mほどを74式中型トラックと高機動車の混成装備の中隊主力が進

む。まだ朝早くだが、避難警報のサイレンに叩き起こされた人々の車が少しずつ増えてきていた。早く決着をつけなくては収拾が不可能にある。誰もがそう考えていた。

その時、先頭に行く高機動車の運転手が前方の交差点の横道から人々が走って出てくるのを確認した。彼らは何から逃げているようだった。

「前方に敵がいるようです。停車し、徒歩で確認します」

高機動車が停まり、1個班10名の隊員が車を降りた。

班長の1等陸曹を先頭に10名は道を進んだ。やがて交差点に達した。避難民を掻き分けつつ見たのは戦車の砲塔だった。

「K1A1戦車だ！」

班長は隊員たちに銃を構えさせると、1人の隊員を伝令に指名して報告に行かせた。

報告を受けた中隊長は各小銃小隊の01式軽対戦車誘導弾の発射用意をすると同時に対戦車小隊の指揮官を呼び出した。陸上自衛隊の各中隊には87式対戦車誘導弾を装備する対戦車小隊が編制されている。呼び出された対戦車小隊長に中隊長は次のように言った。

「対戦車小隊は後退し、防御線を設定してくれ。そこに誘導弾を配置し、我々の到着を待て」

相手に戦車がいる以上、遭遇戦になってしまえば勝ち目は無い。

この場合、87式対戦車誘導弾を使うには交戦距離が短すぎて一方的に殲滅されることになりかねない。中隊長はそれよりも部隊を後退させて十分な準備をした状況で敵を迎え撃とうと考えたのだ。その為、小銃小隊で敵を食い止めて、その間に対戦車小隊を下げて防御線を構築させようというわけだ。

先頭で高麗軍を監視している班の隊員の1人が01式軽対戦車誘導弾を構えた。01式軽対戦車誘導弾は国産の小型対戦車ミサイルで敵車両の発する熱を追尾するので、射手が最後まで誘導する必要が無いという利点がある。

射手は目標として選んだ先頭の戦車に照準を合わせた。01式は戦車の弱点である砲塔上面を狙うダイブモードと最短距離で目標に迫る低弾道モードを使い分けることができる。この場合、敵戦車との距離が短いので射手はダイブモードを選択した。

「発射！」

発射された誘導弾は一気に上昇してK1A1戦車の上面にダイブしたのだ。戦車というのは砲塔正面の防御力は高いが側面や上面の防御力は相対的に低い。そこを狙う攻撃をトップアタックという。

誘導弾はK1A1戦車の上面装甲を簡単に貫いた。映画のように搭載している弾薬に誘爆して大爆発が起きるようなことは無く外観には大きな変化は無かったが、戦車としての機能は既に失われている。

K1A1が被弾すると同時に後続していた乗用車から高麗軍兵士たちが降りて、応戦の態勢をとった。

自衛隊は後退を開始した。

福岡駐屯地 第4師団司令部

北九州に戦車が出現したという情報は、上陸部隊をゲリラ・コマンド部隊だと考えていた第40普通科連隊、次いで第4師団に大きな衝撃を与えた。それは北九州に上陸したのが正規軍であることを示しているからだ。現在、第4師団は福岡西部に上陸した海兵隊部隊を主攻と考えて、主力を福岡に動かしていた。

「戦車大隊だが、どういう状況だね？」

師団長の内海陸将^{うつみ}が師団の幕僚長である1佐に尋ねた

「第1中隊及び第3中隊が福岡に展開しています。さらに第2中隊が大村から前原に向け進出中の第16普通科連隊を援護するために長崎自動車道を西進中です。」

その3個中隊が第4戦車大隊の全力である。本来ならば各師団の戦車大隊にはその師団の普通科連隊（第4師団の場合、4個普通科連隊）と同数の中隊が配備されていて、各普通科連隊を1個中隊で直接支援するのであるが、戦車を600輦まで削減することが政治決定してしまったために、それは不可能になってしまった。

「第5施設団は？」

第5施設団は西部方面直轄の工兵部隊で、第4師団とは同格の部隊である。その隷下にある第2施設群は臨時に第4師団の指揮下に入っていて、5個中隊のうち4個中隊が福岡の戦線まで前進し、第4師団第4施設大隊、ようするに師団工兵だ、と協力して高麗海兵隊に対抗するために陣地構築を行なっている。なぜ1個中隊だけ取り残されているかと言えば、第2施設群の主力が北九州と福岡の間地点である飯塚市の駐屯地を拠点にしているのに対して、残りの

1個中隊は湯布院の温泉地で知られる大分県由布市の駐屯地にあるからだ。

「湯布院の大分自動車道を第368施設中隊が移動中です。これを北九州に向かわせましょう」

作戦参謀にあたる第3部長がそう助言を行った。

「ただ、小郡おごりの第9施設群は福岡まで前進させるつもりは無いようですね」

「やはりか。展開予定地は大宰府あたりか？」

ようするに西部方面隊は福岡を見捨てて、その後方に防御戦を構築しようと考えているのだ。

「ええ。住民の避難支援のためと一応はなっていますが」

「まあいいさ。狭いところにやたらと兵力が集中しても混乱を招くだけだ。第4特科連隊に1個大隊が予備として残っている筈だな。よし第41普通科連隊と第368施設中隊、特科大隊を合流させ、連隊戦闘団を編成する」

連隊戦闘団とは主に1個の普通科連隊に戦車中隊や特科大隊を配属して臨時に編成される諸兵科連合部隊であり、小型の師団とも言える。かつて大戦末期のドイツ軍が多用していたカンプグループが有名である。

「合流地点は夜明駅付近だ。問題は戦車だな。正規軍相手では戦車なしでは心許ない」

内海は決断を下した。

「第3中隊を北九州へ転進させる。飯塚で戦闘団と合流させる」

「しかし師団長。第3中隊の保有する戦車は74式ナナヨンですよ？」

第4戦車大隊第3中隊は九州では唯一74式戦車を保有する部隊なのである。74式という名前からも分かるように、1974年に正式採用された旧式の戦車で、最も新しく製造されたものでも配備から25年ほど経過している。戦車総数の大幅削減と10式の配備より既に最盛期の半分以上の数しか配備されていないが、それでも現在の自衛隊を支える貴重な戦力であることは間違いない。だが、高麗軍の新型戦車に対しては分が悪い。

門司

第40普通科連隊第2中隊第2小隊及び第3小隊は森林の中を匍匐前進で進んでいる。彼ら迷彩服を着込み鉄帽に枝やら葉やらを貼りつけて顔面にドーランを塗って森と完全に一体化していた。

陸上自衛隊の匍匐前進は異様に速い。これは予備が少ないために各隊員個人に超人的技量を求めた結果なので単純に喜ぶことはできないが、ともかく2個小隊は迅速に攻撃位置へ進むことができた。

攻撃位置に到達すると、指揮官の3尉は手信号で部下たちに指示を出し、配置を指定して最後に自らの小銃に銃剣を装着した。

やがて軽迫撃砲の射撃が終わったのか、爆音が聞こえなくなってきた。

「突撃！」

それまで伏せていた小隊の隊員たちは一斉に立ち上がり、高麗軍陣地に向けて突撃を開始した。それに合わせて第1小隊が援護射撃

を行う。

高麗軍陣地は深さ50センチ程の個人用塹壕タコツボがいくつも掘られていて、兵士たちはそこに隠れて迫撃砲攻撃に耐えていた。もちろん高麗軍側も側面からの攻撃に対して備えはしていたが、陣地を守っている高麗兵は1個小隊にも満たなかった。目の前の小隊が全力射撃を行い身動きが取れなくなったところへ、別の2個小隊が突撃をしてくるのだ。

「機関銃陣地だ！」

先頭に行く第2小隊小隊長が、第1小隊に向け射撃を続ける機関銃を発見した。小隊長は後ろについて来たカールグスタフ手を掴まえると機関銃陣地攻撃を指示した。

カールグスタフ手は木の陰に隠れると、弾薬手に榴弾を装填させた。至近距離からの攻撃で、しかもタコツボの中の機関銃手を上から攻撃する形になったので効果はてき面だった。

それを合図に小隊の隊員たちは高麗陣地に突入した。タコツボの中に竄っていた高麗兵たちの動きは当然ながら鈍いものとなった。タコツボの中で思うように身動きがとれない高麗兵を上から射殺する者も居れば、自らタコツボの中に飛び込み銃剣を高麗兵に突き刺す者、高麗兵の反撃で数名の隊員が撃たれたが勝敗はすぐについた。不利を悟った高麗軍の指揮官が降伏の意思を示し、部下に銃を棄てさせたのである。

高麗軍の指揮官が中隊の本部に連れて来られた。中隊長は自ら尋問を行なうつもりだった。中隊長は自分の身分を示して高麗の指揮官に国際法に基づき捕虜として扱われるということを説明した。そして説明を終えた時、とてつもない爆音が響いた。

「何事だ！」

中隊本部は状況が分らず混乱する中で、捕虜の指揮官は不敵な笑みを見せた。

数分後、斥候に向かった第3小隊からの伝令が中隊本部を訪れて何が起こったかが判明した。

「大変です。高麗軍の奴ら、開門大橋を爆破しました！」

高麗軍が九州と本州の分断に成功した瞬間だった。

一五・防衛線放棄

福岡市西区 昭代橋

強行偵察の結果、高麗軍は地図上の地名では「桜井」となっている地点に布陣していることが分かった。兵力は1個連隊規模と推定された。すぐに特科部隊による砲兵射撃が行なわれたが、予備陣地が十分に用意されておらず本格的な砲兵戦を行うのは難しいようで、射撃はすぐに止んでしまった。射撃の効果は不明であるが、十分に装甲化されている高麗海兵隊に致命的な打撃を与えるのは無理だろう。ただし向こうも補給の問題からか、撃ち返してこなかった。

第4施設大隊の連中が昭代橋を含めた瑞梅寺川に架かる橋のいくつかに爆薬を設置し爆破する準備を完了したが、すぐに爆破するようなことは無かった。これから反撃に転じる可能性があったし、それに橋は国家を支える重要な財産である。むやみに破壊はしたくない。

桜井をはじめとする前線の第2小銃小隊隊員たちは地面に穴を掘っただけの簡単な壕の中に隠れてひたすら敵を待つことしかできなかった。

「戦車だ！」

高麗軍の方向を監視していた隊員が叫んだ。桜井は顔を塹壕から少し出して様子を伺った。高麗海兵隊のK1A1戦車の姿が確認できた。全部で4両、1個小隊である。それにAAV-7装甲車が1両続いている。AAV-7は水陸両用の大型装甲車両で25人の完全武装した兵士をのせる事ができる。

「強行偵察だな」

古谷はそう判断すると、指揮下の隊員たちを配置に就かせた。

おそらく高麗側は川に沿って防御線が構築されていると予測していたのであろう。一番後ろを進んでいたA A V ー7が防衛線の手前700mほどで停止して、車両後部のハッチを開放した。高麗の歩兵たちがA A V ー7から飛び降りて、歩道に沿って前進を開始した。

第19普通科連隊第1中隊の対戦車小隊は川の前にあって、昭代橋を通る県道85号線の脇に87式対戦車誘導弾の発射機を配置していた。中隊の保有する対戦車誘導弾の発射機は全部で4門。うち2門を川の西側に配置し、もう2門は対岸に配置している。

照準装置は発射機から独立しているので建物の陰に隠れるように設置されていて、その照準は先頭1両のK 1 A 1戦車に向けられている。

「ギリギリまで引きつけろ」

高麗軍の強行偵察部隊がいよいよ昭代橋に接近してきた。

第1中隊に属する軽迫撃砲小隊の81ミリ迫撃砲が放たれて、戦車の周りに炸裂する。対戦車戦をし易くする為に歩兵と戦車を分離させるのが狙いである。そして目論見通りに戦車が突出しつつあった。

「撃てー!」

対戦車小隊の号令とともに2つの発射機から2発、先頭の戦車に目掛けてミサイルが発射される。1発は脇にそれて外れたが、もう

1発は見事に命中した。

一方、迫撃砲攻撃に攪乱された高麗歩兵は1個分隊ずつ二手に分かれ、片方は回り道をして迂回攻撃を試みた。南へ廻り橋を川に沿って敷かれた道から攻撃するのである。そうしてもう一方は戦車の後ろでチャンスを窺っている。

自衛隊側も側面からの襲撃を警戒して予備となっていた第4小銃小隊を橋の西岸の南側に配置して防衛線を強化していた。高麗兵は小道を通り川沿いの道に出た。しかし、待ち構えていた1個小隊の集中射撃の前に先へ進むことが出来なかった。

やがて高麗軍の火炮、おそらく迫撃砲、が射撃を開始した。ほぼ垂直に落下してくる砲弾の着弾点は、自衛隊の軽迫撃砲部隊と桜井らの第2小隊陣地に集中していた。

迫撃砲弾の1発が自衛隊の壕の1つに落ちた。砲弾は砲弾なのだから当然、当れば爆発する。壕にいた2人の自衛隊員と共に。桜井はその様子を目撃してしまった。そして今度は桜井と古谷の壕に迫撃砲弾が落下してきた。お終いだ！2人ともそう思ったが、砲弾は爆発しなかった。不発弾であったのだ。煙を吐く不発弾を目の前に古谷と桜井は互いの顔を見合わせた。

迫撃砲の射撃が終わると、戦車と歩兵1個分隊が再び前進を開始した。

桜井は壕から上半身を出し、64式改を構えた。照準用スコープには既に一番先頭を走る高麗兵を捉えていた。すでに小隊長の古谷からは射撃許可は得ている。射程の関係から第1射は彼のものと小隊の中で決めていた。

ただ何時もの訓練通りに動いただけで、何の感情も無かった。これが訓練の成果なのか、それとも先ほど吹き飛ばされた同僚を見て

しまったからか、理由は分からないが、本人も驚くほど冷静に行動することができた。すでに7・62ミリNATO弾が装填済みでいつでも射撃可能である。桜井はゆっくりと引き金を引いた。1発の弾丸が先頭の高麗兵の頭を貫いた。

それと同時に小隊の同僚達が射撃を開始した。2人の高麗兵が倒れた。

勇敢かつ優秀な小隊であったが、戦車が相手では無力だった。残った3両のK1A1戦車が撃破された車両を避けて前進してきたのである。1人の高麗兵の狙撃により対戦車小隊の照準手が射殺され、発射機はK1A1戦車の砲撃で破壊された。対戦車ミサイル（さらに言えば携帯式の対戦車兵器全般）というのは待ち伏せに効果を発揮するものであったが、このように発射機的位置が暴露すれば一方的にやられてしまう代物なのである。

対戦車兵器を片付けたK1A1戦車は標的を前方の第2小隊に定めた。120ミリ戦車砲の隣に備え付けられた同軸機銃が火を噴いた。1人の隊員がその餌食となり、再び壕の中に隠れざるえなかった。この時、古谷は橋の東側へ撤退しようとも考えたが、それだけではできなかった。今、第2小隊が撤退すれば、南側で迂回してきた高麗兵を阻止している第4小隊が孤立してしまう。

そんな中で第4戦車大隊第1中隊に属する1個小隊の10式戦車がようやく姿を現した。本来なら前線の普通科部隊と一緒に配置すべきなのであるが、敵から丸見えなのは許容できなかった。戦車壕を掘る時間もなく、結局は橋の後方で隠れているしかなかった。

戦車小隊の指揮官である氷室3尉は自衛隊で最初に実戦を経験する戦車乗りとなった。

「目標捕捉。前方800、K1A1」

「確認、照準良し」

砲手が答えた。

「弾種、徹甲弾。装填」

10式戦車の場合、前世代の90式と同様に自動装填装置が採用されているので重い砲弾でも瞬時に装填が可能なのである。

「装填。射撃準備良し」

「撃て！」

氷室の号令とともに国産50口径120ミリ砲から徹甲弾、正確にはAPFSDS（装弾筒付翼安定徹甲弾）と呼ばれる細く鋭い砲弾、が放たれた。10式の火器管制装置は日本の最新のテクノロジーを注ぎ込んだだけあって、かなり優秀な代物であった。数秒後には狙いどおりにK1A1の砲塔に命中し、APFSDFは至近距離であったこともあって見事にその装甲を貫いた。

氷室は次の目標を探したが、敵の2号車（実際には1号車は対戦車誘導弾が撃破済みなので3号車）は撃破された戦車の後ろに隠れているので攻撃できなかった。市街地では、同時に精々数両程度までしか戦闘を行なえないので、やりにくい。

すると高麗軍の迫撃砲攻撃が再び始まったが、今度は白煙弾が飛んできた。煙幕を張るという行為は、だいたいのところは撤退支援を意味する。

煙の中、高麗軍の強行偵察部隊は元の陣地に戻っていった。高麗側は参加部隊の半分を失う結果となった。自衛隊側は10名が戦死

し、対戦車誘導弾発射機1セットと81ミリ迫撃砲1門を失った。結果だけ見れば自衛隊の勝利である。しかし高麗部隊の目的は防衛線の突破ではなく偵察であり、本格的な作戦の為の下準備に過ぎない。

瑞梅寺川防衛線の放棄を決定した。橋を守っていたのは反攻作戦のためであるが、敵の攻撃が間近に迫っている一方で自軍（このように表現すると語弊があるが）の反攻作戦が始まる気配がまるでないものでより有利な防衛線に下がるべきである、というわけだ。

第19普通科連隊第1中隊では、情報小隊とともに行動し大損害を被った第1小銃小隊が先遣隊として最初に下がっていった。橋の西側を守っていた第4小隊、次いで第2小隊が東側に下がり、橋が爆破された。そして隊員たちは車両に乗り込み次の陣地に向かった。戦車部隊が殿となった。時刻は7時になろうとしていた。

一六：暴露

首相官邸

「国会？この非常時にか？」

烏丸は秘書官の言葉に対して目を丸くした。

「会期中ですから」

秘書官は淡々と言ったのけた。

「こういふときこそ政治がしつかりとしなくてはなりません」

菅井が付け加えた。

「どうしようかね？」

烏丸の問いに内閣法制局長官が答えた。

「対処基本方針を国会に提出して承認を得る必要がありますね」

対処基本方針はく武力攻撃事態等における我が国の平和と独立並びに国及び国民の安全の確保に関する法律＞においてその製作を義務付けられていて、第9条2項にその内容についての記載があり、

一 武力攻撃事態であること又は武力攻撃予測事態であることの認定及び当該認定の前提となった事実

二 当該武力攻撃事態等への対処に関する全般的な方針

三 対処措置に関する重要事項
となっている。

防衛出動を命じた時、同時に製作すべきものののだが。韓国大使の要求にどう対処すべきかなかなか結論が出ずに、今でも形になっていない。

そこへ内閣情報調査室室長がメモ用紙を片手にやってきた。

「総理。緊急です」

渡されたメモを見た烏丸の顔が青ざめていくのを、周りの閣僚達はその目で見た。

「テレビをつけろ」

青瓦台

「やったー！」

柴白一外交通商部長は日本のNHKの報道（高麗では日本のNHK衛星放送を受信できる）を見て歓喜していた。テレビでは高麗が日本に対して外交的解決を迫っていることを伝え、高麗側の要求の一部（主に日本国民を過度に刺激しないもの）まで報道されていた。

「駐日大使館の職員を通じて日本の報道機関にリークしたのですよ。これで我々は一気に有利になります」

「どういう影響を及ぼすのかね？」

大統領が尋ねた。

「日本の報道機関は我々に都合の良い報道をしてくれる筈です。外交的解決を目指す我々を支持し、武力解決を図る日本政府を糾弾す

るでしょう。日本の報道機関は自分達の仕事を、真実を伝えることではなく愚かにも自分の国を貶め罵倒し叩き潰すことだと勘違いしているのです」

それが日本の報道機関の一面であった。某有名新聞社などインターネット上の英文サイトで「日本人はエクアドルで人間狩りツアーをしている」だの「美人局に引っかからないように売春をする方法」だのと書きたてて、批判を受けても知らんぷり、スポンサーからの問い合わせがあつて初めて問題の記事の存在を認め（口だけの）謝罪をする体たらくで、しかも一切の訂正も行なうことなく証拠隠滅を図る有様であった。関係者には大した処罰もなく、責任者はその後社長に昇進した。

名古屋市内 あるアパートの一室

真は徹夜でテレビに張りついていた為に、すっかり眠くなっていた（弟はとっくの昔に眠ってしまった）が、その報道にすっかり眠気が覚めてしまった。電源をつけたままのパソコンの前に座って、某匿名掲示板にアクセスした。朝早くにしては流れが速かった。内容はだいたい予想通り、高麗の要求を非難するものが大半である。政府はまだなんの声明も発表していないのに既に高麗に屈服してしまったかの如く言う書き込みもある。彼らの言葉によれば烏丸総理（ネット上では辛沼とも呼ばれる）は親韓派の売国者だから屈服するのは当然なのだそうである。

「どの総理大臣の時でも同じような事言っているよな」

政府に対する見方は人それぞれだが、1つの点では、皆が同じような意見であった。

124名前…名無しさん 投稿日…2015/7/23 (木) 0
7..00..07

というか、海上自衛隊はなにやってんだ？

簡単に蹴散らせる筈だろ？

133名前…名無しさん 投稿日…2015/7/23 (木) 0
7..01..24

<<124 辛沼のせいだろJK

151名前…名無しさん 投稿日…2015/7/23 (木) 0
7..02..12

辛沼さえいなければ、とっくの昔に終わってるよな

高麗軍如き

162名前…名無しさん 投稿日…2015/7/23 (木) 0
7..03..02

自衛隊がまさか上陸を許すとは思わなかったわ

まあ、これからが自衛隊の見せ場だな

九州には10式戦車もあるし

180名前…名無しさん 投稿日…2015/7/23 (木) 0
7..04..45

<<162

高麗を哀れんで、手を緩めたんだろうな

200名前…名無しさん 投稿日…2015/7/23 (木) 0
7..5..15

防衛出動はもう出てるんだから、辛沼が邪魔しなきゃ明後日には
終わってるだろ

誰もが自衛隊の圧倒的な強さと勝利を信じている。だが、真はそ
こまで楽観的にはなれなかった。

日本海上空

高麗軍の上陸により日本海に面するすべての自衛隊部隊が何らかの行動に出ていた。それは九州に上陸した高麗軍への対処は勿論だが、高麗軍が陽動の為に各地に牽制上陸を行なう可能性も考慮してのものだった。

岩国基地から数機の大型機が飛び立ち、そんな自衛隊部隊の群れの中に加わった。それは一見すれば高麗海軍の封じ込めの為に多数出撃している海上自衛隊の哨戒機であるP-3Cにも似ているが、実際には特別任務を帯びた特殊機であった。

コールサイン“ヴァイオレット3”を与えられた画像偵察機OP-3Cは、装備するSLAR（側面監視画像レーダー）とLOROP（長距離監視センサー）を駆使して対馬海峡に居る筈の高麗艦隊の姿を追っていた。コクピットの機長には前を飛んでいる同様の任務が与えられて高麗軍の無線電波を探っている電子偵察EP-3Cの姿も確認できた。

「高麗艦艇を確認！」

これまで無言でコンソールにむかっていたオペレーターの1人が叫んだ。

「撮影したか？すぐに転送だ」

厚木 海上自衛隊航空集団司令部

日本海から東シナ海にかけて哨戒網を敷いている前線の海上自衛隊航空機部隊から次々と報告が入ってきたが、どれも芳しくないもので、ヴァイオレット3が撮影した1隻のウルサン級フリゲートの写真が唯一情報と言える情報であった。

そういう状況なので航空集団司令部のオペレーションルームに詰める司令や幕僚たちの表情は暗かった。

「おそらくEMCON^{エムコン}（電波輻射統制）を徹底して、個艦単位で行動しているでしょうね。艦隊を組むとしても精々2〜4隻程度が最大になるんじゃないでしょうか？」

情報士官が司令官に説明した。

ようするにレーダーや無線の使用を極限にまで制限した上に、バラバラに行動することで発見されにくくしているということだ。

「おそらく徴用したフェリーや貨物船なんかは護衛もなしの単独航行でしょうね」

これは無謀であるかのようにも思えるが、海上自衛隊にしてみれば実にやっかいな行動なのである。なぜなら、対馬海峡は国際海域であり、様々な国籍の船が行き交っている。であるから、単独航行の方が目立たず中立船の大群に紛れて敵味方識別が面倒くさくなるので幾らか安全なのである。洋上にいる船が高麗軍に協力する船なのか、それともただの民間船なのかを判別するには、最終的には臨検を行なうしかないが、対象の数は膨大であり、しかも臨検を行なうべき海上保安庁や海上自衛隊の艦船は安全圏に退避している。それに海上自衛隊が敵を見つけることができても数百隻の中立船がいる海域で海戦を行なうことは難しいし、もし誤射でもして中立船を沈めれば日本が国際社会から批判を受けることになりかねない。

「EP-3Cはどうだ？」

航空集団司令の羽佐間海将が尋ねた。

「高麗が無線封鎖を徹底している上に、中立船舶が一斉に無線で情報収集を開始したもので。ようするに近くにいる船に「なにが起こっているか知っているか？」と皆が尋ねているわけです」

「手詰まりだな」

「どちらにしろ、対馬海峡から中立船がいなくなるまで数週間はドンパチは起こせませんよ。対馬海峡の両端で見張るだけ」

情報士官はそう言って司令を慰めた。たぶん日本海を南下している船は対馬海峡を無理にでも通ろうとするだろう。日本列島に囲まれた内海である日本海には抜け道はないし、Uターンして津軽なり宗谷なりの海峡に戻ると時間と燃料を食うことになり、結果的に莫大な損害となる。おまけに国際海峡でそういう行為をすれば事故の原因となる。

「それにしても静かですね」

主席幕僚が呟いた。

「ああ。工作員が基地に迫撃砲なりRPG撃ちこむなりするくらいはあると思ったんだが」

自衛隊がとにかく恐れている日本各地での陽動攻撃の兆候はまるで無い。高麗には当然その能力もある筈である。日本国内への海から侵入が容易いことは、1970年代を中心にかつての北朝鮮が起こした恐るべき犯罪行為によって証明されている。漁船程度の船が

あれば朝鮮から日本海沿岸まで行き来することが可能で、それを全て防ぐことは不可能なのだ。

「もし俺が高麗側の司令官だったら、絶対にそうするね」

司令が続けた。

「もししないとすれば、軍事的な理由じゃない。政治だ」

小倉駐屯地

黙々と大局的な情報分析を続けていた厚木の航空集団司令部に対して小倉の第40普通科連隊本部はまさに絶望的な状態となっていた。敵が陽動のゲリラコマンドではなく正規軍だと判明し、第1中隊は蹴散らされ、予備として残っていた第4中隊を投入したものの戦車を含む大隊規模の部隊に太刀打ちできるわけでもなく分断され、残っている小部隊がバラバラに交戦している有様だった。というわけで高麗軍部隊は北九州市内を縦断しつつある。目標はおそらく小倉駐屯地だろう。

無事に残っている部隊は北九州の西側で無意味な封鎖を続けている第3中隊と門司で高麗軍コマンドと対峙している第2中隊である。

「残余2個中隊をもって南下する高麗軍を阻止する」

金井連隊長の言葉に指揮所に詰めていた幕僚達が絶句した。

「連隊長。それは無謀です。戦力の逐次投入になる。一旦、部隊を下げて再編制をすべきです。第41普通科連隊戦闘団も直に到着しますから、一緒に反撃を行なうべきです」

作戦幕僚は食い下がったが、金井は首を縦に振らない。

「君の言うことは分かる。だが、我々は下がるわけにはいかない」

そこに連隊長へ電話がかかってきた。相手は第4師団長の内海であつた。

＜内海だ。金井、聞いているか？命令だ。すぐに北九州市内から退避せよ。街の外に出て第41連隊と合流するんだ＞

「その命令は承服できかねます。我々は逃げるわけにはいきません。そうすれば北九州市民を見捨てることになります」

＜君の言うことはよく分かる。守るべき民を見捨てて逃げるという行為は自衛官にとっては堪えがたいことだ。だが、これ以上、市内に留まれば避難民がどんどん増えて、退避は困難になる上に、混乱が生じてますます被害が増える。＞

それにだ。君たちが破られた時に、いったい誰が人々を守るというんだ。金井、大局的見地から物を見ろ＞

「内海さん。我々は自衛官です。市民を守らずして何が自衛隊ですか！」

そう言うと、金井はそのまま電話を切ってしまった。

一六：暴露（後書き）

・ユニークアクセス1万突破。読者の皆様、ありがとうございます
・話の中で言われている某有名新聞社のことについては下記のサイトを
ご参照ください

<http://www8.atwiki.jp/mainichi-matome/>

一七・最終防衛線

福岡市街地

荻原と片平は市内を出ようと駆けずり回って、ようやく荻原の友人の車に入り込むことに成功した。2人以外にも3人の学生が乗り込むその車は、最初は上陸した高麗軍の反対方向、すなわち東に向けて進んでいた。

「進まないなあ」

運転席に座る青年、青野由紀夫は目の前に連なる車列を睨んでいた。朝の7時を過ぎると避難車両が増えて遂に渋滞が発生したのだ。高速道路が自衛隊の部隊移動の為に通行禁止となったのも拍車をかけた。

「しかたないよ。ラジオつけよ。なんか進展あったかも」

助手席に座る少女、斉藤美緒はカーラジオに手を伸ばした。おそらく自衛隊が高麗軍を撃破して戦争は終了>と言った類の報道を期待したのだろうが、そうはいかない。

<公共交通機関は、九州新幹線が博多、熊本間。山陽新幹線が博多、広島間で…>

ラジオでは交通情報が流れていた。

その時、後席で携帯電話を持って誰かと話していた荻原は突然大声を出した。

「大変！トモちゃんがまだ家に居るって！」

今宿駅前 防衛線

警察から提供されたバリゲート器材が道路上に設置されていた。正規軍相手にはどんな意味があるのか分からないが、野次馬を止めて避難民を誘導するのには役立っている。陸上自衛隊の警務隊（かつての憲兵に相当する自衛隊内の警察）と地元警察が一丸となって避難誘導を続ける中で、桜井たち第2小隊は交差点に立って警戒活動を行っていた。そこへ1台の高機動車がやってきて、桜井の目の前に停まった。

「おい。君」

助手席に座るサングラスの男、階級は1等陸曹である、が桜井に声をかけた。

「高麗軍はどこらへんに居るか知ってるか？」

「それは分かりません。上に尋ねますか？」

桜井がそう返して、無線に手を伸ばすと、サングラスは手でそれを制した。

「いや。わざわざいいよ。じゃあ、防御をよろしく」

サングラスは運転席の男の肩を叩いて、高機動車を発進させた。

「3曹、見ましたか？」

その様子を後ろで見ていた陸士長が言った。

「さっきのサングラスの1曹、M4ライフルを持っていましたよ」

確かにサングラスの持っていたのはアメリカの特殊部隊などで使われているM4A1カービン銃であった。日本でそれを恒常的に使用する部隊はただ1つ。

「特殊作戦群！」

瑞梅寺川

高麗海兵隊はようやく川に達したが、すでに橋は落とされていた。だが、それは予測されたことであるし、彼らには渡河の心得もあった。

まず先遣隊として小隊規模の歩兵部隊が川を渡り、対岸の警戒に当たった。それに続いて水陸両用の装甲車両AAV-7とK1A1戦車が川を渡る。もともと川の多い朝鮮半島の地形に対応するために、高麗軍（特に旧韓国軍）の戦闘装甲車両は渡河能力を持っているものが多い。最後に歩兵や物資を載せたトラックを渡らせるための架設橋の構築に取り掛かった。橋を造ると聞くと大層に大掛かりな作業だろうと感じると思うが、それはパネルと幾つかの大型ゴムボートを組み合わせた浮橋で、短時間で造ることが可能である。自走式の戦車橋（戦車に砲の替わりに可動式の橋を載せたもの）を使えば、もっと短時間で橋を架けることができるが、それを使うには川幅が広がった。

一方、揚陸を終えた機甲部隊と歩兵部隊は警戒部隊を残して前進を始めた。県道85号線に沿って前進し、東へ向かった。道の北側には家屋が密集していて、視界が利かない。南は田んぼばかりだが、少し進むと南側にも家屋の群れがあり視界を奪う。このまま進むと

北側に県立の高等学校が見える筈である。

氷室は戦車の中で朝食を食べていた。おなじみの戦闘糧食ではなく、コンビニから“調達”した弁当であった。

「なるほど。敵も補給物資は最小限で済むわけだ」

食料の現地調達と言えば、悪名高き旧日本軍の南方での失敗を思い浮かべ否定的な見解を持つ人間が多いと思うが、残念ながら現在の日本はジャングルと違ってそこら中にコンビニやスーパー、食料品店があり、大量の食料が備蓄されている。

すると何者かが車長用のハッチを外側から叩いた。氷室がハッチを開けて顔を出すと、前線の監視にあたっている普通科隊員の顔があった。

「敵戦車が近づいてきます」

「よし。いまやつつけてやる」

県道85号線脇の高校の前にあるコンビニの陰に隠れ、敵の前進を待っていた氷室の愛車の1200馬力のディーゼルエンジンが唸り声をあげた。

第4戦車大隊第1中隊の10式戦車は小隊ごとに分かれ、防御線の直衛に2個小隊を配し、残りの1個小隊が待ち伏せを行なっていて、それが氷室の小隊であった。氷室は4輜で構成される小隊を2つに分けて、互いを援護できるように配置した。都合の良いことに敵にはまだ航空支援が無い。こちらにもないが、条件は対等というわけだ。一応、対馬海峡の制空権は確保しているものの、その維持で手一杯で、地上部隊の為に作戦機を割くのは無理ということか。

4輜の10式が動き出した。氷室の指揮する2輜の10式戦車が

道路上に踊り出た。砲塔を後ろに向けた状態で、車体の前方を敵の反対側に向けている。高麗軍に射撃しつつ後退できる態勢である。

敵は戦車を先頭に一列になって進んできている。狭い二車線道路だからそうなるのは仕方が無い。敵との距離400ほどのところで2輦の10式がほぼ同時に射撃した。2発の徹甲弾が先頭のK1A1戦車に集中して、瞬時に破壊してしまった。2輦の10式戦車は再びコンビニの陰に消えた。2輦の戦車は高校の脇を抜けて、次の射撃地点に向かった。

高麗軍は選択を迫られた。敵を避けるか、直進するか。そして避けるなら南に曲がるか、北に曲がるか。無理な交戦は避けよう。問題はどちらに曲がるかである。幸い、南にも北にも敵から自らを隠してくれる目隠し代わりの家屋群がある地点まで前進している。自衛隊の戦車は道の北側にある高校の陰に消えたから、敵を避けて右に回り、一般家屋を盾にしつつ南下することにした。

高麗海兵隊は自分達の慢心を先ほどの氷室の一撃で思い知らされていた。敵はとっくに逃げ出してしまったと思ったら、待ち構えて奇襲攻撃をかけてきたのだ。同じ間違いは繰り返さない。家屋の壁が切れる前に車列を止めて斥候を出すことにした。

海兵隊員の朴南^{パク・ナム}上等兵は自ら斥候に志願した。家屋の陰から顔を出してみると、そこには敵は見えなかった。周りには田んぼが広がり、すこし先に十字路がある。それを左に曲がり東に進むと、中学校の前にでる。周りには家屋があり、戦車も隠れられる、そしてそこには日本の戦車があった。家の陰から戦車の砲身がはみ出ている。やはり彼らは巧妙に待ち伏せをしていたのだ！

朴南は先頭の戦車兵にそれを伝えた。戦車が前進し、自衛隊の戦車が隠れる家屋を射界に収めると、砲塔を旋回させて発砲した。

「畜生。奴ら気づいてやがる！」

壁として使っていた家屋が榴弾で吹き飛ばされ、10式戦車の車体が丸見えとなった。

「撃て！撃て！」

10式戦車の砲塔が回り、家の残骸を押しつけて主砲を敵に向けた。1発。命中を期さない牽制射撃はK1A1の横に建っている家屋に命中した。それを確認する暇もなく2輦の10式は後退しようと動き出した。しかし、そこへK1A1の方もさらに1発撃ってきた。その弾はまだ残っている家の壁を貫通して、10式の砲塔正面に命中した。壁のお陰で威力が削られ、装甲を貫通することはなかったが、損害は大きかった。

「01、こちら03。被弾した。砲手が重傷。衝撃でシステムがダウンしている。砲塔が歪んで、旋回できない。後退する」

03車は01車、すなわち氷室に状況を報告すると、僚車の援護の下で戦域から離れた。

戦車大隊の本部より氷室小隊に後退の命令が出た。周辺住民（と言っても、実際のところは防衛線正面の狭い地域のだが）の避難が完了し、自衛隊部隊は福岡市街防衛の最終線に入ることになった。

福岡最終防衛線

前原方面から福岡中心部に入るには小さな山と林を抜けねばなら

ず、ルートも限られる。海沿いか、それとも今宿バイパスか。第19普通科連隊は第4中隊を海沿いのルートに配置し、桜井らの所属する第1中隊、第2中隊はそれぞれバイパスの北と南に配置された。第3中隊は予備として防御線の東側に待機する。そして、防御線に配置された中隊には1個小隊ずつ戦車隊が援護として配備され、さらに援護の部隊が続々と防御線の陣地に入っていた。師団直轄の対戦車部隊である96式多目的誘導弾装備の第4対舟艇対戦車隊が分散して各中隊の援護に当る。また第4施設大隊の一部や第2施設群の自衛隊員たちもバイパスと海沿いの道路の間を埋めて、高麗コマンンドの浸透攻撃を阻止するために林の中の塹壕に入った。自衛隊の施設科部隊は実は普通科部隊の予備としての側面もあり、特に近接戦闘や陣地戦闘では普通科以上の戦闘能力を持つとも言われているのだ。

砲兵も増強された。師団砲兵である第4特科連隊に加え、西部方面隊直轄の砲兵部隊である西部方面特科隊の203ミリ自走榴弾砲M110A2も駆けつけた。

一方、高麗上陸地点の西側にも長崎の大村から駆けつけた第16普通科連隊が配置についた。この連隊はまだ無傷で、第4戦車大隊第2中隊と第4特科大隊の1個大隊、第4施設大隊の1個中隊が援護について戦闘団を編成した。この戦闘団は高麗海兵隊を西から圧迫するために唐津を過ぎて国道202号線を東進しているところであつた。

西九州自動車道福岡前原道路の高架を爆破し、国道202号線今宿バイパスを進む必要を強いられた高麗軍はおそらくここへ来るはずである。桜井は自分の小隊が当てられた塹壕の中に入り、その高麗軍を待ち受けていた。最終防御線<丙>線に掘られた塹壕は、瑞

梅寺川の防衛線のただ穴を掘っただけの壕に比べればしっかりしたもので、杭と板で補強されていた。しかし、時間が不十分だったように、砲兵射撃から身を守るための掩蓋や壕の中で立った状態でも身を隠せる深さまで掘られた立射壕などはなく、擬装も不十分だった。

防衛線は道の北側の第1中隊と南側の第2中隊が八の字に展開していて、大きく開いた口の方を高麗軍に向けていた。時刻は8時になろうとしていた。

一八・北九州制圧

糸島半島

高麗海兵隊は糸島半島にある小学校を接收して、その体育館に司令部を置いた。上陸した海兵隊は増強された歩兵連隊程度の戦力で、1個大隊を橋頭堡の防備と予備を兼ねて上陸地点や司令部周辺に配置し、1個大隊を半島の西側に配置してその方面から向かってくるだろう自衛隊への備えとした。そして残りの1個大隊で自衛隊1個連隊が防備する陣地に向かっている。大隊で連隊に挑むのは無謀のようにも見えるし、攻める側は守る側の3倍の兵力を必要とするという攻守3倍原則にも大きく反しているように感じるだろう。だが、自衛隊の連隊は大隊節が無く僅か歩兵4個中隊で編制される大隊規模の部隊でしかなく、またただの自動車化歩兵部隊に過ぎない自衛隊に対して高麗側は十分に機械化されているから戦力としては十分である。だが、上陸部隊指揮官のチェ・ミンギ少将は慎重に慎重を重ねるつもりだった。

「こちら側の増援が到着するまで丸一日か」

2隻のドクト型強襲揚陸艦と3隻のコージュンボン型戦車揚陸艦は本国に向けての航海の途上にある。新たな海兵隊部隊を日本に運ぶためにだ。しかし、1隻のコージュンボン型は少数の部隊を乗せて半島の沿岸に残している。作戦のために。

「空軍の支援が受けられるようになるのはいつかな？」

ミンギは彼の脇にいる参謀の1人に尋ねた。彼は空軍や陸軍との連絡を担当している。

「最新の情報によりますと、対馬空港の制圧を完了し、さらに壱岐に部隊を展開しています。壱岐にはまともな自衛隊部隊はいませんから1時間以内に制圧可能であるとしています。両島の空港が使えるようになれば、直ちに部隊を展開して支援を行なえると」

高麗空軍の活動は陸軍や海兵隊に比べると低調であった。戦闘機の航続距離や陸上部隊の要請から実際に戦闘機が目標上空までに到着するまでのタイムラグの問題から、行動がどうしても制限されてしまうのである。先の築城空港のような重要目標を除けば、空軍は専ら航空優勢の確保に力を注いでいた。

「となると、部隊の展開が終わるまで3時間はかかるな。攻撃は3時間後だ。それまで情報収集を継続しよう。これまでのところは？」

「隠密偵察の結果、どうやら日本はこのラインに防御線を敷いているようです」

そう言って参謀は、地図上の長垂山と叶岳を結ぶラインを指差した。

北九州市内

7時を過ぎると市内の道路は避難民で一杯になった。門司から市街へ向けて進んでいた第2中隊は足止めを喰らい、高麗軍に対しては第3中隊が単独で交戦することとなった。仮に2個中隊が集結しても止めるのは難しいことであるが。

第3中隊は街中で放置された自動車を盾にして高麗軍の進撃に立ち向かっていた。だが、それは些か無謀なことであった。

平坂^{ひらさか}2等陸曹は第3中隊の中から選抜された狙撃手の1人である。狙撃手と言っても桜井のように専門教育を受けた狙撃レンジャーで

は無く、射撃の腕が他の隊員より上という理由だけで選ばれた即席の狙撃手である。彼らは道路の両側に建つビルなどの建物から高麗軍を狙い撃つという任務を与えられた。彼らの相手は幸いにも市販車を使う装甲化されていない歩兵なので十分に効果はある筈であった。

平坂はビルの非常階段の踊り場に陣取り、89式小銃で迫ってくる高麗軍に狙いをつけていた。スコープは装着されていたが、それは狙撃用では無く本来は近接戦闘時に使うドットサイトである。

高麗軍がやってきた。戦車を先頭にして突っ込んでくる。その後ろに高麗歩兵を乗せた市販の四輪駆動車が続く。最後尾にも戦車がいて、戦車で歩兵を挟んだ配置である。後方に配置してある87式対戦車誘導弾が発射され、先頭の戦車に向かっていった。誘導のためのレーザーを感知してこれを察した高麗戦車兵はすぐさまスモークデイスチャージャーを作動させて煙幕を張り誘導用のレーザーを遮断した。誘導を失ったミサイルは戦車を掠めて、ビルに当たってしまった。

先頭のK1A1は自ら張った煙幕の為に視界を奪われていたが、ミサイルの発射機的位置はだいたいのところを把握していた。砲塔が僅かに旋回して、それが停止すると同時に発砲した。放たれた榴弾は命中はしなかったが、至近弾で発射機に十分な損傷を与えた。

煙幕に紛れて高麗兵が車を降りて、自衛隊陣地に迫ってきた。平坂以下の狙撃手たちは煙幕の中から出てきた高麗兵目掛けて射撃を始める。如何せん即席の狙撃手であるのでなかなか当たらない。2、3人の高麗兵が倒れたがそれだけだった。平坂は10発を撃ちおえると、移動しよう、と思い立った。何発も撃てば射撃している位置について相手も感づいてくるので狙撃手は常に射撃位置を変えながら戦うべきなのである。しかし、訓練を受けていない狙撃手たちでそれに気づく者は少数であった。平坂はその少数の1人であったのだ。

高麗軍の最後尾を進むK1A1戦車が、その場で停車して主砲を仰角最大まで上へ向けた。正確とは決して言えない精度の狙撃でも高麗軍は邪魔だと判断したようで、戦車がその処理を引き受けたのだ。索敵を行なう車長は歩兵の目視情報と優秀な赤外線センサーを頼りに1人の狙撃手を見つけ出した。

「装填、榴弾！」

「装填よし」

装填手の力強い返事を聞くと、車長は目一杯声を張り上げて、砲手に命じた。

「撃て！」

踊り場を登って、屋上まで駆け上がった平坂は、向かいのビルの屋上に置かれている給水タンクが吹き飛ぶのを目撃した。あそこには同僚の1人が隠れて、狙撃をしている筈であった。同じ中隊とは言え話す機会はあまり無かったのでよく知らない男であったが、その姿はよく知っていた。

「なんてことだ」

平坂はその場にへたり込んでしまった。

そうしている間にも、地上では自衛隊が高麗軍に圧倒されようとしていた。そもそも十分な支援も無い状態で歩兵が戦車部隊に立ち向かおうというのが無謀なのである。先頭の戦車が歩兵の支援射撃の下でバリゲート代わりの放置自動車を乗り越え、踏み潰した。車の後ろに隠れていた2人の自衛隊員を巻き込んで。蹂躪が始まったのである。

逃げ惑う自衛隊員に向けて高麗歩兵や戦車の機銃の斉射が襲う。

さらに戦車が主砲から榴弾を放ち、止めを刺す。前線で指揮を執っていた中隊長が榴弾に巻き込まれ戦死して指揮官が居なくなった。第3中隊は統制を失い各個の判断でバラバラに逃亡している有様で、もはや組織的な戦闘は不可能であり、北九州最後の防衛線は崩壊した。

小倉駐屯地

高麗軍は遂に小倉駐屯地に突入しようとしていた。

「連隊長。もはや一刻の猶予ありません。ただちに脱出して、いまだに建制を失っていない第2中隊と合流して連隊を立て直さないと」

幕僚達が必死に説得しているが、金井は動こうとしない。

「部下を置いて、一人だけ逃げるなんてマネできるか…」

そのように言う金井であるが、それは確固たる決意によるものではなく敗北のショックによるものであることを、周りの幕僚達は見透かしていた。

「だからこそです。連隊を立て直さないと、死んだ者たちは犬死になってしまう!」

「まだ無事な中隊もあるのです。それを率いるのがあなたの職務でしょう?」

だが、金井は押し黙ったままであった。そして、砲声が聞こえてきた。

ようやく高麗軍第11師団の砲兵部隊が揚陸を終えた。それは海兵隊と同様のK55自走砲であった。8門のK55自走砲が道路に並び、一斉に砲撃を開始する。目標は小倉駐屯地である。無線傍受により本部はいまだに小倉駐屯地内にあることを高麗軍は知っていた。

数十発の155ミリ砲弾が僅かな時間の間に小倉駐屯地に降り注ぎ、施設群を粉碎した。金井連隊長以下の首脳たちはそこで命を落とすこととなった。

門司駅前

門司の街を通る2つの国道、3号線と199号線は避難民の車で一杯となり、第40普通科連隊第2中隊は前進できなくなっていた。

「こちら210。指示を請う。オクレ。こちら210。指示を請う。オクレ」

中隊本部付の通信士が無線車両の中で連隊本部との交信を試みていたが、徒労だった。

「ダメです。応答がありません」

「そうか」

無線士の傍らで、本部との通信回復を待っていた中田中隊長は溜息をついた。

「それくらいにしておけ。これ以上は傍受される可能性がある」

中田は通信士に言うと、通信車を降りて外で待っている小隊長たちのところへ歩いた。

「連隊本部との通信が途絶えた。連隊通信を傍受している限り、第3中隊の状況は絶望的だ。もはや任務の続行は不可能だと思う。こうなったら部隊を後退させて友軍と合流するのが最善の道だろう。築城に第41普通科連隊の中隊が居るはずだから、築城へ向かおうと思う」

中田は小隊長たちの顔を見つめた。

「私は中隊長の判断が正しいと思います」

「自分も同じです」

「それしか道はないでしょう」

4個ある小隊の長4人のうち3人が中田に賛同したが、1人は口籠もっていた。

「君はどう思うんだ？」

中田の言葉に、最後の1人がようやく口を開いた。

「中隊長。私に仲間を棄てて逃げろ、と命じるのですか？ 私にはできません」

その言葉に、その場にいた全員が押し黙ってしまった。

北九州市外

ビルの屋上で1人うな垂れていた平坂は、自分が登ってきた非常階段を誰かが登ってくる足音で正気を取り戻した。誰かがこちらへ向かってきている。平坂は咄嗟に物陰に姿を隠した。

現われたのは高麗軍の戦闘服を身につけた二人の男だった。二人とも韓国軍の主力歩兵銃であるK2小銃を持っている。敵である。

1人が平坂のところへ近づいてきた。平坂は銃剣を取り出し握り締めた。高麗兵の足音が1歩1歩近づいてくる。

相手がすぐそこまでやって来ているのに平坂は気づいていた。もう1歩、こっちに進んできたら飛び掛ろう。隠れている状態で発見されたら、まともに応戦できるとは思えない。こうなったら賭けてみるしかない。そう考えて、平坂は銃剣を握る掌に力を込めた。

すると、階段のところで立っているもう1人の高麗兵がなにかを喋りはじめた。平坂は韓国語を理解することができないが、近づいてきている男もそれに対してなにかを話始めたので、二人が会話をしているということに気が付いた。やがて、近づいてきていた男の足音が遠ざかっていった。2人の高麗兵が階段を降りていったのを確かめると、平坂は立ち上がった。彼はそこで2つのことに気づいた。第一に自分が助かったこと。そして第二に1人取り残されてしまったこと。

一八・北九州制圧（後書き）

・こちらの方も登場人物が増えてきたので、登場人物表を準備中

一九 特殊作戰群の活躍

福岡最終防衛線

防衛線に入ってから一時間が経ったが、防衛線は静かなものであった。

塹壕の中で桜井は照準スコープを調整していた。64式改狙撃銃の照準スコープは螺子1つで銃と接合しているのだが、その螺子を軸にしてスコープが動くので照準が狂い易いという欠点に繋がっている。その為、このような細かい整備が欠かせない。

「桜井。小隊長が呼びだ」

そんな桜井の背後から、小隊陸曹の砺波となみ陸曹長が声をかけた。

「古谷3尉が？」

桜井は愛用の64式改狙撃銃を手にとって、古谷のもとへと向かった。砺波はその様子を見届けると、向き直って、高麗軍の襲来が予想される方向に向けて銃を向けている男に話し掛けた。その男、矢部やべ陸士長は戦場に居るにも関わらず、なぜか笑みを浮かべている。その目は獲物を狙う猟師そのものであった。

「矢部、調子はどうだ？」

「前の戦闘では一匹仕留めました。次もガンガンやりますよ」

砺波は笑顔でそんなことを言う矢部の姿を見て不安を覚えた。

糸島半島

山の中で先ほど防衛線を越えて高麗軍の勢力下に飛び込んでいった特殊作戦群の兵士たちは林の中に隠れて、なにやら装置の準備をしていた。

あのサングラスは双眼鏡を片手に麓を調べている。田畑の上に一定の間隔を空けて並べられているコンテナや様々な物資、高麗海兵隊の物資弾薬の臨時集積所であった。

「黒部^{くろべ}1曹。通信準備、終わりました」

サングラスの男、黒部^{くろべ}幸正はそれを聞いて、装置のもとへ駆け寄った。その装置は実は衛星通信装置で、指向性の強い電波で衛星と地上を結ぶので敵の通信傍受に対抗が可能であった。

黒部は早速、受話器を取った。相手は西部方面特科隊の司令部であった。

佐賀県鳥栖市郊外

方面特科隊には師団特科に無い強力な兵器が配備されているが、その花形は多連装ロケットシステム、通称MLRSである。かつて冷戦中にソ連軍の強力な砲兵部隊を一掃するために開発され、広範囲に散らばる敵を一度に攻撃するためにM26と呼ばれるロケット弾を主に使用する。これは所謂クラスター爆弾と呼ばれるもので、内部に子弹と呼ばれる小型の爆弾を600個以上も搭載し、それを敵の上からばら撒くという恐るべき兵器である。初めて実戦に投入された湾岸戦争では敵のイラク軍から「鋼鉄の雨」と呼ばれ大変恐れられたという。もちろん北海道でソ連軍と決戦をすべく整備された自衛隊も導入し、全国の方面特科部隊の主力となっている。

しかし、そんなMLRSにも転機が訪れた。前述したようにM2

6 ロケット弾は無数の小型爆弾をばら撒く兵器なのだが、その数が莫大なためにどうしても多くの不発弾が発生してしまう。不発弾により民間人の犠牲者がでたことから、M26をはじめとするクラスター兵器を規制する運動が世界的に起こり、遂に2008年に一部を除きクラスター兵器を全面規制する条約が締結され、日本もM26のようなクラスター兵器を廃棄せざるをえなかったのである。

というわけで主力の武器を封じられたMLRSであったが、自衛隊は代替の新型ロケット弾を導入することで対応した。それがM31ロケット弾である。

鳥栖市は佐賀県の東の端に位置し、北九州の東西南北を結ぶ交通の要衝である。その郊外にある公園に西部方面特科隊第132特科大隊のMLRSが配置にしていた。大隊は特科隊本部経由で糸島半島の黒部ら特殊作戦群の報告を受け取り、それを基に照準を定めた。

「撃ち方用意！」

1台のMLRS発射機が上を向いた。その発射機は北に向けられている。

「撃ち方始め！」

12連装の発射機からカバーを破って2発のロケット弾が放たれた。M31ロケット弾である。このロケット弾は単弾頭でM26弾のように広範囲の敵を攻撃することはできないが、GPSによる精密な誘導で特定の目標を狙い撃ちできた。驚くべきはその射程で、前述のM26が射程32km、最新の大砲でも射程は40km程度なのに対してM31の射程はなんと85kmに達する。敵砲兵の射

程圏の外から一方的に攻撃をすることが可能なのである。無論、高麗も保有しMLRSから発射する弾道ミサイルであるATACMSに比べれば見劣りするが、精密さについてはATACMSを大きく上回っている。

糸島半島

2発のM31ロケット弾は黒部が指示した座標に正確に向かっていった。その場所には高麗軍のコンテナが置かれていて、M31弾が命中した途端に大爆発を起こして吹き飛んだ。黒部たちは周りで警備をしていた高麗軍の歩哨が慌てふためいて逃げ回っている様子を眺めていた。

「よし。命中だ。次の目標は…」

座標を報告すると数分後、再びロケット弾が飛んできた。

高麗海兵部隊司令部は突然の攻撃に最初は驚いたものの、すぐに冷静になり対処に乗り出した。

「敵は我々の砲兵の射程圏外から撃ちこんできています。応射は不可能です」

チェ・ミンギは部下の報告を聞くと、MLRSのM31ロケット弾の事をすぐに思い出した。

「自衛隊め。早速、投入してきたか。空軍の近接航空支援は？」

「対馬空港を作戦基地として確保したので、ある程度は可能ですが、

十分な支援を行なうにはやはり壱岐空港の確保を待っていただけませんと」

空軍との連絡担当の参謀が答えた。

「壱岐の様子は？」

「壱岐の占領は予定通り終了したので、これから部隊の展開を行なうところだと。ただ、現在でも対馬から限定的な支援なら可能です。しかし効果的な攻撃は期待できませんよ？」

ミンギは数秒ほど考えて結論を下した。

「やはり飛んでもらう。効果が薄くとも、敵砲兵にプレッシャーを与えることができる。」

それと、これほどの長距離砲撃だ。しかも前線からは離れている。おそらく着弾観測が必要な筈だ。無人機か斥候か。予備の大隊と防空部隊を総動員しろ。防空部隊はリーダーで自衛隊の無人機を探せ。大隊は山中を搜索して、敵の偵察部隊を探すんだ！」

「忠誠！」

部下たちはミンギにそう応じると、与えられた任務を実行するために散らばっていった。

首相官邸

その頃、首相官邸では一時間後に迫った国会に向けて準備を着々と進めていた。懸念事項となっている高麗大使の要求への対処については、自由民権党内部では基本的には断固拒否、必要に応じて譲歩という線で話がまとまりかけていた。ただし自衛隊による勝利が

前提となるが。しかし連立する社会民主党への配慮やマスコミ報道の世論への影響も考慮して、とりあえず当り障りのない対処方針を提出して防衛出動の承認を取り付けるつもりであった。とは言え、自由民権党の関係者や閣僚がマスコミに対して漏らした様々な発言から基本方針は自衛隊の武力によっての対処である雰囲気霞ヶ関を包もうとしていた。

「おい。テレビを見てみてくれ」

中山の一言で総理の執務室に集まった閣僚や官僚たち全員の視線がテレビに向かった。テレビには最大野党である民主党の党首である小宮次郎こみや じろうの姿が映っていた。

くとにかくね。国民に不要な流血を強いる政府の方針には反対だよ？我々は国民目線からこの問題を解決したのだよ＞

リポーターに向かってそう言っただけの小宮の姿を目にして菅原が珍しく汚い言葉を吐いた。

「あの野郎。戦争まで政局にするつもりか？」

しかし、小宮ら民主党が与党に反対の姿勢を貫くにはそれなりの理由があった。一応、自由民権党とともに二大政党の一翼を担っている、ということになっているが、実際のところは反与党の議員の集合体でしかない民主党は常に分裂の危機に晒されている。特に支持母体には日教組や自治労などのいわゆる左派組織が多く党内でも左派の力が強いこともあって強硬策は主張できず、とりあえず与党に反対という姿勢でなければ党を一致団結させることはできないのだ。無論、分裂を辞さない態度で臨むこともできるだろうが、小宮

にとっては国益よりも党益が重要なのである。

対馬空港

対馬にはF-15KとKF-16の飛行隊が配置され、待機状態にある。周辺には各種対空ミサイルや対空機関砲が配置され警戒状態にある。

2機のF-15Kが滑走路に出た。対馬空港には滑走路が一本しかないので、1機ずつの離陸となる。翼の下には対装甲兵器用のクラスター爆弾Mk20が吊り下げられていた。

糸島半島

対空機関砲がそのレーダーで上空に日本の観測機がいるかどうか搜索する一方で、予備となっていた1個大隊の海兵隊員たちが回りの山々に次々と突入していった。その様子は観測をしていた特殊作戦群の隊員たちも捉えていた。

「よし。潮時だ。散開するぞ」

黒部がそう叫ぶと、隊員たちは2、3名の小グループに分かれ、それぞれ別の方向に走っていった。そして黒部とその同僚は、^{パディ}あろうことか高麗軍の補給物資集積所を目指して駆け下りていったのである。

高麗軍の搜索をやり過ぎて、黒部たちは集積所に接近していった。2人は茂みの中を進み、やがて集積所の本部と思われるテント

の前にたどり着いた。回りには警備の兵士がいるが山中の搜索に人員を割かれているためか、それほど多くはなかった。

黒部はその様子を確かめると、手信号で同僚に51ミリ軽迫撃砲L9A1を準備するように指示した。L9A1は旧軍の八九式重擲弾筒の現代版と言える兵器で必要なら水平発射も可能な個人携帯型の大砲であった。

黒部が発射を指示すると、L9A1の砲口から1発の榴弾が飛び出した。それは警備の兵士の足元に落下、爆発して瞬時に2人の兵士を吹き飛ばした。

黒部と同僚は爆発を合図に茂みから飛び出て、突然の砲撃に慌てふためく高麗の兵士たちにM4A1カービン銃の銃口を向けた。2人は1人1人確実に、そして迅速に仕留めていき、あらかた片付けると本部テントに突入した。そこにも兵士が1人居て、その男はこちらに銃を構えていたが、引き金を引くのは特殊作戦群の2人の方が速かった。胸に銃撃を受けた高麗の兵士は仰け反って倒れ、そのまま生き絶えてしまった。

テントの中には2人のお目当ての指揮官はいなかった。おそらくM31ロケット弾による被害状況の確認に向かっているのだろう。だが収獲はあった。テントの中には折りたたみ式の机が設置されていて、その上にはハングルで書かれた書類らしきものが何枚も無造作に置かれていた。黒部はその書類を取り、懐にしまうと脱出を決心した。その間に同僚は死んだ高麗兵士の体の下に安全ピンを抜いた手榴弾を仕掛けていた。死体を動かすと安全レバーが外れ爆発する仕組みである。黒部は同僚が手榴弾の仕込みを終えると手で脱出を指示した。

数分後、本部が襲われたと連絡を受けた指揮官が戻ってきた。襲った敵はすでに姿を消していて、味方の死体と負傷者だけが残されていた。鮮やかな手並み、おそらく特殊部隊の仕業であろう。

指揮官は上官に報告するためにテント内の無線機を手を持った。その横で兵士たちが死体を片付けようとしていた。ガチャンと音がして、死体の下から手榴弾が姿を現した。

「逃げろ！」

死体の片付けを指揮していた下士官が咄嗟に叫んだが、もう遅かった。破砕型手榴弾は数秒後に爆発し、鋭い破片を撒き散らしたのである。吹き飛ばされた破片は周りにいた人間の身体に次々と突き刺さっていった。結局、その下士官と数名が戦死し、指揮官と数名が重傷という結果になった。

二〇．防空戦

鳥栖市

数発ずつ、M31ロケット弾を放ったMLRS、M270発射機は黒部らが連絡を断ったので攻撃を中断していた。そしてその間に陣地転換を行なうことにした。高麗軍の大砲にM31ロケット弾並に長射程のものは無かったが、彼らがMLRSを持ち込んでいる可能性もある。そして、高麗軍がM31弾を導入したという話は聞かないが、より射程の長いが命中精度がだいぶ悪いATACMSを装備している。それは特定の車両を狙うような代物ではないが、一応警戒をする必要がある。それに空爆の可能性が無いわけではない。対馬海峡の制空権は依然として高麗側にある。

上空

2機のF-15Kが海上を飛んでいる。レーダーサイトは破壊済みであるし、対馬海峡上空の制空権は高麗側が握っている。AWACSも近くにいない。であるから、2機のF-15Kは敵の探知や攻撃を気にせず燃料効率の良い高度を飛ぶ事が出来たのである。やがて陸地が見えてきた。2機は高度を下げた。陸地には、どこに敵の防空部隊が潜んでいるか分からないので、低空飛行をせざるをえなかった。

MLRS部隊のだいたいの位置は海兵隊からの観測結果の報告で分かっている。だが、あくまで“だいたいの位置”であるし、向こうも馬鹿ではないから陣地転換をするであろうから、F-15Kは自らMLRS部隊を探さなくてはならなかった。

F-15KにはパイロットとWSO（兵装士官）の2人が搭乗する。多種多様な兵器を搭載し、様々なミッションに投入されるF-

15Kの操作は1人では賄いきれないのである。レーダーの操作は主に後席に座る兵装士官が担当する。先を進むF-15Kの兵装士官は呉^{オラクスン}榮舜少尉であった。

「レーダー作動」

F-15Kに搭載されている対地対空両用のレーダー、AN/APG-63(V)型が対地モードで起動し、地表を走査する。それで集まったデータは合成され地図のような形で乗員に示される。デジタル画面上には鳥栖周辺の様子が映されていて、兵装士官はそれにM270らしき車両を発見した。

「やったぞ！目標を捕捉した！」

兵装士官が歓喜の声をあげた。高麗軍にとって幸運だったのは、自衛隊のMLRSが陣地転換のために道路を移動していたことだ。近年、航空機の索敵システムは爆発的な進化を遂げているが、それでも隠れた地上目標を発見するのは大変難しい。湾岸戦争では開けた砂漠上での戦いであったにも関わらず多くのイラク地上軍を撃ち洩らしたし、山岳地帯での戦いであったユーゴ内戦におけるセルビア軍とNATO軍の戦いでは、NATO軍は空中から猛爆撃を行なったにも関わらずセルビア軍に大した打撃を与えることができなかった。もしMLRSが嚴重な擬装を施して隠れていたなら、もしかしたらF-15Kに捕捉されることは無かったかもしれない。だが、MLRSは移動して陣地を換えることにしたのである。

「攻撃準備」

歓喜に震える兵装士官とは対照的にパイロット、申興^{シンフンス}守は冷静さを保っていた。彼のF-15Kは目標上空を一旦通り過ぎると、急

旋回して攻撃態勢をとった。僚機ウイングマンもそれに続いた。

73式小型トラックを先頭に数両のMLRSが道路上を進んでいた。すると空に爆音が聞こえ、北からF-15らしき機体が飛んでいくのが見えた。

「今のは？」

73式小型トラックの運転手が隣に座る指揮官に尋ねた。

「空自、じゃないな」

先ほどのF-15らしき機体だが、飛ぶ高度が低すぎる。

「軽SAMサムを準備しろ」

指揮官は後部座席に座る隊員に命じた。

F-15KはMLRSの車列に照準を合わせた。Mk20は無誘導爆弾なので、パイロットが昔ながらに目と腕でそれを行なう。ただクラスター爆弾なのだから、精度の高い照準は不要だ。

「投下！シュート」

2機のF-15Kがそれぞれ1発ずつ、計2発のクラスター爆弾を投下した。2機はすぐさま針路を北に向けて撤退しようとした。今回の攻撃の目的は、陸上自衛隊を空から脅かしてその行動を制限することである。必要なのは、高麗空軍は九州にある陸上自衛隊部隊を攻撃することができる、という事実を見せつけることなのだか

ら命中させる必要さえなく、ただ目標の上で爆弾を投下するだけで十分なのだ。2機のF-15Kは戦果確認さえしなかった。ここは敵の勢力圏であり、日本には優秀な防空網が存在することを彼らは知っていた。

防空網というのは、大変に広大な概念である。花形は空軍―日本ならば航空自衛隊―の邀撃機ということになるが、勿論それだけというわけではない。敵を探知するレーダーや早期警戒機、そこから適切な判断を行なう管制部隊。さらに地上の各種対空兵器が加わるのである。そして、その一端がMLRS部隊にも配備されていた。

91式携帯地对空誘導弾、愛称はハンドアローだが例によって現場にはまったく浸透しておらず、隊員は主に携SAMと呼ぶのが通例である。このミサイルは1960年代にアメリカのFIM43レッドアイとソ連のSA-7によって確立された携行型地对空ミサイルという分野の最先端に位置するもので、日本の技術力の粋を集めたハイテク兵器なのである。

携行型地对空ミサイル―より専門的な言い方ではMANPADS―という名前からも分かるように、兵士が1人で運搬し操作するもので、外見は長さ150センチほどの筒である。その筒の中にミサイルが収められているのだ。SAM要員の隊員が肩の上に携SAMを構えて攻撃の態勢をとった。敵が接近してくるのが見えた。

「撃て！」

その号令と同時に一筋の光が上空への登っていった。

2機のうち後ろを飛ぶF-15Kの兵装士官が攻撃の効果を確かめるために振り向いたことでそれに気づいた。

「ミサイルだ！来るぞ！」

映画なので、ミサイルロックされるとロックされた戦闘機のコクピット内で警報が鳴って危機をパイロットに知らせる描写があるが、あれはミサイル誘導のためのレーダー波を検知して警報を鳴らすシステムで、自らはなんの電波も発さずF-15Kのターボファンエンジンが放つ高温を追尾する91式携SAMにはなんの反応も示さなかった。

ミサイル接近の報は前方を飛ぶシンのF-15Kにもすぐさま伝えられた。

＜レオン2。こちらレオン1。目標は恐らく携行式ミサイルだ。有効範囲はそれほど広くない。高速で離脱するんだ＞

僚機にそう指示すると、シンは自機のアフターバーナーを点火した。ジェットエンジンの排気には燃料と結びつかずに残った酸素がまだ多く残っていて、そこへさらに燃料を噴射し点火して推力をかさ上げするのがアフターバーナーである。現在の戦闘機には標準装備となっている。

後に続き僚機もアフターバーナーを点火して急上昇する。

「やった！振り切ったぞ！」

オ・ラクスンは既に追跡してくるミサイルは無くなっているのに気づいた。携行型地对空ミサイルは小型なので射程は短く、それが2機のF-15Kを救ったのである。

一方でMLRS部隊の方が悲惨であった。投下された爆弾母体か

ら子弾が次々と吐き出され、MLRSを襲ったのである。9輦のMLRSのうち、8輦が何らかの損害を受け、うち3輦が後に修理不可として破棄された。攻撃を受けたのは、西部方面特科隊の中でも一部の部隊だけであったが、この攻撃以後は空からの攻撃を警戒して部隊の行動に関して慎重になった。高麗軍の企みは成功したのである。

一方、携SAMから逃れた2機のF-15Kであったが、それは結果的に新たな試練を自らに課することになった。回避のために高度を上げたことで、自衛隊の防空レーダー網に捉えられてしまったのである。

2機のF-15Kに対処したのは西部方面隊の陸上自衛隊部隊の防空を担当する陸上自衛隊第3高射特科群の03式中距離地対空誘導弾システムであった。中SAMとして知られる03式は陸上自衛隊の保有する中でも最新鋭の対空ミサイルで、日本のミサイル技術の集大成とも言える存在であった。射程を除けば、アメリカ製のパトリオット地対空ミサイルを上回る性能を持つと噂される程である。先に登場した91式携SAMが歩兵の携行するための小型ミサイルなのに対して03式は複数の大型車両にレーダーやら発射機やらを分散して搭載している大型のシステムで、より広範囲、高高度の敵を迎撃する任務を帯びていた。03式中SAMの際立った特徴として挙げられるのは垂直発射方式を採用したことにある。海上自衛隊は【こんごう】型護衛艦以来、垂直発射方式を採用しているが、陸上自衛隊では03式中SAMが初めての採用となる。

従来型の発射方式が発射機ごと敵に向けて発射してミサイルが直接に敵めがけて飛んでいくのに対して、垂直発射方式は一度真上に発射して上空でミサイル自身が軌道修正し目標へ向かうものである。その程度の違いにどれほどの意味があるのか、と考える方もおられると思うが、実は大きな違いなのだ。従来型ミサイルの場合、敵を

撃つには発射機をまず敵に向ける必要がある。垂直発射方式なら発射機を上に向けておけば、ミサイル自身が自ら針路を修正するのだから、どの方向から敵が来ても瞬時に対応できるのである。さらに従来型の場合、敵に直接向かっていくのだから、ある程度開けた場所じゃなければ使うことができない。そのような場所では敵の反撃を受ける可能性が高まる。一方、垂直発射方式の場合、発射されたミサイルは真上に飛んでいくのだから前後左右を建物や森に囲まれているような場所でも使うことができ、敵の反撃を受ける可能性も抑えることができるのだ。ただレーダーは開けた場所に設置しなければならぬが。

データリンクによって各地に設置された移動式対空レーダーの情報を受け取り、F-15Kの存在を捉えたと、03式中SAMのオペレーターは照準用レーダーを作動させた。IFF（敵味方識別信号）に反応なし、空自の飛行機は飛んでいないことは予め報告されている。そして危険空域内にわざわざ飛び込んでくる民間機もない。敵であることは明らかであった。

「目標捕捉。照準良し」

オペレーターからの報告を受けると指揮官は攻撃を決断した。

「撃ち方はじめ！」

指揮所から少し離れた森の中に隠された発射機から4発のミサイルが発射された。2機のF-15Kに対してそれぞれ2発ずつである。

上空を飛ぶF-15Kのコクピット内に警報音が鳴り響いた。幸

いなことに高麗空軍は度重なる電子偵察の結果、陸上自衛隊の03式中SAMのレーダーが使う周波数を知る事ができたので、そのデータをF-15Kの警報装置に組み込むことができた。

「退避！」

シンは愛機を急降下させた。後席ではラクスンが電子装置を操作して電子妨害を試みている。だが最新鋭の技術が組み込まれた03式中SAMにどれほどの効果があるかは未知数であった。

03式中SAMには高度なECCM能力が付与されている。ECCMは対電子妨害手段などと日本語に訳されているが、簡単に言えば敵の妨害に影響を受けない能力ということになる。F-15Kは妨害電波を発し、03式中SAMの誘導を遮断しようと試みたが効果はなかった。

2機のF-15Kは急降下して、やり過ぎそうとした。03式中SAMには終末誘導は自らに搭載されたレーダーを使うが、ミサイルに搭載可能なレーダーシステムは小型にならざるえないので途中で地上のレーダーによって誘導しなくてはならない。基本的にはだから、急降下して地平線の彼方へと姿を消そうとしたのである。そしてその試みは一応、成功した。

「敵の射撃レーダーが途絶えた。助かったぞ」

ラクスンはそれに安堵しているようだったが、シンは警戒を弛めなかった。

「まだまだ分かんぞ。日本軍のことだ。どんな小細工を施しているか」

その後、シンは僚機と連絡を取ってその無事を確認した。一方、

ラクスンは電子警戒装置が別の追跡者の存在を警告しているのに気づいた。

二〇・防空戦（後書き）

- ・第4話で護衛艦【いそゆき】が【まつゆき】になっていたので修正
- ・次回から政治話が始まります

二・国会開く

その別の追跡者は第4師団の師団防空部隊である第4高射特科大隊であった。高射特科大隊には築城基地にも配備されていた短SAMと91式携帯SAMを車載化した93式近距離地对空誘導弾が配備されている。追跡者は前者であった。

自衛隊の防空システムは航空自衛隊の府中航空総隊司令部から陸上自衛隊の師団防空隊の末端までデータリンクにより繋がっている。これはミサイル防衛構想(MD)がその本来の目的である弾道弾迎撃能力のほかに自衛隊にもたらした副産物で、これにより自衛隊の防空力は格段に向上した。方面隊の高射特科部隊の獲得した情報は師団高射特科大隊の司令部にも渡され、DADS(師団防空情報処理システム)を通じて末端のミサイルにまで伝達される。

敵編隊が侵入した、という情報を得た81式短SAMのオペレーターは師団を空からの攻撃から守るためにレーダーを起動した。そしてレーダーは低空を飛行する2機の敵機の姿を捉えたのである。捉えたのは短時間だったのでミサイル発射まではできなかったが、その情報は彼らが敵機侵入の情報を受けたのとまったく逆のルートを伝って、また各地の防空部隊に伝えられた。

2機の機体が地上レーダーの索敵範囲外から出たことにより、空中を飛ぶ4発の03式ミサイルは追うべき目標を見失ってしまった。従来の対空ミサイルならばこの時点で迎撃失敗となるが、最新鋭の03式中SAMはここで終わらなかった。

ここからが日本の最新鋭システムの本領発揮である。03式中SAMはデータリンクを通じて外部から情報を得たり、目標の針路を自ら予測したりして、その情報を基にミサイル搭載のレーダーで敵を搜索することができるのである。81式短SAMから情報を入手

できたこともあり、1発のミサイルが先端に搭載されている小型レーダーでも捕捉・照準することが可能な位置まで達することができたのである。

「目標、再捕捉！」

オペレーターは歓喜した。

捕捉されたパイロットは驚愕し恐怖した。後席に座るWSO（兵装士官）が接近してくるミサイルを発見したのである。滅多に試し射ちできない自衛隊の事情もあって、ミサイル搭載のレーダー波の情報は警報装置に組み込まれていなかった。

<逃げろ！ミサイルだ！>

<回避しろ！>

難を逃れたシンとラクスンも僚機の危機をその目で確かめた。無線を通じて警告を発したが、相手のパイロットは返答するどころではなかった。

狙われたF-15Kのパイロットは咄嗟にチャフをばら撒きながら急旋回して回避を試みた。だが、03式中SAMは騙されない。直撃こそ避けられたものの、近距離で近接信管が作動してミサイルは爆発した。

「畜生！爆発した！」

ラクスンは光に包まれた僚機の姿を見て絶叫した。

「落ち着け。ほかにミサイルが来るかもしれん。見張りを続けるん

だ」

シンは左右にミサイルが来ないか見渡した後、僚機が飛んでいた空に目を向けた。そこにはまだF-15Kが飛んでいた。ボロボロであつたが。

「大丈夫か？」

シンは無線で呼びかけた。パイロットが返答した。

＜大丈夫だ。破片が当って出血しているが、意識はあるし、手足も動く。だがWSOに呼びかけても返事が無い＞

シンが僚機のコクピットを見ると、前席のパイロットの頭は被害状況を確認しているのかやたらと動いているが、後席のWSOの顔はうな垂れてピクリとも動かない。

「大丈夫さ。きっと日本のミサイルを見て気絶しちゃったんだ。あいつは臆病だからな」

ラクスンはパイロットを励まそうと無線に向かってそう言ったが、正直なところ生きているとは思えなかった。そうしている間にシンは自機を僚機の下に潜り込ませた。

「胴体は穴だらけだが、分解する様子は無い。右水平尾翼ラダーが無くなっている。あと右垂直尾翼の方向舵エルロンと右主翼の補助翼が吹き飛んで無くなっている」

＜畜生。右のフラップも動かない＞

「帰還できそうか？」

シンは尋ねた。僚機のパイロットは少し考えてから答えた。

＜分からないが、やってみる。俺は壱岐を目指す＞

「分かった。上空までエスコートする」

幸いだったのは、F-15Kが極めて頑丈な造りをしていただけ。原型である空戦型F-15も頑丈さで知られた機体で、飛行中に事故で片方の主翼を失いながら無事に帰還した事例さえある。爆撃任務も付与されたF-15Kは低空侵入、低空長距離任務に耐えられるようにさらに頑丈な造りになっている。それが僚機のパイロットを救ったのである。

北宇都宮駐屯地

宇都宮市には北宇都宮駐屯地と宇都宮駐屯地という2つの駐屯地が在って、前者は施設内に飛行場があり陸上自衛隊飛行部隊が配属されている。後者については、従来までは自衛隊の砲兵である特科部隊が駐屯する基地であったが、2007年になって新たな部隊が加わった。その名は中央即応連隊である。

中央即応連隊は、日本を5つに区切る方面隊には属さず代わりに在日米軍のキャンプ座間に司令部を置く中央即応集団の指揮下にある。中央即応集団は方面隊のように特定の活動範囲を定められておらず、緊急事態に場所を問わず迅速に対応するための即応司令部や海外派遣部隊の司令部として機能する。そんな中央即応集団の下で第一空挺団とともに二大実働部隊となっている中央即応連隊が北九州有事における増援部隊第一陣となるのは当然の帰結である。しかも、高麗軍によるゲリラ攻撃に備えて全国の部隊が九州に移動できない状況で、彼らに対する期待はとにかく高かった。

中央即応連隊は装備を整えて北宇都宮駐屯地まで移動した。そこ

で彼らを待っていたのは航空自衛隊の最新鋭国産輸送機であるC-2であった。川崎重工が開発したこの機体は、前任のC-1に対して搭載量、航続距離において格段に勝り、しかも世界の輸送機の中でこのC-2だけが有する特徴を有していた。それは高速巡航能力である。

一般的に軍用輸送機は同クラスの民間旅客機に対してどうしても速度で劣る。巨大な軍用物資輸送のためにどうしても胴体が大型化し空気抵抗が大きくなってしまっているのである。速度が異なる飛行機を同じ空域を飛ばすのは事故のもとなので、軍用輸送機は旅客機の空路を避けるのが常なのだが日本の空ではそれが問題となる。日本という国は狭い島に一億以上の人口が集中し、しかも経済が盛んなので国内の移動が激しいのである。その為、日本周辺の航空路線は大変過密になっており、必然的に自衛隊輸送隊の活動できる空域は大きく制限されてしまうのである。その事態を打開するために開発されたのが最新鋭輸送機C-2で、強力なエンジンを搭載して軍用輸送機ながら旅客機並の巡航速度を達成したのである。これは米空軍も次世代輸送機計画に必要なものと認めた能力で、世界の輸送機事情の先駆けとなったのである。

ともかく中央即応連隊の700名の隊員たちは次々と北宇都宮駐屯地に駆けつけるC-2に乗り込んでいき、一路九州を目指したのである。

名古屋市内 あるアパートの一室

真と辰巳はテレビの特別報道番組を見ていた。今日は平日なので2人とも仕事があるのだが、公共交通機関が麻痺しているので通勤どころではない。真の軍事系雑誌の仕事だが、この有様では目的の自衛隊施設の取材などできるわけがないし、帰れもしなかった。政府が鉄道、バス、高速道路など公共交通機関にストップをかけたか

らだ。生活物資の輸送など公共目的を除けばその使用は大きく制限され、市民生活は停滞しているのである。なぜそんな制限が行なわれているかといえば、自衛隊部隊の移動を容易にするためであり、また高麗コマンド部隊によるゲリラ攻撃を警戒した措置である。政府の措置の結果かは分らないが、結果的にまだゲリラ攻撃は発生していなかった。国民の不満は高まる一方であるが。

テレビでは偉そうな軍事専門家を名乗る人物が意見を述べているが、真はまともに聞く気が無かった。日本では専門家と名乗りさえすれば専門家ということになっているので、肩書きはあまり信用できない。ふと腕時計を見ると10時になろうとしていた。真はリモコンを掴むとチャンネルを替えた。

「何をするんだよ」

辰巳が抗議したが真は無視した。チャンネルはNHKに合わされていた。

「兄貴。国会中継なんて見ていたの？」

「いや。今日が初めてだよ」

国会 衆議院本会議場

議長である自由民権党議員が宣言した。

「これより会議を開きます」

防衛出動の発動及び対処基本方針は衆議院並びに参議院に提出された。このような議案が提出された場合、まず各議院に組織されている委員会（この場合、衆院なら安全保障委員会、参院なら外交防

衛委員会）に付託されて審議されるが、提出者である内閣の要請により緊急を要する事から今回は本会議で直接審議されることになった。

「日程第一、内閣総理大臣による自衛隊に対する防衛出動命令並びに北九州有事対処基本方針に対する可否を議題とします」

議長は中山防衛大臣に趣旨説明を求めた。中山はそれに応じて防衛出動と基本方針について説明をした。それが終わると議長が尋ねた。

「日程第一は緊急を要する議題ですので、提出者である内閣の要請により委員会の審議を省略するに、御異議は御座いませんか？」

烏丸総理をはじめとする閣僚は異議を出すものがないとは思わなかった。野党が反対を言うと言っても、最後の採決で形だけ反対して政府反対の建前だけ貫くと考えたのである。菅井を除いて。そして菅井の思う通りになった。

「異議あり！」

民生党党首の叫び声が本会議場に響いた。

登場人物紹介

日本

政府

烏丸祐一郎

内閣総理大臣 社会民主党党首

菅井

官房長官 自由民権党

古橋

外務大臣 社会民主党

栗田

法務大臣 社会民主党

中山

防衛大臣 自由民権党

井戸たけ子

衆院議員 社会民主党

小宮次郎

衆院議員 民生党代表

自衛隊

神谷

陸将 統合幕僚長

剣持

陸将 陸上幕僚長

笹山

海将 海上幕僚長

斎藤

空将 航空幕僚長

真田

陸将 情報本部長

内海

陸将 第4師団師団長

野木

1等陸佐 第19普通科連隊連隊長

桜井雄一

3等陸曹 同連隊第1中隊第2小隊 狙撃手

古谷

3等陸尉 同部隊指揮官

砺波

陸曹長 同部隊小隊陸曹

矢部

陸士長 同部隊小銃手

金井

1等陸佐 第40普通科連隊連隊長 戦死

中田

3等陸佐 同連隊第2中隊長

平坂

2等陸曹 同連隊第3中隊 即席狙撃手

丹下

1等陸佐 第41普通科連隊連隊長

氷室

3等陸尉 第4師団第4戦車大隊第1中隊第2

小隊長

小津

佐久間

黒部幸正

3等陸佐 対馬警備隊指揮官

2等陸曹 対馬警備隊

1等陸曹 特殊作戦郡

二ノ宮

佐川

羽佐間

海将補 第2護衛隊群司令官

護衛艦「いせ」艦長

海将 航空集団司令官

野々宮純一

3等空佐 イーグルドライバー

Other

片平由香里

プロ市民

萩原里美

学生、桜井の交際相手

青野由紀夫

学生、萩原の友人

斉藤美緒

学生、萩原の友人

水谷知世

学生、萩原の友人

深海真

某軍事雑誌ライター

深海辰巳

真の弟

高麗連邦

チョン・ウジュン 高麗連邦大統領

イ・セチャン 国防部部长

ソン・ペクイル 外交通商部部长

キム・ユリョン 国家情報院院長

キム・ギムン 駐日高麗大使

ウォン・インワン 高麗陸軍大將 合同参謀総長

チェ・チョンヒ 高麗陸軍中將 対日遠征部隊<チョリマ>総司

令官

イ・デヨン 高麗陸軍大佐 同部隊主席参謀

ドン・テヒョン 高麗陸軍少尉 特殊部隊指揮官

キム・ジユヨン 高麗海軍少将 艦隊司令官

チェ・ミンギ 高麗海兵隊少将 海兵隊上陸部隊司令官兼第1

海兵師団師団長

パク・ナム 高麗海兵隊上等兵

シン・フンス 高麗空軍大尉 F-15Kパイロット

オ・ラクスン 高麗空軍少尉 F-15K兵装士官

アメリカ合衆国

ローゼンバーク 駐日米国大使

チャールズ・アトリー 在日米軍司令官兼第5空軍司令

フランク・スチュワート 海軍少将 第70任務部隊指揮官

アダムス 海軍大佐 空母【ジョージ・ワシントン】艦長

登場人物紹介（後書き）

日韓大戦も登場人物が増えましたので、登場人物一覧表をつくり
ました

また以下の部分を改訂

- ・ 9 話で語られるアメリカ軍の状況を変更
- ・ 19 話で自由民権党が自由民政党になっていたのを修正

二二・政局動く

小宮は立ち上がった。

「自衛隊の防衛出動は戦後初めてのことであるから、十分な審議が必要だ。政府は自衛隊の出動を急いでいるようだが、テレビの報道によれば高麗政府は外交解決を目指しているそうじゃないか。しかも自衛権発動の要件に対する政府見解では「必要最低限の実力行使」となっている。私は相手方が外交解決を求めているのに武力行使を行なうのは必要最低限を越えていると考える。出動ありきの政府のやり方には納得できない。私はこの問題を安全保障委員会に付託することを求める」

それについて野党側の議員の野次が飛ぶ。

「手続きをちゃんと踏め！9条を蔑ろにするな！」

「有事に託けて軍国化の準備をするようなマネは許さない！」

「政府は情報を隠すな！」

それに対して与党側——と言っても自由民権党だけだが——も応戦する。

「敵は既に上陸して戦争になってんだぞ！」

「軍隊で侵攻しておいて、外交的解決も何もないだろう！」

「国民の生命を何だと思っているんだ！」

本会議場は大混乱であった。そんな有様を烏丸たちは議長席両側の閣僚席で眺めていた。向かって左側の最も中央寄りの席に座る烏丸は頭を抱え、その隣に座る菅井は議長の方を見た。議長もこの状

態にどうすればいいかわからないらしく、こちらを見て目で何かを訴えていた。菅井が首を横に振ると、議長は頷いた。

「内閣総理大臣による自衛隊に対する防衛出動命令並びに北九州有事対処基本方針の委員会の審議を省略するに異議がありましたので、記名投票によりその可否を採決します」

議長がそう宣言すると民主党の議員たちは一斉に拍手をした。そんな様子を見て菅井は一度溜息をついてから隣の烏丸に尋ねた。

「社会民主党の方はちゃんとまとめているんですよね？」

社会民主党は90年代中期に政権党となった時に、それまでの姿勢から一点して自衛隊及び日米安保容認に鞍替えした事から分かるように、それなりに現実感覚を持っている。だが、今は彼らの姿勢次第で政局を動かすことができる状態にある。

「そう信じている」

烏丸は不安げに答えた。

対馬空港

高麗の臨時航空基地と化した対馬空港にシンとラクスのF-15Kは戻っていた。既に高麗軍によって制圧された壱岐空港まで自衛隊の攻撃を受けた僚機を援護して、無事に着陸するまでを見届けてから対馬に降りたF-15Kの機体は今や整備を受け、燃料・弾薬を補充して何時でも発進できる状態にある。だが、乗員の方はそうもいかなかった。

「で、2人はどうなったんですか？」

ラクスンが飛行隊長に詰め寄っている。戦闘中にさえ見せない必死さに周りの同僚たちも止めることができなかった。

「大変言いにくいのだが、パイロットは助かったよ。重傷を負って本国に移送されたが。だが、WSOは着陸した時には既に死んでいたそうだ」

それを聞くとラクスンはその場に崩れ落ちた。

「畜生！畜生！倭奴め！皆殺しにしてやる！」
ウエノム

ラクスンの相棒であるシンは、その様子を黙って見守っているしかなかった。いや、シンだけではない。その場にいた全員が同僚の死という現実を前にして黙り込んでしまった。そこへ対馬に展開した部隊の指揮官である大佐がやってきた。

「諸君。早速だが仇討ちのチャンスが来たぞ」

衆議院本会議場

衆議院議員480名が投票を終えた。

「投票漏れはありませんか？」

議長が叫んだが、返す者は無かった。

「投票漏れなしと認めます。投票箱閉鎖、開票。議場閉鎖。投票を計算させます」

集まった票の集計が行なわれている頃、烏丸は隣の菅井と話をしていた。

「もし反対多数となったらどうなる？」

「統合幕僚長の話だと、攻勢に出られるタイムリミットは12時間だそうです。今を逃せば、もう無理ですね」

ようするに烏丸の所属する社会民主党の動向が北九州有事を迅速に処理できるかどうかの鍵を握っているのだ。

とりあえず衆議院が可決したなら、午後の自由民権党が単独で過半数を確保している参院を待たずに基本方針を実行するように烏丸に迫れるだろうと考えた中山ら閣僚であるが、その試みは暗礁に乗り上げたわけだ。

のおがた
直方市

直方は北九州の南西に位置し、筑豊三都の1つに数えられる都市である。100万都市である北九州に隣接していることもあり、近年は住宅地として発展している。市内には遠賀川が流れていて、その川原の緑地公園には第41普通科連隊戦闘団が分散・擬装して待機していた。第40普通科連隊の救出のために派遣された彼らだが、肝心の第40普通科連隊司令部との連絡が断たれ北九州の状況が不明なうえに、烏丸総理の「現状維持を図り、高麗軍との交戦は避けるべし」という命令があるため、市内への突入に踏み切れなかった。結局、直方の緑地公園に待機し、連隊本部直轄の情報小隊を派遣するに止めている状況である。

戦闘団の司令部は直方市役所及び警察署の駐車場に置かれた。そこで警察や市の職員とテレビを前に情報交換と避難民への対応を進めていた。だが、司令部に詰める大多数の目はテレビに映る国会中継に向けられていた。

「なあ、連隊長さん。もし国会で否決されたらどうなるんだ？」

直方警察署の署長が第40普通科連隊の連隊長である丹下^{たんげ}1佐に尋ねた。

「政治の事は私にはわかりません。しかし、高麗軍に対して受身にならざるをえないでしょうなあ。場合によってはここからも撤退することになるでしょう」

丹下は淡々と語った。それを聞いた署長はなにも返すことができず、ただ胸中で自衛隊撤退後も街に残る覚悟を決めただけであった。

衆議院本会議場

投票結果の集計を終えた事務総長が、議長のところへ駆け寄り、その旨を報告した。

「投票の結果を事務総長から報告させます」

事務総長は議長の前に立つと、投票結果を報告した。

「投票総数480。可とする者は232。否とする者は248」

その報告を聞くと、民主党と社会民主党の議員が一斉に拍手をし

た。社会民主党は政府から離れ野党に擦り寄った。政局は動いてしまったのである。

「右の結果、自衛隊に対する防衛出動命令及び政府基本方針を安全保障委員会に付託することを議決します」

政府の企みが破綻した瞬間であった。

「続いて日程第二は…」

名古屋市内のあるアパート

その結果に真と辰巳は呆気にとられてしまった。

「なあ兄貴。いったいどうなるんだ？」

「参院じゃ与党多数だから大丈夫だろうが、衆院がこの様じゃなあ」

安全保障委員会に付託する以上、今日中に決着をつけるのは難しい。民主党の事だ。政府与党の揚げ足取りに終始して貴重な時間を食いつぶすに違いない。

「だけどさ。兄貴。それじゃあ政治不信が広がる一方じゃないか。民主党にどんな得があるって言うのさ？」

「政治不信が広まれば、組織票が十分に見込める民主党が有利さ」

ともかく結論が出るまで自衛隊は受身の対処しかできない。その貴重な時間を使って高麗軍はより多くの部隊を上陸させることができる。

防衛省中央指揮所

防衛省には国会の状況が逐一報告されているし、テレビだって当然に備わっているので国会中継を見られる。

「困った事になった」

そうぼやいた神谷を皮切りに陸海空自衛隊の幕僚長が話し始めた。

「早期解決の道は潰えたわけです。敵が師団単位の戦力を揚陸しているなら、北海道から第7師団を呼ぶ必要があります」

陸上幕僚長の神谷がもつとも深刻な表情をしている。ここ20年の防衛費削減で最も打撃を受けているのが彼ら陸上自衛隊なのだ。各地に配備されている師団は上陸した部隊の進撃を止めるための張り付け部隊に過ぎず、さらに上陸した部隊を撃破するには強力な起動打撃力を持つ陸上自衛隊唯一の戦車師団である第7師団を九州に動かす必要がある。だが重装備の多い第7師団を北海道から九州に移転するには時間がかかるだろう。

「高麗がさらに別の師団を揚げるつもりなら、米軍の支援が来るまで反撃は不可能ですね」

そして、その懸念は現実のものになるとは、まだ知る由もなかった。

「空自としては高麗の巡航ミサイルに注目しています」

航空幕僚長の斉藤が恐れているのは高麗の巡航ミサイル攻撃であ

った。かつての北朝鮮がノドンやテポドンをはじめとする弾道ミサイル開発に力を注いでいたが、対して韓国は巡航ミサイルに注目して射程1000kmを超える【玄武】巡航ミサイルやその空中発射型である【若鷹】巡航ミサイルなどを装備している。放物線を描いて超高速で落下してくる弾道ミサイルに対して、比較して速度の遅い巡航ミサイルは撃墜することは容易であるがジェットエンジンで超低空を飛行するので発見するのが難しい。いかにして見つけ出すかが巡航ミサイル対処のポイントとなる。

「現在配備中のF-15FXならレーダーとしてAPG-63(V)4を搭載しているから探知、そして迎撃は十分に可能ですが、あくまで各務ヶ原で試験中の機体です。数も少ないしノウハウも十分じゃない。E-767も十分な巡航ミサイル探知能力がありますが、敵航空機への対処もしなくてはなりませんからなあ。海上自衛隊にはP-1を改造した巡航ミサイル探知機があるが、あれは使えませんか？」

その問いに笹山海上幕僚長は残念そうな顔で答えた。

「XEP-1Cの事でしたら、こちらも試験中の機体ですからね。空自のF-15FXと組み合わせればそれなりに使えるでしょうが、信頼性に疑問があります」

「よろしい。巡航ミサイル対策については米軍とも相談してみよう。ともかく事態の長期化は避けられない。それを踏まえて作戦計画を検討しなくては」

そう神谷が総括した時に3人のところへ連絡官が走ってきた。

「緊急事態です」

衆議院本会議場

内政に関する各種法案の審議が行なわれている時に、烏丸の秘書官が本会議場に飛び込んできた。彼は烏丸の腕を掴むとそのまま議場の外へ連れ出そうとする。菅井と中山もその後続いた。野党議員を中心に「逃げるのか！」などと野次が聞こえる中、烏丸は議場を出た。

「いったいどうしたって言うんだ！本会議中に連れ出すなんて、どうかしているぞ！」

烏丸はこの状況に怒りを隠せなかった。だが興奮した秘書官はそれも介さずに報告した。

「福岡の自衛隊に対して高麗軍が大規模な攻撃を仕掛けているそうです！」

二三・第一次全面攻勢

最終防衛線

攻撃は砲撃と共に始まった。高麗海兵隊のK55自走砲の砲撃は今宿バイパスの通る隘路の周辺に集中していた。高麗軍はそれに続き1個大隊の兵力を防衛線に突入させるつもりである

近くの市立高校校庭に設置された第19普通科連隊本部では連隊長の野木^{のぎ}1等陸佐が采配を振るっていた。普通科部隊の指揮官である野木には本来は戦車部隊や対戦車部隊、砲兵部隊を指揮する権限は無いのだが、第4師団師団長である内海から各部隊の調整をする許可を得ていた。

「敵の主攻はバイパスだな。問題は助攻だな。南から来るか、北から来るか」

バイパスの北側から海岸にかけては施設部隊が埋めているが、南側は防備が薄い。第4偵察隊の残存と連隊本部付の情報小隊、そして各中隊から選抜したレンジャー遊撃隊を配属して一応の防備は整えたが十分とは言えなかった。

「増援部隊が来れば良いのですが」

幕僚の1人が言った。今のところ増援として移動中なのは宇都宮からの中央即応連隊、それに南九州各地に配備されている陸上自衛隊第8師団の各部隊、そして西部方面隊直轄の西部方面普通科連隊^{ワイアー}である。そのうち、宇都宮を出発したばかりの中央即応連隊は問題外である。第8師団も北上を続けているが間に合いそうにない。となると頼りは西部方面普通科連隊である。

西部方面普通科連隊^{ワイアー}W A i Rは2002年に九州から沖縄に点在

する無数の島々を守るために結成された部隊で、「東の空挺、西のワイアー」と第1空挺団と並び称せられる精鋭レンジャー部隊なのである。彼らは本来の任務の通りに対馬の増援の為に温存されていたが、対馬海峡の制空・制海権がすぐに取り戻せる状況にないので、今ごろになって第19普通科連隊の援護に派遣されることになったのだ。

砲撃が止まった。それと同時に高麗軍がバイパスの通る隘路に突っ込んできた。先頭は戦車1個小隊で、1個中隊の歩兵を載せたAAV-7装甲車がそれに続く。

「来たぞ！」

古谷は部下たちを射撃位置に配置した。

「無反動砲は装甲車を狙え。戦車は戦車隊の連中に任せるんだ」

やがて自衛隊側も砲兵射撃による応戦が始まった。203ミリ自走榴弾砲、155ミリ榴弾砲、120ミリ迫撃砲、81ミリ迫撃砲。そういった様々な火器が一斉に放たれ、一帯が砂埃に覆われる。その中から最初に抜け出てきたのは2輦の縦隊が2列、計4輦のK1A1戦車であった。4輦の戦車は古谷らの小隊が隠れる塹壕を超越して先へ進んだ。そして数を減らしたAAV-7がそれに続く。

「今だ！無反動砲！」

古谷の号令と同時に無反動砲手が飛び出し、AAV-7に対戦車榴弾を発射した。カールグスタフ無反動砲は旧式化しているとは言

え、相手は装甲の薄い装甲車である。威力は十分だ。AAV-7はそのまま惰性で走りつづけたが、上部のハッチが開き黒焦げになった高麗兵が飛び出してきた。

古谷小隊の攻撃が合図となり、道路を挟む八の字状の陣地に潜む幾つか部隊が一斉に姿を現し、高麗兵に一斉射撃を浴びせた。

左右から挟撃を浴びた高麗兵は、また装甲車の中で対戦車火器によって焼き殺されては堪らない、と次々とAAV-7から飛び出して、装甲車を盾にして応戦を始めた。そうしている間にも自衛隊陣地から再びカールグスタフ無反動砲が発射され、また1輦のAAV-7が破壊された。

一方、戦闘を行く4輦から成るK1A1小隊も事態に気づき停止して、先の2輦が前方を警戒する中で後続の2輦が砲塔を後ろに向けて、歩兵の援護を始めた。主砲同軸の7・62ミリ機銃で牽制をしつつ120ミリ主砲が自衛隊の陣地に向けられ、対戦車榴弾が放たれる。装甲の貫通に重きを置く対戦車榴弾なので、通常の榴弾程の爆発では無かったが、十分な補強のされていない簡易な塹壕には凶悪なまでの威力を発揮し、数名の隊員を一度に吹き飛ばしてしまったのだ。

だが、自衛隊も黙ってやられるわけにはいかない。今度は戦車隊のすぐ前方左側から擬装して道の脇、林の中に隠れていた2輦の10式戦車が飛び出して高麗軍のK1A1を襲った。狙われたのは10式側に面していた左側の縦隊の2輦で極至近距離、しかも自衛隊陣地を攻撃しているK1A1は砲塔を後ろに向けていたので、装甲の薄い側面と後方を10式に晒す状態であった。K1A1に逃れる術などあるわけもなく、2輦は一撃で粉碎されてしまったのである。

しかし、残りの2輦のK1A1が10式戦車めがけて反撃を仕掛けてきた。後ろのK1A1は撃破された味方の戦車が邪魔で攻撃に移れなかったが、先頭で警戒活動をしていた車両はすぐに反撃することができた。10式戦車の正面装甲は90式戦車譲りの高い防御能力を持っていたが、この至近距離では120ミリ徹甲弾をはじき

返す事ができず貫かれてしまい、砲塔内の乗員は即死した。10式を撃破したK1A1はもう1輦も撃破しようと動いたが、それは適わなかった。今度は道の右側から別に2輦の10式戦車が飛び出てきたからだ。2輦の10式はそのK1A1に対してほぼ同時に射撃をして見事に命中した。だが、そのK1A1の後ろでは照準に四苦八苦している最後のK1A1が居る。その戦車の乗員は同僚の仇を討つべく、前方に新たに現れた2輦のうち1輦に照準を合わせて、砲手が射撃ボタンを押した。すぐにスモークディスチャージャーを作動させ、撤退のために煙幕を張ったので乗員には戦果が分からなかったが、砲弾は見事に命中した。ただし、先ほどとは違い距離があつたので貫通には至らなかった。

ともかく高麗軍の進撃は停止した。

バイパスの隘路の両側には木々に覆われた標高100メートル前後の小さな丘があり、道路を挟んでいる。北側の稜線には施設部隊が、南側の稜線にはレンジャー遊撃隊、偵察隊によって防衛線が築かれていた。桜井はレンジャー遊撃隊の一員として稜線の警戒陣地に配属されていた。

下が見渡せる位置に精々2、3人の兵士が入れば一杯になるタコツボ。そこが桜井の警戒陣地だ。彼は即席の相棒バディとなったレンジャーの1曹とともにそこで近づいてくる敵が居ないか警戒していた。下で普通科連隊主力が高麗軍との戦闘に突入したこともあり、その緊張は高まっていた。そんな時に相棒となった1曹が尋ねてきた。

「桜井3曹はどのレンジャーなんだね？」

自衛隊においてレンジャーは主に特別な訓練を修了した者に与えられる一種の資格であるが、それには様々な種類が存在する。有名

なのは空挺教育隊で空挺隊員向けに行なわれる空挺レンジャーや富士学校で幹部（昔で言うところの士官）に対して行なわれる幹部レンジャーである。またそれらのレンジャー課程を卒業した者がそれぞれの部隊で独自にレンジャー訓練を実施している。それらは総称して部隊レンジャーと呼ばれ、各地の地象に合わせた訓練が行なわれているのだ。例えば北部方面隊の冬季戦技教育隊では厳しい冬季を想定したレンジャー教育を行う冬季遊撃レンジャー。また松本市の第13普通科連隊では日本アルプスなど日本有数の山岳に囲まれた地勢を行かして山岳レンジャーの育成を行なっている。そして最近加わったのが狙撃レンジャーだ。

「狙撃レンジャー課程。一期生です」

自衛隊における従来の狙撃手とは、部隊の中で射撃の上手い者を狙撃手に任命して指揮官等の特定の目標を狙って射撃するように指示する程度で、特別な訓練は行なわれていなかった。そういった状況を改善すべく導入されたのが狙撃レンジャー課程で、幹部と曹を対象にして通常のレンジャー教育を実施し体力を練成した後留学してアメリカ陸軍の狙撃手養成課程を受けるというものである。肝心の狙撃術の学習は今のところアメリカに丸投げしている状況であるが、将来的には課程を全て日本国内で行なう構想である。

「凄いな。将来の自衛隊を支える人材というわけだ」

「そんなものじゃありませんよ。1曹殿は？」

「俺か？聞いて驚け。冬季遊撃レンジャーだ」

「えっ！じゃあなんで九州に居るんですか？」

九州は冬季遊撃レンジャーが必要なほど冬は厳しくない。

「不思議だろ？」

1曹がそう答えると2人はクスクスと笑い始めた。周囲には聞かない程度の声で。タコツボの中の空気が和やかになっていたが、それはつかの間のことであった。下を見張っている桜井の顔が真剣そのものに戻った。その変化を1曹も感じ取れた。

「どうして？」

「林の中に何かが動いています。座標は165768の辺り」

1曹は目を凝らしたが何も見えなかった。だが、彼は桜井の目を信じることにした。

「さすが狙撃レンジャーだ。隊長に砲撃を要請してくる」

1曹はタコツボを抜け出すと草の陰に隠れながら隊長のところへ向かい事情を説明した後、また戻ってきた。隊長は手信号で稜線の陣地に隠れた隊員たちに射撃準備を指示する。

しばらくすると、隘路の戦闘の爆音に混じってヒュルヒュルヒュルと砲弾が向かってくる音が聞こえてきた。砲弾が次々と斜面に突き刺さり木々を吹き飛ばす。その中に逃げ惑う兵士の姿が見えた。砲撃が高麗兵を炙り出したのだ。斜面には1個中隊の高麗兵が侵入していた。

「撃て！」

レンジャー隊指揮官が命じた。一斉射撃が始まる。しかし、そこは特別な訓練を受けたレンジャーである。1発1発をちゃんと狙いをつけて無駄弾を極限にまで減らしている。特に正確な射撃を行なうのは狙撃手として教育を受けた桜井で、引き金を引くごとに高麗兵が次々と倒れる。

やがて高麗兵が砲撃の中で突撃を仕掛けてきた。砲撃に対抗するために乱戦に持ち込むしかない。そうすれば自衛隊の砲兵部隊は友軍誤射を恐れて砲撃を控える筈である。高麗軍の迫撃砲部隊もレンジャー部隊の射撃を牽制すべく砲撃をしてくる。これには精鋭レンジャーたちも溜まらず、塹壕の中に身を隠してしまった。その隙をついて高麗兵が進んでくる。先頭を進む高麗兵は防御線まで十数メートルというところまで達し、手榴弾を投げてくる。それは自衛隊の塹壕の中に入り込んで、中に居た2人の隊員を殺した。その塹壕は防御線としての機能を失い、線に穴が開いたのである。高麗兵はそこへ突っ込んだ。

だが、高麗歩兵隊がそこまで近接してしまうと迫撃砲部隊も友軍を巻き込まないために砲撃を止めてしまう。止むと同時に自衛隊側の応戦も始まった。防御線に穴が開き、そこに高麗兵が殺到している状況だが、レンジャー遊撃隊はそれを逆に利用して突進してくる高麗兵に左右から銃撃と手榴弾を浴びせた。高麗兵たちが切り開いた道がそのままキルゾーンと化したのである。桜井も側面から指揮官を狙う撃ちして高麗兵を混乱させる。山の上でも自衛隊側有利に事が運びつつあった。

だが、それを打ち破るものが別の方向から迫っていた。それも海と空の二方向から。

二四．対艦攻撃

戦域に近い海岸に面する山中にレーダーシステムを後部に搭載する73式小型トラックが停車していた。パジエロの愛称で知られる市販車を改良した軍用四輪駆動車に載せられているのは、JTPS-P15。これこそ日本が誇る対水上攻撃システム、88式地对艦誘導弾の搜索レーダーである。レーダーが捉えた情報はデータリンクを通じて鳥栖市に配置されている指揮統制装置に伝えられた。

指揮統制装置に向かうオペレーターはレーダーが大型の船舶の影を捉えているのに気が付いた。敵味方識別装置に反応が無いので味方ではない。だが、敵味方識別装置は味方かそれ以外かを識別する装置で、中立船や民間船と敵国船を見分ける機能は無い。

「洋上に未確認船舶。確認を請う」

その要請は再び福岡の海岸まで戻っていった。

レーダー車両に乗っていた隊員の1人が双眼鏡を持ち出して車を降りた。レーダーが影を捉えた辺りを覗くと、そこには軍艦の姿があった。2隻の軍艦、それは高麗軍の【コージュンボン】型揚陸艦と【クアワンゲト・デワン】型駆逐艦である。彼らは防衛線を脅かすために洋上機動により自衛隊の背後に海兵隊部隊を送り込むつもりなのだ。

「高麗艦隊だ。畜生。別働隊を上陸させるつもりだ」

レーダー員が無線でそう報告している間に、揚陸艦から小型揚陸艇が4隻ほど飛び出してきた。

高麗艦艇が洋上に現われたころ、連隊本部では新たな作戦が動き出していた。

連隊の作戦幕僚が状況を説明した上で、自分の案を説明していた。

「隘路でも山中でも我が連隊は敵の進撃を押し止めることに成功しています。そこですが、海岸線に面した陣地に配備した中隊を前進させ敵をさらに圧迫するのはどうでしょうか？」

作戦幕僚は司令部の机の上に置かれた地図を指し示した。

「戦車の支援をつけた第4中隊を前進させて、今宿駅前を過ぎて国道202号線との合流点まで、そしてそのまま202号線に沿って西へ進む高麗郡の背後を脅かすのです」

野木連隊長は作戦幕僚の作戦をただちに実行することにした。

「よろしい。その案でいこう。ただちに第4中隊に前進を命じよう」

命令を受けた第4中隊は早速に前進を開始した。配属された1個小隊4輦の戦車のうち、2輦が先頭を進む。その後ろに軽装甲機動車に搭乗する1個小銃小隊が進む。その後に残りの戦車2輦が入り、そしてその後に中隊の主力、中隊本部に高機動車及び中型トラック搭乗の小銃小隊、対戦車小隊、軽迫撃砲小隊が進んだ。中隊本部には第4対舟艇戦車隊の観測班も乗り込んでいた。彼らは96式多目的誘導弾システムに攻撃に必要な情報を与えるのが任務であった。

第4中隊前進の命令が実行され、連隊本部の要員はその無事を祈っていた。そこへ対艦ミサイル連隊からの報告が入電した。その報告によれば博多湾の外に2隻の高麗艦が現われたという。

「1隻は駆逐艦で玄海島げんかいじま付近を遊弋しています。別の1隻は戦車揚陸艦で小型揚陸艇4隻を下ろした後に湾の入り口を横切り、どうやら海浜公園のあたりに部隊を上陸させるようです。小型揚陸艇は湾内に侵入して、現在は能古島のこのしまの影に隠れてレーダーではロストしましたが、こちらに向かってきているようです」

玄海灘に面する博多湾はその広さに比して湾の入り口が狭い。糸島半島の先端と志賀島しかのしまの間の6kmほど空間がそれである。そして間に玄海島という小さな島が浮かんでいる。志賀島は砂などが堆積して対岸まで至ってしまう砂州さいしゅうと呼ばれる地形によって本土と繋がった陸繋島である。志賀島と九州を結ぶ砂州は海ノ中道と呼ばれ、海ノ中道海浜公園として国営公園に指定されている。その砂浜に高麗軍のコージュンボン型揚陸艦が上陸しようとしているのだ。一方、湾内には能古島のこのしまと呼ばれる小さな島がある。その背後に隠れることで高麗小型揚陸艇は第19普通科連隊の後方に直接上陸しようとしている。

「洋上機動による後方遮断か！」

野木は頭を抱えた。丁度、海岸沿いの第4中隊を前進させたばかりじゃないか。タイミングが悪い。

「対艦ミサイル連隊が揚陸艦と駆逐艦にミサイル攻撃を行なうそうです」

「となれば、揚陸艇と兵士はこちらの管轄だな。迎撃の準備だ」

野木は予備の第3中隊に海岸沿いの防備を命ずるとともに、バイパス隘路の防衛線から戦車2輦と96式多目的誘導弾を引き抜いて第3中隊に配属した。

洋上機動の別働部隊は高麗軍の切り札であった。

高麗海兵隊は福岡攻略部隊として歩兵1個大隊と戦車1個中隊より成る戦闘群を編制した。そして、まず戦車1個小隊と歩兵1個中隊をバイパスの隘路に、もう1個中隊をバイパス南の森の中へ突入させた。だが、自衛隊に阻止されている。今こそ別働隊を投入すべき時である。

高麗軍は予備として上陸地点の防備に当たっていた1個大隊から2個中隊を引き抜いた。特殊作戦群の攻撃により損害を受けたが、それは軽微であり十分な戦闘能力を有していた。まず1個中隊を小型揚陸艇に乗せて自衛隊陣地の後方に送り込み圧迫する。そして6輦の戦車の支援を受けた1個中隊を海ノ中道に上陸させて自衛隊の後方に回りこむ。これによって自衛隊は防備の薄い後方を脅威に晒され、足止めされた主力部隊の援護になる筈である。チェ・ミンギ少将は残った予備の1個歩兵中隊と戦車1個小隊に対して別働隊の上陸に合わせてバイパス隘路に突入し、足止めを喰らっている部隊を超越して自衛隊に攻撃を加えるように命じた。またもう1個の戦車小隊は北方向に向かい海岸線を前進してきた自衛隊の中隊―第4中隊のことである―を牽制するように命じた。

氷室は第3中隊を支援するように命じられ戦車壕を慌てて出た。生き残っている部下の10式戦車2輦に対しては、若手の2曹が車長を務める1輦に自分について来るように命じ、ベテラン1曹の指

揮するもう1輛にはバイパス隘路を守るもう1個の戦車小隊の指揮下に入るように命じた。2輛の10式戦車は第3中隊を指して防衛線を去っていった。

そして道を進んでいる時、砲撃がどこかに着弾した時の轟音が聞こえてきた。

「どこだ。誰が攻撃を受けているんだ？」

氷室の疑問は第3中隊からの情報で氷解した。

「高麗の駆逐艦が艦砲射撃をしているんだ！」

氷室は高麗駆逐艦が装備する127ミリ砲の威力を思い出そうとしたができなかった。戦車兵の氷室には、そもそも艦砲に関する知識など無かったのだ。

鳥栖の88式対艦誘導弾はいよいよ発射態勢になった。88式は発射機16基、ミサイル96発で1システムを構成する。オペレーターは駆逐艦に対してミサイル4発、揚陸艦に対して2発を発射することにした。

「発射！」

郊外の田園地帯で発射機の1つが発射態勢になっていた。大型トラックに載せられた6本の筒状のものがそれであり、筒の1つ1つにミサイルが装填されている。今、発射筒はせり上がり斜め上を向いている。

爆音とともに筒の1つからミサイルが発射された。それに続いて他のミサイルも次々と発射され、6発のミサイルが空中に上がった。

1 輻の96式多目的誘導弾が防衛線の設けられている山のすぐ東側の林の中に来ていた。そこは九州大学の演習林で、自衛隊は開けた海水浴場との境目に陣地を設けた。

96式多目的誘導弾は高機動車に載せられた大型の対戦車ミサイルシステムである。この手の対戦車ミサイルはケーブルを使ってミサイルへ目標の情報を与えて誘導するのだが、次世代のケーブルとして光ファイバーが有望視されている。光ファイバーは従来のケーブルよりも多くの情報を送信できる上に細くできる―つまり同じ重さなら従来型ケーブルより光ファイバーの方が長くできるので、射程もその分だけ増す―からだ。そして世界で初めて光ファイバー有線誘導方式に成功したのが96式多目的誘導弾なのである。その射程は10kmを超えるとされ、弾頭も世界中のあらゆる戦車はもとより小型の船でさへ破壊できると言われる。それ故に“対戦車”誘導弾ではなく“多目的”誘導弾なのである。公式の愛称はマルチ。陸上自衛隊の装備品の中では珍しく現場でも頻繁に使われる。

96式多目的誘導弾の観測班は第3中隊に同伴していた。96式マルチは射程が長すぎるので、砲兵のように敵の情報を集める観測班を前線に派遣しなくてはならない。第3中隊は海岸沿いにさらに東へ進んだ。やがて車両縦隊は停車して普通科隊員と観測班が降車して配置についた。そこは新小戸公園と呼ばれる公園で、東にはマリナーや水処理センター、南には小戸大神宮がある。高麗軍の揚陸艇も丸見えであった。

「攻撃用意！」

96式マルチの観測班は情報を発射機に伝えた。

6発の88式地对艦誘導弾は山と山の間を這うように北へ進んでいた。このミサイルは内陸から発射され、敵に悟られないように地形に沿って超低空で飛ぶという巡航ミサイルのような能力が備わっていたのだ。やがてミサイルは山を越えて市街地上空に達した。弾頭に備えられたシーカーが洋上の高麗艦隊を見つけて、ミサイルは攻撃の最終段階へと突入した。

福岡市 南区

荻原らは避難民の列から抜け出し、なんとか南区まで来ていた。だが、アパートの自分の部屋に閉じこもり逃げられなくなっている友、水谷知世みずたに ともよが居るのはさらに西の城南区である。

「洒落になってないなあ」

運転手の青野は西の方向を眺めて言った。山の向こうから砲声が聞こえてくる。西に向かうということは、それに近づくということである。

「そんなこと言ったって、トモちゃんを置いていくわけにはいかないでしょ?」

斉藤が運転手に怒鳴った。

「そう言われてもなあ」

すると何かが彼らの上空を飛び去った。轟音を残して。

「なに今の？」

「ミサイルっぽいなあ」

二四・対艦攻撃（後書き）

・ユニークアクセスが2万を突破。読者の皆様、ありがとうございます
ます

二五・迎撃不可

88式地対艦誘導弾が高麗艦を捉えた。揚陸艦の方は戦車を上陸させて、次に物資や歩兵を載せたトラックが降りるところであった。駆逐艦は相変わらず艦砲射撃を繰り返している。6発のミサイルが弾頭に備えられたレーダーを作動させて終末段階に入った。

88式のレーダーをESMで探知した高麗艦は迎撃を試みた。揚陸艦の方は艦首に40ミリ単装機関砲を、艦橋の後ろに2基の20ミリバルカン砲を搭載しているが、どちらもレーダーに連動したCISWSでは無く迎撃は絶望的であった。一方、駆逐艦の方は自衛用にシースパロー短距離艦対空ミサイル16発とオットー・メララ127ミリ速射砲、30ミリCIWSゴールキーパーを装備している。しかし、イージスシステムを装備していないクワンゲト・デワン型駆逐艦が4発のミサイルを迎撃できるかは分からない。

2隻の軍艦はまず電子戦装置を作動させた。妨害電波を発してミサイルを逸らそうとしているのだ。だが、6発のミサイルが逸れる様子はない。

続いて駆逐艦から2発のシースパローミサイルが発射された。

一方、演習林の中に隠れている96式多目的誘導弾発射機からも2発のミサイルが発射された。2発のミサイルは光ファイバーケーブルを後ろに引いて一直線に高麗軍揚陸艇を目指した。やがて弾頭部の赤外線シーカーが揚陸艇を捉え、画像として発射機に送信した。オペレーターは揚陸艇に照準を定めた。

2発のシースパローミサイルのうち1発が駆逐艦を目指すミサイル群の先頭に命中した。もう1発は外れた。駆逐艦はさらに艦首の

127ミリ砲も射撃を開始した。この速射砲は砲塔の大きさが満載排水量4000t弱の駆逐艦には不相応なもので、高麗海軍のような陸軍国家の海軍にありがちな過大な重武装でトップベイベーな船体を象徴するものであった。しかし対空射撃能力は拔群で、チュンムゴン・イ・スンシン型以降の駆逐艦に装備されたアメリカ製のMk45型127ミリ砲を上回っているとされる。それにより1発のミサイル迎撃に成功したが、まだ2発残っている。

対馬海峡上空

壱岐空港から8機のKF-16が、そして対馬から4機のF-15Kが発進し、超低空で自衛隊防衛線の築かれた山を目指していた。そのうち先行する2機のKF-16が上昇して目標の山を視界に収めた。しかし、2機の任務は自衛隊の防衛線攻撃では無かった。

水平線上に高麗空軍の作戦機が現われたので当然ながら陸上自衛隊の防空レーダーに探知された。だが、それは高麗空軍も当然に想定していることである。KF-16のESM装置にも自衛隊の対空レーダー波が感知された。それが“チキンゲーム”が始まる合図である。

SEAD、すなわち敵防空網制圧は空軍が行なう様々なミッションの中でも最も困難で勇気が必要な任務であることは疑う余地がなく、空軍の兵士たちの間では“ヒーローミッション”と呼ばれる。普通、敵地に侵入する軍用機は、できる限りレーダーに探知されることを避けようとするが、SEAD機は逆に積極的に探知されようとする。敵国、今の場合は日本の自衛隊、のレーダー網を燻りだすために。

KF-16のパイロットは敵のレーダーを見つけ出すために、レ

ーダー波を追っていた。自衛隊がミサイルを撃つのが先か？それとも彼が対レーダーミサイルを発射するのが先か？まさに“チキンレース”であった。その時、KF-16のコクピット内に警報音が鳴り響いた。照準用レーダーが照射され、KF-16がロックオンされたのである。だが、これで敵を見つけ出せる。

2発の81式地对空短距離誘導弾が発射された。2機のKF-16のパイロットはレーダーを攪乱する金属片や赤外線追尾を欺く熱源をばら撒いて急旋回し回避を試みる一方で、搜索を続けて、自衛隊のレーダーの幾つかを遂に発見した。最初に発射された2発の81式はフレアに阻まれたが、まだ自衛隊はレーダー照射を続けている。だが、同時に2機のKF-16から1発ずつ対レーダーミサイルが放たれた。

対レーダーミサイル、AGM-88 HARMは敵の発するレーダー波を追うミサイルである。この攻撃に気づいた自衛隊は再び2発のミサイルを発射すると、すぐにレーダーを停止した。だが、HARMは追うべきレーダー波が停止されても、メモリーに記録された情報を基に目標へ向かっていく。今回は発射点がレーダーから近かったこともあり、レーダーが逃げ出す暇が無かった。かくして陸上自衛隊の防空システムの一端が破られ、高麗空軍の付け入る隙ができた。

一方、空中に放たれた2発の対空ミサイルは、KF-16の排熱を追って突き進んでいた。2機のKF-16はまた先ほどと同じように急旋回とフレアの射出を行なった。だが今度は先ほどのように幸運には恵まれなかった。ミサイルのうち1発は外れたが、もう1発は見事に命中したのである。残りのSEAD担当機は、異国の空に散った同僚の二の舞にはなりたくないようで、そのまま壱岐まで去っていった。

残りの10機の高麗空軍機は、2機を航空自衛隊戦闘機の襲撃に備えて待機させると、あとの8機は攻撃に向かった。

海上

高麗揚陸艦は機関砲を空に向けて乱射しつつチャフを盛んに打ちあげて対応したが、目視照準の攻撃ではミサイルを撃墜できるわけもなく、また88式地对艦誘導弾の優秀なシステムはチャフの攪乱を切り抜けた。そして最後に揚陸艦の横っ腹に突入した。弾頭の榴弾が炸裂し、厚くはない船体を貫いて艦に積み込まれた物資を焼いた。

駆逐艦の艦上に備えられたゴールキーパーCIWSが稼動した。オランダが開発したその兵器は30ミリガトリング砲とレーダーシステムによって構成される近接防御システムで、日本の護衛艦が搭載するフランクスCIWSよりも大型でより強力であった。7本の銃身から30ミリ弾が毎秒75発の速さで空中に放たれる。だが、目標にしたミサイルを撃墜することなく銃撃を止めてしまった。目標を撃墜するまで銃撃を続けるフランクスと異なりゴールキーパーは一定数の弾を撃つと銃撃を停止して次の目標に移る仕組みになっている。そのため、1発の88式を撃墜し損ねたのである。しかし、もう1発の88式は30ミリ弾が命中して空中で吹き飛んだ。

「回避！両舷前進全速！チャフ、発射！」

高麗駆逐艦の艦長は艦を動かしつつ攪乱材を発射してミサイルから逃れようとした。しかし、無駄なあがきであった。幸い艦橋や船体からは逸れたものの、様々なアンテナ類が集中するマストに直撃した。死者は出ず航行も十分に可能で兵装類も無事ながら、レーダーや通信の中枢が吹き飛ばされたのは現代戦では大きな痛手である。駆逐艦は撤退せざるをえなかった。

一方、揚陸艇にも96式多目的誘導弾が襲い掛かろうとしていた。揚陸艇なのだから対空ミサイルやらCIWSやらなどは当然ながら載せているわけもなく、歩兵が持つ小火器が唯一の防空火器であった。だが、細長い誘導弾に小銃弾を当てるのは至難の業だ。向かってくるミサイルに小銃やら機関銃やらを乱射するが、まったく落ちる気配がない。

というわけで、ミサイルは何の損傷も受けることなく先頭の揚陸艇に突入した。96式は真上から揚陸艇に突っ込み、その戦車の装甲すら貫く運動エネルギーで船底を突き破り、船体の真下で爆発した。2つに折れた揚陸艇の船体は爆発の水柱で浮き、乗っていた兵士たちはそのまま吹き飛ばされて最後は海に叩きつけられた。

「よし、その調子だ！攻撃を続けてくれ！」

新小戸公園では観測手が無線機に向かって新たな目標を指示していた。しかし、その要請が実行されることは無かった。

防衛線

バイパス隘路には高麗軍の新たな歩兵中隊と戦車小隊が突撃してこようとしていた。それに伴い高麗海兵隊砲兵が猛烈な射撃を加えてくる。先ほどの戦闘で高麗軍は防衛線の突破には失敗したが、防衛線の位置を把握できたのでそこに火力を集中しているのだ。塹壕の中の隊員たちは堪ったものではない。

「退避！退避！第二陣地に後退するんだ！」

古谷が自ら指揮する小隊の隊員たちに向かって指示した。

「ほら！後退だ！立ち上がるんだ！」

小隊陸曹の砺波は、高麗の砲撃に怖気づいて塹壕の中に隠れている隊員たちを立ち上がらせようとした。

「怖がっているだけじゃ、何れやられるぞ！立ち上がるんだ」

必死に部下を鼓舞しようとする砺波だが、それを必要としない者も居た。

矢部は敵の砲弾が着弾する時こそ、さすがに隠れてしまうが、高麗の砲撃の狭間を見つけるとすぐに立ち上がって高麗軍の方に小銃を乱射していた。

「矢部！後退だ！それくらいにしておけ」

逆に砺波が止めなくてはならないくらいであった。

すると、味方の砲兵部隊も応射し始めた。高麗軍の砲兵部隊に対砲兵射撃を仕掛ける一方で、防衛線の手前に煙幕弾を撃ち込んで、普通科部隊が姿を隠して後退するためのスクリーンを作り出した。

かくして高麗軍の予備部隊は阻止された部隊を通り過ぎて、誰もいなくなった自衛隊の陣地を踏み越えた。

SEAD機のKF-16が陸上自衛隊の防空網を制圧して穴から、空爆部隊が侵入した。先頭は4機のF-15Kで、爆弾を満載していた。1機はシンとラクスの機体であった。

「見つけたぞ。あの稜線が自衛隊の防衛線だ！」

ラクスンが機体下部に取り付けられたタイガーアイ目標指示ポッドの赤外線画像を見て言った。彼らの目標はバイパス隘路ではなく、桜井たちが守る隘路の南の稜線であった。

先行の2機がクラスター爆弾を投下した。目標は自衛隊と高麗軍が戦闘を繰り広げている稜線の西側ではなく反対側の東側であった。高麗軍の考えでは、自衛隊は稜線の反対側に反斜面陣地を築いていると考えたので、まずそれを潰そうとしたのである。実際、反斜面には自衛隊の陣地が築かれていて、高麗軍が稜線を越えてきた場合に味方を収容して高麗軍を阻止するために予備の隊員や無反動砲のようなけなしの火力が集められていた。

二六・戦線突破

続いてシンとラクスの乗る機体を含めた別の2機が攻撃を仕掛けた。クラスター爆弾が稜線に向けて投下され、次々と炸裂した。

「ざまあ見やがれ！」

ラクスが稜線上に次々と起こる小爆発を見て叫んだ。シンはすぐに機体を旋回させて帰ることにした。敵地の上空に長く居るものではない。

KF-16のパイロットは隘路の上を一度、通り過ぎた。その間に下を見ると4輦の自衛隊の戦車が韓国海兵隊のK1A1に応戦しているのが見えた。

KF-16はすぐに引き返すとFCSを稼動させた。彼のKF-16には僚機とともに対地ミサイルであるAGM-65マーベリックが装備されていた。

別の2機のKF-16が急降下してバイパス隘路の自衛隊の陣地に無誘導爆弾を投下していた。その2機が急上昇して去ったのを確認すると、マーベリック搭載の2機が高度を保ったまま突入した。

標的は4輦のうちの2輦。それぞれが1輦の戦車を狙い、1機が2発ずつ発射する。使用するのは赤外線画像誘導式で、ミサイルの先端に備えられたカメラの赤外線画像を見てパイロットが目標をロックすると、後はミサイルのメモリがその画像を記憶して自動的に追尾する。弾頭には57kgの成形炸薬弾が装備されていて、比較的装甲が薄い戦車の上面を確実に貫く事ができるのである。

2発のミサイルが命中して吹き飛ぶ10式戦車の姿を見て、氷室小隊から派遣されたベテラン1曹が肝を潰した。それで敵のミサイル攻撃の前に自分達がいかに無力かを悟ったのである。1曹はスモークを作動させると、すぐに擬装された隠れ陣地に戦車を隠すように操縦手に命じた。しかし、赤外線画像誘導方式のミサイルをどこまで誤魔化せるかは未知数であった。

演習林

96式多目的誘導弾システムのオペレーターは直ちに第二次攻撃を行なおうと考えた。しかし、ヒュルヒュルヒュルという音を聞いて中断せざるをえなかった。高麗軍の砲撃である。逃げる暇も無いので、オペレーターたちは各種の車の下に潜り込んで、やり過ぎすしかなかった。直撃弾さへ喰らわなければ、それなりに持ちこたえられる。

防衛線

高麗空軍は自衛隊のレーダーシステムを破壊したため、瞬間的ではあるが防衛線上空の航空優勢を確保したと考えていた。他にも予備のレーダーがあるだろうが、対レーダーミサイルですぐに潰されてしまうと考えて、使用は控えるのではないだろうとも考えた。しかし、彼らは陸上自衛隊の防空能力を甘く見ていた。

低空迎撃用の93式近距離地对空誘導弾は、敵がいくらか高い高度を飛んでいるので効果が薄いと思われた。となれば使うのは81式短距離地对空誘導弾ということになる。レーダーは失われたが、81式にはそれとは別に光学照準装置が準備されていて、レーダーに頼らなくても戦闘が継続できた。

「光波弾用意！」

光学照準装置が空を飛ぶKF-16を捉えた。ランチャーに装填されているのは光波弾、赤外線画像誘導方式でレーダーの補助なしに使用できる。

「撃て！」

2基の発射機からそれぞれ2発、合計4発の81式短距離地对空誘導弾が発射された。

狙われたのは、さきほどマーベリックミサイルによる攻撃を仕掛けてきた2機であった。彼らは再び攻撃を行なうべく戻ってきたのだ。だが、その機会は遂に訪れなかった。自衛隊は一切レーダーを使わずにミサイルを打ち上げたのだ。なんの警告もなく、4発のミサイルは2機の戦闘機に襲い掛かった。1機は気づく暇もなく撃墜された。もう1機はミサイルの接近に気づき、回避行動を行なったが遅すぎた。結局、2機のKF-16が空中に散った。

桜井が自らの塹壕から顔を出した時、あたりは酷い状況になっていた。クラスター爆弾が炸裂して、多くの隊員たちが死傷したのである。幸い彼とバディの1曹の入る壕は直撃を受けず2人とも無傷であったが、この有様では防衛線の維持は無理であろう。

そして高麗側も当然それに気づいているから、再び兵士を集めて突撃してきた。

「予備陣地に撤収する！ 負傷者優先。戦える者は援護をするんだ」

陣地防衛部隊の副官―指揮官は戦死していた―が声を張り上げて

命令をしていた。桜井はすぐに銃を構えて、登ってくる高麗兵に浴びせた。生き残っている隊員たちも次々と射撃を始める。だが前ほどの勢いは無く、高麗兵の突撃を止めるには至らなかった。

「稜線に向かって火力を集中せよ。繰り返す、稜線に火力を集中せよ！」

副官が無線の向こう―おそらく特科部隊―に怒鳴り終えると、負傷者が退却したのを確認した。

「よし。全員、撤収するんだ！」

桜井は殿として最後まで射撃を続けると、部隊の最後尾を走って、下り斜面につくられた予備陣地まで撤収した。しかし、そこもクラスタ―爆弾のために酷い状況であった。

やがて稜線の上で次々と爆発が起こった。特科部隊の砲撃で、高麗兵の進撃を止める効果は十分にあった。ともかく、自衛隊の防衛線の1つに穴が空けられた。

愛宕浜 海浜公園

高麗軍の上陸したのは自衛隊の展開している新小戸公園のすぐ東側、マリ―ナを挟んで反対側にある砂浜であった。直線距離だと1 kmほどの距離だが、間にマリ―ナの埠頭があるのですぐには迎えない。

高麗軍は1隻の上陸用舟艇を失ったが、2個小隊と中隊本部、それに若干の重火器部隊を上陸させることに成功した。自動車1台も無い徒歩歩兵であったが、彼らの任務は敵を釘付けにすることであった、機動戦をすることでは無いので大きな問題ではなかった。

防衛線

西部方面航空隊の対戦車ヘリ隊は、指揮官機である国産観測ヘリOH-1を中心にV字編隊で飛んでいた。主力となるのはAH-1Sヒュイコブラで、対戦車ミサイルTOWとロケット弾、20ミリ機関砲を装備する対戦車キラーである。

ヘリ編隊は筑紫山地の山々の稜線に沿って超低空で這うように進んでいた。彼らは飯場峠上空を通過して西に抜けて、韓国軍の背後に回りこんだ。

北九州市

対戦車ヘリ隊が第19普通科連隊の救援に向かっていた頃、第4師団直属の飛行隊は北九州に向かっていった。目的は連絡を断った第40普通科連隊と北九州の状況を探ることである。ただ第41普通科連隊情報小隊の報告により第40普通科連隊はすでに壊滅していると考えられた。

第4飛行隊のOH-1観測ヘリは九州自動車道に沿って西へ進んでいた。OH-1にはコクピットの後方上部、メインローターの根元に索敵サイトが設置されている。これはカメラ、赤外線センサー、レーザー測距機を合わせたセンサーシステムで、昼夜を問わない偵察活動が行なえる。そして、OH-1のセンサーは恐るべき映像を捉えた。数キロ先の国道3号線、その上を走る軍用車両。

「あれは何だ」

後席の偵察員が画像を拡大すると、見えたのはK1A1戦車、そ

れに続く装甲車両である。

「海兵隊か？」

前席に座り操縦を行なうパイロットが尋ねた。

「いや。装甲車はK200だ。陸軍だよ」

K200はアメリカが開発した装甲兵員輸送車M113を改造した歩兵戦闘車両である。決して高性能ではないが量産性は高く安価に多数の車両を揃えることができる。12・7ミリ重機関銃の砲塔と9名の兵士を運ぶ能力を持ち、配備開始から30年近く経っているが現在でも高麗陸軍の主力装甲車となっている。

「糞！遂に陸軍の機甲部隊が活動を始めたのか！」

それこそ揚陸を終えた韓国陸軍第11機械化歩兵師団第9旅団であった。それは、事態が既に西部方面隊が収拾できる状態でないことを示すものであった。

今宿駅前

数時間前に桜井が黒部と出会った今宿駅前は、今にも戦場になるうとしていた。

第4中隊は2輦の10式戦車を先頭に西へ進んでいたが、交差点の影に高麗戦車が潜んでいることに気づかなかった。4輦のK1A1戦車はその照準装置に10式戦車を既に捉えている。

「距離200。撃て！」

先頭の2輦の10式は縦に並んでいたもので、前を進む10式が狙われた。なかなか頑固な装甲が施されているとは言え、この距離から120ミリ徹甲弾を防ぐのは無理である。正面装甲を貫かれた10式はその場で停止した。

それとともに第4中隊の車列が停まり、普通科隊員たちは外へ飛び出した。新たな戦いが始まった。

残った10式戦車はただちに反撃を行なった。初弾で敵戦車の1輦を破壊したが、他の戦車は隠れてしまった。

一方、歩兵隊は小道を使って高麗軍の背後に回りこもうとした。そして、敵戦車隊に随伴歩兵が伴っていないことに気づいた。ある1個小隊は交差点の南側に回り、敵戦車を1輦発見した。

「対戦車弾用意！」

自衛隊では110ミリ個人携帯対戦車弾と呼ばれるドイツ製のパンツァーファウスト3を担いだ隊員3人―各小銃班に1つずつ配備されている―が指揮官のところへやってきた。

「後方を狙うんだ」

普通科部隊に尻を向ける戦車に対して隊員たちが次々とパンツァーファウストが放たれた。後方は装甲が薄いので、軽量なパンツァーファウストでも貫通することができた。敵の戦車は半分に減った。とりあえず戦いは自衛隊側に優勢に動いていた。

二七．タイムアップ

防衛線

高麗軍の背後に回り込んだ対戦車ヘリ隊は一斉に攻撃を開始した。標的には狭い隘路を進むK1A1戦車とAAV7装甲車。まさに狩場であった。

第一陣として、AH-1Sが4機、突入した。彼らはまず戦車を排除する。それぞれ1発ずつ計4発のTOWミサイルが発射される。目標は自衛隊の陣地を蹂躪している高麗軍の戦車小隊である。2発が戦車の後部に命中して破壊したが、2発は外れてしまった。それに続いて、別の4機のAH-1Sが突入してきた。彼らの目標は第一陣が撃ち漏らした戦車であった。やはりそれぞれが1発ずつ、TOWを発射する。1輦の戦車に2発ずつのミサイルが向かうのだから外すわけがない。突入してきた高麗軍の戦車小隊は全滅した。防衛線に残る高麗軍の戦車は最初に突入した部隊の生き残りで、今は後ろに下がり突入部隊を援護している1輦だけであった。

だが強力な対戦車兵器であるAH-1Sと雖も決して無敵の兵器ではない。高麗歩兵は携帯式のミストラル対空ミサイルや装甲車などに備え付けられている12.7ミリ機関銃K6―自衛隊でも使われる傑作機関銃M2の韓国バージョンで、独自に改良が施されている―を空に向けて果敢に挑んできたのである。AH-1Sは20ミリガトリングガンで掃射しつつ高速で戦闘地域を離脱して逃れようとした。だが、高麗歩兵の1人が発射しミストラルミサイルが最後尾を飛んでいたAH-1Sのエンジン部分に命中してしまった。ヘリはなんとか姿勢を維持しようとしたが、その努力も空しく隘路の南の丘、桜井たちが守る林の中に消えていった。また、K6機関銃の射撃により3機のAH-1Sが重大ではないものの損傷を負い、修理を必要としていた。

だが、おっかない戦車がいなくなれば陸上自衛隊普通科隊員の本

領發揮であった。戦車を失い援護を欠いた高麗歩兵が友軍から突出して路上に孤立しているのだ。彼らにはまだAAV-7装甲車があったが、その手の車両の装甲は炸裂した砲弾の破片から兵士を守る程度のもので歩兵が持つ対戦車火器でも簡単に破壊することができるのである。パンツァーフアウストや84ミリ無反動砲カールグスタフが高麗歩兵の隠れる装甲車や戦車の残骸を破壊して、機関銃と小銃による掃射を浴びせる。それに厚い砲兵の支援も加わり高麗軍部隊は完全に突破力を失った。

隘路を挟む丘を守る隊員たちにとって事態はそれほど樂觀できるものではなかった。桜井たちは高麗軍の砲兵射撃に苦しんでいた。高麗軍は稜線上の陣地を確保したので自衛隊の反斜面陣地を見渡せるようになり、その誘導に従って正確な砲撃を行なってくるのである。しかも、それまで高麗砲兵は砲弾を出し惜しみしているようであったのに、ここにきてなんの遠慮もなく次々と撃ちこんできたのであった。高麗陸軍が動き出したのを知って、勝利を目前とした故のことであろう。おまけに自衛隊の陣地の前でAH-1Sが墜落してしまった為に、それを目撃した多くの隊員たちが状況を絶望視して士気が下がりつつあったのだ。友軍の特科部隊が稜線上の高麗兵や高麗砲兵に対して砲撃を行なって桜井たち守備隊を援護するが十分とは言えない。

やがて高麗軍海兵隊の歩兵隊が突撃を仕掛けてきた。これまでの戦闘と砲撃でだいぶ損耗していた自衛隊が止められるものでは無かった。損耗していたのは高麗側も同じ筈なのだが、これが先の明るいものと暗いものの差ということなのだろう。耐え切れず後方へ逃げ出す者も現われ始めた。防衛線は崩壊し始めたのである。

桜井はバディとともに応戦していたが、限界に達しようとしていた。そこへ後ろから別な集団が現われた。彼らは全員がジャングル戦などに使われる鍔の広いブッシュハットを被っている。そんな部

隊を桜井は自衛隊の中で1つしか知らない。

「西部方面普通科連隊」

彼らのブッシュハットは自衛隊の装備体型の中では変わった経緯で採用されたもので、もともとは西部方面普通科連隊のある曹が個人的に購入―予算的に冷遇されている陸上自衛隊ではよくある―したものを使い心地がいいというので陸上自衛隊に正式採用されたのだと言う。西普連共通の装備で、坊主頭―自衛隊でも任務に支障がない限り髪を伸ばすことを認めているので、最近では珍しい―とともに彼らのシンボルとなっている。精鋭部隊の象徴なのだ。

彼らは先遣隊で僅かに1個中隊程度の兵力でしかなかったが、それまで少数のレンジャーと偵察隊で守っていたことを考えれば、この増援は防御力を倍增させることになる。

西普連の隊員たちは防衛線の空いた穴に次々と入って塞いでいった。またある隊員は逃げ出した隊員を引き止めて、また防衛線に戻している。高麗軍の突破は寸前で止められたのである。

福岡駐屯地 第4師団司令部

時刻は11時半を過ぎた頃であった。師団飛行隊の絶望的な報告が師団司令部の面々を青ざめさせていた。

「高麗陸軍が揚陸を完了したか」

内海が情報担当の幕僚である第二部長に尋ねた。

「敵兵力は1個旅団と見積もられます。戦車1個大隊と完全に機械化された2個の歩兵大隊、砲兵大隊及びその他支援部隊から成るも

ので、砲兵を除けば我が師団と対等に渡り合えますよ」

「増援可能な友軍部隊は？」

その内海の質問には、作戦運用担当の第三部長が答えた。

「大宰府に防御陣地が築かれ、第9施設群と第8戦車大隊が陣地を占領しております。即時に動かせる兵力となると第8戦車大隊となりますが、戦車部隊のみで言えばほぼ対等、しかも相手には機械化歩兵の援護がありますからね」

つまり無謀ということか。

第8戦車大隊は九州南部に駐屯する陸上自衛隊の第8師団に所属する戦車部隊で、第8師団の第一陣である。重い戦車を保有する部隊がなぜ増援第一陣になったかと言えば、実は第8師団の部隊でありながら第4師団の担当範囲内にあり第4師団第4戦車大隊と同じである玖珠駐屯地に駐留しているからだ。だから第4戦車大隊とともに福岡防衛線に加わることはできたのだが、内海は第8師団にそれを求めなかったし、西部方面隊もそのような指示は出さなかった。陸上自衛隊は高麗の侵略をかなり深刻に受け止めており、第4師団だけで対処し切れない可能性は決して低くないと考えていた。であるから、第8師団から機甲戦力を奪うわけにはいかないし、福岡放棄後に第4師団が入る收容陣地の保持のことも考えて、予備として残置したのである。

「福岡市民の避難状況は？」

内海のその問いはその内容以上に大きな意味を持っていた。なぜなら、この問いが福岡放棄への第一歩になるからである。

「福岡市や警察に派遣している連絡員の定期報告によれば、最大限

の努力を尽くしているが、混乱しており状況把握が困難とのことです」

第二部長の報告は内海にとって最悪のものであった。市民の避難が完了していたなら、時間稼ぎはできたと慰められたものだが。せめて完了していなくても避難完了の見込みがあるなら、それまで粘る術もある。だが返答は状況不明である。

「また市民を置いて逃げ出したと後ろ指を指されるのかな」

一回深呼吸をしてから、司令部に詰める隊員たちを見渡してから内海ははっきりした声で言った。

「諸君。ありがとう。深夜からこれまで休みなく働いてくれたことに私はいくら感謝しても感謝し切れない。だが、もはや現防衛線を死守することは絶望的だ。確かに敵海兵隊の攻勢は阻止した。だが背後には敵別働隊がその爪を食い込ませており、さらにその後ろに高麗陸軍の有力な機械化部隊が迫っている。こうなれば、現在に師団が保有する戦力を集結しても、あらゆる行動の自由が許されたとしても福岡の防衛は難しい。また市民の避難がいつ完了するかも分からない。すでに第40普通科連隊が失われ、後退の時期を逸すればさらに多くの戦力を失うことになる。」

私は師団長として師団の戦力を守り、全国からの増援を待つて高麗軍を粉砕するのが最善と考える。よって、我々は作戦目標を福岡及び北九州防衛から大宰府の二次防衛線への後退へと変更する。それに沿って運用計画を立ててほしい。第4中隊を防衛線に戻し、態勢を立て直させろ。第二部長は先遣隊を組織して大宰府防衛線に向かい現地部隊との調整を頼む。私は西部方面隊総監部に福岡放棄を進言し、正式な命令を貰う。

敵に国土の一部を明け渡すという選択は諸君らにとって耐えがた

きことであろう。国民を置いたまま後退するのはたいへんに辛いことであろう。だが私は我が自衛隊が必ず盛り返し、奪われた国土を奪還できる時が必ず来ると信じる。だから、一時の恥辱に耐えてほしい」

司令部の面々は押し黙って頷くばかりであった。

内海は考えた。もし待機している第41普通科連隊戦闘団に直方に到着すると同時に北九州市への突入を命じていたら、第40普通科連隊を壊滅する前に脱出させていれば、前原で待機中の第16普通科連隊戦闘団を高麗海兵隊の背後に突入させていれば、この事変は早期に最低限の犠牲で終わらせることができたのではないだろうか？だが実際にはできなかった。政府は、議会は、未だに決断を下さずにいて、現場の部隊は現状維持しかできない。そして全てが終わったのである。

福岡市 城南区

古いが家賃の安いあるボロアパート。学生が主な利用で、水谷知世もその1人だ。萩原らは到着すると、青野だけが車に残って―エンジンをかけたままの車をそのままにするわけにはいかないし、この状況下でエンジンを切るのはもつといけない、知世の部屋の戸を叩いたのだが返事が無い。しかし鍵が開いていたので中に入ると、一番奥の押し入れの中で知世は丸くなって震えていた。

萩原らが無理やり引っ張り出そうとすると知世はなにも言わずに顔を横に振って拒絶した。

「大丈夫だって。まだ外は安全だよ？」

萩原はそうやって知世を宥めて外に出ることを納得させると、車

に駆け戻ってすぐに出発した。だが、もう手遅れだった。

二七・タイムアップ（後書き）

- ・登場人物を更新しました
- ・25話の描写に誤りがあったので訂正しました

二八、それぞれの作戦

国会議事堂

12時を過ぎて午前の日程を終えて衆議院本会議場を出た総理を待っていたのは、第4師団が福岡放棄の許可を求めているという報告であった。

「陸幕はただちに防衛線の仕切りなおしをしないと現地部隊が全滅に等しい損害を受けると警告しています」

信じられないと言った表情で立ち尽くしている烏丸首相を前に中山防衛大臣が言う。その後ろには神谷統合幕僚長も立っている。

「すでに1個連隊が全滅し北九州が陥落しています。判断の遅れは最悪の事態を招くことになる」と

「福岡の避難状況はどうなっているんだ？」

烏丸が尋ねた。答えたのは官房長官の菅井であった。

「警察によれば、現地は大変混乱しており状況が把握できない、だそうです」

「その状況で撤退か？」

国民を見捨てるってことじゃないか。

「待ってくれ。国民を守るための自衛隊だろ？もう戦力はないのか？どうなってるんだ？」

「これが自衛隊の限界なんですよ」

神谷が言った。

「周辺国が軍拡を続ける中、自衛隊はその戦力を減らされ続けたのです。その結果がこれです。そしてそれを進めたのはあなた方ですよ？」

烏丸はうな垂れるばかりであつた。

福岡 第4師団司令部

現場の司令部では撤退計画が検討されていた。現在、師団は基幹となる連隊が完全に独立して行動している状態になっている。状況不明なるも第40普通科連隊は壊滅したものととして扱い、残り3つの連隊をどうまとめるかが問題となる。

それぞれの連隊の状況をここで纏めてみよう。

まず高麗海兵隊の攻撃を受け止める福岡正面の第19普通科連隊である。この部隊は多くの増援部隊を指揮下に置いていて2個連隊程度の戦力を維持している。第1中隊と第2中隊が小さな隘路の中の防衛線を維持していて、さらに増援部隊である第2施設群と、偵察隊や選抜レンジャー、それに増援の西普連先遣中隊の混成部隊とが隘路の両側の山地で防衛をしている。しかし、これらの部隊は高麗軍の攻撃に晒され弱体化しつつあった。しかも北側の施設群は長垂山山頂を確保しているが、南側の稜線は高麗軍に奪われている。一方、高麗勢力下の地域まで前進していた第4中隊は連隊長命令により元の防衛線に戻った。また予備であつた第3中隊も防衛線の背後に上陸した高麗軍中隊の撃破に向かった。相手と戦力はほぼ均衡していたが、戦車2輦の援護が加わり敵を圧倒している。しかし撃破には至っていない。第3中隊と第4中隊の損害は小さく、まだ十

分な戦闘能力を確保していた。機甲戦力については、1個中隊14輦の10式戦車が配属されたが12時現在の稼動数は8輦になっていた。また偵察隊の87式偵察警戒車のうち4輦が戦闘可能であった。

第16普通科連隊は高麗海兵隊上陸地点の西側、前原市で相変わらず待機中であるが、戦闘を行っていないので戦力を確保していた。第41普通科連隊も主力は直方に待機中で、1個中隊を航空自衛隊の築城基地防衛に派遣している。どちらの連隊も増援部隊が配属され戦闘団を編成していた。

「第41普通科連隊を国道200号線沿いに南下させるとして、どこまで南下させますか？できれば飯塚市は確保しておきたいと思うのですが？」

飯塚市は北九州と大宰府一帯を結ぶ国道200号線と、福岡と周防灘沿岸を結ぶ国道201号線が交差する交通の要所である。高麗軍がここを確保すれば、すでに占領したであろう北九州と福岡の連絡をより頑固にし、第4師団が後退する大宰府防衛線に側面から攻め込むことができる。一方、自衛隊が確保していれば高麗軍は海沿いの道しか福岡と北九州の連絡に使えないし、福岡に対し側面から圧力をかけることができる。

「そうだな。第41普通科連隊戦闘団は飯塚市の北側に布陣。中央即応連隊で側面を固めよう。第16普通科連隊戦闘団は現在位置でも大丈夫だ。問題は第40普通科連隊をどう後退させるかだな」

最初に提案されたのは、国道202号線を通って、市街の南側を抜けて大宰府に向かう案だ。国道202号線は福岡外環状道路及び福岡都市高速道路の高架の下を通る大きな道路で、自衛隊が通るに

は十分広い。しかも後方連絡線確保のために師団の警務隊（かつての憲兵に相当する自衛隊内の警察）が交通規制を行っているので、避難民の渋滞に妨げられることもない。

「だが、洋上機動した敵別働隊に襲撃される危険がある。側面から襲撃されたら大変だ。しかも高架を破壊されれば簡単に封鎖できる」

それが内海の懸念であった。高麗海兵隊は福岡防衛線のすぐ後方に上陸させた歩兵中隊の他に、戦車を含んだ別の中隊をさらに上陸させている。その部隊が移動中の自衛隊を襲えば悲惨なことになるだろう。

「となると、国道263号線を南に進み油山の南に大きく迂回して大宰府まで行くコースでしようか」

「しかし、一般道は避難する市民で一杯になっているぞ。ここは襲撃の危険を承知の上で202号線を使うしかない」

糸島半島 高麗海兵隊司令部

地図が置かれた机を中心に、指揮官であるミンギと幕僚たちがそれを囲んで椅子に座り作戦会議を行っていた。

高麗海兵隊の方も状況は決して良くは無かった。ここで高麗海兵隊の現状についてもまとめてみよう。

高麗海兵隊は3個大隊編制の第1海兵連隊を中心に砲兵1個大隊、戦車1個中隊、それにその他の支援部隊を上陸させている。海兵連隊のうち1個大隊に戦車1個小隊4輜をつけて雷山川沿いに防御線を敷き、西から迫る自衛隊第16普通科連隊を待ちうけている。別の1個大隊は上陸地点付近で司令部の警備も兼ねて予備として置か

れている。だが、そのうち2個中隊を自衛隊の福岡防衛線の背後に別働隊として送り込んだので、高麗軍の予備兵力は実のところ1個中隊に過ぎなかった。そして最後の大隊は福岡防衛線を突破すべく攻撃を行なっているが、結局は阻止されてしまった。

「一番の問題は機甲戦力の喪失だ」

ミンギ少将が指摘した。高麗海兵隊は2個中隊28輦のK1A1戦車を揚陸した。だが自衛隊の福岡防衛線に達する前に6輦を失った。さらに防衛線突破を任された大隊には14輦を配属して突入を試みたが、そこで9輦を失った。突破部隊に残るのは僅かに5輦。西側で防衛している大隊に配属されている4輦と自衛隊防衛線背後に送り込んだ別働隊の4輦を合わせても13輦。最初に上陸した戦車の半数弱である。さらに歩兵輸送用のAAV7についてはほとんど失ってしまった。

「敵は隘路に頑固な陣地を築いています。残存戦力を集めても正面突破は難しいでしょう」

作戦幕僚が意見を述べた。

「となると、隘路の両側面の山中を突破するしかないな」
「しかし、戦力が不十分です。大隊はだいぶ損耗しています。予備も1個中隊しかありませんし。ここは陸軍が到着するのを待ったらいかがでしょうか？」

あくまで突破に固執するミンギに対して作戦幕僚が諭した。確かにそれはそれで魅力的な提案である。陸軍の機械化部隊が確実に迫っているのだ。そうなれば陸上自衛隊の部隊など一掃できる。

「だが、本国の連中が納得しないぞ？艦隊や陸軍の連中にばかり成果をあげられてはな」

海兵隊司令部はなんらかの戦果を求めている。

「それにだ。もしお前が自衛隊側の指揮官ならどうする？」

「もはや福岡を防衛するのは絶望的ですからね。後退して建て直しを図ります」

「だろ？」

ミンギがニヤリと笑った。

「私もそうする。敵はなかなか優秀な部隊だ。このまま後退させるわけにはいかない」

「なるほど。攻撃を仕掛けて防衛線に釘付けにするってわけですね？」

「撃たれている時に背中を見せるわけにはいかないからな。さて、問題はどの部隊に突撃させるかだ。賭けになるが、私の案を聞いてくれるかな」

そう言うと、ミンギは立ち上がって地図に指を指して説明を始めた。

「今、半島の西側ではオ・ギョンピョル少佐の第2大隊が自衛隊の1個連隊の前に防衛線を敷いている。私は第2大隊をそのまま東の正面に転用するつもりだ。予備の中隊も含めたな」

「しかし師団長。それでは西側の兵力がなくなります」

作戦幕僚が指摘した。そこへ自衛隊が突入してきたら、高麗海兵隊は一気に崩壊する。

「その点は大丈夫でしょう。通信部隊が日本の放送電波を傍受してありますが、倭奴^{ウエノム}はまだ自衛隊出動を承認するかどうかで揉めています。このような状況下では攻勢には出られないでしょう」

情報参謀はそうに述べたが、作戦参謀はまだ納得できない様子であった。

「それは希望的観測に過ぎないでしょう。もしかしたら、情報工作かもしれません。それに現地指揮官が独断専行するかもしれない」

一步も譲らない両者だが、ミンギが論争を止めた。

「なるほど。作戦参謀。君の意見ももつともだ。だが、ちゃんと手は打つよ」

そう言ってミンギは幕僚たちに自分の意見を説明した。

「分かりました。師団長がそれでいく、というのなら我々もそれに
ついて行くのみです」

反対派の作戦参謀がそう言って論争は幕を降ろした。

「ありがとう。発動は別働隊の混成中隊が防衛線後方に到着すると
同時だ」

防衛線 第19普通科連隊本部

野木連隊長とその幕僚たちは師団司令部の指示に基いて、撤退計

画を練っていた。

「第一陣は隘路を守る第1中隊と第2中隊だな。防御線からは隘路の部隊から下げて、両側の山地の部隊に援護させる。第4中隊が殿だ。問題は第3中隊をどのタイミングで脱出させるかだな」

野木が地図上に置かれた第3中隊、それと戦闘中の高麗海兵隊中隊を示す二つの駒を見つめて言った。敵と交戦中の部隊を引き下げるのは難しい。

「それに隘路南側の稜線が敵に取られたのも問題です。これでは撤退の様子が丸見えだ」

「こちらから突撃を仕掛けて、撤退の間だけでも蹴散らす必要がありますね」

幕僚たちが口々に意見を述べる。

「分かった。ただちに取り掛かろう。後方から戦車を保有する新たな敵部隊が迫っている」

時間は無かった。

二八. それぞれの作戦（後書き）

三話、五話、二二話、登場人物紹介を修正

防衛省、防衛大臣がなぜか防衛庁、防衛庁長官になってましたor
z。連載開始の一年前にもう省に昇格していたのに：

二九 第二次全面攻勢

防衛線

午後1時。

先手を仕掛けたのは自衛隊側であった。菅井の説得もあり首相が後退を認めたのである。第一撃は特科部隊による砲撃である。155ミリ榴弾砲と203ミリ榴弾砲、それぞれ1個大隊による集中砲火。それは主に隘路南側の山地の稜線上と隘路の出入口に集中していた。隘路に防衛線を展開する部隊の撤退を援護するための射撃であった。

その隙に海岸側の第4中隊が担当の防衛線を離れ、隘路の防衛線の背後に移動した。一方、隘路の南側の山地では桜井ら防衛部隊が稜線上の高麗兵を排除すべく行動を開始していた。自衛隊側の砲撃で高麗兵の動きが制限されている隙について分隊単位で前進し始めた。樹木や地形を利用してできる限り見つからないように素早く指定された突撃発起線まで進んでいく。部隊が発起線に集結したら、一気に頂まで突撃を行なうのだ。できれば夜間に行なうのが好ましいのだが、なにぶん時間がないのだから仕方が無い。

一方、第3中隊は高麗軍中隊を愛宕山まで追い詰めていた。山と言っても全高68mの小さな山で、山頂に愛宕神社がある。愛宕山という名の山は全国各地にあるが、その中でも特に小さい。しかし、ただそれでも高所に陣取るというのは有利なことで、防衛線に向こうにいる海兵隊砲兵部隊の援護も得て、なんとか持ちこたえていた。

ショッピングモールを背後にして北から自衛隊が山頂を目指して突撃を仕掛けた。前衛として1個小隊が前を行き、その後ろから中隊主力が進む。車道を氷室率いる10式戦車2輦が進み、その両側

の林の中を普通科隊員が1個小隊ずつに分かれて進む。最後の小隊が予備として後方から進む。軽迫撃砲小隊の81ミリ迫撃砲による援護射撃を行なう下、素早く前進する。

前衛として進む小隊が道の脇から高麗兵の銃撃を受けた。小隊はつかさず散開して一世射撃を浴びせて高麗兵を釘付けにする。その間に後から中隊の主力が追いつき、道の左右の小隊が高麗兵を包囲し、戦車が射撃を行なう。最後に予備の小隊が突入して敵を追い払う。これを繰り返して、第3中隊は次々と高麗兵の陣地を制圧していった。

一方、高麗軍側も作戦を開始した。高麗軍はK55を2つのグループに分けた。一方が隘路の自衛隊の防衛線に向かって攻撃を行なう。そしてもう片方が前原の第16普通科連隊戦闘団に射撃する。

「なんだ、こりゃ」

撤退の準備を進めていた古谷は目の前の光景に驚いた。真っ白なのだ。

「煙幕弾か？逸れたのかな」

自衛隊側が高麗兵から撤退を隠すために煙幕弾を撃ちこんでいることは知っていた。しかし目標は高麗軍に確保された南側の稜線上と高麗軍が集結している隘路の西側である。となれば、煙幕弾が目の前に落ちたというならば味方の誤射か、それとも相手方の砲撃ということになる。

「しかし、今のは敵側からだよな」

高麗兵も後退するつもりなのか？敵状の考察に集中していると、後ろから肩を叩かれた。小隊陸曹の砺波だった。

「小隊長。他の小隊が後退しました。次は我々です」

「分かった。第1班から順に後退。相互躍進で収容陣地まで下がる。あと通信士を呼んで来い」

師団司令部

高麗兵の不可思議な行動はすぐさま内海に知らされた。

「前原にも砲撃か」

「師団長、これは高麗軍が攻撃方向を転換したということではないでしょうか？」

つまり、高麗兵は福岡正面の突破は困難と判断して目標を前原に変えたということである。であるから、前原正面に配置された部隊の前進を援護するために第16普通科連隊戦闘団に砲撃を行なう。一方、福岡正面は部隊を後退させて戦線を一旦整理して防御態勢を整える。その援護のために煙幕を張った。

「なるほど。理にかなっている。だとすれば、福岡正面の攻勢は無いということか。チャンスだな」

この時、内海は自分達が高麗軍の巧妙な罠の中に引き込まれていることを知らなかった。

稜線上 高麗軍陣地

高麗軍が保持している隘路の南側の稜線。ここには自衛隊の砲撃が集中していたが、それが止まった。パク・ナム上等兵は愛用のK2小銃を持って塹壕から顔を出した下の自衛隊を警戒した。

「これじゃあ、何も見えないな」

しかし戦場は敵味方の発煙弾で真っ白になっていた。

桜井ら陸上自衛隊側は突撃発起点に到達した。煙幕のせいで息が苦しい。

指揮官のGOサインが出た。数丁のミニミ機関銃の射撃が始まり、小銃手たちがその火線の下を匍匐前進して高麗陣地に肉薄する。桜井とそのバディは機関銃とともに援護射撃をしていた。時折、頭を見せる者をすべて狙い撃ちするのである。しかし高麗兵も黙ってやられてくれるわけでもない。高麗側には高地に陣取る利があるのだ。手榴弾が次々と投げ込まれ突撃を阻止される。

しかし、こうしている間にも高麗軍部隊主力は着実に移動していたのである。

自衛隊が先手を仕掛けてから一時間経った。隘路の防衛線からあらかた部隊が撤退したので、両側面の山地の部隊にも後退命令が出た。桜井らは結局のところは稜線上の陣地を確保することができなかったが、下の部隊を援護するという役目は十分に果たした。

桜井はヒュルヒュルという音とともに味方側から落下している砲弾の音を耳にした。友軍の援護射撃である。榴弾で高麗兵を塹壕の中に隠れさせて、発煙弾でその視界を奪う。しかし特科部隊も弾切れが近いのか、その弾量は十分とは言えない。しかし制圧はできな

くても高麗兵を怯ませられる程度の効果はある筈である。

桜井は西普連の隊員とともに殿として最後尾に山を下ることになった。

高麗軍は自衛隊の攻撃に耐えて、いよいよ第二次攻勢を発起した。パク・ナムはそれまでの度重なる自衛隊の攻撃による鬱憤を晴らすように塹壕から飛び出した。榴弾砲の砲弾が炸裂する中、多くの兵士たちがそれに続く。破片を浴びて倒れる者もいたが、かまわず突撃を続け下り坂を駆け下りていった。

「自衛隊に近接するんだ。そうすれば大砲は使えない」

勝利を目前にして興奮した兵士たちが白煙の中から次々と飛び出していった。

突然のことに驚いたのは自衛隊側であった。彼らは、高麗軍は攻撃の方向を転換したので、自分達の正面にいる兵士たちは守勢に転じたと聞かされていたからだ。

「やっぱり、情報屋ってのは信頼できないんだな」

桜井のバディが余裕ありげな声色で言った。しかしそれは声だけであった。

「まったくです」

桜井は突撃してくる高麗兵を狙撃するが、阻止できる様子はない。それもそうだろう。桜井たち殿部隊は小隊にも満たないが、高麗側

はだいぶ損耗したものの中隊規模の部隊であり、しかもそれに増援としてさらに2個中隊が加わったのである。高麗軍の偽装に見事に嵌った結果であった。

パク・ナムは仲間を次々と撃ちぬいていく狙撃手を発見した。彼はK2小銃を構えて、セレクタを3点バースト射撃に選択した。引き金を引くと3発の5・56ミリ弾が発射される。しかし2発は僅かに逸れて、3発目が狙撃手の鉄帽を掠った。

桜井は銃弾が頭を掠めたので反射的に頭を下げた。そしてその隣のバディが撃ってきた敵の姿を見つめた。彼は愛用の89式小銃のセレクタをフルオートに合わせた。だが、相手の高麗兵の方が反応が早かった。

パク・ナムは狙撃手の隣の兵士が自分に銃口を向けていることに気がついた。咄嗟にその敵に銃を向けた。引き金を引くのはパク・ナムの方が早かった。敵兵士は体から血飛沫を跳ばしてそのまま倒れてしまった。

桜井は撃ち尽くした弾倉を捨てて、新たな弾倉を装填しようとした。その時、すぐ横にバディが倒れる様を目撃した。顔をあげると突撃してくる高麗兵の姿を見つけた。銃は間に合わない。

パク・ナムは狙撃手を仕留めるべく弾倉交換の隙を突いて突進した。交換は間に合いそうに無い。彼は勝利を確信した。だが次の瞬間、倒れていたのはパク・ナムの方であった。狙撃手が突然、彼に飛び掛ってきたのである。

桜井は高麗兵の身体に突き刺さった銃剣を引き抜くと、バディのもとへと駆け寄った。呼吸は止まっていて心臓は動いていなかった。

周りを見ると敵味方入り乱れていて大隊規模の突撃を前に自衛隊は崩れ去ろうとしていた。桜井はバディの認識票を回収すると64式改狙撃銃を持って山を駆け下りた。

隘路の両側面山地の防御線は増援を得て二個大隊に膨れ上がった高麗兵部隊の前に崩壊した。

福岡市内

一方、高麗軍の海ノ中道に上陸した別働隊も迫っていた。彼らは対艦ミサイル攻撃で多くのトラックを失ってしまったので、歩兵たちは残ったトラックに押し込められたり戦車の上に乗ったりして移動することになった。彼らは今宿新道、国道202号線を西に進む。戦場が見えてきたあたりで部隊は一旦停止して歩兵がそれぞれの車から飛び降りる。戦車の上の歩兵たちも道に下りた。評判の悪いタンクデザントであるが、実のところこの軍隊でも頻繁に見られるものである。なぜソ連のことばかり散々に言われるかと言えば、ソ連は歩兵が戦車に乗ったまま突撃するからであり、ただの移動手段としてはそれほど悪いものとは言えないのである。

ともかく自衛隊は東西から高麗軍に挟まれる結果となった。

三〇．危機を打ち砕け

防衛線

側面の山地を高麗軍が抑えたので、残存する機甲部隊が隘路に突入した。合計9輦のK1A1戦車と残存の歩兵たち。一方、K1A1戦車4輦の支援を受けた1個中隊が東側から防衛線に迫っている。

この時、陸上自衛隊の部隊は第1中隊と第2中隊を大宰府防衛線に送り出していたが、高麗軍に突破された隘路両側の山地の部隊は混乱状態にあり彼らをまとめるには今しばらく時間が必要であった。また第3中隊もまだ愛宕山の掃討から戻っていない。というわけで迫り来る高麗軍の戦車13輦を含む部隊の阻止に使える自衛隊の部隊は、撤退の殿として配置についている第4中隊のみであった。しかも同中隊の援護として配属された戦車は3輦だけである。ほかの車輛は撤退している部隊の護衛をしているか、第3中隊とともに愛宕山で戦っている。

いよいよ高麗の戦車隊が隘路から平地に出てきた。随伴歩兵を引き連れて高架の下の道路を福岡市街地に向けて進む。自衛隊が混乱している中、それは実に簡単な進軍に見えた。だが自衛隊も黙って通すつもりはなかった。

「よし！今だ！」

高麗軍の進撃の様子を双眼鏡で見張っていた3尉が隣の隊員に命令を発した。その隊員は手にしている、どこから伸びているワイアーに繋がった小さな装置の上の小さなレバーを90度回した。それと同時に辺りに轟音が響いた。

「な！なんだ！」

先頭の戦車に乗る指揮官は、高架を支える柱が粉々に吹き飛ぶ光景を目撃した。それが彼のこの世の最後の記憶となった。何千トンというコンクリートと鋼鉄の塊に押しつぶされては、戦車といえども耐えられるものではなかったのである。これによって3輦の戦車と随伴歩兵を始末できた。

それにあわせて物陰に隠れていた1輦の10式戦車が姿を現した。突然の出来事に混乱したまま動けなくなっていたK1A1は完全に鴨であった。高度な射撃統制装置と自動装填装置によって支えられた国産の120ミリ主砲は連射により即座に2輦のK1A1を射止めたのである。手動装填のK1A1にはできない芸当であった。

高麗戦車兵もさすがにそれを見て正気に戻った。留まっていたはいけない。即座に動かなくては。誰が指示したわけでもなく、生き残った4輦の戦車はスモークディスチャージャーを作動させて散開した。2輦ずつ、北と南に。

一方、東側に迫る別働隊に対しても2輦の10式戦車が立ち向かうとしていた。2輦は交差点の陰に隠れ、普通科隊員の陰から顔を出して敵の動きを窺っている。敵が迫っている。K1A1を1輦、先遣として前を進ませているようだ。そして先遣車輦は室見川に架かる橋を渡ろうとしていた。それが狙い目であった。なにしろ逃げ場がない。

2輦が一斉に交差点上に飛び出した。役割分担はすでに決まっている。1輦が橋の上の先遣を片付けて、もう1輦が後続のうちの1輦を破壊する。その役目をどちらも見事に果たした。

驚いたのは高麗軍側である。突然の襲撃で一気に2輦の戦車を失ったのだ。咄嗟に撃ちかえしたが、狙いが定まっているわけでもな

く自衛隊戦車の横の自動車販売店を破壊して終わった。2 輦の敵自衛隊戦車はまだ物陰に隠れてしまった。

一方、再び物陰に隠れた10式戦車の片方では3輦を束ねる小隊長が車内のデジタルディスプレイを見ていた。10式戦車はC4I
―指揮・統制・通信・電算・情報―機能^{コマンドコントロールコミュニケーションネットワークインテリジェンス}を発達させたハイテク戦車である。第4戦車大隊に属する10式戦車は全てデータリンクで結ばれており、情報を常に交換しあっている。乗員同士が通信をしなくても戦況が手にとるように分かるのである。隘路から出てきた戦車の撃ち漏らしは重く見るべきだろう。小隊長は小隊内無線の通話スイッチを押した。

「俺は西側の援護にまわる。坂井、1人で橋を守れるか？」
＜任せてください＞

「西田。俺は北側を守る。お前は南側だ」
＜了解＞

小隊長の戦車が交差点から離れていった。

破壊された福岡前原道路の高架の南側、土嚢を積み上げて造った急増陣地を陸上自衛隊の小銃班が守っていた。

彼らの目の前に、崩壊した高架から逃れてきた高麗歩兵が現われた。

「撃て！」

89式小銃とミニミ機関銃が一斉に乱射され、何人かの高麗兵が倒れた。難を逃れた高麗兵は近くの遮蔽物に隠れて銃弾を防いだ。

「呐喊！前へ！」

班長の曹長は突撃を命じた。隊員たちが陣地を飛び出して敵に向かう。遮蔽物の陰に釘付けにされていた高麗兵たちはうまく対応することができず、次々と撃ち抜かれ、一部は降伏した。

そこへ高麗軍のK1A1戦車が2両現われた。形勢逆転である。K1A1戦車は同軸機銃を乱射して逃げ惑う自衛隊員を敗走させ、K1A1は追撃に移行した。

しかし自衛隊もやられっ放しではない。隊員たちが逃げ惑う中、臆せず陰に隠れてK1A1の様子を伺うものが2人居た。彼らは応援にかけつけた別の班の隊員でパンツァーフアウスト3を持っていた。

「随伴歩兵がいないな」

隘路での戦闘、高架の爆破、そして先ほどの陣地での戦い、それらを経て高麗軍は随伴歩兵をすり潰しており戦車が単独で前進してきた。2人は目の前の家に飛び込んだ。玄関の鍵は掛かっていなかった。急いで二階に上がり窓から道路を見下ろすと、すぐ下にK1A1戦車がやってきていた。

「よし、撃つんだ」

隊員の1人がパンツァーフアウスト3を肩に担いで、下の戦車を狙った。引き金を引くと弾頭が発射され、装甲の薄い戦車の砲塔上部に命中した。2人は戦果を確認することなく素早く一階に駆け下りた。

玄関を出ると拳銃を持った高麗戦車兵と遭遇した。2人の自衛隊員はすばやく小銃を構えて戦車兵を射殺した。道に出てみると、そこには炎上した戦車の姿があった。もう1輦はどこかへ消えていた。

もう1輦のK1A1は大通りに脱出することを目指した。入り組んだ住宅地は視界が狭く歩兵の待ち伏せには最適で、随伴歩兵を欠いた状況で戦うべき場所ではない。大通りに出れば自衛隊の戦車と遭遇することになるが、その方がずっと良いと戦車兵は思っていた。やがて戦車は大通りに出た。そこにはやはり10式戦車が待ち構えていた。

西田戦車長は戦車長用のペリスコープで敵の姿を探していた。そして横道からK1A1が現われた。

「敵だ。2時方向！」

砲塔が動いて照準が定められる。両方の戦車が発砲したのはほぼ同時であった。そしてどちらも同時に命中し、両者を同時に破壊した。

小隊長は西田車からのデータリンクが途切れたことに驚いた。

「どうなっている。西田車、応答せよ。応答せよ！」

だが返事がない。車長用ハッチを開け、体を外に出して後方を確かめると2輦の戦車が炎上していた。小隊長がその様子を見て呆然としていると、普通科隊員が駆け寄ってきた。

「指揮官ですか？」

「そうだ。小隊長だ」

小隊長はなんとか声を出すことができた。

「1 輜は我々が倒しました。202号線の南にもう戦車がいません。あとは北側の2輜と橋の東側の2輜です。北側稜線を守っていた施設科に乗せたトラックが来ます。通しますよ？」

「ああ、構わない。ありがとう」

「小隊長。あなたの部下の活躍、お見事でした」

普通科隊員はそれだけ言うと言った。小隊長はもう一度だけ炎上する部下の戦車を確かめてから、戦車の中に戻った。

やがて数輜の中型トラックが通り過ぎていった。彼らは隘路の北側を守っていた施設科の隊員たちだ。撤退の第一陣である。撤退作戦は順調に進んでいた。

三〇、危機を打ち砕け（後書き）

自衛隊、負けっぱなしなのでたまにはということですが、しかし、高架を落として戦車を破壊できるんだらうか。なぜか確信がもてない：

三一・防衛線からの撤退

室見新橋

室見川に架かる橋。先ほど激戦が行なわれた今宿新道の1つ川下の室見新橋。そこを1輦のK1A1戦車が随伴歩兵を引き連れて渡ろうとしていた。海ノ中道に上陸した別働隊の残存である。新道の橋の前で小隊長と坂井車の迎撃を受けた彼らは二手に分かれて、新道の南北に散ったのである。そして今、室見川を渡り撤退する自衛隊を襲撃しようとしていた。しかし戦車が橋の中ごろに達したこと南の方から何かが飛んできた。

「ミサイルだ！」

歩兵の誰かが警告を発したときには既に遅く、K1A1戦車の砲塔上部に96式多目的誘導弾が炸裂した。

室見川の川沿いの緑地内に隠れて監視活動を行っていた観測班はミサイルの戦果を確認して歓喜した。

「うかれているんじゃないぞ。お前ら。撤収の準備をするんだ」

班長の言葉が隊員たちを現実に取り戻した。彼らは今、大局的に見れば負けているのだ。

橋本橋

一方、もう1輦のK1A1は今宿新道の2つ川上に架かる橋本橋

を、なんの妨害を受けることなく渡った。1輦の戦車と歩兵小隊は自衛隊の退路を断てる位置を占めたのである。

隘路の北の山地

北側の山地の防衛部隊はなんとか持ちこたえていた。北側には2つの山が連なっていて、西側の長垂山を突破されたものの、それに続く一二七高地の稜線を防御ラインとして使うことができたからだ。機関銃陣地と特科隊の攻撃で高麗兵を押し止めて、その間に守備隊の施設科隊員たちは次々と撤退していった。

隘路の南の山地

南の防御線は北のようにはいかなかった。

突撃してくる高麗兵の上に自衛隊特科隊の放った榴弾砲が次々と炸裂する。なんの装甲も持たない徒歩歩兵が相手なのだからその威力は絶大なのであるが、観測手を欠いて照準がいい加減なこともあって進撃を止めるには至らない。だが、彼らの前に別のものが立ち塞がった。

山の中腹に建てられた高校。その校庭に4輦の87式偵察警戒車が集結していた。

「君たちが最後かな」

指揮官がハッチから顔を出して、山の中から逃げてくる隊員を呼び止めて尋ねた。

「まだ逃げ遅れている奴がいるかもしれんが、部隊としてまとまっ

ているのは俺達が最後尾な筈だ。集団で走ってくる奴がいたら、そいつらは敵兵だ」

「そうか、援護を頼めるか？」

「いいだろう」

その隊員は自分達の部下を集めて、校庭の周りに散開して装甲車を援護するように命じた。

一方、装甲車の砲塔内では砲手が赤外線監視装置で接近してくる大勢の軍勢の姿を捉えた。

「来ました！」

「よし、主砲、撃ち方はじめ」

4輦の装甲車から一斉に25ミリ機関砲が森に向けて放たれた。エリコン社製の25ミリ機関砲の威力は凄まじい。木々を撃ち抜き枝を舞い上がらせ、突撃してくる高麗兵を次々と射倒す。最初の高麗兵の集団は思わぬ攻撃に全滅した。

だが、いつまで押しとめられるかは分からない。

大通り

隘路を貫く今宿新道と福岡外環状道路が交わる交差点上で小隊長の10式戦車が前後左右に警戒を張り巡らせていた。これまで10輦のK1A1戦車を撃破したが、彼の小隊も2輦まで戦車を減らしっている。

「敵はあと3輦か」

デジタルディスプレイを見つめながら小隊長が呟いた。視線は南

下してくる2輦の友軍戦車を示すアイコンに向けられている。愛宕山の高麗軍を蹴散らした第3中隊と行動している氷室と僚車を示すものである。

「氷室、早く来い」

その時、交差点の北側に2輦のK1A1戦車が現われた。

「撃て！」

すぐさま砲塔が動き1輦に向けて主砲が放たれる。120ミリ主砲弾はK1A1の正面装甲を貫通した。しかしもう1輦が10式戦車に主砲の照準を合わせた。いかに10式戦車といえども先ほどの高架下での戦闘と違い機敏に動く相手への連続攻撃は難しい。

「間に合わない」

小隊長は最期だと覚悟した。

しかし、もう1輦のK1A1戦車は主砲を撃つことなく沈黙して炎上しはじめた。

<先輩、遅くなりました！>

無線機から聞こえてくるのは後輩の戦車小隊長、氷室のものであった。

「よく来てくれた。助かったぞ。あとの敵戦車は1輦だ」

橋の前を守っていた坂井車も加わって、4輦の戦車は交差点の真中で円陣防御の態勢をとった。2人の小隊長はそれぞれの戦車を出

て、今後のプランについてミーティングを行なおうとした。その時、無線機が鳴った。相手は先ほど交代した施設部隊のトラック縦隊だった。

＜敵の襲撃を受けている。戦車あり。至急、応援を頼む＞

「よし。私の小隊が片付ける」

氷室はそれだけ言うと、自分の戦車に戻った。

K1A1戦車の攻撃を受けて何輛かの中型トラックが転倒し炎上していた。生き残った隊員たちは小銃を手に持って高麗軍歩兵と戦っているが、相手には戦車の援護がついているので圧倒されてしまふ。

氷室小隊の2輛の戦車は第3中隊を引きつれて4車線道を左右の路肩側の車線に分かれて進んでいた。

「弱いもの虐めはたいがいにしるよ。よし、こちらで戦車を片付ける。僚車は高麗歩兵を掃討せよ。砲手、徹甲弾！」

＜3尉。獲物をもっていけないでくださいよ。今回は譲りますが、次は頂きますからね＞

「次があればな。よし、てえー」

敵戦車K1A1は対応するいとまもなく正面から120ミリ徹甲弾を受けて破壊された。それに続いて僚車が高麗歩兵に肉薄して同軸機銃でなぎ倒す。

「戦車は全て破壊した」

危機の絶頂は回避した。氷室は狭い戦車の中で安堵した。

彼らと同行していた第3中隊はそのまま大宰府防衛線まで撤退することになった。

隘路の北の山地

稜線に掘られた機関銃陣地では殿を任された兵士たちがミニミ機関銃を乱射して高麗兵の突撃を阻止しつづけていた。そこへ防衛を任された指揮官がやってきた。

「よし。あらかた退却が終了したぞ。我々もここを離れる。特科部隊が最期に盛大な射撃をするから、それを合図に山を下るんだ」

やがて特科隊の支援射撃が始まった。部隊の後退を敵の目から隠す発煙弾と榴弾のミックスは絶大な威力を発揮した。

山を下りた隊員たちは待ち構えていた中型トラックに飛び乗った。それが最期の便であった。彼らはやがて小隊長と坂井車、第4中隊が守る交差点を過ぎた。

「北側はあれが最期だな。南は？」

すると3輦の87式警戒偵察車が交差点にやってきた。高校の校庭で阻止を行っていた部隊である。もう1輦の姿はなかった。車体の上に隊員たちを乗せている様子は、いかにも逃げてきたという感じである。

先任の指揮官である第4中隊長が状況を既に大宰府に移動した野木連隊長に報告して、後退の許可を得ると2輦の10式戦車を先頭にして退却を開始した。それに第4中隊を乗せた中型トラックや高

機動車、軽装甲機動車が続き、最後に3輦の87式偵察警戒車が殿となつて出発した。

午後3時。福岡防衛線は放棄された。

三二・混乱

福岡県 京都郡苅田町 二橋交差点

北九州から鹿児島を結ぶ東九州の大動脈である国道10号線と国道201号がぶつかる交差点は、北から南下してくる避難民とそれを統制すべく検問をしている警察、さらに築城から派遣された第41普通科連隊の一個小隊が混ざって大変な混乱状態であった。

「来るんじゃないかなあ」

第41連隊第4中隊第3小隊の指揮官である3尉は目の前の状況に参っていた。彼らがここを訪れている目的は避難誘導の支援と北九州で壊滅した第40普通科連隊の生き残りの回収、そして情報収集であるがどれも行なえそうにない。3尉は部下たちが警官と一緒に右往左往している時に呑気にも通信士とともに煙草を手に一服していた。そこへ年配の警官がやってきた。

「小隊長さん。ちょっと来てくれませんか？」

3尉が案内されたのは近くの中学校で、その校庭に小型トラック、中型トラック、高機動車、軽装甲機動車といった様々な自衛隊車輛が停まっていた。その部隊の指揮官らしき男が3尉に気づいて近寄ってきた。

「我々は第40普通科連隊第2中隊だ。私は中隊長の中田3佐。そちらは？」

3尉は自分の所属と地位を述べると、次に状況を説明した。

「直方の連隊主力が1個小隊と接触したのをはじめ、個別に北九州を脱出してきた多数の隊員を収容しております。しかし合わせても100名ほどですね。中隊単位で生き残っているの貴方がただけでしょう」

「そうか」

「連隊本部に報告します」

3尉はその場を去ろうとして中田に背を向けたが、中田の言葉に動けなくなってしまった。

「なあ、3尉。俺は正しかったのだろうか？守るべき一般市民を見捨てて逃げてきたんだ。これで良かったんだだろうか？」

3尉は少しの沈黙の後、中田の方に振り向いた。

「分かりません。でも貴方がたはまだ戦えます。一緒に戦えます」
「そうだな。一緒に奴らを追っ払おう」

防衛省 中央指揮所

北九州に続いて福岡の失陥が確定したことで、中央指揮所の空気は一段と重くなっていった。2つの都市が敵に奪われ、100万を越す一般市民が敵中に取り残されることになったのだ。

指揮所の入り口に近い手前側に指揮官用のスペースがある。戦況を報じる巨大なディスプレイを見下ろすその席は、統合幕僚長や陸海空各幕僚長、それに防衛庁長官、必要なら総理大臣も交えて作戦指導を行なうことになっている。今は統合幕僚長とその他の三幕僚長が集まっていた。

「本当に申し訳ない。完全な敗北だ」

陸幕長の剣持が立ち上がり他の幕僚長達の前で頭を下げていた。

「やめてくださいよ。剣持さん。これは前から当然に予想された事態です。今の自衛隊の戦力なら仕方ない結果です。あなたの責任じゃありませんよ」

斉藤空幕長が剣持を慰めている。

「今はこれからのことを考えるべきでしょう。陸上自衛隊の戦力の集中はどうなんですか？」

「問題はその点だ」

神谷統幕長が指摘した。

「北九州有事が発生してから半日以上経つが、いまだに高麗コマンド部隊のゲリラ活動の兆候が見出せない。どう考える？ 真田くん」

出入口のドアの傍に立って黙って様子を伺っていた情報本部長の真田陸将は4人のもとに歩み寄った。

「内調や外務省の情報部門から得た情報や戦況を鑑みますに、高麗軍の目的は保障占領ということになります。つまり上陸した高麗軍の引き上げの対価として我が国から外交的譲歩を得る、ということです。そして事態が長期化すれば政府はそれを受け入れざるをえないでしょう。」

問題は相手の要求です。つまるところ、自国の経済の苦境を打開するための支援を求めている。つまり日本側の経済が良好であるこ

とが高麗にとっても必要になります」

「つまり、高麗軍は日本に必要な以上のダメージを与えないためにコマンド部隊の投入を控えていると？」

「その通りです。笹山海幕長。つまり高麗軍はこの戦争を局地紛争に抑えておきたいのです。全面戦争になれば日本という国家全体が戦時体制に突入しますし、アメリカの介入も確実にありますしね」
「ということは、九州以外の地域から戦力を引き抜いて集中することは可能ということになるな」

剣持は安堵の笑みを浮かべた。

「しかし、あくまで推測に過ぎません。要求が通らないと考えて自暴自棄な行動にでる可能性も捨てきれません」

それを聞いて斉藤が溜息をついた。

「出撃して帰投したら基地が無くなっている、なんてのはやめてくださいよね」

「敵が事態の長期化を狙っているのなら、敵の補給を断つというのはどうだろう。いや、ダメだ」

笹山は自分の意見の間違いに気づいて頭を掻いた。

「油と食べ物なんて今日びの日本ならどこにでもあるんだよねあ」

軍隊が必要とする補給物資は主に弾薬、食糧、燃料である。そして後者2つは現在の日本でなら容易に大量に徴発可能なのである。現地調達で十分に戦力を維持できるのだ。あとは弾薬であるが、これは敵との戦闘によって消耗するものである。結局のところ、地上軍が十分な戦力を用いて交戦しなくてはならないのだ。

「こうなったら奴らが無茶をしない可能性にかけるしかない。剣持君。九州に展開する部隊はどうする？」

「はい、統幕長。今現在、増援に向かっているのは中央即応集団だけです。即応連隊がすでに熊本空港まで進出し、まもなく第1空挺団が出発します。その後ですが、まず対象となるのは第12旅団と第14旅団ですね」

第12旅団は北関東から北陸にかけて駐屯する部隊で、戦車部隊を持たず代わりにヘリコプターによる機動能力を高めた空中機動旅団ということになっている。第14旅団は四国の部隊で九州、中国、関西方面の事変に対する予備部隊として性格づけられる部隊である。

「第7師団に南転の準備をさせろ」

師団規模の正規軍が上陸した以上、それを撃滅できるのは陸上自衛隊唯一の戦車師団である第7師団だけである。

「ただちに命令します」

悲壮な面持ちの統幕長と陸幕長。そこへ妙に上機嫌な男が現われた。

「自衛艦隊司令官です。海幕長、報告があります」

主力の機動作戦部隊である護衛艦隊、潜水艦隊、航空集団、それに地方警備を担当する地方隊の全てを統括する自衛艦隊司令官の富田海将^{みた}。海上自衛隊の実質的な総司令官とも言える人間である。

「電話でも良かったんですが、直接報告した方が良いかと思いまし

て。

第2護衛隊群の残存艦隊ですが、どうにか危険範囲を脱出したようです。損傷艦もどうやら無事に曳航できたようで。被害は最小限に抑えられました。実は良かったです。大変素晴らしい」

そこまで言って富田は自分が指揮所内で浮いていることに気づいた。

「失礼」

みんながすっかり黙り込んでしまった。

福岡市内

既に16時を過ぎたが、萩原たちは福岡の市街から抜け出すことが出来なかった。自衛隊の部隊移動のために主要道に交通規制が敷かれ避難民が溢れて道が混んでいたのだ。そこから逃れようと青野がなんども回り道をしたことも拍車をかけた。

「畜生、なんとかならないかな？この有様」

青野が愚痴っていると、助手席の美緒から突っ込みが入った。

「あんたが“近道する”とか言って、どんどんはまり込むから悪いんじゃない？」

すると彼らの目の前に自衛隊の大型トラックの縦隊が割り込んできた。

そのトラック群は福岡防衛線で隘路の北の山地を守っていた第2

施設群の1個小隊で人員輸送の2輦と工兵器材を運ぶ3輦から成っていた。彼らは撤退途中で道から外れてしまい、高麗軍の逆探知を避けるために無線封鎖をしていたこともあって市内を彷徨っていたのだ。

「なんだ、自衛隊か。なんでこんなところにいるんだ？」

青野の言葉に敏感に反応したのは市民運動家である片平であった。

「逃げているのよ。市民を置き去りにして、自分だけ助かろうとね。見なさい。歴史が証明しているわ。彼らが守るのは体制であって、国民じゃないのよ。私達を時間稼ぎのための駒くらいにしか思っていないのよね、きっと」

片平の言葉に車内の空気が重くなる。しかも悲しいことに一般市民を置き去りに自衛隊が戦場から逃げているのは事実なのである。するとヘリコプターのローター音が聞こえてきた。

高麗海兵隊のMD500ヘリは市内の様子を偵察するために飛んでいた。彼らは海兵隊本隊の市内突入に先立ち空軍部隊とともに残敵を掃討することを任務としていた。

「前方に日本陸軍のトラックを発見。どうやら工兵部隊のようだ」
くよくやったぞ。その連中は撃滅した方がいいだろう。ただちに飛行隊を派遣する」

上空では2機のF-15Kが飛んでいた。そのうち1機はシンとラクスの機体である。すると壱岐の空軍前線指揮所から攻撃目標

が指示された。

「俺らがいく。援護しろ」

シンは僚機に指示すると、目標へ針路を向けた。ラクスンが目標の座標を確かめ、モニター上に写るレーザー走査によるデジタルマップと見比べて目標を探した。そして赤外線画像で目標らしいトラック群を見つけた。

「よし、見つけた。あれだ」

「よくやったぞ、ラクスン。レーザー誘導爆弾用意」

「誘導装置作動。レーザー照射開始」

「投下！」

1発の500ポンド爆弾が福岡市内で炸裂した。

三三・獅子、目覚めるとき

桜井は福岡市内を1人彷徨っていた。彼は隘路北側の山地の稜線上防衛線が崩壊した時に仲間とはぐれ、撤退する車輛隊に乗り遅れて、徒歩で大宰府まで向かう羽目になった。それは彼に限ったことではなく、個人単位でなんとか仲間のところへ行こうと彷徨っている自衛隊員は福岡にも北九州にも一杯いた。しかし敵との遭遇を警戒して狭い路地を前後左右注意しながら進んでいくので、なかなか前へ進めない。

すると桜井は道に出た。そして彼が出てきた建物の間の路地から道を挟んで反対側の家と家の間に隠れて休息をとっている2人の自衛隊員の姿を見つけた。あたりを見回して高麗兵がいないことを確認すると、一気に道を横断した。

「第19普通科連隊、桜井雄一3曹です」

出迎えたのは見覚えのある顔であった。

「おお。今宿以来だな。特殊作戦群、黒部幸正1曹だ」

相手は今宿駅前で出会ったサングラスの男であった。

「あの時の！」

「奇遇だな。こんなところで。そっちは仲間とはぐれたのかい？」

そんな風に他愛もない会話をしていると、ジェット機の轟音と爆発音が聞こえてきた。3人が音のした方向を見ると黒煙が上がっていた。

「いってみましょう」

桜井を先頭に黒部、そしてそのバディが駆け出した。

「いま、爆発が起きました。私の後ろの建物、その向こうに黒煙が上がっています。空爆が行なわれたのでしょうか？」

地元テレビ局のアナウンサーだろうか。テレビカメラの前で目の前の状況を熱心に解説している。

「とにかく現場に向かいたいと思います。いったん中継を終わります」

＜吉田さん。気をつけてくださいね。では、北九州有事関連の最新情報をお伝えします＞

東京 永田町 首相官邸

国会での日程を終えて官邸に戻った烏丸首相は自分の執務室に籠って電話をかけた。相手は社会民主党の井戸たけ子だ。

「お願いしますよ。与党なんだから政府の足を引っ張るようなマネはよしてください」

＜あなたが間違っているのよ。総理＞

相手の声からその頑固な意志が読み取れた。烏丸はこの時点ですでに説得は不可能だと悟った。

＜総理の椅子を得るために自由民権党と手を結んだのが拙かったのよ。民生党と組んだ方が我々の政策をより実現に近づけられるわ。総理の地位は得られないけど、でもそれは目的ではないわ＞

なるほど立派な考え方だ、と烏丸は思った。しかし、その政策は正しいのだろうか？

「今は非常時なんだ。だからみんなが協力して事態に立ち向かわなくてはいけない。分かってくださいよ」

＜だから軍国主義化を押し進める自由民権党の手伝いをしろ、と言うの？ こういう時だからこそ、私たちが平和主義を守るために戦わなくてはならないのよ。我々はあくまでも外交による解決を目指すわ＞

「それがみんなの意志なのか？」

＜党の幹部とは話をつけているわ。それが社会民主党の方針よ。あなたもこれ以上、私たちに反抗するというのはならそれ相応の処分があるわ。分かっているわね？＞

それだけ言うと相手は電話を切ってしまった。彼にはもう社会民主党をまとめることができないのだ。となれば衆院を野党に抑えられたことになる。これからどう動けばいいというのだろうか？

烏丸は無意識にテレビの電源をつけた。どこの局も北九州有事関連のニュースばかり報じていた。

福岡市上空

高麗軍の識別マークをつけた数機のミル8輸送ヘリが低空を飛行している。乗っているのはドン・テヒョン少尉の指揮する旧北朝鮮と旧韓国の特務部隊要員から選抜された混成チームである。彼らは

北九州の占領任務を後続部隊に引き継ぐと福岡占領作戦を支援するためにヘリで飛んできたのである。

テヒヨンの指揮する小隊の完全武装の40名は2機のミル8型に分乗して、それぞれの目標を目指していた。テヒヨンはコクピットの通信装置の傍に座り、パイロットとともに友軍の無線交信を傍受して戦況を探っていた。

「我々は勝利しているようだな」

「そのようですね少尉」

敵の日本自衛隊は福岡の放棄するつもりらしい。これなら占領は簡単にできそうである。すると無線でテヒヨンのヘリが呼び出された。

<白^{ベク}7号ヘリ、白7号ヘリ、応答せよ。応答せよ>

「こちら白7号。どうぞ」

<近くで空軍が敵トラック隊を攻撃した。戦果を確認し残敵を掃討せよ>

指揮官はそう命ずると、詳しい座標を伝えた。

「了解しました。交信終わり」

無線が切れるとパイロットはテヒヨンの方を向いた。

「どうします?」

「敵が携帯式ミサイルを持っていたら危険だ。この機から一個分隊を斥候として出す。近くの公園に降りてくれ」

それだけ言うとテヒヨンはコクピットを離れ、^{キャビン}客室に戻った。

「同志ハン曹長！」

テヒョンが座席に座って任務を待つ兵士達に向かって叫ぶと、一人の下士官が立ち上がった。彼はSDVドラグノフ狙撃銃を持っていた。

「なんでしょうか？同志少尉どの」

「任務だ」

福岡市内

荻原は横転して車から自衛隊員の手に助けられて抜け出した。地面に足をつけたことに一息ついてからあたりを見回すと惨状になっていた。5輦の自衛隊トラックは全て破壊されていて、周辺には負傷した自衛隊員や巻き込まれた人々が横になって呻き声をあげていた。そんな中で難を逃れた数名の自衛隊員と人々が協力して救助活動を行っている。

そして人々の中から友人たちの姿を見つけた。青野は手に傷を負っていて、美緒が心配をしていた。

「その手、大丈夫なの？」

「痛むけど、それほど大変な傷じゃないよ」

この2人は大丈夫のようだ。一方、知世は道端にうずくまって肩を震わせていた。

「大丈夫？」

声をかけると知世は首を横に振った。萩原は彼女の隣に腰を下ろした。

「もう大丈夫だよ。戦闘機はどっかいったみたいだから」

その向こうで片平が自衛隊員を詰っている。

「そもそもあなたたちがこんなところに居るからこんなことになるのよ」

対する自衛隊員はなにも言い返せず黙り込んでしまった。

そこへ衛星中継車から延長コードがギリギリのところなカメラを持ったテレビの取材班も現われた。

「ご覧ください。空爆のために自動車が炎上しております。周りの建物のガラスはほとんどが割れており、爆発の威力を物語っています」

吉田アナウンサーは横転した車から人を助け出そうとしている自衛隊員の姿を見つけた。

「自衛隊が被害を受けた車からドライバーを助け出そうとしています」

カメラマンがその様子を捉えるべくカメラをズームさせる。するとその時、自衛隊員と助けられた男が血飛沫をあげて倒れた。さらに回りにいた群集が次々と撃たれ倒れていく。

カメラを通してそれを目撃し事態を悟ったカメラマンは顔が即座に青ざめて脚がブルブルと震えだした。

「どうしたの？」

背後で起きていることに気づかないアナウンサーがその様子を心配してカメラマンに声をかけたが、それが最期の言葉となった。次の瞬間、アナウンサーの身体を何発かの銃弾が貫通して口から血を吐いて倒れてしまったからだ。

カメラマンも咄嗟に逃げようとしたが叶わなかった。彼もまた敵の銃撃に狙われたからである。そしてその様子は全国に放映された。

首相官邸

カメラマンが撃たれて倒れたらしく、テレビはなぜか銃撃音をBGMに曇つつある九州の空を映していた。やがて中継が切れて東京のスタジオの映像に変わった。

くええ、どうやら現地でアクシデントがあったようです。詳しいことが分かり次第、お伝えします>

状況は明らかである。自衛隊と一般市民が銃撃された。相手は高麗兵に違いない。

「これが現実か？九州ではこのような事が起きているのか？」

テレビで流されたのはあまりにも残酷な現実であった。高麗に占領された全域でこのような事態が起きているのだろうか？避難命令は出されたが短時間に大都市に住む全員が逃げられるわけがない。ここに入ってくる多くの情報から察するに、むしろ多くの人々が取り残されていると考えるべきだろう。今、多くの市民が危険な状態にあるのだ。

考えれば当然の事じゃないか。九州は戦争という極限状態の中に

あるのだ。悲劇が一般市民に襲い掛かることだってある。いや、現実は何の罪もない一般市民が高麗兵に襲われ何人もの尊い命が奪われてしまったではないか！

なぜ、それを今までこういう事態が起こりうる事を考えていなかったんだ？今まで、旧日本軍や米軍による戦争犯罪や市民の虐殺について残虐さをさんざん訴えてきたのは我々ではないか。だが高麗が日本の一般市民を虐殺する可能性を思いつかなかった。

これが平和ボケって奴なのか？

いまは戦争が起きているんだぞ！

果たして外交で解決という手段でいいのか？あの映像の中に居た人々のように不当に生命が奪われようとしている人々がいるというのに。武力を駆使してでも日本を、日本人を守るべきではないのか？

「我ながら、どういう思考をしているんだ」

気づくのが遅すぎた。そもそも国家の役割とは国民の生命と財産を守ることにある。交渉のためにと称して国民の命が奪われる様を見過ごすようなことはあってはならない。自国を侵略されたら武力をもってこれに抵抗するのは国家として当然のことじゃないか。だが今の日本はそれに躊躇している。この日本は国家ですらないというのだろうか？国家の最高指導者として私はなにをすべきなのか？決まっている。日本がやるべき事は一つだ。

「そうだ。この事態を解決できるのは自衛隊だけだ」

烏丸は電話に手をのばした。かける相手は決まっている。

三三・獅子、目覚めるとき（後書き）

- ・ユニークアクセス3万を突破しました
- ・28話を訂正。国会議事堂が舞台なのに、なぜか官邸に戻ったことになっていたので
- ・あらすじ紹介を少し変更

三四・合流

桜井と黒部、とそのバディは物陰に隠れて、爆発が起きた通りを覗いていた。

「素敵な出迎え係りだね」

黒部は小さな双眼鏡でK1A1カービン銃を持つ高麗コマンドの姿を確認していた。

「桜井3曹。狙撃ポイントを探せ、俺らは裏から回り込む」
「了解」

ハン曹長率いる9名の分隊は生き残りの自衛隊を殲滅するという任務が与えられていた。彼らはミニ機関銃かK2ライフルの銃身を切り詰めた国産のK1A1カービンを持ち、指揮官のハンだけはソ連製のドラグノフ狙撃銃を使っている。

第一撃で何人かを射殺したが、まだ何人か残っている。彼らは慎重に前進していった。

「敵だ！」

片平の追及を受けていた隊員が周りの同僚が次々と撃たれていくのを見て叫んだ。そして片平らを物陰に押し込むと、自分の89式小銃を構えた。

敵はゆっくりだが確実に近づいてきている。

中央指揮所

自衛艦隊司令官を交えた幕僚たちのミーティングは続いていた。しかし、神谷の一言がそれを終わらせた。

「そろそろ時間だな」

時計を確認した神谷は立ち上がって指揮所の出口へ向かった。

「官邸へ行く。首相にブリーフィングをしなくてはならない」

「同行します」

真田も立ち上がった。

「自分は座間の陸上総隊司令部に赴き部隊転用の指揮を執りたいと思います」

最後に剣持が続いた。陸上総隊は各方面隊の上位に位置し、陸上自衛隊の全戦闘部隊を指揮する総司令部として2013年に新設されたものである。海上自衛隊の自衛艦隊司令部や航空自衛隊の航空総隊に相当する。司令部は在日米軍のキャンプ座間に置かれ、アメリカ陸軍第1軍団との緊密な連携が可能である。

3人が指揮所を出て行くと、それを待っていたらしい富田が立ち上がった。

「皆さん、私の意見を聞いてくれますかな？」

斉藤と笹山は突然のことになにも言い返せなかった。

「どうして我々は高麗軍の上陸を許してしまったのでしょうか？私
が思うに、これまでの防衛力整備の陸偏重が原因なのではないでし
ょうか？」

たとえば今年度予算では陸上自衛隊の予算は海上自衛隊の1.7
倍なのですよ？信じられますか？海洋国家、海軍国家のこの日本で
陸軍がこれほど優遇されるのはおかしいではないですか？」

富田の演説はどんどんヒートアップしていく。

「もし適切な予算配分が行なわれていれば、海上自衛隊と航空自衛
隊が洋上で高麗軍を撃破できた筈です。すべては陸偏重の予算配分
が原因なのです」

必死に訴える富田に斉藤はいかにも胡散臭いといった視線を向け
て、笹山は富田と目を合わせず頭を掻いている。

「やはり我々としては空海への更なる予算の配分を必死に訴えてい
くべきだと思っんです。では私は司令部に戻りたいと思います」

富田は一方的にそう言って指揮所を去った。
残された二人は同時に溜息をついた。

「身内の恥を晒してしまったようですね」

「あの阿呆はいまだに洋上撃破なんて幻想を信じているんですか？」

「みたいです。あなたは違います？彼の意見」

「さっきも言ったでしょう？そりゃ空自^{うち}の予算を陸に回せとまでは
言いませんがね、出撃して帰投したら基地が無くなっている、なん
てのはやめてほしいね」

2人はもう一度、溜息をついた。

首相官邸

烏丸は再び井戸に電話をかけていた。

「井戸さん。私は自衛隊出動の方針で進める。すでに多くの日本人が被害に遭っているんだ。我々には日本人を守る義務がある」
くなにを言っているの！それではわが党の理想はどうなるの！>

井戸が声を張り上げ怒鳴ったが、烏丸は話を続けた。

「理想、理想って叫んだだけじゃ現実はどうすることもできない。我々にできるのは現実に迫った脅威から日本を守ることだ」

<しかし、平和的に解決するから意味があるんです。今こそ日本の平和主義の：我が党としては防衛出動は認められません>

「なら、党を抜ける」

<えっ！>

烏丸の突然の宣言に電話の向こうの井戸は何も言う事ができなかった。

「党に居るために日本を守れないなら、党を抜ける。防衛出動を必ず承認させる」

烏丸の決意は固かった。

<分かりました。あなたがそのつもりなら結構です。しかし党はあなたを容赦しませんよ？>

「覚悟の上さ。井戸さん。今までありがとう」

<では、さようなら>

福岡市内

片平、萩原、それに知世の目の前で89式を構えた自衛隊員が1人射殺された。隊員を撃った高麗兵がゆっくり、だが確実に迫ってくる。3人とも腰が抜けて、その場にへたりこんでしまった。しかしそれが彼女らを救った。もし逃げようと飛び出したら、高麗兵は反射的に射撃することであろう。

そしていよいよK1カービンを持った高麗兵が3人の前にやってきた。相手は目の前の女3人に一瞬驚いた表情を見せたが、銃口を向けた。

片平は2人を後ろに銃口の前に出て立ち塞がった。

「片平さん」

「私は暴力に屈しない。そう決めたのよ」

銃口はまだこちらに向けられているが、兵士の方は首を動かして辺りの様子を伺っている。するとその眉間に穴が開き、そのまま倒れてしまった。

64式改狙撃銃の照準スコープを通して敵を倒したことを確認すると、桜井は次の標的に移った。そしてそちらも一撃で仕留めた。さらに別の高麗兵を狙おうと固まって行動している3人に銃口を向けたが、撃つには至らなかった。どこから手榴弾が投げ込まれ、3人とも吹き飛ばしてしまったからだ。

手榴弾で敵兵を蹴散らした黒部とバディは、驚いている高麗兵2

人を後ろから襲い掛かり銃剣で喉を掻き切った。高麗兵部隊はほとんど全滅してしまった。

桜井は狙撃ポイントから飛び出した。倒れている自衛隊員や市民の様子を1人1人確認していく。ほとんどが死亡しているか、重傷を負い危険な状況にある。しかし軽傷ないし無傷の者もいくらか居た。そしてその中に見知った顔も何人か居た。

「青野さん？」

前に紹介した荻原の学友。その顔を桜井は覚えていた。青野由紀夫と斉藤美緒。2人とも無事の様である。

「思い出した。あんだ、荻原里美の……」

そう言いかけた青野の口を桜井は手で塞いだ。

「静かに。まだ敵が近くに居るかもしれない。ここに隠れていて」

目の前で人が射殺される光景を何度も見せられて荻原、片平、知世は憔悴しきった顔をしている。黒部は3人の前に立って、どうすべきかと途方に暮れていた。

「大丈夫かい？」

荻原が無言で頷いた。黒部は道の真中で辺りを警戒しているバディの方を向いて首を横に振った。そこへ桜井が駆けつけてきた。

「里美！」

その声に萩原も桜井の存在に気が付いた。

「雄一！」

その声に呼応するかのように銃声が響いた。桜井と黒部は咄嗟に近くの物陰に見を隠した。そして様子を探るために物陰から少し顔を出した桜井は道の真中で誰かが倒れているのに気づいた。

「あつ」

黒部のバディだった。桜井は彼を助けようと飛び出そうとしたが、黒部が背囊を掴んで無理やり戻した。

「もう遅い。あいつは死んでる。それより狙撃手を見たか？」

「いいえ。すみません」

「いいさ」

黒部は辺りをきょろきょろ見回した。萩原ら3人も後ろに隠れていて、的になりそうな奴は居ない。黒部は覚悟を決めて、桜井の肩を叩いた。

「外すなよ」

それだけ言うと、黒部は道に飛び出した。

三四・合流（後書き）

連載開始から早1年経ちました

読者の皆様、これまで応援ありがとうございました
そしてこれからもよろしくおねがいします

三五・決断

黒部は道の真中に倒れているバディに向かって駆け出した。
ハン曹長と観測手の伍長はそれを見逃さなかった。

「仲間思いだな。だが、それが仇になる」

ハンはドラグノフを構えて黒部を狙い引き金を引く。だが、素早くフェイントをしかけ方向転換をしてジグザクに進む黒部を一撃で仕留めることはできなかった。しかしドラグノフはセミオート式の狙撃銃で、自動的に次弾が装填されるので連続して射撃を行なえる。

次々と弾丸が黒部を掠め地面に着弾している。彼は凹になっているのだ。桜井はその間に敵狙撃銃の発射炎を見つめようと思死にになっていた。あたりを見回し顔をなんども左右に何度も往復させて敵を見つけ出そうとしていたのである。そして、あるビルの非常階段の踊り場部分にそれを見つけた。

桜井は64式改狙撃銃をマズルフラッシュに向けた。外すつもりはなかった。

観測手はハン曹長が焦りつつあることに気づいていた。相手は巧みにこちらの狙撃を避けている。だが長くは続かない筈である。観測手はハンを落着かせようと肩を叩いた。だが次の瞬間、ハンが後ろに飛ばされて倒れたので観測手は驚いた。右目に銃創が空いていた。

「遅いよ」

黒部がすばやく桜井のところへ戻ってきた。

「すみません。それよりこれからどうしますか？」

「自衛隊、味方の戦線まで行くしかないだろう」

さも当然のように黒部は言った。桜井は意気消沈している荻原ら3人の姿を見つめた。

「民間人はどうします？」

「どうしようもないさ。ついて来る奴、ついて来ない奴、好きにすればいい」

そこへ青野と美緒がやってきた。

「あのお、味方のところへ行くって、どうやって？」

辺りには高麗軍の爆撃で破壊された自動車の残骸が散らかっている。

「決まってるだろう？ 歩くんだよ」

「街中は高麗軍と遭遇する可能性がありますからね。となると」

桜井は南の方角に目を向けた。その方には標高597mの油山を中心に山々が連なっていた。そこが彼らの行くべき道であった。

「マジで！」

青野がそれを知って悲鳴をあげた。

首相官邸 閣議室

首相官邸の閣議室には主要閣僚が集まっていた。目的は統合幕僚長の報告を聞いて、今後の対応について練ることである。

真田情報本部長が先ほど中央指揮所で説明したように高麗の狙いについて説明し、その後に神谷が自衛隊の戦略について説明した。

「ちょっと待ってくれ！それじゃあ、高麗軍が各地に上陸してゲリラ作戦を行なう可能性がまだあるってことだよな。九州に部隊を集結したら、それじゃあ他の地方の防衛はどうなるんだ？」

大臣の1人が声を荒げて尋ねた。

「お察しください」

神谷の返事はその一言であつた。それに特別に反応したのは栗田法務大臣であつた。

「自衛隊の任務は国民を守ることだろう。福岡や北九州の人々を見捨てて、さらに多くの国民を見捨てて。任務の放棄じゃないか！」

「戦力がないのです。自衛隊は精一杯やっていますが、全てを守るには戦力がまったく足りないのです」

そのやりとりを聞いて古橋がまるで達観したかのような口調で言った。

「しかたありませんな。つまり自衛隊はまるで役に立たない。こうなったら、やはり党が主張するように外交的解決を目指すのが筋で

しょう」

その言葉を聞いて菅井や中山をはじめとする自由民権党に属する閣僚が一斉に古橋を睨みつけた。これまで散々に自衛隊の足を引っ張っておきながら、まるで役に立たない、と自衛隊を批判するというのか。

「まあ、それくらいにしたまえ。政府方針だが私は既に決めているんだ。井戸さんとも話した。みんなも知っているように、我が国は憲法で平和主義を標榜している」

その言葉を聞いて外交解決を主張した面々が笑みを浮かべて何度もうんうんと頷いている。だが彼らは次の一言で冷や水を浴びせられることになった。

「だからこそ、暴力による脅迫に屈するわけにはいかない。私は国民の生命財産を守るために外交努力と並行して自衛隊による実力行使による高麗軍の排除を進めるつもりだ」

その発言に閣僚の誰もが驚いた。

「この方針を覆すつもりはない。私の方針に不満があるのであれば、すぐにでも辞任していただいて結構」

これにて政府の方針は決まった。あとはいかに国会を説得するかである。

福岡市内

福岡はすっかり雲に覆われてしまい、いまにも雨が振りそうであった。

「それは確かなのか？」

ドン・テヒョンらのコマンド部隊が福岡市内要所の制圧という任務を終えて、後を海兵隊に引き継いだその時のことであった。テヒョンの直属の部下である女性下士官、キム・ヨンス金英修伍長がハン曹長の分隊が全滅したことを伝えた。

「唯一、生き残っていた観測手を収容しました。同志パク軍曹が分隊を率いて確認に行きたいと申ししておりますが」

「許可する。私も同行する。来い」

テヒョンは停められていたジープの高麗軍版であるK121多目的車に乗り込んだ。

ヨンスが運転する車輛を先頭に何両かのK121が道を進んでいる。やがて先ほど、ハン曹長の部隊と桜井らが交戦したあたりに到着した。車の残骸や死体は放置されたままで、悲惨な状態であった。

「ドン少尉。ハン曹長の遺体を発見しました」

その声を聞くと、テヒョンはその声の方に駆け出した。ヨンスもそれに続いた。

ヨンスがテヒョンに追いついた時、彼はハンの死体を前にして目をつぶり胸に手を当てて鎮魂の言葉を唱えていた。

「同志少尉殿？」

ヨンスが声をかけると、テヒョンは幾秒かの沈黙の後、ハンについて語り始めた。

「同志ハン曹長とは長い付き合いだね。アフリカで一緒に反政府組織に対するゲリラ戦の指導もした。10年前に南と戦争になったときも、内戦のときも、一緒に戦った」

「自分もハン曹長から学びました。私の恩師です」

「敵は自衛隊の狙撃手だったな。これから仇をとりに行くぞ」

「お供いたします」

テヒョンは大きな無線機を背負った兵士を呼び止めた。

「私の小隊を全員招集するんだ。ここが片付き次第、狩に出かける」

無線手が小隊の主力を呼び出している間、テヒョンは南の方の山々を見つめていた。

「同志少尉？」

「ヨンス。我々は福岡の要所を制圧すべき市内の各所に展開している。相手もそれを察知している筈だ。となれば逃げ道は山だな」

名古屋市内 あるアパートの一室

テレビはあいかわらず北九州有事のニュースで一色であった。特にここ数時間のうちに福岡市内で撮影された衝撃的な映像と自衛隊が福岡と九州からの撤退というスクープが舞い込んできたので、報

道は過熱していた。

＜これまで国民を守るためという名目で増強されてきた自衛隊。しかし実際には守られることはありませんでした＞

テレビの画面には吉田アナウンサーが射殺される瞬間が流されている。

＜一般市民を置いて逃げ出した自衛隊。今こそ自衛隊の存在意義が問われる時なのかもしれません＞

真と辰巳は所在ない様子でテレビを眺めていた。

「ねえ、福岡と北九州って見捨てられちゃったの？」

辰巳の言葉に真はめんどくさそうに答えた。

「今の自衛隊の戦力を考えれば、どこかを見捨てにやらんだろうな」

「そんな。政府の怠慢じゃないか。そんなことが許されるんだろうか？」

それを聞くと真が突然に真剣な顔つきになった。

「本当にそう思うかい？ まるで他人事じゃないか」
「え？」

「その政府を選んでいるのは国民だ。この国は民主主義国なんだ。そういう連中を選んだのは国民の責任だよ。この国には自分の責任についてなにも考えず、まるで自分は被害者みたいな顔して政府批判している奴が多すぎやしないか？」

「自業自得だと言いたいのかい？」

「日本という国家が使える資源は有限さ。それで国民がある事への割り当てを優先すべきと考えれば、他の事への割り当てが減らされるのは当然のこと。今まで自衛隊の充実を求めた有権者がどれだけいるだろうかね？」

もし国民が選択を誤ったなら、そのによって誰かが傷つくことになる。それが民主主義ってもんだろ？」

辰巳はすっかり黙り込んでしまった。

三六・山中の逃亡

福岡市南西部

遂に雨が降り出した。桜井たちは右手に油山、左手に片縄山を眺める道を進み萩ノ原峠を目指していた。

桜井と黒部はまず負傷した隊員の中から動かせる者を選別した。比較的傷の浅い者には銃を持たせた。それに民間人の中から同行を希望した者も加わる。何人かは銃を携帯させてもらえるように黒部に求めた者もいたが拒絶された。萩原たちも加わった。片平は反対したが萩原、青野、美緒に説得されて渋々ついて来ることになった。動かない負傷者は応急処置をして、後は高麗軍の良心に賭けることにした。

さらに黒部は死亡した高麗兵の持っていたスコープ付K2小銃を取り上げると桜井に手渡した。桜井は64式改狙撃銃を持っているが、一応狙撃銃であるので連射を繰り返して銃身が磨耗して精度が悪化することを心配してのことである。それに補給が途絶えた孤立した状況なのであるから敵から弾薬を奪って使用できるというのは都合が良かった。

さらに都合が良いことに高麗軍の前身である韓国軍は西側の軍隊である。であるから西側共通の5・56ミリNATO弾を使っている。K2小銃の弾倉もアメリカ軍が使うM16のものと同一、つまり黒部の使うM16の縮小版であるM4カービンとも同一なのである。しかもM16の弾倉は自衛隊の主力小銃である89式小銃のものと互換性がある。

かくして30名ほどの集団が自衛隊の守る地域を目指して南下をしているのである。

出発から2時間ほど経ったが、敵中の強行軍ゆえに慎重に進んでのでペースはどうしても遅くなる。まず黒部が先へ進み安全を確認

した後、比較的傷の浅い自衛隊員の護衛の下で萩原ら民間人が負傷者を抱えて進み、最後に桜井が殿として後方を警戒しながら進む。その繰り返しだ。

「敵だ！」

桜井が叫んだ。それを聞いた黒部が道の側面に広がる林の中に隠れるように指示を出した。皆が隠れたところに高麗軍のK121四輪駆動車が1台、道を走り去った。

「ここも敵の通り道ってことか。やむをえない。山の中を進もう」

誰も反対はしなかった。たぶん異存のある者はいたのだろうが文句を言う気力が無かったのであろう。

それから30分後、暗くなりつつある先ほどの道にテヒョンが指揮するコマンド小隊の縦隊がやって来た。先頭を進んでいた兵士がなにかを見つけた。それを見たテヒョンは縦隊を停めると、その兵士のもとに駆け寄った。

「なにを見つけた？」

「見てください。足跡です」

兵士が懐中電灯で照らした先には新しい足跡の群れが山の中に向かって伸びていた。

「ここから山に入ったな。足跡を辿って進むぞ」

コマンド隊は山の中へ進んでいった。

しかし雨天のために足跡は次第に消えてゆく。しかたなくコマンド隊は少数ずつに分散して逃亡した敵を捜索することになった。

桜井たちは山の中腹に設けられたキャンプ場を横切っていた。利便性のためか日光が当るようにするためか、木々が切られ草地になっていて、森と森の間の中間点には道が作られていた。まず黒部が先を進み、その後に民間人と負傷者、そして殿として桜井が進む。

それを監視する者がいた。高麗兵のコマンドである。彼らは2人ずつに別れて捜索を行っていたが、そのグループの1つが遂に桜井たちを捉えたのである。相手は30名で、こちらは2人。劣勢なのであるから、まず無線でデヒョンに報告して追跡を続けつつ友軍の援護を待つべきであった。しかし彼らはそれを無視した。数で劣勢とは言え、相手側のほとんどが武器を持たない民間人か負傷者で実質的な戦力は数名程度である―さすがにまともに戦えるのが自分達と同じ2人だけとは思わなかった。さらに現状は見通しが効く場所であるし、夜が近づき暗くなっている森の中に逃げられたら見失う恐れもある。それに相手も自分達と同じように物陰に隠れて開けた場所を渡る者がいないか見張っているかもしれない。それで追跡のために出ていって掃射を浴びるのは御免である。彼らはここで桜井らを銃撃する道を選んだ。

桜井は道の脇にあるベンチの傍に立って進行方向とは反対側の森を睨んでいた。何かが居る気配がするのだ。敵であろうか？桜井が民間人たちの様子を見ようと振り向くと、民間人たちの一群が森と草地の境に達しようとしていた。そこには黒部が立って警戒をしていて、こちらを見て“何かあったか？”と目で言っている。桜井が“分からない”と首を振って答えたその時に銃声が轟いた。何発かが桜井の傍のベンチに当り、桜井は咄嗟にその後ろに隠れた。そしてすぐさまK2小銃を構えて撃ち返した。

「早くこっちに来るんだ!」

黒部が民間人たちに向かって叫んでいる。彼らはその場にうずくまって動けなくなってしまうている。M4カービン銃を反対の森に向けつつ、先頭に居た1人の民間人の腕を掴むと、そのまま森の中に押し込んだ。他の人々もそれに続こうとしたが、萩原は1人後ろを向いていた。

「雄一!」

だが、呼ばれた桜井はその声を意に介せず敵の銃撃を浴びながら64式改狙撃銃に持ち替えて反撃を続けていた。敵兵1人が倒れた。黒部は萩原の手を掴むとそのまま引きずって森の中に押し込んだ。そして桜井を援護すべく反対の森に銃撃を浴びせた。軽傷の自衛隊員2人がそれに加わる。さすがにそれに耐えかねたのか残りの高麗兵1人が撤退しようとして遮蔽物として利用していた木の陰から飛び出した。桜井はその瞬間を見逃さなかった。引き金を一回引くと逃げようとした高麗兵が次の瞬間に倒れた。

それと見届けると桜井はベンチの陰から飛び出して、倒した敵兵2名の遺体を確認し小銃の予備弾倉を奪うと、黒部らのもとへ急いだ。

「敵に感づかれましたね。急ぎましょう」

集団はまた黒部を先頭にして進みだした。

十数分後、別の1隊が戦友の亡骸を発見し、テヒョンら主力がそれから10分後に追いついた。彼らは仲間の死を悼みつつも敵を確

実に追い詰めている感触を得た。そして復讐を誓い、森の中へ進んでいった。

それからさらに30分ほど経った頃、桜井たちの一群はすっかり暗くなった森の中で小休止をとっていた。黒部にしろ桜井にしろ休息せずに突破したかったが、民間人や負傷者にそれを求めるのが酷だった。みんな疲れきっているのか、ほとんどなにも喋らないので、辺りには雨音だけが不気味に響いていた。

桜井が一群の端に座って敵を警戒していると、そこへ萩原がやってきた。

「隣、いい？」

桜井はなにも言わなかったので、肯定と捉えて萩原は桜井の隣に腰を下ろした。

「雄一、変わっちゃったね」

その一言にはさすがに驚いたのか、ゆっくりと萩原の方を向いた。

「どういうこと？」

「さっきね。戦っているときの雄一を見てさ、普段とは全然違う顔をしているなあと思ってさ。片平さんじゃないけど、その人殺しの顔なのかなって」

それを聞いた桜井は何も言わず黙りこんでしまった。萩原はそれを見て、さすがに拙いことを言ってしまったようだと思った。

「その、ごめん。別に雄一を責めているわけじゃないよ？その、な

んというか…ごめんなさい」

「いいよ、別に。その通りかもしれない」

それだけ言うと桜井はまた黙り込んでしまった。やはり自分の言葉が雄一の心を傷つけてしまったのかと、荻原が声をかけようとしたが桜井の手で遮られた。

桜井は銃を構えて森の中に向けると、手で荻原に他の者のところに戻るよう指示した。荻原がそれに従って離れていくと、状況の変化を察したらしい入れ替わるように黒部がやってきた。

「敵か？」

「おそらく」

2人とも森の中に何者かの気配を感じていた。しかし、その敵はなぜか襲ってこない。しかもやがて退いていった。

「なぜ攻めてこない？」

「どうしたんでしょう？ 動物かなにを勘違いしているのか・・・」

桜井の推測に黒部は首を横に振った。

「いや。あの殺気は俺達を殺そうとしてたぞ。敵のはずだ…」

「とにかく、すぐに出発しないと」

桜井らが高麗コマンドと謎の接触をした時から少し時間を遡る。テヒョンは無線手が持つ大型無線機に向かって怒鳴っていた。

「納得できない！ なぜ撤退しなければならぬのか！」

相手はコマンド部隊の総司令官であった。

＜司令部が撤退する自衛隊部隊の観測のために油山一体の山々を占領することを決めた。そのために海兵隊1個大隊を投入するそうだ。君らのような少数のコマンドが居ては海兵隊の邪魔になる。友軍相撃の危険もあるしな＞

「司令！我々は今、敵を確実に追い詰めているのです。あと僅かな時間があれば確実に制圧することができなのです」

＜敵は負傷兵と民間人の集まりだそうじゃないか？海兵大隊の敵じゃないし、わざわざ君たちが制圧に向かう必要は無い。見逃しても構わない目標じゃないか？＞

「敵の中には少数ですが優秀なレンジャーが混じっている。これを見逃せば、後で我々が大きな被害を受けるかもしれない。それにです。これまでの戦いでボロボロになって海兵隊をぶつけても負傷者が増えるだけだ」

あくまでも作戦継続を主張するテヒョンに対して司令官も業を煮やしたようだ。

＜いいか！これは決定事項なんだ。すぐに撤収したまえ。さもないと君を解任するぞ！＞

そこまで言われてはテヒョンも身を引かざるをえない。

「分かりました。撤収します」

それだけ言うと受話器を戻して、隊内無線で撤収を命じた。

コマンド部隊が山を降りて道のところまで来ると、すでに海兵隊

を乗せたトラックが到着していた。トラックから降りた兵士たちが次々と山に入っていく光景をテヒョンは意に介さず桜井らが進んでいるであろう油山の森林を見つめていた。

「絶対に死ぬなよ。お前を仕留めるのは俺だ！」

テヒョンはまだ見ぬ仇に向かって叫んだ。

三七・包囲網

東京 首相官邸

7時を過ぎると東京の街も暗くなった。九州とは違ってまだ雨雲の襲来を受けていなかったのも、屋上に上がり風景を楽しむこともできた。

ブリーフィングを終えると閣僚たちは様々な表情をしつつ解散していった。神谷統幕長はさらに総理と2人きりで話し合いをしようとしたが、いつのまにやら総理の姿が消えていた。探し回って、やがて秘書官から屋上に上がっていることを知らされた。

首相官邸の屋上へリポートに立って煙草を片手に烏丸は東京の夜景を眺めていた。後ろから神谷が近づいているのにも気づいたらしく、背を向けたまま話し始めた。

「昔のことだ。私が党の執行部に名を連ねたばかりのころのね」

烏丸はある国の王女が来日した時、その王女と非公式の会談を行ったことを話した。

「彼女は熱心な平和運動家で、NGOの活動にも積極的に参加しているお方だったんだが、彼女は日本についてもかなり勉強なさっていてな。憲法9条について質問された。なぜ日本は戦力不保持という素晴らしい概念を掲げていらっしゃるのに、それを無視して軍備を持っているのですかと？」

「なんと答えたのですかな？」

「人は愚かだから」と答えた。“日本はかつて強大な軍事力を持っていた国だからね、一度持ったものは容易に棄てられない”とも。

しかし今はその愚かさのために救われているわけか」

烏丸は自嘲気味に笑った。それを聞くと神谷もニヤリと笑った。

「私なら“そんなに素晴らしいとお思いなら、オタクの国で実践してみてもどうでしょう？”と返しますよ。だいたいその国と言えど、当ても今でも軍事増強を続けている国じゃないですか？随分、勝手な言い草…」

そこまで言って神谷は口を噤んだ。職業軍人が口にしていい台詞ではない。

「いいんだよ。人間なんて本質的には愚かで勝手なものさ。だから欲望は決して尽きず、すぐに争い、場合によっては戦争になる。そんな歴史を繰り返してきたんだ。」

私はそんな状況をなんとかしないといけないと考えて、憲法9条に頼った。だけど憲法の平和主義は単なる理想論だ。今、九州で傷ついている人達の助けにはなりやしない。だから私は戦争を繰り返すことに決めたよ。

だがね。私はただ繰り返してきただけだとは思いたくない。私は傷つく度に人は学んでいくものだと思いたい。1歩進んで、昨日よりはマシな世の中を創っているのだと思いたい。そして学ぶためには今という時を明日に繋げなくてはならないんだ。この国を明日に残していかなくてはならないんだ。

今になってようやく自衛隊という組織の存在意義を理解したのかもしれない。明日を守るために君たちが必要なのだよ」

「我々の努力が明日の希望となるのなら、すばらしいことです」

烏丸は神谷に向き直った。その顔は真剣そのもので、神谷も自然と堅くなった。

「幕僚長。君は我が国がいつか自衛隊という武力を放棄できる日にくると思うかね？」

「分かりません。しかし努力は続けるべきだと思います」

神谷は一息つくと、真剣な表情を崩した。

「ただし、放棄するのは私が退職した後にしてほしいですね」

2人とも、街中に響きそうな大声で笑い出した。

「最後に聞きたい。自衛隊は高麗軍に勝てるのかな？」

「勝ちますよ。総理が戦えと命じたのですから、必ず勝ってみせます。ではその件について総理と詰めておきたいことがありますので下に降りませんか？」

烏丸は煙草を携帯用灰皿―皿というより袋だが―に押し込むと、神谷の提案に応じた。

福岡

高麗海兵隊の歩兵小隊が桜井らを捉えていた。雨が降る暗黒の森の中で、桜井と黒部は暗視装置を身につけて迫ってくる敵を狙い撃ちしていたが、たった2人で撤退しつつ民間人を守りながら大規模な敵と戦うのは困難であった。

すると高麗小隊は態勢を整えるためだろうか、後退していった。しかし、桜井と黒部はこれで敵から逃れられたとは思わなかった。そして2人はこの短時間でお互いの目を見交わしただけでそれぞれの意志を確認できるまでになっていて、しかも状況を分析してどち

らも同じ結論に達していた。

目を交わしてそれを確かめると、黒部は民間人グループの中にいる自衛隊員の最上位者のもとへ駆け寄った。その男は黒部と同じ1等陸曹で足に怪我を負っていた。

「俺と桜井3曹はここに残って奴らを引き止める。君たちはその間に突破して何とか逃げのびてくれ」

黒部の突然の提案に自衛隊員たち、それに萩原たちが驚いた。

「どういうこと？ 雄一、どういうことなの？ 一緒に行くんだよね」

詰め寄ってくる萩原を桜井はやさしく抱きしめた。

「ごめん。だけど戦わなくちゃいけないんだ」

するとその様子を見ていた知世がやって来た。それまでずっと無言であった知世の突然の行動に皆が驚く中で、知世は萩原の手をそっと握った。

「里美さん、信じましょうよ。彼は貴方を守るために言っているのだから」

萩原の体から急速に力が抜けていった。その様子を見て比較的軽傷な自衛隊員数名が黒部のところへやってきた。

「私もともに戦います」

「私もお供します」

だが黒部は首を横に振った。

「君たちの気持ちはありがたいが、だが君たちは負傷者だ。軽傷とは言え、レンジャーの戦闘についていくのは無理だ。君たちは民間人たちを守ってやってくれ」

そう言われた自衛隊員たちは悔しがっていた。黒部らと戦えないことを悔やんでいるのだ。その様子に片平はなにか苛立っていた。その姿はまるでかつての特攻隊のよう。そしてそれを我慢しきれずに遂に叫んだ。

「なんで！なんでなの！」

突然の叫び声に皆は再び驚かされた。

「なんで、そうやって平気な顔で死地に行こうとするの？！おかしいじゃない。どうしてそんな簡単に命を投げ出せるの？」

しばしの沈黙の後、それに答えたのは桜井であった。

「それが仕事だから」

それに黒部が続く。

「あんたが何を想像したのかはだいたい分かるが、だが俺たちはレンジャーだ。あんたの言うところ殺しのプロだよ。勝算はあるさ」

そう言ってニヤリと笑った黒部の顔は自信に満ちていた。

高麗海兵隊大隊の指揮官であるオ・ギヨンピョル少佐は苛立っていた。実質的には数名の戦闘員によって守られている民間人集団を未だに制圧することができないからだ。

「大隊長。もう放っておきませんか？ 僅か数名の兵士が逃げ延びたからといって戦局に影響を与えることはありません」

参謀はそう進言したが、ギヨンピョルは聞きいれなかった。

「いや、たかが数名の敵兵の前に精鋭海兵隊が屈するわけにはいかない。それに放置してみろ。日本にとっては絶好の宣伝材料だ。日韓両軍の士気に大きな影響を及ぼすことになりかねん。全力をもって叩き潰す。必要なら迫砲による支援も与える」

ギヨンピョルは意地でも桜井たちを倒すつもりであった。

「分かりました。幸い陣地獲得の方は順調ですから、予備を抜いても1個中隊は投入できます」

「よろしい。ただちに行動を起こしたまえ」

海兵隊歩兵中隊が森の中を進んでいる。1個分隊が先導として敵の足跡を頼りに前へ行く。彼らは“逃げ隠れている敵”を威圧するためか大声をあげながら進んでいた。圧倒的な優勢が彼らに慢心を抱かせていた。その為、雨天にも係わらず足跡がくつきり残っていることに誰も疑問を抱かなかつたし、暗視装置のために視野が狭まっていることを気にも留めなかった。

先導分隊からの後ろから距離をとって小隊主力、さらにその後方に中隊の主力が進んでいる。そして先頭の歩兵が木と木の間に張ら

れたワイアーに足を引っ掛けた。それが始まりだった。

爆発音が森の中に轟き、高麗の兵士たちが一斉にその場に伏せた。木の根元に仕掛けられた2つ手榴弾の安全ピンがワイアーに引っ張られて外れて爆発したのである。先導分隊の3分の1がそれに巻き込まれて死に、残りの全員が負傷した。

さらに爆発が続く。黒部が持っていたL9A1迫撃砲である。それが後続の小隊の上に落下したのだ。黒部はさらに1発の51ミリ弾を小隊に打ちこむと、今度は目標をさらに後方の中隊主力に移した。そこに1発打ちこんだだけで弾切れになってしまったので実質的にはそれ程の効果は無かったが、突然の奇襲という要素が加わって高麗海兵隊中隊を混乱させることに成功した。

「見ろ。これが“衝撃力”さ」

L9A1を設置している小さな窪みから顔を出して逃げ惑う敵兵の様子を眺めて黒部が言った。

「さあ、敵が立ち直る前に暴れるとするか」

黒部が窪みから飛び出して、桜井もそれに続く。

桜井はすぐに木の影に隠れると64式改狙撃銃を構えた。標的は指揮官たちである。暗視装置を通してでも混乱する部隊を必死にまとめようとしている士官は戦場の中では目立って見える。桜井は3発の弾を発射して、その結果として2人の高麗小隊長が戦死して1人が負傷して倒れた。その後は冷静さを取り戻した敵兵を狙うことにした。

桜井の狙撃の下、黒部は最初に手榴弾攻撃で壊滅した分隊のところにへ急いだ。目的は小銃の弾倉だった。

比較的軽傷の敵兵が小銃を構えて黒部を迎え撃とうとしたが、引

き金に指をかける前に黒部に眉間を撃ちぬかれた。敵分隊が倒れているところに着くと武器をM4カービンから9ミリ拳銃に切り替えて死んだ亡骸や負傷して呻き声をあげている敵兵の荷物を探り、実弾が装填されている弾倉を探した。1人の高麗兵が起き上がって反撃しようとしたが、すぐに9ミリ拳銃で射殺された。

黒部は6つの弾倉を見つけてL9A1の砲弾を入れていた袋に詰めるとその場を離れることにした。行きがけの駄賃として死んだ高麗兵から奪った手榴弾を残して。手榴弾が投げ込まれるのを見て2人の高麗兵が逃げようと立ち上がった。彼らは軽傷であつたらしく、立ち去る黒部を後ろから襲おうとして死んだフリをしていたのだが、手榴弾のために逃げ出さざるえなかった。そしてそれを黒部の9ミリ拳銃が狙っていた。2人の兵士は射殺されてその場に倒れた。手榴弾は爆発しなかった。

自分のところへ戻ってきた黒部の姿を確認すると桜井は訪ねた。

「なんでピンを抜かなかったんですか？」

「武士の情けって奴だね。それより敵が立ち直りかけている。お遊びの時間は終了だ」

中隊長が混乱する部隊をまとめようとしていた。彼は部隊に左右に展開して敵を包囲するように指示を出している。桜井は中隊長を狙って撃ったが、彼の通信士に当たった。桜井と黒部はそれを最後にしてその場から離れた。

三七・包囲網（後書き）

久々の日韓大戦の更新です。

さて劇中で特殊作戦群の黒部がL9A1小型迫撃砲を駆使しておりますが、はつきり言いますとこれは嘘描写です。めんどくさがりやの私はネットを主な情報源としていまして特殊作戦群の装備はウィキペディアを参考にしました。そこで装備の1つとしてL9A1が挙げられていたのです（過去形）。私はそれを小説に取り入れたわけですが、後に判明したL9A1の詳細情報（英国本国では退役していた、とっくの昔に代替の装備に更新されている）から考えますと自衛隊が装備している可能性は低く、肝心のウィキペディアからもL9A1の記述が削除されていることから考えますと明らかにガセです。しかしながら、現在版の擲弾筒というコンセプトはおもしろいものですし、今さら書き換える気にもならないので劇中の自衛隊はL9A1を装備している、ということで押し通すことにしました。

それにしても朝日新聞社から2ちゃんねるに対して荒らし行為が行なわれていることが発覚したり、金正日の長男、金正男が北朝鮮の弾道弾発射に対する日本の対応を「自衛のために当然の行為」だと発言したりと世の中が凄いことになっていますね。

三八 追い詰め追い詰められ

筑紫郡 那珂川町

すっかり夜も更けてしまった。北九州有事一日目が終わろうとしている。萩ノ原峠を越えて道を南に進むと西畑という小さな集落に出て県道56号線と交わる交差点に出ることができる。そこには西部方面普通科連隊から一個小隊が偵察と避難誘導の支援のために派遣されていた。福岡市街から避難する時に経路としては相応しくない県道56号線は特に渋滞することなく集落の避難もすでに終わっていた。

「凄い轟音ですね。山の中で戦闘が行なわれているのでしょうか？」

小隊長付の陸曹が油山を眺めながら言った。彼の部下が今、偵察のためにそこへ言っている。

「かもしれない。友軍なら接触できるというのだが」

すると山へ派遣した斥候隊に加わっていた隊員2名が交差点に設置された小隊本部まで駆け戻ってきた。2人だけの帰還に小隊長と陸曹は最悪の事態を思い描いた。

「どうしたんだ？他の隊員は？」

小隊長は“まさか全滅したのか”という言葉の口から出そうになるのをなんとか押さえた。するとその隊員の1人が意外な言葉を口にした。

「民間人を保護しました。残りの隊員はその護衛をしています」

やがて彼の言葉通り、斥候隊の残りが民間人と負傷した自衛隊員を連れて現われた。

「これで全員か？」

小隊長の問いに斥候隊の1人が答えた。

「どうやら2人、まだ戦っているらしいですよ」

確かに銃声と爆音がまだ聞こえてくる。

「敵は最低でも中隊以上。どうしますか？」

別の斥候隊の隊員が報告した。言外にこう言っている。“助けに行きますか？”

こちら側にあるのは軽武装の1個歩兵小队。相手は最低でも1個中隊以上で、おそらく迫撃砲などの重火器の援護もあるだろう。いくら自衛隊有数の精兵が揃う西普連とはいえ、真っ向から立ち向かえる相手では無い。それに民間人は保護している。彼らを安全地帯まで連れて行かなくてはならない。それを達成すれば2人を犠牲にした対価としては十分ではないか？

「いったん中隊長と連絡をとる。撤収の準備をしておくんだ」

桜井と黒部は互いに援護しながら後退を続けていた。1人が高麗兵に銃弾を浴びせ、もう1人がその間に後方へ駆ける。それで一定の距離を走ったら止まって後ろを向いて敵に銃弾を浴びせ、もう1人の後退を援護する。2人とも訓練を受けたレンジャーらしく、フルオート射撃を繰り返すような真似はせず最低限の射撃で確実に敵

の数を減らしていく。

黒部が木の陰に立ち正面から向かってくる高麗兵に銃撃を浴びせて後退する桜井を援護する。すると横から回りこんできた高麗兵2人が襲ってきた。黒部は即座に銃口の向きを変えて2人の高麗兵を倒した。黒部はその2人の亡骸から予備弾倉^{マガジン}を持ち去るのを忘れなかった。

オ・ギヨンピョル少佐は怒りが爆発しかけていた。1個中隊の兵力を投入したにも係わらず敵を制圧するどころか自軍の犠牲が増える一方だからだ。

「前線部隊から更なる報告です。“敵を確実に追い詰めつつあるが、当方の被害甚大。増援を送られたし”」

部下の報告について怒った。

「いい加減にしろ！精鋭海兵隊とあろうものが、たかが数名の敵にどれだけの血を流すつもりなんだ？もういい。兵を下がらせろ。重迫撃砲の射撃で一帯を吹き飛ばす」

桜井と黒部は突然、一帯が静かになったのに気がついた。敵の姿が消えたのである。そして機の陰から様子を伺っていると、ヒュルヒュルという音が聞こえてきた。

「ヤバイ！」

2人とも駆け出した。次の瞬間、2人がさっきまで隠れていた木が爆発して吹き飛んだ。それが引き金となり森の中で次々と爆発が

起こる。高麗軍の迫撃砲攻撃である。迫撃砲弾は大きく外れるものもあれば、至近距離に落ちて2人はしばしば衝撃でその場に倒れこんでしまう。しかしすぐに立ち上がってまた逃げる。

「あそこに飛び込め！」

黒部が指した方向には小さな窪みがあった。2人が隠れるには十分だ。2人はそこに飛び込んで、その場に伏せた。至近弾が落ちたのか、木々の破片が上から降ってくる。だが衝撃はない。爆発力は特に上方向や横方向に作用するので溝の中に潜ってしまえば、直撃弾でも受けない限りはその衝撃から逃れることができるのだ。

迫撃砲による高麗軍の攻撃はしばらく続いた。

「よし。これより撤収する」

西普連の小隊長は荻原たちにとっては衝撃的なものであった。

「どういうことなの？」

荻原が小隊長に詰め寄る。

「まだ雄一は戦っているのに！見捨ててるっていうの！」

小隊長はなにも応えることができなかった。

「これが現実よ。なにかと理由をつけて国民を見殺しにする。それが軍隊の正体。人々を守るとか言うけど、実際に守るのは体制だけ。そのためなら何人だって犠牲しても構わないと思っているのよ」

片平がここぞとばかりに小隊長を怒鳴りつける。後ろの青野、斉藤、知世も厳しい視線を小隊長に向ける。この圧迫はあくまでも冷徹な指揮官でいようとする小隊長の決心を挫かせた。

「我々だってやりたくてやってるんじゃないんだよ」

突然の叫びに彼の部下も含めまわりに居た全員が驚いた。

「仲間が戦っているのに見捨てるようなマネはしたくない。だが、そうするしかない。我々には戦力が無いんだ。だから誰かが時間稼ぎをするしかないんだ」

その勢いに周囲の人々は黙り込んでしまった。

「私には部下と君たちを守る義務がある。無謀な戦いに赴くことはできない」

迫撃砲の攻撃が終わり森の中には静寂が戻った。木々が折れ大地が掻き乱されて周りは酷い惨状であったが、幸い桜井と黒部が隠れていた窪みの中には一発も落ちなかった。すると何者かが近づいてくる気配がした。

近づいてきたのは高麗海兵隊が戦果を確認すべく派遣した偵察隊であった。彼らは一直線に並んで横隊で進んでいた。

桜井と黒部は窪みから顔を出すと、近くにいた2、3人を撃つてから手榴弾を投げ込んだ。高麗偵察隊が怯んだ隙に2人は窪みを飛び出して逃げた。

オ・ギヨンピョルの怒りは頂点に達していた。

「いったいどうなっているんだ?! たかが数名の敵をなんで制圧できないんだ!」

部下たちは言葉が出てこず黙り込んでいた。

「こうなったら森ごと焼き払ってやる。空軍に近接航空支援を要請するんだ!」

部下たちはなんの異論も挟まず、早速手配をはじめた。

新田原

新田原には航空自衛隊西部航空方面隊の全てが集結していると言っても過言ではなかった。高麗軍が接近しつつある春日基地から司令部も移転し、今や3つの飛行隊が揃ってしまっているのだから。かつては2個飛行隊が配備され90年代に1個飛行隊に削減された経緯があるので基地のスペースには幾分余裕があったが、それにも限界がある。また部隊が一ヶ所に集中すると敵の一撃で部隊が全滅するような事態になりかねない。そこで航空自衛隊は鹿屋や大村など海上自衛隊の飛行場や民間空港への部隊の分散を計画していた。さて臨時の方面隊司令部は空中の早期警戒機と密接な連携を保って高麗空軍の攻撃に備えている。常時空中には早期警戒機と迎撃機2機が飛び警戒を続けている。

「高麗空軍に新たな動き? 陸上自衛隊への攻撃か?」

それは上空で警戒中のE-2Cホークアイからの報告であった。アメリカ海軍が艦載の早期警戒機として開発したE-2は機体設計

が古く小型であるために指揮管制能力まであるE-767に比べる
と能力が劣るが、搭載するコンピューターやレーダーシステムには
順次改良が加えられており導入から30年ちかく経つ今日でも十分
に現役機として通用し、今も防空の中核となっている。それからの
報告に司令部は機敏に対応した。

「よし。陸上自衛隊に通告しろ。それと上空の機体に迎撃の用意を
させるんだ。ただし不用意な交戦は避ける」

高麗の奇襲で打撃を受けた航空自衛隊は、今は戦力の建て直しに
尽力していて高麗軍への積極的攻撃を控えていた。

「司令。目標は防衛線には向かっていないようです。今の針路です
と福岡南西部、油山上空を掠めます」

「まだ市内に友軍がいるのだろうか？」

それも含めて連絡官が陸上自衛隊に連絡をすると驚くべき答えが
返ってきた。

「なに！ たった2人で！」

油山で戦う桜井と黒部の話は航空自衛隊の指揮官の心を動かした。

「上空の戦闘機をただちに向かわせろ」

空中待機をしていたのは野々宮とそのウイングマンであった。

＜目標をただちに迎撃せよ＞

2機のイーグルはその命令を受けるとアフターバーナーを点火し
て急加速し戦場に向かった。

三八・ 追い詰め追い詰められ（後書き）

- ・感想欄のご指摘により一五話を一部訂正

三九 脱出

出撃した2機のKF-16は翼の下に4基ずつ19連装のロケット弾ポッドを装備していた。装填されているのはハイドラ70ロケット弾。直径70ミリの小型ロケット兵器で、元は対空兵器として開発され、今では対地対水上戦で使用されヘリコプターから戦闘機まで様々な航空機に搭載可能な万能兵器である。

いよいよ油山上空に達した2機は急降下すると数発のロケット弾を山中に撃ちこんだ。そして山を通り過ぎると急旋回して再び攻撃に向かった。

野々宮は新田原からの指示に従い飛行を続けていた。敵はE-737AEWが対馬上空で監視の目を光らせているが、彼らはあえて高度を保ってE-737のレーダーに探知されるように飛んだ。ようは敵を追払えばよいのだからこちらの姿を晒して敵が逃げてしまえばそれでも良いのである。だが敵は逃げなかった。

＜敵が新たな編隊を壱岐から発進させた。奴らは正面から戦いを挑むつもりだよ＞

おそらくその2機が我々を引き受けて最初の2機は攻撃に専念するということであろう。どのように立ち向かうべきか？野々宮は漆黒の闇の向こうにいてであろう敵機の姿を思い浮かべていた。

韓国空軍のE-737ウェッジテイルAEWは対馬海峡の上空を

飛んで一帯の制空権を守るべく活動をしている。韓国空軍が航空自衛隊のE-767に対抗して導入したのはボーイング737型旅客機を改造した機体で、機体の上には空自のE-767のような回転式レドームでは無く板状のフェイズド・アレイ・レーダーを載せている。

その機内でコンソールの前に座りレーダー画面と睨めっこをしているオペレーターは新田原基地上空が戦闘機2機が友軍機に向かって追っていた。おそらくF-15Jだろう。さらに新田原から4機の戦闘機が出撃した。オペレーターは司令官に繋がっている機内通信のスイッチに手を伸ばした。

「自衛隊がさらに戦闘機を発進させています。このままでは大規模な空中戦に発展するかもしれません」

「なにが言いたい？」

「ただちに下がらせるべきです。現状ではまだこちら側の防空態勢は整っておりません。無用な損害を出す前に手を引きましょう。それほど重要な目標ではないでしょう」

「くそう言われてもな。海兵隊の連中が納得してくれそうにない」

油山への攻撃そのものが海兵隊の強硬な意見によって反対論を押し切られた結果に行なわれているものだ。海兵隊はその一帯を火の海にすることに相当な執着を見せている。

「そうですか」

オペレーターが画面上の敵機の動きに注意を戻した。

「レッド1。敵機が射程圏内に入った」

壱岐からスクランブル発進した2機のKF-16は照準用レーダーを作動させて、敵のF-15Jを捉えた。距離はアムラーム空対空ミサイルの射程ぎりぎりだ。ここから発射してもたぶん命中しないであろう。しかし命中させる必要は無い。ようは敵を追払えばそれで良いのである。

「レッド1、フォックス3！」

2機のKF-16から2発ずつ、アムラームが発射された。

照準用レーダーが照射され警報音がコクピット内に鳴り響いた。2機のF-15Jは回避するため、別々の方向に分かれて急旋回する。アムラームはミサイル自身のレーダーで敵を追尾するアクティブ・レーダー誘導方式のミサイルであるが、遠距離からの攻撃では大型の戦闘機搭載レーダーに誘導されるので敵のKF-16の照準レーダーから逃れなくてはならない。

野々宮は西に機種を向けて有明海に急降下した。筑紫山地の山々が壁になりKF-16の照準レーダーは勿論のこと、対馬海峡上のE-737の索敵レーダーからも逃れることができたようだ。尾翼に備え付けられた逆探知用のESMアンテナはなにも捉えていない。

「マイホーム、こちらアーニー。敵の死角に入った。指示を」
「アーニー。そのまま北上しろ。だが油山上空のKF-16のレーダーには捉えられるかもしれないぞ」

後方のE-2Cホークアイからデータリンクを通じて地上の管制隊は敵機の全てを監視していた。油山上空で対地攻撃を行なっている2機のKF-16は自分達の任務はあくまで対地攻撃と割り切っているのか、逆探知を避けているのか対空レーダーを使用していな

かった。

「マイホーム、こちらアーニー。使ってくれたなら索敵の手間が省けるってもんです」

野々宮はアフターバーナーを点火してイーグルを急加速させて北上していた。

対馬海峡上のE-737ウェッジテイルの機内でも戦場の監視が行なわれていたが、一部を見落としていた。

搜索レーダー上には敵機が映し出されている。

「新田原からさらに2機が接近しています。別の2機は基地上空で待機しているようですが」

オペレーターは新手とともに最初に迎撃に出撃して先ほど散開した編隊にも注目していた。東に逃げた1機は引き続き捕捉しているが、西に逃げた機は失探^{ロスト}している。

「機長。敵を1機、見失っています。前進して搜索しましょう。迎撃機にも高度を上げさせて発見を急ぐべきです」

「くいや。それでは自衛隊の地对空ミサイルに狙われる危険がある。失探した敵機は回避のために離脱したんじゃないか?」

「ではせめて対地攻撃中の機に警告を」

そちらの主張は認められた。

油山上空のKF-16は4度目の攻撃を終えた。彼らは急旋回し

海の側から再び突入して5度目の攻撃を行なおうとしている。

<敵機が接近している可能性がある。注意せよ>

それを聞いたパイロットは不安に駆られた。

<レッドテイル1、こちらレッドテイル2。レーダーを使用し警戒をします。その間に攻撃を>

<レッドテイル2、こちらレッドテイル1。援護を感謝する>

レッドテイル2は対空レーダーを作動させた。

ESMアンテナは至近距離からレーダー照射が行なわれたことをはつきりと野々宮に知らせた。敵もその近さに驚くに違いない。AM-3、90式空対空誘導弾の射程圏内の距離に気づかれることなくまんまと侵入したのであるから。野々宮はESMから得られる敵方位に機種を向けた。

野々宮は激しく雨によって叩かれるキャノピー越しに敵機の姿を探った。しかし闇夜の中にその姿は認められない。しかもAM-3は敵機のエンジン発熱などを赤外線として捉えて追尾する短距離空対空ミサイルである。敵の熱さえ捉えればアムラームと同じで母機からの誘導を必要としない撃ちっ放し型ミサイルであるが、熱を追尾するというシステムなので雨や雲などを隔てると追尾能力は極度に低下する。今回の場合もミサイルの弾頭に備えられた敵の発する赤外線を捉えるシーカーは敵を発見していなかった。赤外線は雨などを通ると減衰されて遠くまで届かない。しかし野々宮は迷わずに発射ボタンに指を置いた。

「アロー1、フォックス2！フォックス2！」

左右の翼の下に2発ずつ吊るされているAAM-3のうち左右から1発ずつ、合計2発が発射された。

KF-16のレーダーは敵から2発のミサイルが放たれたことを捉えた。

「回避！回避！」

2機のKF-16は先ほどの野々宮たちと同じように左右に分かれて急旋回した。

野々宮は対空レーダーを作動させた。急旋回をしてAAM-3から逃れようとしている2機のKF-16の動きが画面上に映る。野々宮は近距離に居た1機に狙いを定めた。

AAM-3は追尾してくる気配もなく、それに続くレーダー照射。相手もこちらの意図に気づいたようだ。急旋回を繰り返しロックオンから逃れようとするが既に遅かった。野々宮は使用兵装にAIM-7スパローを選択して、照準の十字線をヘッドアップディスプレイ上の敵を示すマーカーに重ねた。電子音がコクピット内に響いた。

「アロー1、フォックス1！フォックス1」

イーグルの胴体側面に搭載されているスパロー空対空ミサイルのうちの2発が機体から切り離された。そして次の瞬間、ロケットモーターが点火され、敵から反射してくるイーグルの照準レーダーを追っていった。

最初の1発は外れたが、2発目が命中した。近距離での発射だっ

たため、それほど時間はかからず、敵のKF-16が爆発四散する光が一瞬見えた。

しかし勝利の美酒に酔っている暇はない。近くにはもう1機の敵機がいる。

「マイホーム。敵機1を撃墜」

くこちらでも確認した。もう1機の方は逃げたよ。お前の勝利だ！

対地攻撃を担当していたもう1機のKF-16は逃げ、空自迎撃に上がっていた別の2機もそれを援護しながら帰投した。自衛隊は空中戦で再び勝利したのである。

油山山中

桜井と黒部は窪みの中に隠れて空の様子を探っていた。その周りでは木々が倒れたり折れたりしている。高麗空軍のロケット弾攻撃の仕業だ。

「雨で良かったな」

黒部が漏らした。冷たく体力を奪う雨を嫌がっていた彼らであったが、ロケット弾攻撃が始まってから考えが変わった。

「山火事にでもなっていたらと思うとゾッとしますね」

桜井は少し焦げて倒れている木を見つめていた。この雨のためにロケットの爆発はその直接の衝撃以上の被害を出さなかったのである。

すると空から再びなにか落ちてくるような音が聞こえてきた。

それも真上だ。

「攻撃を再開したのか！逃げるぞ！」

黒部に促されて桜井が窪みを飛び出した。黒部も続く。しばらく走って後ろを振り向くと、空から何かが降ってきて轟音とともに今さっきまで2人が隠れていた窪みのうえに落ちた。メラメラ燃えているそれは、明らかに戦闘機の胴体の一部であった。それに続く主翼らしき巨大な板も近くに落下した。それには太極旗をモチーフとした高麗空軍の識別マークが描かれていた。

朝を迎え雨は止んでいた。空は曇っていて、またすぐにでも雨が降り出すかもしれないが、今は止んでいた。

桜井と黒部は萩原たちが救出されたあの那珂川町西村の交差点まで来ていた。さらに味方がいるであろう戦線を目指して道を進んでいると、前方から車の駆動音が聞こえた。咄嗟に道の脇に隠れて応戦の用意をした2人だったが、現われたのは自衛隊の73式小型トラックであった。2人が姿を現すと停車した。

その73式小型トラックは幌が取り外され、5・56ミリ機関銃ミニミが取り付けられていた。運転席と助手席に陸士がそれぞれ座り、指揮官らしい2曹が荷台に立ってミニミをいつでも撃てる状態にしていた。

「黒部1曹と桜井3曹ですか？」

2曹が訪ねてきた。

「そうだよ」

黒部が答えた。それを聞いた2曹の顔が緩んだ。

「自分は西普連本部付中隊の情報小隊に所属する羽柴2曹であります。黒部1曹、桜井3曹、探しておりました。もう戻るところだったんですよ」

そう言って2曹は73式小型トラックの荷台に乗るように促した。2人は2曹の手を借りて荷台に飛び乗った。

三九 脱出（後書き）

・延べ読者数、ユニークアクセスで4万を突破。読者のみなさま、ありがとうございます。

四〇・待ち伏せ

6月24日 午前6時

春日市 陸上自衛隊福岡駐屯地

かつて九州北部一帯の防衛を担う第4師団の司令部をはじめとする中枢が配置されていた福岡駐屯地であるが、今は西部方面普通科連隊の警戒部隊が残るのみとなった。

桜井と黒部を乗せた73式小型トラックは南の門から駐屯地内に入ると運動場へ向かった。運動場には西普連の車輛が擬装を施された状態で分散して停められていた。小型トラックが停まり、2人は荷台から降りた。彼らを待っていたのは3佐の階級章をつけた男であった。

「西部方面普通科連隊第2中隊指揮官の岡本3佐だ。君たちの話は聞いている。ご苦労だったな」

彼は自分の中隊が殿としてここを守っていると説明をした。彼の指差した先には小型の模型飛行機のようなものを手に持った隊員が立っていた。それは台形の大きな翼を持ち、翼端が曲がって上を向いていて垂直尾翼の役割を果たしているようである。そして小さなプロペラが2つ付いていた。

「これから空中偵察を行なうんだよ」

岡本が説明する。

するとその隊員は手に持った物体をまるで紙飛行機を飛ばす様に空へ投げた。プロペラが回転し、曇空の中を上昇していった。

「携帯飛行体ですか」

黒部が言った。防衛技術研究所が開発を進めていた手で持ち運べる携帯型の小型無人偵察機。近距離偵察用で遠隔操作式。最近、正式採用されたもので黒部も訓練で使用した経験があった。

携帯飛行体を空中に投げた隊員の隣で別の隊員が迷彩柄のノートパソコンに向かっていて、手はパソコンから伸びたコードに繋がれているジョイスティックを握っていた。

「それで操作しているんですか？」

桜井の質問に操作に集中しているらしい隊員は無言で頷いて肯定の意を示した。

あたりに居た隊員たちがパソコンの周りに集まった。隊員たちの目はパソコンの画面上に映る携帯飛行体のカメラ映像に注がれている。

「この画像は連隊本部と方面総監部にも配信されているんだ」

岡本が説明した。

携帯飛行体は福岡都市高速の上に沿って飛んでいて、まもなく福岡国際空港がカメラの視界の中に入った。

「敵の装甲部隊だ！」

カメラには10輜以上のK1A1戦車とその倍ちかくあるK200装甲車を捉えていた。福岡空港の敷地内に分散して停まっている。映像には対空自走砲や対空ミサイルシステムも映されていた。

「福岡空港を利用するつもりなんだろうな」

携帯飛行体はさらに針路を変えた。そして福岡駐屯地へ向かう道路上に別の高麗部隊を発見した。

「こちらに来るぞ！」

それはジープ型の四輪駆動車に何輦かのK200装甲車と2輦のK1A1戦車の縦隊であった。先ほど空港を占領していた部隊に比べるとずっと小規模である。

「偵察部隊だな。迎撃準備！」

岡本は自らも銃を手にとった。

「敵はどこに出てくる？」

飛行体を操作していた隊員が福岡の地図を手にした。

「このまま進めば雑餉隈駅横ざっしよのくまの陸橋を通過して、駐屯地の北に出てきます」

周りの皆が地図上の雑餉隈駅周辺に注目した。

「狙うは線路を渡る時だ。わざわざ陸橋を渡るなんて危ないマネはしないだろう。1個小隊を以って敵を阻止する」

そう部下に指示を出す岡本を前に桜井と黒部は立ち尽くしていた。

「これからどうする？」

黒部が桜井に聞いてきた。

福岡市博多区

高麗陸軍の偵察部隊は2輦のK1A1を先頭に道路を進んでいた。高麗軍は自衛隊の防御態勢を調べるためにコマンド部隊から成る隠密偵察部隊からこのような強硬偵察部隊まで様々な戦力を投入して偵察活動を行っていた。

この強行偵察部隊は小隊規模の部隊で、4車線道路を南に進んでいた。やがて橋が見えてきた。だがそれを渡るつもりは無い。橋の上は逃げ場がない。

小隊は側道へと進んだ。側道は私鉄の線路を前にしてT字路になっている。歩兵が周りに目を配らせる中、1輦のK1A1戦車が線路と道路を隔てるフェンスと木を押し倒して線路上に入った。それを狙う者がいるとも知らずに。

K1A1が突破しようとしている地点から50mほど西に線路の影に2人の自衛隊員が隠れていた。01式携帯対戦車誘導弾を構えて。目標はK1A1の砲塔側面である。できれば装甲の薄い上部を狙いたい、上を通る陸橋が邪魔になっているので弾道飛行ができない。

「目標をロック！」

「後方安全確認」

「クリア」

「撃て！」

発射機から1発のミサイルが発射された。01式対戦車誘導弾は目標の発する熱を追うミサイルなので、発射後に誘導を行なう必要

がない。だから攻撃を行なった自衛隊員はすぐさま逃げることにきた。

一方、戦車の方に逃げる暇は無かった。

「ミサイルだ」

だが発射点はわずか50メートル先である。K1A1の乗組員に出来ることはなにも無かった。ミサイルが砲塔側面で炸裂し、装甲を破壊した。操縦手は無事だったようで、砲塔から煙を吐きながら戦車は元来た道に戻っていった。

一方、随伴歩兵たちは戦車が壊したフェンスの穴から線路上に飛び出した。フェンス越し警戒・支援をする友軍を背後にその場に伏せて敵の姿を探した。しかし彼らは新たな敵に遭遇した。兵士たちが次々と頭を撃ち抜かれていったのである。

「狙撃手だ！」

狙撃手は線路を挟んだ向かい側にそびえる博多南図書館の屋上に陣取っていた。

「木と木の間にミニミを構えている奴がいるだろう？フェンス越しに援護射撃をしている。距離は72メートルだ」

黒部が双眼鏡を持って観測手を務めていた。そしてその隣で桜井が64式改狙撃銃を構えて敵を狙い撃ちしていた。黒部はフェンスの向こうの高麗機関銃手が眉間を撃ちぬかれて倒れる様子を目に焼き付けた。

「よくやったぞ」

桜井がさらに目に付いた目標に次々に銃弾を撃ちこんでいる横で黒部は桜井が見過ごしている目標が無いか探した。そしてそれを見た。

「やばいな。撤収だ」

黒部は桜井の肩を叩いて危険を知らせた。桜井もそれに気づいたらしく素直に応じて、その場を離れた。2人が離れた次の瞬間、狙撃地点で爆発が起こり、2人は爆風で倒された。

「畜生。本は大切に扱え！」

黒部の抗議の声は相手に届きそうに無い。

線路上ではもう1輦のK1A1が出てきていて、主砲を図書館屋上に向けていた。

「敵狙撃手を排除した。突破しろ」

高麗歩兵たちが次々と飛び出して前進した。戦車の方は線路の反対側まで渡りきり、そのまま木々とフェンスをなぎ倒した。それにK200装甲車が続く。偵察部隊はそのまま前進して大通りに戻ったのであった。

そのまま南に進めば県道49号線との交差点にぶつかる。これを右にまわって進めば福岡駐屯地の前に出ることができる。

そして先頭に行く戦車が交差点に達した。その瞬間を狙う者が居た。

「距離200m」

「目標をロック」

「後方安全確認」

「クリア」

「撃て！」

県道49号線の道路上、偵察部隊の侵攻方向にJR線の踏切を背後にして自衛隊の最終防衛陣地が築かれていた。と言っても放置車輛を盾代わりに並べただけであるが。

その陣地から放たれたO1式対戦車誘導弾はまっすぐK1A1戦車に向かっていった。この時、対戦車隊員はO1式を弾道飛行で敵戦車上部を攻撃するダイブモードに設定し忘れるという致命的ではないが重要なミスを犯してしまった。

旋回途中のK1A1の乗員は接近する誘導弾を発見すると咄嗟に砲塔を動かした。先ほどと違い着弾まで幾らか時間的余裕―数秒程度だが―があったのが幸いした。K1A1の砲塔正面がミサイルの突っ込んでくる方向に向くと同時に着弾した。正面装甲は大きな被害を受けたが貫通までは許さなかった。K1A1はすぐさま主砲を撃ちかえした。

「手前に落ちた。外した」

K1A1の砲塔内で車長が言った。

「FCSと砲架が損傷して使い物になりません。精密射撃は不可能です」

砲手が報告をした。正面装甲は貫通されなかったが、着弾の衝撃

そのものは小さくないようだ。

「本国に送り返す必要はあるか？」

「そこまで酷くはありませんが。しかし一度、撤退した方がいいです」

車長は考えた。敵の防衛線にぶつかったが、応急陣地と軽歩兵だけで戦車の姿が見えない。となれば敵の主防衛線はさらに奥にある。これだけ分かっただけでも十分な成果だと車長は思った。

「よし。偵察部隊を撤退させる」

戦車と装甲車がもと来た道に戻っていった。

踏切前の陣地を守っていた部隊の指揮官は戦車の様子を見て言った。

「ありゃ修理可能だ。もしかしたらまた戦線復帰するかもしれんな」

隣では01式対戦車誘導弾の発射機を持った隊員が立っていた。

「君はダイブモードで使うべきだったな。上面装甲なら貫けただろうから、大きな損傷を与えることができただろうに」

図書館の入り口の前に桜井と黒部が座っていた。辺りに敵が潜んでいないか探っていた西普連の隊員がそれを見つけた。

「大丈夫か？」

それに黒部が応えた。

「大丈夫なもんか。大事な本の一部が吹っ飛ばされちまった」

2人はかすり傷程度しか負っていなかった。

桜井と黒部は西普連とともに、その日の夕方まで駐屯地周辺を守っていた。

四〇・待ち伏せ（後書き）

・久々の更新です。

四一・戦いつづける者

雑餉隈駅前

桜井は周りに隊員たちが後始末をしている中で自分の射殺した高麗兵の死体を見下ろして立ち尽くしていた。

「どうした。撤収だぞ」

その姿に気づいた黒部が言葉をかけたが、どうも桜井の様子がおかしい。すっかり黙り込んでいて表情も幾分暗い。目には後悔の念が窺える。

「いや。自分が殺した死体をじっくり眺める機会ってなかったもので」

「その機会とやらも終わりだ。行くぞ」

黒部は待機している高機動車に乗るように促した。

福岡駐屯地の放棄も決まったので高機動車は一路、大宰府防衛線を目指して突き進んでいる。そのうち再び雨が降り始めた。桜井らの乗る高機動車は幌をつけていなかったので乗っている者はみな雨に晒されてしまう。

「なあ一体どうしたんだ？」

桜井の相変わらず様子に黒部は堪らず尋ねた。しかし雨のため、耳の傍でしゃべらないと聞こえない。

「黒部1曹。森の中で里美に言われたんですよ。人殺しの顔だって考えてみれば、自分は随分と簡単に人を撃てるなあと思ひまして」
「立派な兵士になった証拠だ」

だが黒部の励ましにも無反応だ。

「俺は人殺しのために自衛隊に入ったんじゃない」

その様子を見て黒部が溜息をついた。

「なあ桜井3曹。じゃあなんで入隊したんだ？」

それを聞いた桜井は入隊まで経緯を話し始めた。2008年の東海大地震の時にボランティアとして現地に向かった事、その場で死にかけた事、そして災害出動していた自衛官に助けられて代わりに自衛官が死んだ事。

「ずっと誰かの為に役に立ちたいと思ってた。でも役に立てなかった。だから自衛隊に入ったんです。自衛隊でなら役に立てるようになる」と

「青臭い理由だな」

「確かに…」

黒部は桜井が笑ったように見えた。たぶん自嘲の笑みだろうと黒部は思った。

「分かりやすく誰かの役に立ちたいって言うなら、ボランティアの方がずっと機会が多いと思うけどな」

「いや。実はその時ですね」

桜井が被災地で目撃した護憲NGO団体の様子を説明した。

「なるほど。そういう連中と同じように思われる事が嫌だったわけだ。本当に青臭い奴だ」

2人は大きな声で笑った。その様子にさすがに周りの隊員も気づき、状況が分からず怪訝な顔をした。

「まあいいさ。基本的にそんなもんだ。ご立派な理由で入隊してくると、それだけ現実とのギャップに苦しむ」

また耳元でのヒソヒソ話に戻った。

「みんな、そんなもんなんですか？」

「ご立派な理由で入隊してきた奴はな。どうでもいい理由で入隊した奴だって一杯居るさ。原隊に戻ったら聞いてみるといい。とにかく。あんまり思いつめるなってことさ。人を殺しちまったって？後悔なら後で十分できるさ。だから今は自分の仕事をやり遂げることだけを考えろ」

「考えろったって…」

桜井の心はまだ定まらない。

「いいか3曹。だから言っているだろう？お前は自衛隊に居る目的がデカくて抽象的すぎるんだ。人々の役に立ちたい？国を守りたい？世界に貢献したい？そういうのはもっと上の連中が考えていればいいことだ。国だの世界だの、兵隊が考えるにはデカすぎる。だから実像が見えずに悩む事になる。だからもっと具体的な目標を見つけるんだ」

「具体的な目標…」

桜井が思い浮かべたのは萩原の顔であった。

「だが、例のガールフレンドはダメだぞ」

考えている横から黒部に全否定され桜井は苦い顔をした。

「全とお見通しですか？」

「だいたい予想がつくよ。だけどガールフレンドはダメ。敵地に取
り残されているならともかく、俺達の手で安全地帯まで逃がしたん
だ。そいつの事を考えていたら後ろのことばかり考えて目の前の
敵に集中できないものさ」

「そういうものですかね」

「そりゃ辛いだろうさ。置いてきた恋人やら家族やら忘れちまえっ
てのはさ。だが、俺達はそれが仕事だ。だから忘れるんだ」

「それじゃあ、なにを目的にしろって言うんですか？」

桜井が大声を上げて車内に居る者の視線が再び2人に集中した。

「まあ落ち着けよ」

突然の叫びに苛立っている周りの隊員たちに目を配りつつ黒部は
桜井の肩を叩き宥めた。

「お前はレンジャー資格者だ。みんながお前を頼っている」

「だから何だって言うんですか？」

「ここは戦場だ。敵味方に分かれ、生死を賭けて争いを繰り広げる
地獄だよ。そこで最後に頼れるのは何だ？ 国家か？ 正義か？ 違う。
隣で戦っている仲間だ。そいつらはお前を信じているからこそ、思
う存分に戦えるんだ。誰かの役に立ちたいと思うんなら、まず隣で

戦っている奴の役に立つことを考えろ。俺が言えるのはそれだけだ」

桜井はそれを聞くと黙り込んで、小隊の仲間達のことを考えた。だが結論となるような考えは浮かばなかった。

「ところで1曹。あなたはどのようにして自衛隊に」

聞かれた黒部の方はなぜか目を伏せた。

「ブラックホークダウン”だよ」

「えっ？」

「だから“ブラックホークダウン”だ。昔、そう言う映画があったんだよ。その登場人物の1人が言っていたんだ。“なぜ戦うのか？”と皆が聞く。だけど俺は答えない”なぜだと思う？”」

「さあ」

「そいつは言った。“連中にはわからないからさ。俺は仲間のために戦う。それだけだ”ってな。俺は憧れたんだ。そうやって互いに命を預けられる連中、そういう連中の中に入りたかったんだ」

黒部の声は若干自嘲を含んでいた。

「だから俺は自衛隊に入って特種作戦群に志願した。俺もとんだ青臭い奴だったって訳だ」

2人はまた大笑いした。さすがに周りの人間は我慢できなかった。

「おい。静かにしないか」

北九州市内 コンビニ

夕陽が西に沈む頃であったが雲のために空は灰色だった。平坂2曹は雨の中、足を引き摺って市内を彷徨い、そして目の前にあったコンビニに無意識のうちに入り込んでいた。原隊の第40普通科連隊が壊滅して1人戦地に取り残されてからすでに24時間以上も何も口にしていない。

電気はまだ通じているらしく自動ドアは平坂に反応して動いた。そのまま倒れこむように店内に入ると、奥の調理パンやら弁当やらが並んでいるスペースを目指した。

「お客さん、大丈夫？」

カウンターに立っていた店長が平坂の疲れ果てた様子を見て声をかけた。平坂はその時までその男の存在に気づかなかった。

「避難していなかったのか？」

「雇われ店長ならともかく、ここ僕の店だもん」

平坂は棚に並ぶ食べ物と店長の顔を見比べてから平坂は出口に向かった。彼は今、財布を持っていなかった。

「ツケでいいよ」

背後からの声に平坂は振り向いた。

「後で払ってくれればいいよ」

「払える保障はありませんよ？」

「信じてあげる」

店長はニンマリ笑った。それを見た平坂は食品の棚から調理パン

を取ると出口に向かった。

「ビニール傘ならあるけど」

「自分は兵士ですから」

平坂は店を出た。食事を手に入れた事以上に生きる明確な理由が出来た事が嬉しかった。

前原市 韓国海兵隊師団司令部

韓国海兵隊は大宰府に防衛線を構えた自衛隊との睨み合いを到着した陸軍部隊に任せると、福岡西側に主力を置いて自衛隊の第16普通科連隊戦闘団への守りとなっていた。司令部では福岡西側の防衛計画を練るとともに、増援として送り込まれて上陸を開始した第5海兵連隊への対応で大忙しであった。

本国から再び来航した6隻の揚陸艦―他に1隻あるが、それは海ノ中道でその戦歴を終えている―から第5海兵連隊と1個戦車中隊が上陸した。既に上陸した第1海兵連隊とあわせて、それが今回の作戦に投入された高麗海兵隊の戦力の全てである。これ以降、揚陸艦部隊は主に陸軍部隊や物資の輸送を担うことになる。

「自衛隊に撃破された戦車ですが、うち5輜がここで修理可能だそうですね。あと他に12輜、本国に戻して再生する必要があります。残りはもう直せません。ですから我々が自由に使える戦車は増援の1個中隊とあわせて19輜となります」

九州の地形図が広げられた机の前に座り部下の報告を聞いてチェ・ミンギは溜息を吐いた。報告はさらに続く。

「陸軍部隊が福岡と北九州の要所を完全に占拠しました。福岡空港と北九州空港も確保し、我が空軍部隊が利用できるようになりました。作戦は順調に進んでいますよ。師団長」

師団長は“順調”だと言った部下の顔を見た。声の調子は“励ます”というより本音を言っているように聞こえた。

「順調だと思っかね？」

「違うのですか？」

ミンギはまた溜息をついて、それから立ち上がった。

「なるほど。確かに我々は作戦の第一段階における全ての目標を達成した。しかし、その代償は大きい。第1海兵連隊は多大な損害を出し、上陸した2個戦車中隊は全滅した」

ミンギは机の地図上の大宰府に指を指した。

「なるほど。自衛隊は敗れ撤退した。だが我々に多くの傷を残した。見事な遅滞作戦だ。陸上自衛隊は強敵だよ。これは厳しい戦いになる」

「しかし、その前に政府の方が屈服する筈です。そういう計画ですよ？」

「それはあくまでも楽観論だよ。補給の問題もある。今は自衛隊側が立て直しをしているところだから補給は続いている。だが自衛隊が反撃に転じたら手元の物資で戦うしかなくなるぞ。これは本当に厳しい戦いになる」

チェ・ミンギと同様の考えの者は複数居たが、本国の戦争指導者には1人も居なかった。

四一・戦いつづける者（後書き）

・39話、40話の誤字を修正しました

四二・戦いに向かう者

太平洋 台湾沖

闇夜の中を旗艦であるヘリコプター護衛艦【ひゅうが】を先頭にして第1護衛隊群が単縦陣形で北を目指して進んでいた。晴れていれば綺麗な星空を眺めることもできたであろうが、生憎空は雲に覆われ雨が降り続いていた。

【ひゅうが】艦橋に第1護衛隊群司令の水無月海将補が幕僚長の藤堂^{とうどう}1佐を伴って訪れた。そして艦長の相田^{あいだ}1佐とともに雨が降り続く海上を眺めていた。

「もうすぐ戦場だというのに指揮官が油を売っていていいのですかな？」

相田の言葉に水無月は苦笑しながら答えた。

「もうすぐ戦場だからだよ。戦闘海域に入れば、ずっとCIC詰めだ。その前に外をじっくり見ておきたい」

「だとすれば生憎の天気ですね」

雨のせいで視界が悪い。

「まあ、私はこれでも悪くないと思っているんだがね」

「それにしても高麗軍は侮りがたい。第2護衛隊群にあれだけの損害を与えるとは」

「そこでだ、艦長。我々、“広報の1群”の出番だよ。奴らに我々の強さを広報してやるのさ」

水無月の言葉に艦橋にいた全員が笑った。ずっと無表情を保って

いた藤堂までも。第1護衛隊群は横須賀に本拠地を置いていて、首都が近いこともありマスコミの取材をよく受けるので“広報の1群”と呼ばれる。そこへ水を指すかのようにC I Cから報告が入った。

<対水上レーダーに感!>

それに呼応するように艦橋の航海用レーダーを監視していた乗員がレーダー画面の一点を指差した。様々なクラッターの中から素人目で見つけ出すのは困難だが、熟練したレーダー員の目は画面上の影に航行する船舶の姿を見ていた。

相田艦長がC I Cに繋がる艦内電話の受話器をとった。

「こちらでも捉えた。目視確認する」

見張り員が暗視機能付双眼鏡を片手にレーダー員が指示した方を搜索したが、見つかる気配がない。

「ダメです。雨が激しくて目視確認できません!」

衝突を心配するような距離では無いが、敵性船舶の可能性もある。見過ごすわけにはいかない。

「シーホークに確認させよう」

水無月が相田に向かって言った。シーホークとは海上自衛隊が艦載の対潜ヘリコプターとして配備しているSH-60を示す。第1護衛隊群にはそれに日本独自の改良を施したSH-60Kを配備している。そして今、そのうちの2機が艦隊の先を飛んで、敵の潜水艦を警戒していた。

1機のSH-60Kが【ひゅうが】の捉えた水上目標に進路を向けた。雨粒がキャノピーを叩き視界も悪い。赤外線センサーを通じて何とか海面の状況を確認できる状況だ。すると大型貨物船が緑のかかった画面の中に現われた。

「目標を目視確認。貨物船です」

ある意味、予測通りの結果であった。

「目標はパナマ船籍で台湾の企業が運行する貨物船です。敵性船舶の可能性は低いですね」

「だな」

第1護衛隊郡はこれまでも何回か中立国の民間船舶と遭遇している。

「日本周辺にもウジャウジャいるんでしょうね」

相田が呟いた。

「ああ。おそろくな。“戦場の霧”というヤツかな」

おそらく戦闘海域周辺には中立国や日本の民間船の姿もあるだろう。しかし、どの段階でそれを高麗軍の軍艦や偽装商船と区別することができるのであろうか？もし民間船を撃沈するようなことになれば日本は外交的に大きなダメージを負うことになる。自衛隊にも批判が集中するであろう。しかし判断を誤れば敵に一方的に攻撃されることにもなりかねない。

そこへ部下が新たな報告をしてきた。

「友軍機が接近中です」

それは海上自衛隊が掃海任務と輸送任務に使用するために導入したアグスタウェストランド製のMCH-101ヘリコプターであった。掃海用器具を下ろせば乗員の他に30人ほどの人員を乗せることが可能な大型ヘリコプターで、南極観測船にも載せられている。

【ひゅうが】の飛行甲板に着陸した2機のMCH-101からは作業着を着た海上自衛隊員が次々と降りてきた。

「これで乗組員たちも楽になるな」

水無月が艦橋からその様子を見て言った。

護衛艦の乗組員の充足率は低い。実際に乗っている乗組員の人数が定員よりずっと少ないのである。なぜそのような状態であるかと言えば、海上自衛隊全体の人員の人数が定員に達していないという事もあるが、多くの乗組員が定期的に海上自衛隊の各種学校に出向しているという事情もある。日進月歩で進歩する軍事技術を体得するため仕方が無いことなのである。そういう場合は予備の乗組員を乗せて欠員を補うのが“普通の国”の海軍の通例なのであるが、自衛隊には予備など存在しない。

MCH-101で【ひゅうが】に降りたのは、各種学校に出向していた第1護衛隊群の乗組員たちなのである。

「ええ。これで我々の態勢は万全です」

相田がそう応じた。

北海道 苫小牧港

北海道では星空を拝むことができた。

港に自衛隊の唯一の機甲師団である第7師団の先遣隊が集まっていた。第71戦車連隊から派遣された2個戦車中隊で増強された第7偵察隊である。総勢60輜近い各種車輛から成る部隊は4隻の民間フェリーに乗り込み九州を目指す手筈であった。

「どうした？なぜ乗り込めない。日付が変わる前に出発したいのだが」

指揮官である第7偵察隊長の2佐はご機嫌斜めのご様子だ。有事法制にもとづき徴用されたフェリーにこれから乗り込むことになる筈なのだが、いつまで経っても乗り込めない。すると船員の一団と交渉をしていた第7師団長の大原陸将が2佐のところへやって来た。

「いったい何があったのですか？」

「それが、労働組合がうるさくてな。戦争には協力できないと…」

これだから日本は…。2佐は溜息をついた。しかしながら大原の方は船員たちの考えも理解できた。彼らが船員になったのは戦争に参加するためではないのであるから。太平洋戦争中の悲しい出来事も考えれば拒否するのも致し方ない。

2佐もそれを察したようだ。

「海自の連中、今度は守ってくれるんでしょうね？」

「してもらわなくては困るよ。そのために奴らは金をジャブジャブ使って、こっちが苦勞する羽目になったのだからな」

80年代末から90年代にかけて陸上自衛隊には様々な新型兵器の配備が開始されたが、その配備状況はどれも芳しくなかった。冷戦終結という時代の流れもあるが、海空自衛隊の軍拡のために犠牲になったのが大きいだろう。F-15J戦闘機、AWACS、イージス艦。そういった高価な兵器を導入するために陸上自衛隊の装備購入予算が削られたのだ。そしてそれらの配備が終わり陸上自衛隊に再び予算配分がなされるだろうという時になると政府は財政再建のためと称して防衛費の削減を開始したのである。その結果が陸上自衛隊の現状である。拳句の果てに海に沈められたのではやっつけられない。

大原は真っ暗ななにもかも飲み込んでしまいそうな海を見つめていた。もしかしたら九州で敵と戦うまえにあの海の中に引きずり込まれるのかもしれない、と思った。

「九州に送り届けてもらわなくては困る」

高麗軍はすでに橋頭堡を確保している。頑固に守る敵軍を追払うには強力な衝撃力を有する装甲部隊の投入は不可欠だ。そして日本にはそれは第7師団しか存在しない。

熊本空港

増援第1陣の中央即応連隊に続く第2陣は第1空挺団であった。パラシュート降下で敵の後方に降り立ち遊撃作戦を行なう空挺部隊には精鋭部隊が充てられるのが通例で、第1空挺団も世界の例に漏れず陸自有数の精鋭部隊として知られている。

空挺団は普通科3個大隊編制で、そのうち即応待機中であった第2大隊が第一陣として出発し、昼頃に熊本の大地に降り立った。そ

して夕方になって大隊が集結を完了した頃に新たな任務が与えられたが、それは空挺隊員達が待ち望んでいたものではなかった。

「山岸1尉。どうなってるんでしょうね？俺たちに陣地防御をしろって。これじゃあまるでバルジの戦いの101空挺じゃないですか？」

陸曹の1人が中隊長に愚痴った。精鋭部隊と言っても、その実態はただの軽歩兵で映画に登場する特殊部隊のようなスーパーマンでは無い。敵正規軍と正面から激突した場合は、輸送の都合により火力で劣る分、むしろ不利である。空挺部隊の強みは空中移動の機動力を生かし敵の弱点を突くことで、陣地に籠もって攻めてくる敵を正面から待ち受けるなどまるでお門違いなのだ。陸曹が例にだした“バルジの戦い”は第二次大戦中の1944年末にドイツ軍が西部戦線で反攻作戦を行なってアメリカを中心とする連合国軍と激突した戦いで、アメリカ軍は兵力不足のために空挺部隊を要衝バスターニュの守りに配備せざるをえなかった。そしてドイツ軍の猛攻撃を受けて厳しい戦いを強いられたのである。

「あああ。この前のドラマを見て、あんな戦いには絶対に巻き込まれたくない！と思ったんですけどね」

「じゃあお前はガルニア役だな。足を吹っ飛ばされて退場」

「うちの衛生隊員はロウみたいに砲撃の中を走り回れるかね？」

「1尉殿はウィンターズ大尉ですかね？それともスピアーズ？」

「うちの隊長はウィンターズじゃないか？まあ飲み屋ではニクソンだが」

隊員達はこの前にみんなで鑑賞したアメリカの戦争ドラマをネタにして盛り上がっていた。少しでも緊張を和らげるため、これから彼らを待つ困難の姿を少しでも捉えるため。だが山岸には別の懸念

があつた。

「俺たちがバストーニュの再現をするのはしかたないとして、誰がパットンを演じるんだろうな」

バルジの戦いではドイツ軍に包囲された第101空挺師団をパットン將軍の第3軍が突破して救助した。しかし自衛隊に第3軍のよ
うな強力な予備戦力は存在するのだろうか？

国会の審議が進まず政治が停滞したまま、2日目は西普連の殿部隊が高麗の偵察部隊と交戦した程度で大した戦闘も起こらなかった。そして2日目が過ぎた。

四三・戦い未だ終わらず

6月25日 午前7時

筑紫野市内の中学校校庭 西部方面総監部前線統制所

自衛隊の防衛線の背後にあるこの学校では行き場を失った避難民や本隊から離れ離れになった自衛隊員により混雑していた。

荻原たちは行く当てもなく、ここで一夜を過ごしていた。そして昼頃に青野が宮崎の実家と連絡をとることに成功したので、そこのお世話になることになった。

荻原はそれを片平に知らせるべく、その姿を探していた。そして見つけた。

「片平先輩！」

片平は校庭の一角から外を取り囲んでいるデモ隊の姿を眺めていた。

<学校を戦争に使うな！>

<平和を返せ！>

<戦争反対！>

そんなシュプレヒコールを叫びながら中学校を囲む平和団体の姿だ。

「参加するつもりなんですか？」

荻原の言葉に対して片平は首を横に振った。それを見て荻原は怪訝な顔をした。いつもの彼女なら真っ先に参加すると思っていたか

らである。

「知っている人が居たのよ」

「じゃあ、なおさら」

「彼女は一昨日に福岡駐屯地のデモに参加していた筈なのよ」

荻原の指す女は手にく市民を見捨てた自衛隊を許すな>というプラカードが握られている。現況を反映したプラカードは一昨日以前に用意したものではないだろう。

「デモの時に高麗軍上陸の話を聞きつけて、とつと逃げてきたのよ」

そうではなくてはあんな立派なプラカードなど用意できるわけがないのだ。女は自らは真っ先に逃げ出してきたくせに、市民を見捨てたと自衛隊を批判しているのだ。自衛隊に助けられ地獄を生きのびてここまで辿り着いた片平にとってはおもしろくない話であった。しかし、片平の心はそのまま冷めていった。

「自分だって同じ穴の貉むじなじゃない」

そこに行き着くと片平はその場に座り込んでしまった。

桜井と黒部は西普連とともに前線の塹壕で夜を過ごして、ようやくこの中学校まで辿り着いた。統制所に出頭すると2人は分かれてそれぞれの指示を受けた。そして校庭で合流した。

「桜井3曹、このまま原隊復帰か？」

「はい。そちらは？」

それを聞くと黒部はニヤリと笑った。

「ここだけの話だが、なにやらの特殊作戦のために沖縄に飛ばなくちゃならないんだ」

そこで桜井は黒部と分かれた。その後で知った顔を見つけた。

「青野さん！」

青野と付き添う女性2人が振り向いた。

「ああ。里美の！ いやあ、お陰で助かったよ」

隣の斉藤美緒が続いた。

「まったく。どこぞの誰かと大違いよね」

そう言っつて青野を肘で突付いた。

「本当に助けてくれてありがとう。ほら。知世も」

斉藤に促された知世は無言で頭を下げて感謝を表した。

片平と荻原は一緒に歩いて青野たちの待っている場所に向かっていった。すると片平がなぜか立ち止まった。

「ご免。一緒に行けないよ」

突然の片平の言葉に萩原は立ち止まり振り向いて目を丸くした。

「で、でも。大丈夫なの？」

「分からないけど。これを期に自分なりにいろいろと整理したいの。だから1人にさせて」

そう言って立ち去る片平の背中を見送るしか萩原には出来なかった。

1人で青野らの元に戻った萩原が見たのは桜井の無事な姿であった。

「雄一！」

萩原は桜井に飛びついた。

「無事だったのね！」

桜井は突然の事に圧倒され何も言えなかった。
1分ほど立ってようやく落ち着いた。

「それで皆はどうするんだ？」

桜井が尋ねた。

「俺の実家に皆に行く事になりました」

青野が答えた。そこに萩原が割り込んだ。

「雄一はどうするの？一緒に行かない？」

突然の言葉に桜井はその真意を測りかねた。

「俺は自衛隊だから、逃げるわけには…」

「もう十分戦ったじゃない！だから、もういいじゃない！」

萩原はかなり真剣に言っている。桜井は空気がだんだんと悪くなるのを感じていた。周りの人間の視線も痛い。仕事だ、任務だ、と無理に引き剥がすことも出来たが、そういう気分にはなれなかった。

「俺だって、戻りたいわけじゃない。これは辛い任務だよ。けど、皆がまだ戦っている。仲間がまだ戦っている。だから俺だけ逃げるわけにはいかないんだ」

「私と、どっちが大切なの」

どこぞでお馴染の台詞であるが、桜井は自分に言われるとは思っていないかった。

「決められないよ。俺は仲間たちを信頼している。だからこれまでの辛い戦いも戦う抜くことができたんだ。彼らは俺の応えてくれるから。そして仲間たちは俺を信頼してくれている。だから俺も仲間たちの信頼に応えたい。だから里美、君も俺を信頼してくれ。そうすれば必ず応える。必ず戻ってくる」

桜井は萩原を背にして戦場に向かって歩き出した。するとそこへ1台の73式小型トラックが近づいてきた。幌を外された荷台には黒部の姿があった。そして桜井の横で止まった。その様子を見て桜井が戸惑っていると黒部が手を差し出した。乗れと目で行っていた。桜井は頷くと、その手を握り締めた。彼が73式小型トラックの

荷台に収まると車はまた走り出した。戦場に向かって。

その光景を見て知世は不思議な気分になった。これから地獄の戦場に戻るというのにどうしてあんなに自信に満ちた表情なのであるうか。なぜ何の後悔もしていないという表情なのであるうか。

知世は泣き崩れている荻原に駆け寄った。そして自衛隊が配布していた毛布を背中にかけてあげた。その時、知世はシェイクスピアのある一説を思い出した。

「今日は聖クリスビアン祭の日だ。

今日を生きのびて無事故郷に帰る者は、今日のことが話題になるたびにわれ知らず胸をはり、聖クリスビアンの名を聞くたびに誇らしく思うだろう。今日を生きのびて安らかな老年を迎えるものは、その前夜祭がくるたびに近所の人々を宴に招き、「明日は聖クリスビアンの祭日だ」というだろう、そして袖をまくりあげ、古い傷跡をみせながら、「聖クリスビアンの日に受けた傷だ」と言うだろう。

老人はもの忘れしやすい、だがほかのことはすべて忘れても、その日に立てた手柄だけは、尾鰭をつけてまで思い出すだろう。そのとき、われわれの名前は日常のあいさつのようにくり返されて親しいものとなり、王ハリー、ベッドフォード、エクセター、ウォリック、トールボット、ソールズベリー、グロスターなどの名はあふれる杯を飲みほすたびに新たに記憶されるだろう……」

…この物語は父親から息子へと語りつがれていき、今日から世界が終わる日まで、聖クリスビアンの祭日があれば必ずわれわれのことを思い出されるだろう。少数であるとはいえ、われわれしあわせな少数は、兄弟の一団だ。なぜなら、今日私とともに血を流すものは私の兄弟となるからだ。いかに卑しい身分のものも今日からは貴族

と同列になるのだ。そしていま、故国イギリスでぬくぬくとベッドにつく貴族たちは、後日、ここにいなかったわが身を呪い、われわれとともに聖クリスピアンの祭日に戦ったものが手柄話をするたびに男子の面子を失ったようにひけめを感じることだろう。

―戯曲『ヘンリー五世』（著…シェイクスピア）より『聖クリスピアンの演説』（訳…小田島）

日韓大戦 第一部 完

反省と次回予告

—まず、はじめに—

というわけで読者のみなさん、日韓大戦“第1部完結”です。今まで応援していただいていたありがとうございます。

突然の“完結”に驚いた方もおられると思いますが、もちろん物語がこれで終わるわけではございません。私は日韓大戦を4部構成として4つに分けようと構想していました、物語が一区切りつきましたので一旦終了となります。近日中に第2部を公開することになるでしょう。

えっ？なんで何で4部構成にするかって？ただ単に、最後の『聖クリスピン演説』の引用をやリたかっただけ（ry

—反省—

上の最後の言葉は実は割と本気であつたりします。バンド・オブ・ブラザーズに感化されちゃって。『兄弟の一団』バンドオブブラザーズが由来なんですよ。その為に強引に捻じ込んでしまった感がありますが：

某所で自分の作品について『一定の水準に達した』などと自画自賛していましたが、こうやって一区切りついた時に見返してみますと自分の未熟さを思い知らされます。

問題点はいくらでもあるでしょうが、自分で気になるのは人間ドラマパート部分の弱さ。桜井と荻原の関係や桜井の最後の決意の部分などはどうも消化不良感があります。またプロローグと本編との繋がりがどうも弱い。あれはこの物語のプロローグとして成立しているのだろうか？と悩むわけです。桜井雄一という人物をもっと掘り下げてみるべきだったかも。

ともかくまだまだ問題の多い私ですが、もっと上に行けるようにがんばりたいと思います。

―『日韓大戦 第二部 遅滞の章』

というわけで、近日中に第二部の連載を開始する予定です。

第一部でも政治パートが大きな比重を占めておりましたが、第二部ではさらに増える予定です。というより、そっちがメインとなります。自衛隊と韓国軍の大激突をお望みの方はがっかりしたかもしれません。しかし必要な過程です。

衆院での過半数の支持を失った烏丸政権がいかにして自衛隊の軍事行動を議会に認めさせるか？そして中国の不可思議な行動に動きを縛られているアメリカはどう対処するのか？そしてロシア、中国はどう動くのか？それが第二部のテーマです。

また、第一部は一応、完結しましたが、これからも改訂、加筆修正を行なう予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7711d/>

日韓大戦 第一部 開戦の章

2010年11月24日13時10分発行